

福井県埋蔵文化財調査報告 第177集

福井城跡

—北陸新幹線建設事業に伴う調査 6—

第2分冊 遺物編

2022

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設事業に伴い、平成27・28年度に実施した福井城跡（福井県福井市豊島1丁目所在）の発掘調査報告書である。なお、調査範囲が南北に細長いため2分割して整理作業を実施しており、本報告分はその南側にあたるため「新幹線南地点」と通称する。報告書は、第1分冊遺構編、第2分冊遺物編で構成され、本書は第2分冊遺物編にあたる。
- 2 本書の編集は木村孝一郎 御嶽直義があたり、木村、御嶽、杉田曜、九千房百合、中原義史（現こども歴史文化館学芸員）が分担して執筆した。執筆分担は以下のとおりである。
第1章：木村 第2章：中原 第3章：杉田 第4・5章：御嶽
第6章：九千房 第7章：御嶽 木村 九千房 杉田
なお、第6章1～3節は各種分析報告を九千房が、第4節の樹種同定は杉田が一部加除・編集した。
- 3 福井城跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 4 出土遺物のデジタルトレース・写真撮影は、令和2年度に土器・陶磁器、石製品を株式会社キミコンに、瓦、木製品、金属製品を株式会社サンワコンに委託した。このうち土器・陶磁器、石製品は因化作業も委託した。委託した図の校正、図版作成は、木村、御嶽、中原、杉田が行った。
- 5 木製品の一部は、令和3年度に株式会社吉田生物研究所に委託して保存処理とあわせて樹種同定と塗膜構造分析を実施した。他の自然科学分析は、平成29・30年度、令和2年度に委託し、貝類同定を株式会社パレオ・ラボ、大型植物遺体同定を株式会社パレオ・ラボとバリノ・サーヴェイ株式会社、動物骨同定は、株式会社パレオ・ラボと一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。素材同定を株式会社パレオ・ラボ、土壌分析を一般社団法人文化財化学研究センターが実施した。
- 6 出土遺物のうち木製品の文字資料については、宇佐美倫太郎氏（福井県教育庁生涯学習・文化財課主査）の協力を得た。
- 7 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 8 遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および整理作業員が行った。
- 9 本遺跡の所在地は、中世から柴田勝家の時代、さらに結城秀康入国後の17世紀初めまで「北庄」と呼ばれていた。その後、寛永元年（1624）に「福居庄」「福井庄」へと改称され、さらに元禄年間（1688～1704）から「福井」が広く使われるようになっていった。しかし、このような変遷を記述に反映させると煩雑になるため、本書では、柴田勝家の居城を北庄城、結城秀康入城以降を福井城とし、遺跡名としては北庄城の時期を含めて福井城跡と総称する。また、慶長6年（1601）の結城秀康の越前入国を以て近世とする。
- 10 本書で使う福井城の曲輪等の名称は、幕末頃の住宅地図である福井県文書館所蔵の山内秋郎家文書「福井藩家中絵図」（「戊午屋鋪絵図」）に記載されている呼称である。

目 次

第1章	土器・陶磁器	1
第1節	A街区15-1調査区出土の土器・陶磁器	1
第2節	B街区16-1調査区出土の土器・陶磁器	10
第3節	C街区16-1調査区出土の土器・陶磁器	13
第4節	C街区15-2調査区出土の土器・陶磁器	18
第5節	D街区15-2調査区上層出土の土器・陶磁器	26
第6節	D街区15-2調査区下層出土の土器・陶磁器	26
第7節	E街区15-2調査区出土の土器・陶磁器	34
第8節	15-2調査区石組水路2出土の土器・陶磁器	39
第9節	15-2調査区道路遺構出土の土器・陶磁器	41
第2章	瓦	60
第3章	木製品	63
第4章	石製品	90
第5章	金属製品	114
第1節	金属製品	114
第2節	鑄造関連遺物	123
第6章	自然科学分析	136
第1節	素材同定	136
第2節	自然遺物	138
第3節	土壌分析	155
第4節	遺物の構造分析	184
第7章	まとめ	193
第1節	城ノ橋の変遷	193
第2節	FKJ21-1調査区について	196
第3節	福井城下における土器・陶磁器の様相	199
第4節	福井城下における出土漆器の構成	200
第5節	本調査地周辺の自然環境について	202

写真図版目次

図版第1	土器・陶磁器	A街区	図版第6	土器・陶磁器	A街区
図版第2	土器・陶磁器	A街区	図版第7	土器・陶磁器	A街区
図版第3	土器・陶磁器	A街区	図版第8	土器・陶磁器	B・C街区
図版第4	土器・陶磁器	A街区	図版第9	土器・陶磁器	C街区
図版第5	土器・陶磁器	A街区	図版第10	土器・陶磁器	C街区

図版第 11 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 12 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 13 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 14 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 15 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 16 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 17 土器・陶磁器 D 街区上層
 図版第 18 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 19 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 20 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 21 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 22 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 23 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 24 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 25 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 26 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 27 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 28 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 29 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 30 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 31 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 32 土器・陶磁器 道路
 図版第 33 瓦
 図版第 34 木製品 漆器椀類
 図版第 35 木製品 漆器椀類
 図版第 36 木製品 漆器椀類
 図版第 37 木製品 下駄・下駄歯
 図版第 38 木製品 下駄・桶・樽
 図版第 39 木製品 桶・樽・曲物
 図版第 40 木製品 曲物・柄杓
 図版第 41 木製品 建築材等・墨書
 図版第 42 木製品 箸・楊枝・切匙等
 図版第 43 木製品 杓子・庖丁柄・笥・灯明台
 紡錘車・栓
 図版第 44 木製品 櫛・刷毛・柄鏡箱
 竹首継手・人形・箒・独楽
 図版第 45 木製品 指物等・部材
 図版第 46 石製品 容器類・白類
 (1) 容器類
 (2) 粉挽臼・茶臼・搗き臼
 図版第 47 石製品 暖房具・調理具・井戸関連
 図版第 48 石製品 硯・砥石・重石等
 (1) 硯・砥石・重石等
 (2) 碁石
 図版第 49 石製品 石瓦・建材・石塔等
 図版第 50 金属製品 武器器具等
 (1) 武器器具

(2) 迷子札
 (3) 焼印「神二文字屋」
 図版第 51 金属製品 工具類
 図版第 52 金属製品
 工具・農具・漁具・日用品等
 図版第 53 金属製品 煙管
 (1) 煙管(雁首)
 (2) 煙管(吸口・延煙管)
 図版第 54 金属製品 日用品等
 図版第 55 金属製品 日用品・その他
 図版第 56 金属製品 銭貨
 図版第 57 金属製品 日用品等・
 鑄造関連遺物 1
 (1) 匙・蓋
 (2) 鉈滓
 (3) 鑄造素材
 (4) 鉈滓の付着した取瓶・羽口
 図版第 58 鑄造関連遺物 2
 (1) 鑄型
 (2) 羽口
 (3) 取瓶・増場
 図版第 59 縄の素材同定
 図版第 60 自然遺物 大型植物遺体 1
 図版第 61 自然遺物 大型植物遺体 2
 図版第 62 自然遺物 貝類遺体
 図版第 63 自然遺物 動物骨 1
 図版第 64 自然遺物 動物骨 2
 図版第 65 自然遺物 動物骨 3
 図版第 66 土壌分析 花粉 1
 図版第 67 土壌分析 花粉 2
 図版第 68 土壌分析 種実 1
 図版第 69 土壌分析 種実 2
 図版第 70 土壌分析 葉
 図版第 71 土壌分析 微細遺物 魚骨
 図版第 72 土壌分析 微細遺物 種実
 図版第 73 土壌分析 微細遺物 木材 1
 図版第 74 土壌分析 微細遺物 木材 2
 図版第 75 土壌分析 微細遺物 木材 3
 図版第 76 木製品の樹種
 図版第 77 木製品の樹種
 図版第 78 木製品の樹種
 図版第 79 木製品の樹種・漆器 漆薄片
 図版第 80 漆器 漆薄片
 図版第 81 漆器 漆薄片
 図版第 82 漆器 漆薄片
 図版第 83 漆器 漆薄片
 図版第 84 漆器 漆薄片・X線写真

挿 図 目 次

第1図	土器・陶磁器	A 街区①	1	第51図	墨書板材	76
第2図	土器・陶磁器	A 街区②	3	第52図	箸	77
第3図	土器・陶磁器	A 街区③	4	第53図	楊枝・切匙類	79
第4図	土器・陶磁器	A 街区④	5	第54図	杓子等	80
第5図	土器・陶磁器	A 街区⑤	7	第55図	栓	81
第6図	土器・陶磁器	A 街区⑥	8	第56図	櫛・刷毛・独楽・その他	82
第7図	土器・陶磁器	A 街区⑦	9	第57図	指物等	83
第8図	土器・陶磁器	A 街区⑧	11	第58図	部材	84
第9図	土器・陶磁器	A 街区⑨・B 街区	12	第59図	容器類① [盤]	91
第10図	土器・陶磁器	C 街区①	14	第60図	容器類② [円形盤・把手]	92
第11図	土器・陶磁器	C 街区②	15	第61図	容器類③ [槽]	93
第12図	土器・陶磁器	C 街区③	16	第62図	容器類④ [鉢・蓋]	94
第13図	土器・陶磁器	C 街区④	17	第63図	容器類⑤ [容器状製品]	95
第14図	土器・陶磁器	C 街区⑤	19	第64図	行火・香炉	96
第15図	土器・陶磁器	C 街区⑥	20	第65図	石臼	98
第16図	土器・陶磁器	C 街区⑦	21	第66図	暖房・調理具 [温石・竈・鍋掛重り・風炉等]	99
第17図	土器・陶磁器	C 街区⑧	22	第67図	流し	99
第18図	土器・陶磁器	C 街区⑨	23	第68図	井戸関連遺物	100
第19図	土器・陶磁器	C 街区⑩	25	第69図	硯	101
第20図	土器・陶磁器	D 街区上層	27	第70図	砥石①	102
第21図	土器・陶磁器	D 街区下層①	28	第71図	砥石②	103
第22図	土器・陶磁器	D 街区下層②	29	第72図	砥石③	105
第23図	土器・陶磁器	D 街区下層③	31	第73図	日用品・その他	105
第24図	土器・陶磁器	D 街区下層④	32	第74図	石瓦	106
第25図	土器・陶磁器	D 街区下層⑤	33	第75図	建材 [礎石・敷居石等]	108
第26図	土器・陶磁器	E 街区①	35	第76図	建材 [石礎等]	109
第27図	土器・陶磁器	E 街区②	36	第77図	石塔類 [石仏・狛犬等]	110
第28図	土器・陶磁器	E 街区③	37	第78図	武器武具	115
第29図	土器・陶磁器	E 街区④	38	第79図	工具類	116
第30図	土器・陶磁器	石組水路①	40	第80図	工具・農具・漁具等	118
第31図	土器・陶磁器	石組水路②	42	第81図	煙管	119
第32図	土器・陶磁器	石組水路③	43	第82図	迷子札	119
第33図	土器・陶磁器	石組水路④	44	第83図	日用品 [簪・針・指貫状製品・庖丁・分銅等]	121
第34図	土器・陶磁器	石組水路⑤	45	第84図	日用品 [鉄鍋・鉄板・火箸・匙等]	122
第35図	土器・陶磁器	道路①	46	第85図	調度品・その他 [引手金具・鋸金具・焼印等]	124
第36図	土器・陶磁器	道路②	47	第86図	銭貨	125
第37図	瓦 1		61	第87図	鑄造関連遺物 [取板・埴埴]	126
第38図	瓦 2		62	第88図	鑄造関連遺物 [羽口]	126
第39図	漆器椀類 1		64	第89図	鑄造関連遺物 [銚型]	127
第40図	漆器椀類 2		65	第90図	鑄造関連遺物 [銚滓・素材]	128
第41図	漆器椀類 3		66	第91図	メロン類種子の大きさ	144
第42図	下駄 1		67	第92図	ニホンカボチャ近似種子の大きさ	145
第43図	下駄 2		68	第93図	151-28 における花粉ダイアグラム	160
第44図	桶・樽 1		69	151-102 における花粉ダイアグラム	160	
第45図	桶・樽 2		70	第95図	151-26 における花粉ダイアグラム	161
第46図	曲物 1		71	第96図	151-204 における花粉ダイアグラム	161
第47図	曲物 2		72	第97図	151-108 における花粉ダイアグラム	168
第48図	曲物・柄杓		73			
第49図	建築材 1		74			
第50図	建築材 2		75			

第98図	151-259における花粉ダイアグラム	168	第104図	151-108における樹種と層序の相関グラフ	181
第99図	151-28における大型植物遺体(種実) ダイアグラム	168	第105図	樹種の利用傾向	189
第100図	151-26における大型植物遺体(種実) ダイアグラム	169	第106図	福井城周辺の旧地形	193
第101図	151-204における大型植物遺体(種実) ダイアグラム	169	第107図	調査区にかかる屋敷地の変遷	195
第102図	151-259における大型植物遺体(種実) ダイアグラム	169	第108図	城ノ橋の発掘調査地点	197
第103図	151-102、151-108における微細物(種実) ダイアグラム	181	第109図	FKJ21-1調査区全体図	198
			第110図	FKJ21-1調査区位置図	198
			第111図	FKJ21-1土層堆積状況図	198

表 目 次

第1表	土器・陶磁器観察表	A 街区	48	第32表	硯・砥石観察表	112
第2表	土器・陶磁器観察表	B 街区	50	第33表	日用品・その他観察表	113
第3表	土器・陶磁器観察表	C 街区①	51	第34表	石瓦・建材等観察表	113
第4表	土器・陶磁器観察表	C 街区②	52	第35表	石塔・灯笼等観察表	113
第5表	土器・陶磁器観察表	D 街区上層	54	第36表	武器武具観察表	129
第6表	土器・陶磁器観察表	D 街区下層	54	第37表	生産具類観察表	129
第7表	土器・陶磁器観察表	E 街区	56	第38表	煙管観察表	131
第8表	土器・陶磁器観察表	石組水路2	57	第39表	日用品(簞・庵丁・迷子札等)観察表	131
第9表	土器・陶磁器観察表	道路	59	第40表	日用品(鍋・火箸・匙等)観察表	132
第10表	軒丸瓦観察表		62	第41表	調度品・その他観察表	132
第11表	軒平瓦・軒棧瓦観察表		62	第42表	銭貨観察表	133
第12表	丸瓦観察表		62	第43表	鑄造関連遺物観察表	134
第13表	平瓦・棧瓦観察表		62	第44表	素材同定結果	136
第14表	面戸瓦・飾板観察表		62	第45表	大型植物遺体同定結果	141
第15表	下駄圧痕計測表		70	第46表	大型植物遺体出土状況	143
第16表	箸計測表		78	第47表	メロン類種子の計測値	144
第17表	漆器輪観表		85	第48表	ニホンカボチャ近似種子の計測値	145
第18表	下駄観察表		85	第49表	152-2出土メロン仲間種子の大きさ	146
第19表	桶・樽観察表		86	第50表	貝類同定結果	149
第20表	曲物観察表		86	第51表	出土貝類の最小個体数	150
第21表	建築材観察表		87	第52表	動物遺存体同定結果	153
第22表	墨書観察表		87	第53表	分析試料一覧表	156
第23表	箸観察表		87	第54表	花粉分析結果	158
第24表	楊枝・切匙類観察表		88	第55表	大型植物遺体(種実)同定結果	167
第25表	杓子等観察表		88	第56表	151-28における大型植物遺体(葉)同定結果	171
第26表	栓観察表		88			
第27表	櫛・刷毛・独楽・その他観察表		89	第57表	大型植物遺体(動物遺存体)同定結果	172
第28表	指物等観察表		89	第58表	微細物分析結果	180
第29表	部材観察表		89	第59表	器種別樹種組成	188
第30表	容器類観察表		111	第60表	木製品樹種同定表	191
第31表	暖房・調理具等観察表		111	第61表	漆塗膜分析結果表	192
				第62表	調査地周辺の屋敷地名義変遷	195

第1章 土器・陶磁器

北陸新幹線建設工事にかかる発掘調査で出土した土器・陶磁器は、江戸時代を中心に近世初頭以降まで大量であるが、紙面の都合上ごく一部を紹介する。遺物は街区・屋敷・遺構・整地土単位で比較的同時のあるものを整理し、遺物図版・遺物観察表・遺物写真ともそれに沿って編集した。本文ではそのなかから時期的にまとまりのある遺構・整地土より出土した遺物を中心に生産地ごとに紹介する。

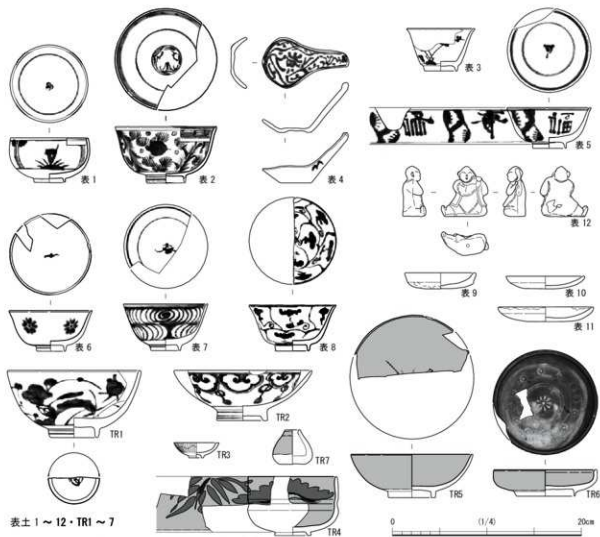
第1節 A街区 15-1 調査区出土の土器・陶磁器

1) 表土出土遺物 (第1図 第1表 写真図版第1)

伊万里 表1は半球碗で窓に草花文、表2は端反碗で、外面に水草亀文と見込に円形松竹梅を描く。表3は草花文の坏、表4は匙で内面に唐草文、外面に笹文を描く。18世紀末以降にまとまる。

瀬戸・美濃焼 端反碗で、表5は福寿文、表6は花文、表7は流水文、表8は内外に唐草文を描く。

土師質土器 G系の皿ほかに、型成形の童子を表した土製品があり文様を刻線で表現する。



表土 1 ~ 12・TR1 ~ 7

第1図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区① (縮尺 1/4)

TR等出土遺物(第1図 第1表 写真図版第1)

伊万里 TR 1は大振りのくらわんか手の碗で外面に草花文、TR 2は口縁に対して器高の低い平碗で、輪宝繋文を外面に描く。

京・信楽焼 体部中央が窪むTR 4は高台無軸の色絵の碗で、外面に赤・緑色で松竹文を描く。このほか見込に白釉の象甌の花文を認める灰釉皿や先端に向けて細くなる甌がある。

2) 第1面遺構出土遺物(第1～5図 第1表 写真図版第1～4)

井戸3(第2図)

瀬戸・美濃焼 3-1は唐草文と松竹梅を描く碗で、見込に寿文を描く。型紙刷りの皿もみられる。

産地不明品 内面と腰部以下無軸の3-3は土瓶で、両面に文様の違う草木文を描く。また口縁外面に一定の単位で斜線を認める。3-4は直角に曲がる口縁端部に刻目を入れる甕で、外面と内面上部に鉄泥を施し草花文を線刻で描く。いずれも近代のものである。

土坑4(第2図)

瀬戸・美濃焼 4-1は稜花状口縁外面を刺突する深鉢で、屈曲する腰部に明瞭な2条の沈線が巡る。

土坑21・溝22(第2図)

瀬戸・美濃焼 22-1は内外面に唐草文を描く端反碗で、高台内に銘がみられる。

越前焼 21-3は顕著な轆轤目を認める体部に丸みのある口縁を持つ深鉢である。

土師質土器 内型成形の21-4～6、22-2・3はG系の土師質皿で、この時期から増加する。

土坑28(第2・3図) 木製品と植物遺体を含む18世紀後半以降の遺物群である。

伊万里 28-1は稲束、28-3は兎と果実文を描く半球碗で、内面に四方禪文、見込に五弁花を持つ青磁の半筒碗ともに湯呑茶碗である。28-5・6の碗蓋は表に芭蕉文、裏に鶯を描く同規格のセット品である。28-7の破蓋は表に松と家と人物文、裏に雷文と昆虫文を描く。

瀬戸・美濃焼 28-8は梅枝文、28-9は唐草文と銀杏文を描く、28-10は高台裏全面に灰釉系の釉を施す端反碗で、白泥の梅花文を認める。瀬戸の小西窯に類似品がみられる。

京・信楽焼 体部を工具で変形に削り、下端に刻目を持つ28-11～15を認める。灰釉系の釉を施すこの碗は信楽窯の表採遺物に確認できる。

越前焼 28-18・19は体部が直線的に伸び口縁で屈曲する深鉢で、団子状の3脚が付く。18は底部が穿孔され、植木鉢に転用されている。28-19は通常と異なり装飾的なカキメ状の成形痕を認める。

土師質土器 28-20はG系の灯明受け皿である。

土坑100(第3図)

伊万里 100-1は型成形で、内面に唐草文を認める匙である。

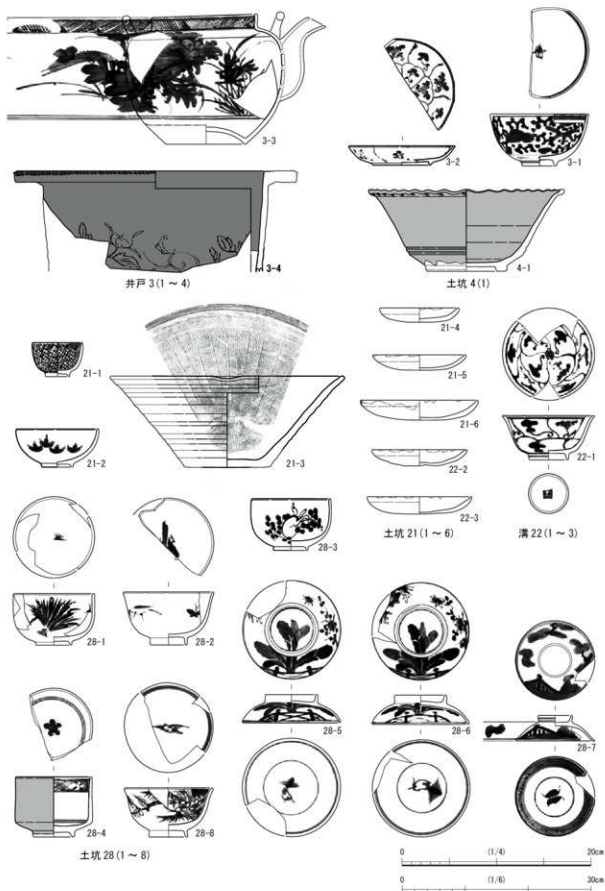
瀬戸・美濃焼 100-2は隸字体文を外面に描く端反碗である。

越前焼 100-4・5は土坑28出土遺物と同形態だが、小振りで鉄泥を全面垂らし掛ける。前者は底部が穿孔される。口縁の張り出しの弱い後者がやや古く18世紀末頃のものである。なお土坑92には同時期のG系の灯明受け皿(92-1・2)がある。

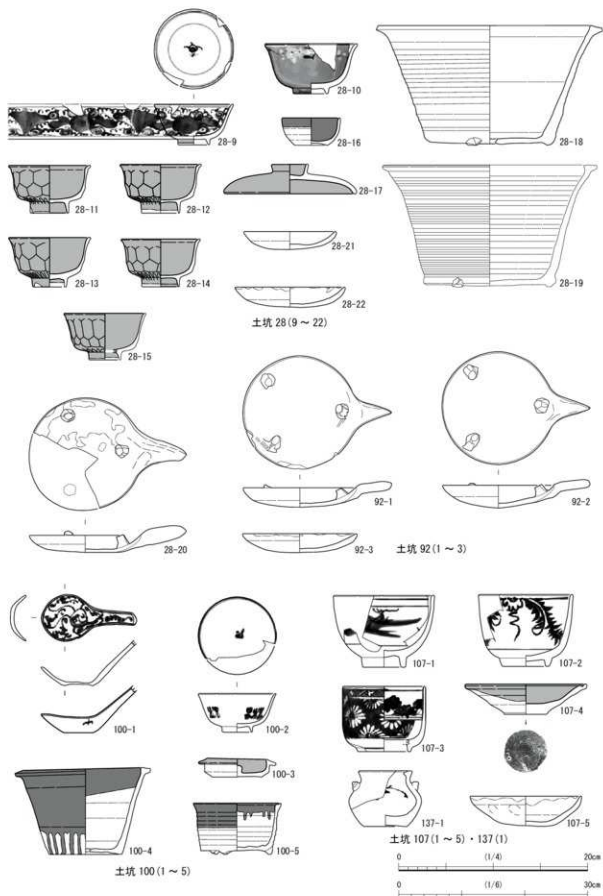
土坑107(第4図)

伊万里 107-1の山水文を描く碗は全体的に丸みを帯びる点で107-2・3と異なる。腰部が張る後者のうち3は外面に散し菊、内面に菊文を描く。草花文を描く2は器面が灰色気味の波佐見産である。

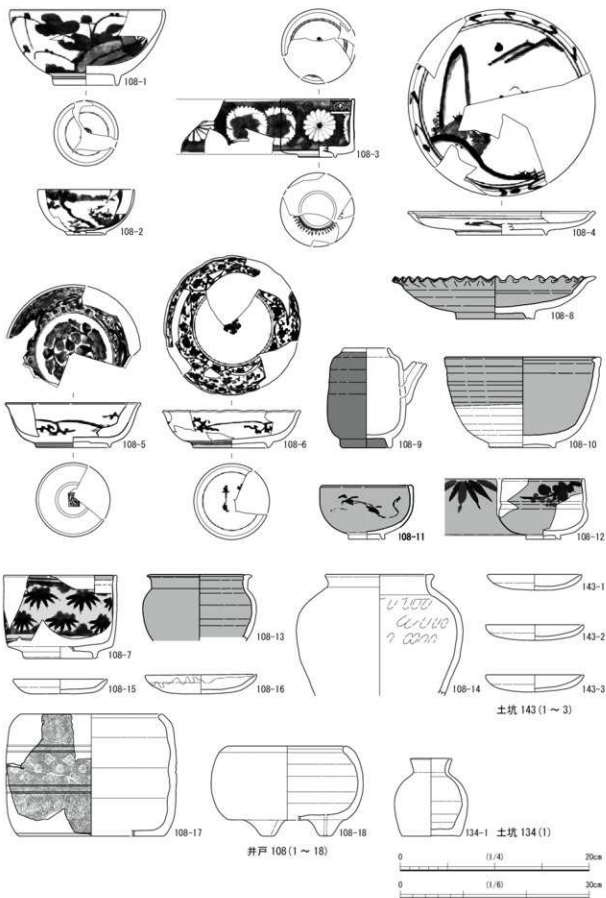
唐津焼 107-4は溝縁口縁を持つ灰釉系の皿で、見込に砂目の痕があり、回転糸切り痕を認める。



第2図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区② (縮尺1/4 1/6: 3-4・21-3)



第3図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区③ (縮尺1/4 1/6:28-18・19、100-4・5)



第4図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区④ (縮尺1/4 1/6:108-14・134-1)

井戸 108 (第4図) 18世紀後半以降の遺物群である。

伊万里 108-1は草花文を描く大振りのくらわんか手の碗である。焼成時の歪みが顕著である。108-2は山水楼閣文、108-3は菊花文を描く半筒碗で、五弁花文が見込みにみられる。108-5・6は皿で、外面に唐草文が巡る。前者は内面に草花文、見込に牡丹文、蛇の目凹形高台内に「満福」銘、稜花状口縁の后者は内面に唐草文を描き、見込に五弁花文、高台内に「大明年製」銘を認める。18世紀後半頃のものだが、口縁が屈曲し見込に風水文を描く皿(107-4)は古く、17世紀前半まで遡る。直線的に伸びる体部全面に笹文を散らして描く鉢(108-7)は、口縁内端部が無軸である。

瀬戸・美濃焼 108-8は襷皿で見込上方に稜が巡り、全面に施した灰軸系の軸に貫入がはいる。107-9は注口を貼り付けた鉄軸の水注で、口縁と内面は無軸である。108-10の鉢は口縁が内側に肥厚する。高台を削り出す際に腰部にも回転削りを施し、体部上半と内面に灰軸系の軸を掛ける。いずれも伊万里と同時期に収まる製品と考えられる。

京・信楽焼 108-11は文様不明の鉄絵を認める半球碗、108-12は体部中央が窪む色絵の碗で、外面に笹文と梅枝文を描く。また笹文には赤色軸が残る。后者は見込に目痕が3つ残り、高台はいずれも無軸である。TR 4出土の類似形態の碗とともにこの頃の組成の一端を示すものと思われる。

越前焼 108-13は全面に灰軸を施す甕、108-14は内面に指頭痕が顕著なねじたて成形の甕である。

瓦質土器 内湾して伸びる 108-17は火鉢で、体部が2条の沈線で3区画され、中段に花文と菱形文を捺印し、上・下段に細密な烈点文を認める。108-18の風呂はより丸みを帯びる外面を丁寧に磨きあげる。これらの資料にはG系の土師質皿が共伴する。同系の皿は土坑143にも認める。

土坑 134 (第4図)

越前焼 134-1はお歯黒壺で、体部中央に最大径を持つ胴部に外反気味に伸びる口縁がつく。

土坑 123 (第5図)

伊万里 123-1は内面に牡丹唐草文、123-2の染錦の皿は外面に草花文、内面に宝相華文、見込に雲竜文を描き、高台にハリの痕がある。17世紀後半以降のため、伝世品と思われる。

越前焼 123-3は轆轤成形で高台を持ち、口縁部が直立する播鉢で、18世紀末頃のものである。

溝5 (第5図)

唐津焼 灰軸系の皿で、見込の白泥上に銅緑軸を渦巻き状に施す。瀬戸・美濃焼の灰軸皿とC系の土師質皿が伴う。

2) 整地土1・2出土遺物(第6図 第1表 写真図版第5・6)

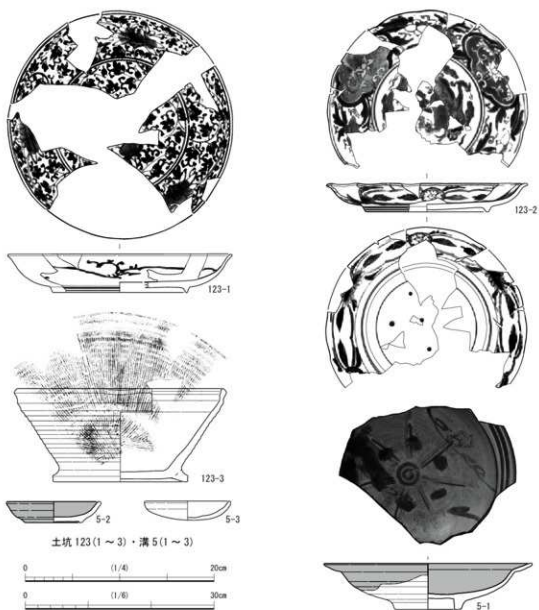
伊万里 整1-1は口縁に雷文、外面に二重格子文を描く小丸型碗で、高台内に福字の示偏が篆書体の偏に変化した銘を持つ。整1-2の碗は花蝶文を伴う家、整1-3の蕎麦猪口は松竹梅を外面に描く。整2-1は小碗、整2-2は大振りの坏で、后者の外面には雪輪文を描き、口縁端部に口紅を認める。

唐津焼 整1-4は外面に山水文を描く高台無軸の京風唐津碗で、17世紀後半のものである。

瀬戸・美濃焼 整1-5~7は端反碗で5は流水文、6は草花文、7は山水文を描く。沈線を認める体部に、灰軸と鉄軸を掛け分ける整1-8は腰筋碗、整1-9は白泥の梅花文を認める端反碗である。

京・信楽焼 整1-10は灰軸系の軸の上から鉄絵で「風」・「仏」を描く半筒碗である。

産地不明品 整1-11は方形の四隅を窪ます隅入角鉢で、白泥の内外面に岩と文字の鉄絵、青色軸で秋草文を描き、口縁にも同軸を施す。「風」・「蘭」・「芝」の文字を外面に認める。整1-13の土鍋は団子状の脚が付き腰部以下無軸で、整-13の蓋は灰軸系の軸を施す体部内に摘みを貼り付ける。



第5図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区⑤ (縮尺1/4 1/6:123-3・5-1)

越前焼 方形を呈する口縁を持つ整1-14は深鉢で、団子状の脚を持つ底部を穿孔し、外面と内面上半に灰釉を施す。同形態で器高の低い整2-3の鉢には外面に鉄泥を粗く垂らし掛ける。全面に施釉する製品は幕末以降に認めるものである。

土師質土器 整1-15・16と整2-4・5はG系の灯明受け皿で、16の見込には油痕が残る。このほか同系の皿もあり、道師を表した型成形の土製品も認める。

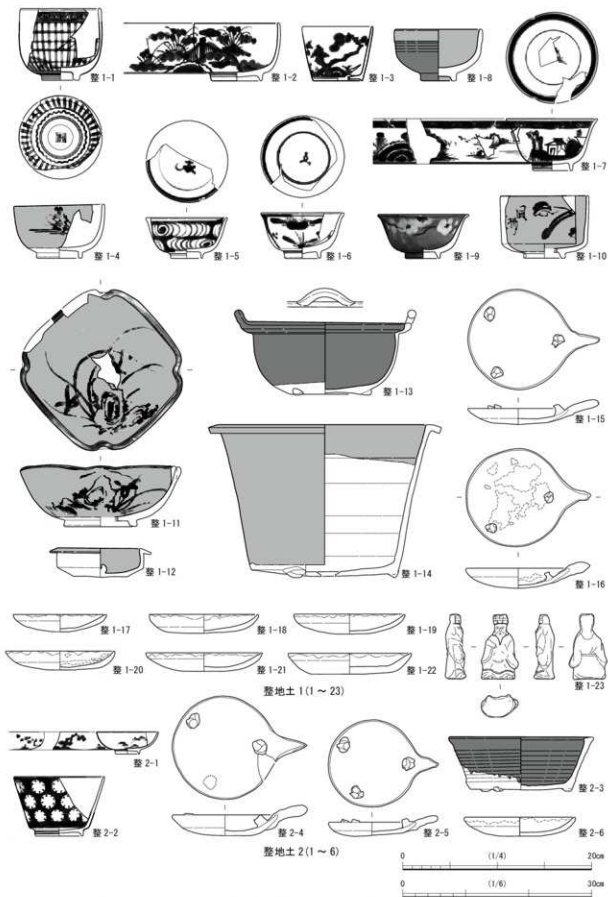
3) 整地土4出土遺物 (第7図 第1表 写真図版第6)

伊万里 整4-1は口縁内面に放射状の波文、見込に梅枝文を描く碗で、高台内に「大明」銘を持つ。

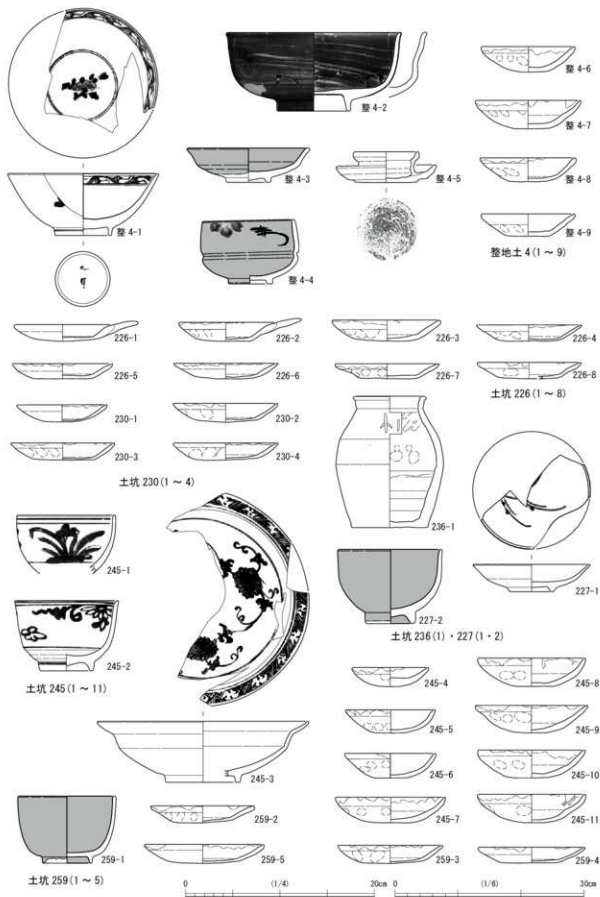
唐津焼 整4-2は鉢で内外面に刷毛目を施す。整4-3は高台無軸の灰釉皿で被熱痕を認める。

京・信楽焼 整4-4は高台無軸の色絵碗で、花の部分は赤、葉の部分は緑色である。

土師質土器 底部に回転糸切り痕を認める轆轤成型の整4-5は、やや外反する筒状の部体を貼り付けた皿である。皿部と受け部とも成形痕が顕著に残る。これはG系のそれ同様、灯明受け皿の可能性もある。整4-6～9はC・D系の皿である。



第6図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区⑥ (縮尺1/4 1/6: 整1-4・整2-3)



第7図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区⑦ (縮尺1/4 1/6:236-1)

4) 第2面遺構出土遺物 (第7図 第1表 写真図版第6・7)

土坑 226・230・245・259 (第7図) いずれも土師質皿が多く出土した17世紀後半の土坑である。

土師質土器 226-1～8・230-1～4・259-2～5は、見込と体部との境の圏線を明確に認めるD系の土師質皿で、一乗谷のD類の製作技法をよく受け継ぐ。226-1・2は灯明受け皿である。C系である土師質皿(245-4～11)は底部が丸い体部内面にナデ調整を行うもので、圏線を入れる意識がみられる。系譜は一乗谷のC類の製作技法である。

伊万里 245-1・2は草花文を描く碗で、後者は体部下端に轆轤成形の痕が残る。245-3は肩部が屈曲した体部から内湾気味の口縁に至る大振りの皿で、見込に菊花文を描く。17世紀中頃のものである。

唐津焼 259-1は碗で、灰軸系の軸を全面に施し高台内は平坦である。17世紀後半のものである。

土坑 227・236 (第7図)

伊万里 227-1は見込に草花文を描く皿である。口径に対して高台の幅が狭い特徴を持つ。

唐津焼 土坑 259 出土遺物と同じ灰軸系の軸を施す碗で、17世紀後半頃のものである。

越前焼 236-1は口縁端部が外に張り出す壺で、肩部に傘型の刻文がある。体部外面には鉄泥を全面に施すが、内面は体部下半を密に、上半は頸部のみ粗く塗る。

5) 古代遺物 (第8・9図 第1表 写真図版第7)

須恵器 坏には無台坏と高台坏がある。古2は坏H身、古3～6は坏Aである。4～6は古3よりも底部の屈曲が緩い。古7～10は坏Bで外側に踏ん張り高台を貼り付ける。古11・12は皿でいずれも底部の屈曲が強い。古13～16は坏H蓋で14～16は全体が丸みを帯びる。古17は坏Bの蓋で、やや扁平な摘みが付く。古18のように摘みのない蓋も認める。古19は口縁が垂直な壺で、肩部に沈線が巡る。古20・21は肩部の屈曲の明瞭さと残存部から細口壺であろう。古22は平瓶、古23は上方に伸びる把手が付く甔状の鉢で、削り調整の腰部以下を除きカキメを施す。全て7世紀～9世紀に収まる。このほか、灰軸陶器の耳皿や緑軸陶器の皿もある。

土師器 古26は口縁内端部が肥厚する布留式甕である。古27・28は口縁内面に強いナデ調整により形成された段を数段認める。古29・33は緩く外反する頸部から斜めに開いて口縁へ至る甕で、古31は体部外面にカキメ調整痕が僅かにみられる同形態に長胴甕である。古32は轆轤成型で体部を丸く挽き出した後に底部に削りを施した丸底の甕で、頸部の屈曲が明瞭である。口縁を強くナデて面を形成する平底の小型甕もある。布留甕以外は須恵器と同時期に収まると思われる。

第2節 B街区16-1調査区出土の土器・陶磁器 (第9図 第2表 写真図版第8)

包含層出土遺物 (第9図) 包1は青磁の仏華瓶で、強いナデ調整により口縁端部が顕著に窪む。

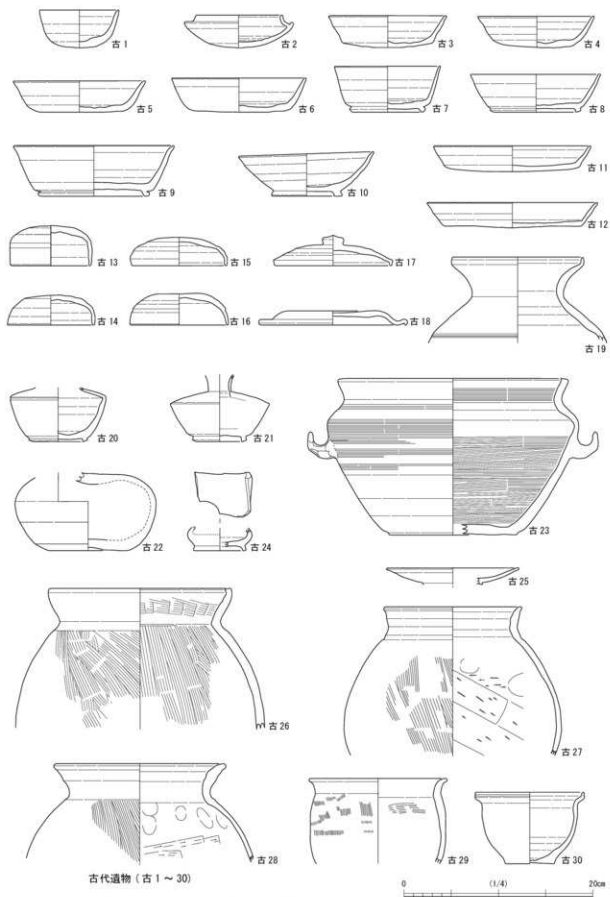
溝 112・115 16世紀末～17世紀初頭の遺物がまとまる。

唐津焼 腰部以下無軸で体部が外反する112-1の皿と灰軸系の軸を施す鬘皿がある。

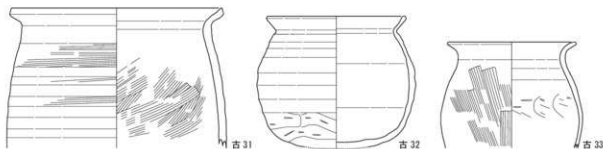
瀬戸・美濃焼 112-3は体部が直線的で口縁が直立する天目茶碗、112-4は筒型の志野皿である。

越前焼 115-1は鉄泥を施さない壺で、口縁を横へと引き伸ばす。112-5は水平な口縁下に沈線の巡る播鉢で、播目は摩滅で掃り減っている。115-2は内傾する口縁下に深い沈線の巡る播鉢で、これらは17世紀初頭頃と時代的に古い様相を持つ。上記の瀬戸・美濃焼とはほぼ同時期のものである。

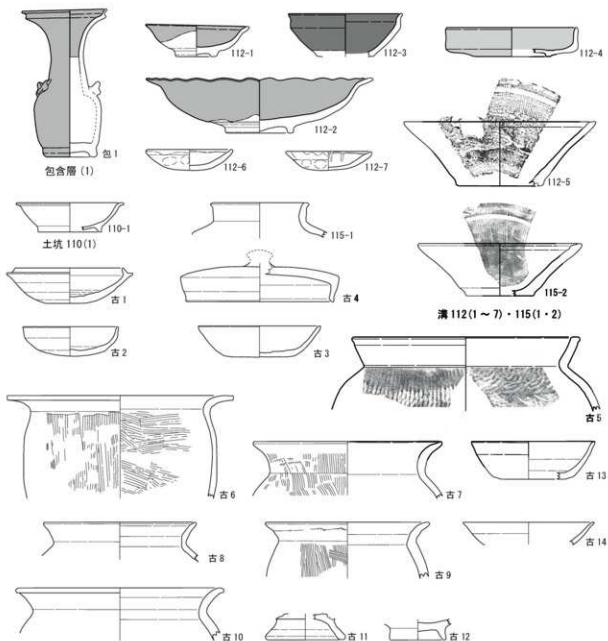
土師質土器 112-6・7はC系1の土師質皿で、口縁端部を摘み上げる古い様相を認める。なお土坑110からは体部が外反する白磁皿のE群が出土している。



第8図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区③ (縮尺1/4)



A街区 15-1 調査区出土遺物 (古31 ~ 33)



A街区 16-1 調査区出土遺物 (古1 ~ 14)

第9図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区⑨・B街区 16-1 調査区 (縮尺1/4 1/6: 112-1・115-2)

古代遺物（第9図）

須恵器 古1は坏H身、古2・3は坏A身である。古4は体部が屈曲し口縁に至る蓋で、短頸蓋に伴うものである。口径の広い古5は甕で、焼成の甘い体部両面に叩き調整の痕がみられる。

土師器 古6はゆるく内湾する体部から斜めに開いて口縁へ至る甕で、端部に面を持つ。古7～10は古6より頸部の屈曲が強い甕で、古9は口縁外面に接合痕がある。黒色土器や緑釉陶器碗も認める。

第3節 C街区16-1調査区出土の土器・陶磁器

1) 表土・包含層出土遺物（第10図 第3表 写真図版第8）

伊万里 包1は葉文が緑、花文が赤色の色絵の八角小鉢である。包2は輪花状口縁の皿で、体部内面に瑞果文、見込に花文を描く。包3は見込を軸剥ぎする高台無軸の波佐見産の青磁皿である。

京・信楽焼 表1は半筒碗で、体部内面の段上に鉄軸で1条の沈線を施す。

産地不明品 表2は灰軸系の軸を施した坏、表3は軸上に鉄絵で草花文を描いた香炉である。

土師質土器 包4はG系の灯明受け皿、包5は坏で、丸みのある底部から外反して伸びる体部を持ち、口縁端部を摘み上げる。G系の土師質皿も認める。

2) 第1面遺構出土遺物（第10～12図 第3表 写真図版第8～10）

土坑1・2（第10・11図）複数が切り合う土坑で、18世紀後半～19世紀にまとまる遺物群である。

伊万里 1-1・2は前者は草花文とコンニャク印判の若松文、後者は窓内に人物と草花文を描く碗、1-3は見込に五弁花文を持つ広東碗である。1-4は菊散し文、2-1は梵字文を描く碗で18世紀後半以降に多い。腰部に花卉、外面に羽子板と羽根を描く1-5・6は紅皿であろう。整1-9は表に山水文を巡らす碗蓋である。2-2は段重蓋で表に牡丹唐草文を描く。

唐津焼 外内面に刷毛目を施す1-11は鉢で、見込は中央を除いて軸剥ぎする。

瀬戸・美濃焼 1-12は灰軸系の軸上に呉須を掛け流す碗、2-3は鉄絵で草文を描く深鉢である。

京・信楽焼 体部が湾曲する1-13は色絵碗で、灰軸系の軸上に緑と赤色で草花文を描く。体部には印がみられ、無軸の高台内に「上の」の墨書がみられる。

越前焼 1-14は轆轤成形で高台を持ち口縁がやや直立する搦鉢、1-15・2-5は体部が内湾して立ち上がる鉢で、前者は外面に粗い刻線を巡らし、後者は肩部に円環状の貼り付け文を持つ。1-16・17は体部が直線的に伸びて口縁で屈曲する深鉢で、口縁上面に沈線が巡り底部が穿孔される。口縁部が垂直に屈曲する甕は沈線を認める外面に印花文と波状文と列点文を施し、薬灰軸を鉄軸の上に流し掛ける。

土師質土器 G系の土師質皿（1-19～24）や印跡の消失した焼塩壺（2-8）を認める。

土坑8・9・22・25（第11・12図）

伊万里 8-1は箆文を描く碗、8-2は外面に若松文を描く半筒碗、25-1は外面に菊花文を重ねて描く坏、22-1は見込を軸剥ぎする高台無軸の波佐見産の皿である。

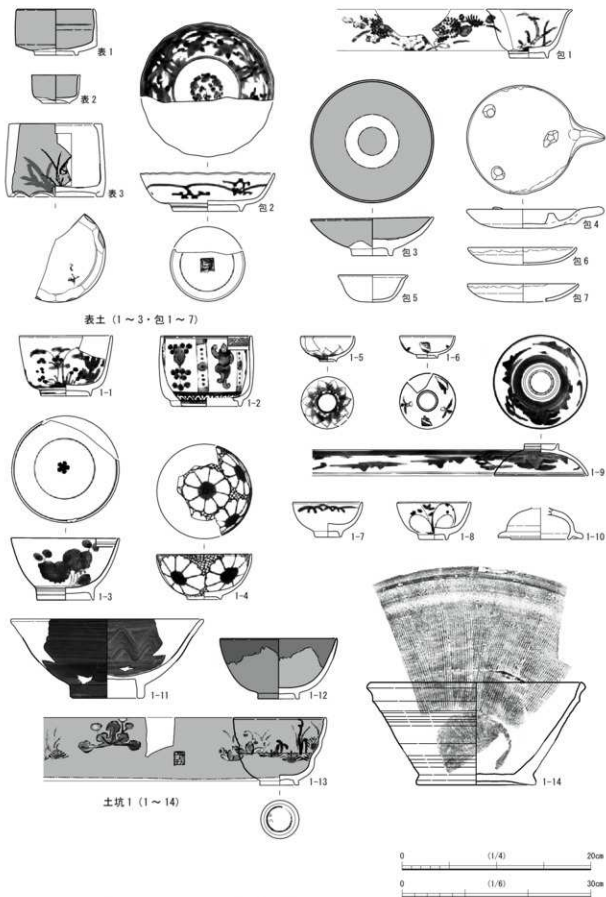
唐津焼 9-1の碗は彫唐津で刻文を持つ全面に灰軸系の軸を施す。漆継ぎされ見込に目痕が残る。

瀬戸・美濃焼 25-2は煎皿、25-3は内外面に灰軸系の軸を施す鉢で、半円形状の把手を認める。

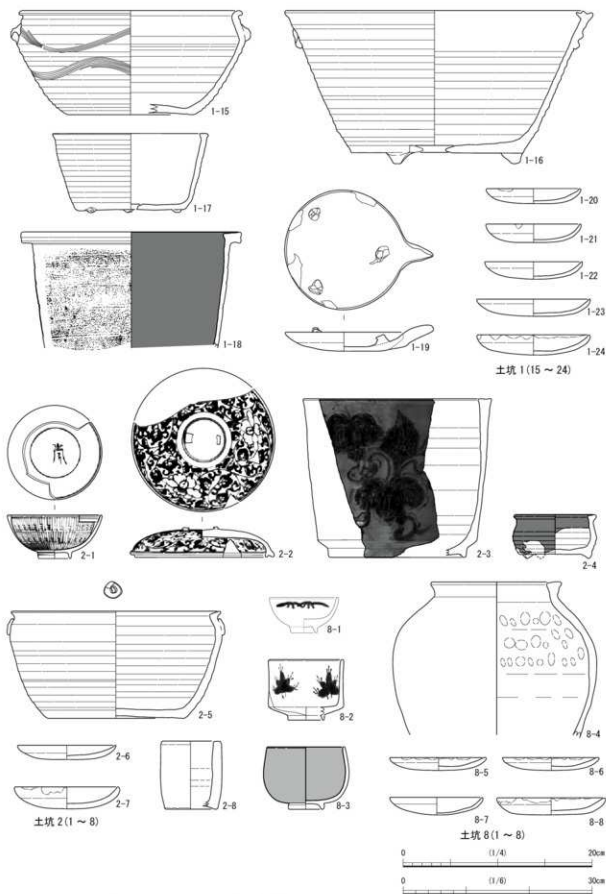
京・信楽焼 内外面に灰軸系の軸を施す8-3は、高台無軸の半球碗である。

越前焼 8-4は中甕、9-2は搦鉢、25-6は底部を穿孔した深鉢で、19世紀前葉のものである。

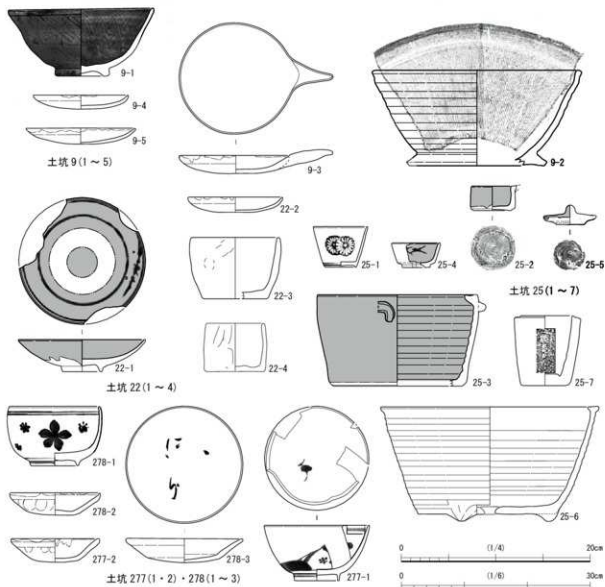
土師質土器 9-3は突起を持たないG系の灯明受け皿、25-7は摩耗した印を認める焼塩壺、22-3・4は手づくね成形の筒型土器で同器種であろう。



第10图 土器・陶磁器 C街区16-1調査区① (縮尺1/4 1/6:1-14)



第 11 図 土器・陶磁器 C街区 16-1 調査区②(縮尺 1/4 1/6 : 1-15 ~ 18・2-5・8-4)



第12図 土器・陶磁器 C街区16-1調査区③(縮尺1/4 9-2・1/6:25-6)

土坑277・278(第12図)

伊万里 278-1は外面に花散し文を描く碗、277-1は草花文を描く碗と思われる。

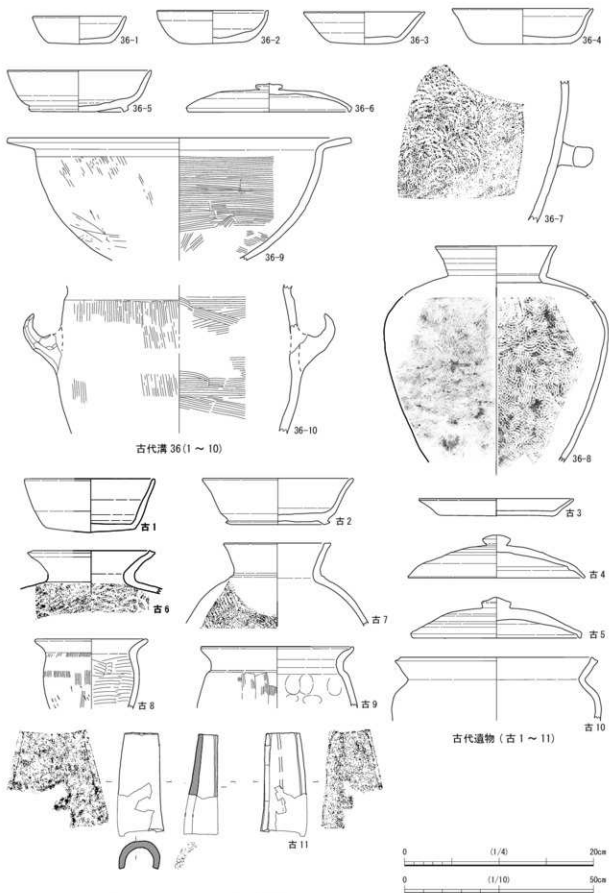
土師質土器 278-2はC系1、278-3はD系2の土師質皿で、見込に判読不明の墨書を認める。

3) 古代遺物(第13図 第3表 写真図版第10)

須恵器 36-1~4は坏A身、36-5は坏B身で外側に踏ん張り高台を貼り付ける。36-6は坏B蓋で、器高が低く扁平な摘みが付く。36-8は僅かに張った肩部から直線的に伸びる口縁を持つ中甕である。36-7は把手付きの甕である。同遺構以外には返りを持つ古4と返りを持たない古5の山笠状の坏B蓋が特徴的である。このほかに頸部の屈曲が強く肩部が張る古6、緩やかな体部を持つ古7の壺がある。

土師器 36-9は丸みを帯びる体部から斜めに開く幅広の口縁を持つ鍋、36-10は体部最大径の部分に把手が付く甕である。古8は小甕で内面の覓調整が粗い。古9は強いナデ調整で体部と頸部の境界が明瞭である。古10は肩部が張り、頸部が強く屈曲する甕である。

瓦 古11は丸瓦で内面端部に面を持ち布目痕がみられる。



第13図 土器・陶磁器 C街区16-1調査区④(縮尺1/4 1/8:36-8 1/10:古11)

第4節 C街区 15-2 調査区出土の土器・陶磁器

1) 第1面遺構出土遺物 (第14～16図 第4表 写真図版第11～13)

溝36 (第14図)

伊万里 36-1は肩部が強く屈曲し直立する皿で、口縁外面に対になる草花文、見込に竜文を描く。36-2は皿で見込の圏線内に柳文を描く。なお前者の器面はやや青みを帯びる。

唐津焼 36-3は灰軸系の軸を施す皿である。強いナアにより体部内面に凌が巡る。

土師質土器 36-4・5のC系1、36-6・7のC系2、36-8・9のC系3がある。

土坑48・76・150、井戸56 (第14図)

伊万里 48-1は碗で、見込の圏線内に芽荷文、高台内に「大明」銘を認める。48-2は皿で、内面に折り花文、見込に花文を描く。56-1は外面に緻密な花唐草文を描き、高台内に「渦福」銘を持つ。口縁に鋸歯文がある150-1の碗は、体部外面の鉢内に連続花文を描く。17世紀前半頃に認める特徴を有する。これらの遺構出土の伊万里には古い様相を認める。

産地不明品 56-2は鉄軸の短頸壺で、丸みのある体部に直立する口縁を持つ。腰部と内面は無軸で、器肌が茶褐色に良く焼き締まる。76-1は土瓶で、灰軸系の軸の上から銅緑軸を施し、無軸の底部外面に「大乙ひな」と記す。

土坑156・166 (第14～16図) 廃棄土坑出土の18世紀後半以降の遺物群である。

伊万里 156-1・166-4は碗で、前者は外面に蓮池文、見込に鶯、後者は外面に羽羽根文を描く。156-2・3と160-5は見込に五弁花文を持つ半筒碗で、前者は輪宝繁文、後者は菊花文を描く。二重格子文の166-6も含めて湯呑碗である。湯呑碗より口径の広い166-1～3のうち1は外面に鼓と草花文、2は草花文、3は福壽文を、見込にそれぞれ草花文、昆虫文、振花文を描く。116-8～11は碗蓋で、裏に四方禪文を認める1と8はセット関係である。166-9は表に粗唐草文、裏に麒麟、摘みに「大明成化年製」銘、166-10は表に芭蕉文と花文、裏に源氏香を描く。このほか裏に五弁花文を持つ青磁蓋、166-12のように表に唐草文を描く段重蓋も認める。156-4・166-7は蛇の目凹形高台を持つ皿で、前者は内面に亀甲文、見込に山水文、後者は内面と見込に笹文を描く。156-5は幅広の高台外面と口縁内面を除き青磁軸を施す香炉である。

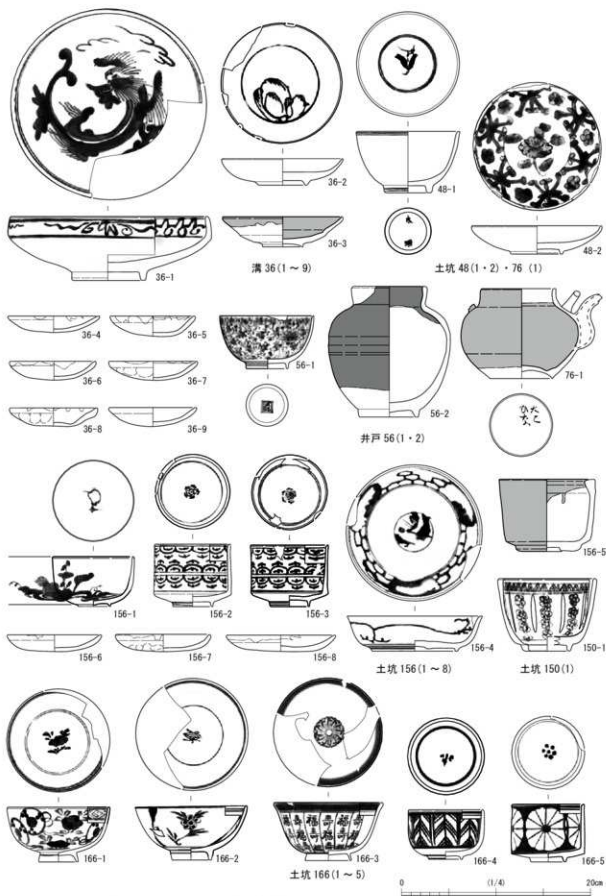
唐津焼 166-13は無軸の高い高台を持ち、内外面に刷毛目を施す碗である。166-14は灰軸系の軸を全面に施す具器手碗で、17世紀後半頃のものである。

瀬戸・美濃焼 166-15の端反碗は外面に蓮弁文、見込に四葉文を描く近代のものである。116-16・17は体部が垂直に伸びる香炉で、前者は体部の下部と底部を削り高台を造りだす。屈曲部より上の体部外面、口縁内面に灰軸系の軸を施す。同形態の後者は無軸の底部に5脚を貼り付け、外面に草花文を描く。これらの香炉もほかの遺物と同時期のものであろう。

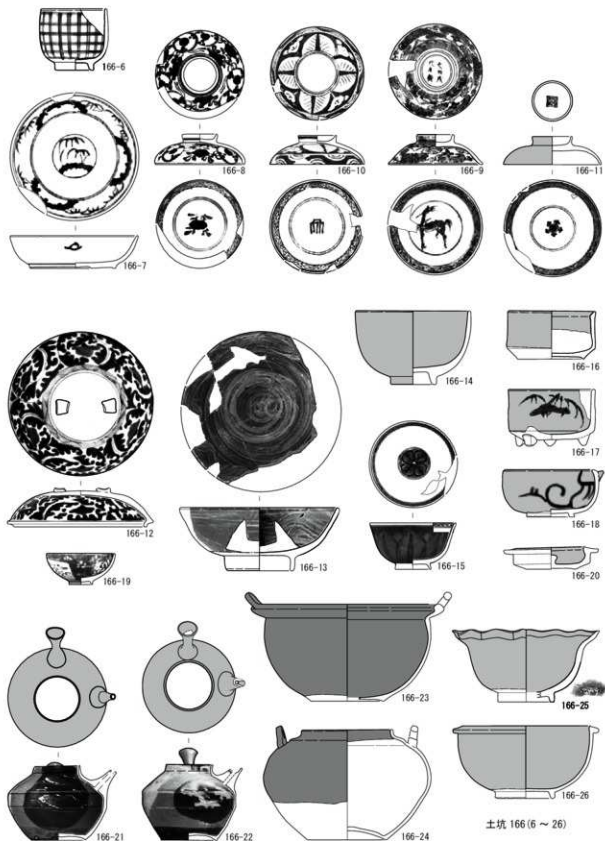
九谷焼 166-19は色絵碗で、扇型の窓内に同一意匠の秋草文を描く。

京・信楽焼 166-18は灰軸系の軸上に鉄絵を描く高台無軸の片口鉢で、見込に目痕が3つ残る。166-21・22は急須で灰軸系の軸上に白泥と鉄軸を施す。後者は鉄軸の昆虫文、白泥の瑞果文を認める。底面が無軸の両者は信楽窯の汽車土瓶と同様のものであろう。

産地不明品 166-23は内外面に鉄軸を施す土鍋、166-24は腰部以下と内面が無軸の土瓶で、口縁下の段から一部分に灰軸を掛ける。166-25は袋状口縁を持つ灰軸系の鉢で、「安居」印を腰部に持つ。166-26は鉄泥を施す高台以外に灰軸系の軸を施す鉢で、見込に目痕が3つ残る。

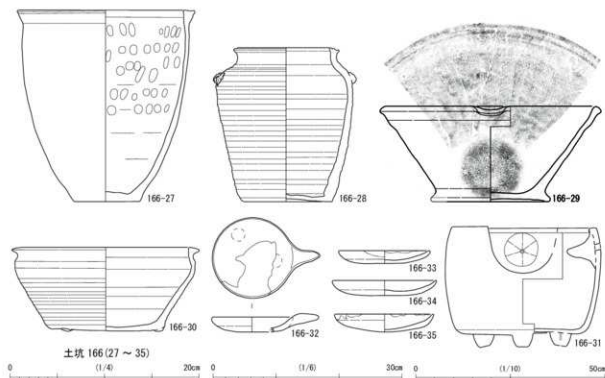


第14図 土器・陶磁器 C街区 15-2調査区⑤(縮尺 1/4)



0 (1/4) 20cm

第15図 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑥(縮尺1/4)



第16図 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑦(縮尺1/4 1/6:166-28～31 1/10:166-27)

越前焼 166-27は口縁に最大径を持つねじたて成形の中甕で、口縁端部を僅かに横に引き出す。166-28は口縁上面に2条の段が巡る轆轤成型の小甕で、肩部に撚り紐を表現した貼り付け文を認める。166-29は貼り付け高台を持つ挿鉢で体部から口縁に直線的に伸びる。166-30の鉢は体部が内湾する。土師質土器 156-6～8、166-32～35はG系の土師質皿で、32は受け部が剝離した受け皿である。瓦質土器 166-31は内面に受け部、底部に脚を3つ持つ風炉で、U字型の窓を認める体部、脚部中央に穿孔がある。

2) 整地土1出土遺物(第17図 第4表 写真図版第14)

伊万里 整1-1は外面に草花文、高台内に銘を認める碗、整1-2は内面に蝶を描く皿でくらわんか手である。整1-3は蛇の目凹形高台を持つ後花皿で、内面に芭蕉文、見込に萩と月を描く。白磁の碗蓋の整1-4は、摘みの圏線内に銘を認める。草花文と芭蕉文が巡る高台無軸の瓶もある。

瀬戸・美濃焼 整1-6は端反碗で、雲文内に竜文を描く。

京・信楽焼 高台無軸の灰釉系の整1-7・8の碗の後者は、見込に赤絵で葉文、鉄軸で湖畔を描く。

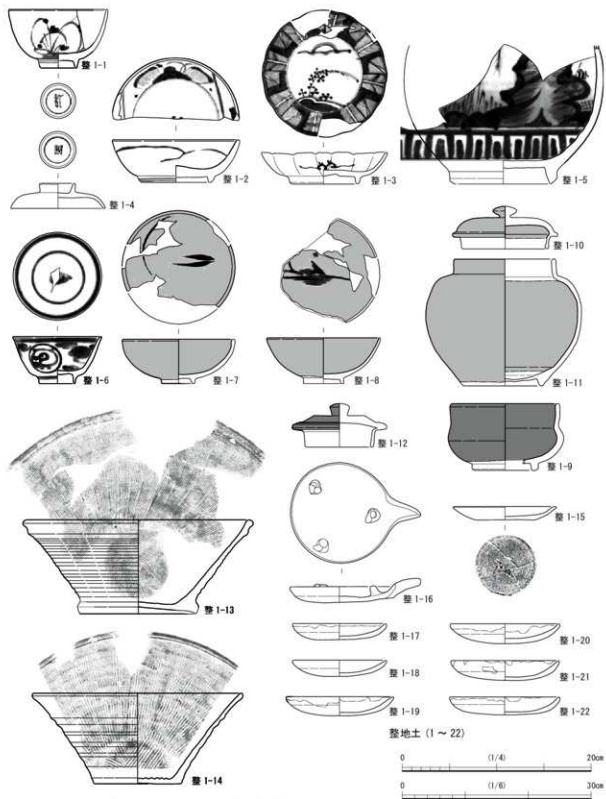
産地不明品 口縁内外、口縁内面と見込が無軸の整1-10・11は短頸壺である。整1-12は宝珠型の摘みを持つ土瓶蓋で、鉄軸を施す。このほか体部がやや窪む鉄軸碗がある。

越前焼 整1-13は貼り付け高台、整1-14は先細り丸みを帯びる口縁を持つ挿鉢である。

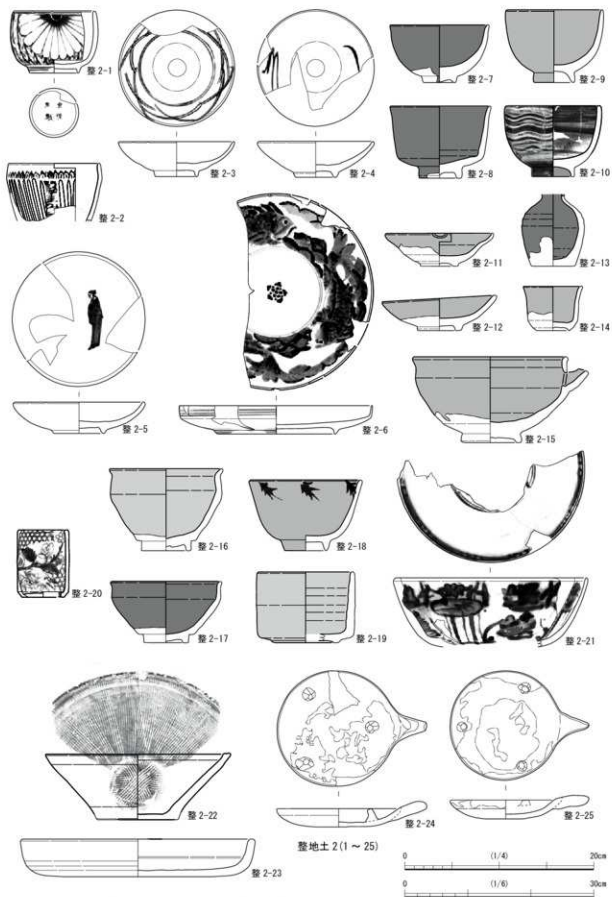
土師質土器 整1-16はG系の土師質皿で、底部が平坦で体部が直線的な皿もみられる。

3) 整地土2出土遺物(第18・19図 第4表 写真図版第14・15)

伊万里 整2-1は半菊と矢羽根文を外面に描き、高台内に「宣徳年製」銘を持つ。整2-2は体部外面の鍋内に福寿文を認める。整2-3・4は見込を軸刺ぎする皿で、前者は内面に絵垣文を描く。高台無軸の後者は彼佐見産である。見込に人物文を描く整2-5、草魚文を描く整2-6の皿もある。整地土1と異なり一時期古い様相を含む特徴を認める。



第17图 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑧(縮尺1/4 1/6:整1-13・14)



第18図 土器・陶磁器 C街区 15-2調査区⑨(縮尺 1/4 1/6: 整 2-23)

唐津焼 整2-7は高台無軸の鉄軸碗、整2-8は腰部が屈曲する鉄軸の半筒碗、整2-9は灰軸系の呉器手碗、整2-10は刷毛目碗である。整2-11は窪みが3つある口縁を持つ灰軸系の灯明皿、整2-13は腰部以下無軸の鉄軸皿、整2-15は高台無軸の灰軸の片口鉢で、口縁端部を横へ摘み出す。整2-14の坏も含めて17世紀後半に収まる。

瀬戸・美濃焼 整2-16は内外面に長石釉、整2-17は鉄軸の天目茶碗で高台は無軸である。整2-18は高台内面以外に灰軸系の釉を施し、口縁外面に鉄絵で草文を描く碗、整2-19は全面に長石釉を施す半筒碗である。

京・信楽焼 整2-20は色絵瓶で、灰軸系の釉の外面に金泥で瑞果文、緑色の笹文と松垣文を描く。

中国製品 外面にやや滲む蓮池水鳥文を描く整2-21は彰州窯の鉢で、貫入を認める。

越前焼 整2-22は水平な口縁下に不明瞭な段が巡る播鉢である。17世紀前半頃のものであろう。

土師質土器 整2-23は直立気味な体部に1条の沈線が巡る焙烙で、外面下方に回転削りを施す。整2-24・25はG系の灯明受け皿、整26～29はC系、30はD系で圏線を認める。整2-31～33はG系の土師質皿、整2-34は体部外面の指頭痕が顕著な焼壺である。

第4) 第2面遺構出土遺物 (第19図 第4表 写真図版第15・16)

石組水路 178 (第19図) 17世紀後半頃の遺物でまとまる遺物群である。

伊万里 178-1は外面に草花文を描く碗である。

唐津焼 178-2は口縁が強く外反する碗で、無軸の腰部に明瞭な回転削り痕を認める。178-3は高台を除くやや外反する体部全面に灰軸系の釉を施す呉器手碗である。178-4は胎土目積みの灰軸系の皿で、腰部以下は無軸である。178-5は見込屈曲部に段の巡る溝縁皿、178-6は口縁部を横に引き出す溝縁皿である。後者は外面に灰軸系の釉、内面に刷毛目を施して銅緑釉でオモダカを描く。

瀬戸・美濃焼 178-7は長石釉、178-8・9は鉄軸の天目茶碗で高台は無軸である。見込の釉を拭う178-10は灰軸皿で、高台内に窯道具の痕が残る。17世紀中頃に収まる。

越前焼 178-11はお歯黒壺で肩部に窯印を認める。178-12は強いナデを施すことで口縁が直立気味に伸びる播鉢で、上面に面を持つ。17世紀中頃に収まる。

土師質土器 178-13・14はC系2の土師質皿である。

土坑 177・262・299、**石組溝** 229・361 (第19図) 道路西側の区画溝出土の遺物も含む。

伊万里 177-1は六角皿で、見込の2重圏線内の上半分に花文を描く。

唐津焼 299-1は無軸の萐萐底の高台以外に灰軸系の釉を施す胎土積みの皿、262-1は成形後に口縁の四隅を变形する絵唐津四方向付で、段が巡る内面と見込に菖蒲文を描く。見込に釉が溜まる361-1は高台無軸の灰軸碗、361-2は腰部を斜めに削り、体部に灰釉を施す坏である。四方向付は伊万里が普及するまで瀬戸・美濃焼とともに多様された。

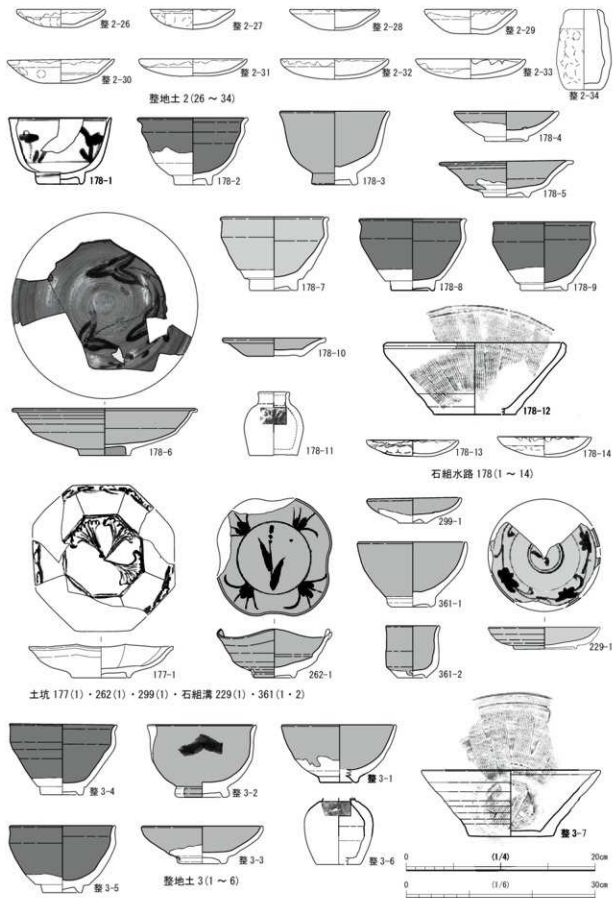
瀬戸・美濃焼 229-1は体部全面に長石釉を施す皿で、内面に鉄絵で唐草文を描く。

5) 整地土3出土遺物 (第19図 第4表 写真図版第16)

唐津焼 整3-2は口縁が外反する高台無軸の灰軸碗で、体部外面に鉄絵を認める。整3-1の灰軸碗のほか、胎土目積みの灰軸皿もある。

瀬戸・美濃焼 整3-4・5は鉄軸の天目茶碗で高台は無軸である。

越前焼 整3-6はお歯黒壺で、肩部に窯印を持ち、内面に鉄分が残る。整3-7は口縁が内傾する播鉢で口縁下に浅い段が巡る。



第 19 図 土器・陶磁器 C街区 15-2調査区①(縮尺 1/4 1/6: 178-6・12、整 3-6・7)

第5節 D街区15-2調査区上層出土の土器・陶磁器

1) 第1面遺構出土遺物(第20図 第5表 写真図版第17)

小穴106・土坑107(第20図)

土師質土器 見込に判読不明の墨書を記す106-1は土師質皿で、106-2・107-1ともC系1に属する。

石組井戸77・土蔵基礎81(第20図)

伊万里 77-1は碗蓋で表に山水文を描く。81-1はくらわんか手の碗で外面に梅枝文、81-2は大振りの碗で、外面に鶴と亀甲文、見込に円形松竹梅を描く。81-3は碗蓋で、表に牡丹文を描く。

瀬戸・美濃焼 77-2は高台無軸で型成形の輪花皿である。81-4は直立する口縁を持ち、底面を除き灰軸系の釉を施し見込に鉄絵で草花文を描く行灯皿である。81-5は灰軸系の釉を施す蓋で、表に鉄軸を2重圏線状に施す。蓋とセットになる81-6は筒型の鉢で、釉葉の施文は4と同様で見込に目痕が3つ残る。81-7は灰軸系の釉の上に草花文を描く鉢で、81-8は無軸の香炉である。

産地不明品 81-9は腰部以下と体部内面以外に灰軸系の釉を施す土瓶で、肩部に21条の沈線が巡る。81-10は玉縁口縁を持つ搦鉢で、高台を除く外面に鉄軸、内面に鉄泥を施す。

越前焼 81-11は轆轤成型で鉄泥を垂らし掛ける小鉢で、直線の体部を持つ浅鉢が伴う。

瓦質土器 81-13は松ぼっくり状の摘みと体部の3箇所の受け部を持つ七輪で、体部下半に火入れがある。81-14は焜炉で、前者と同じく3箇所の受け部を持つ。

2) 整地土1出土遺物(第20図 第5表 写真図版第17)

伊万里 整1-1・2は半筒碗で、前者は松枝文、後者は菊文と御所車文、四方禪文を描く。

瀬戸・美濃焼 軟質の陶土を持つ整1-3は半筒碗で、鉄軸と藍釉を交互に施す。

第6節 D街区15-2調査区下層出土の土器・陶磁器

1) 表土(第21図 第6表 写真図版第18)

瀬戸・美濃焼 表1は全面に灰軸系の釉を施し、体部に草花状の文様を刻文する深鉢ある。高台無軸で見込に砂目痕が残る。

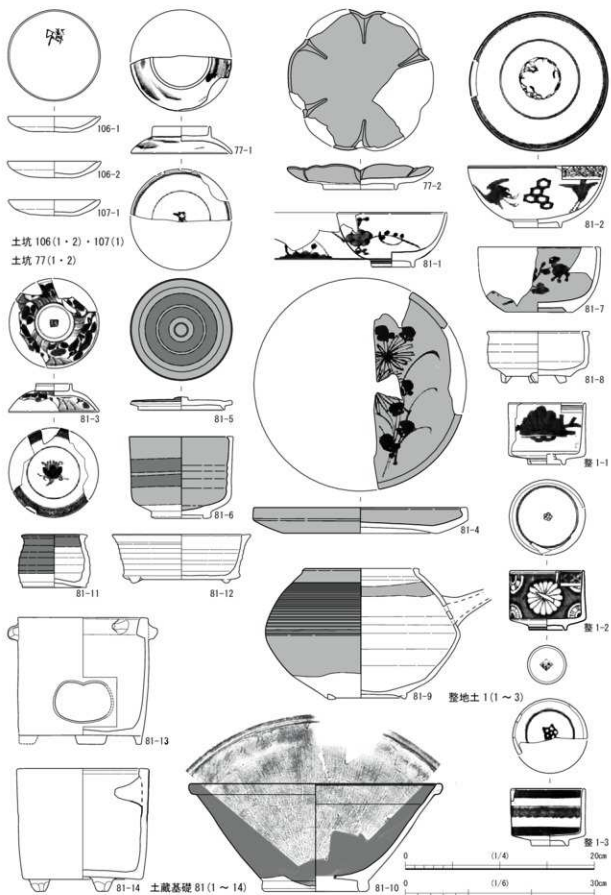
2) 整地土1・2出土遺物(第21・22図 第4表 写真図版第18・19)

整地土1・2出土遺物は39点図化した。

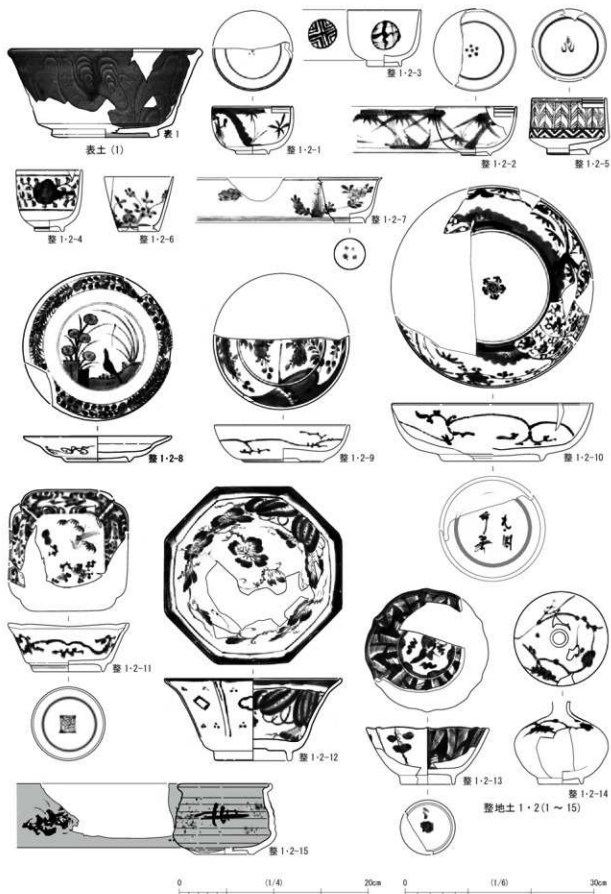
伊万里 1・2は見込に五曜星を持ち外面に竹林文、3は丸に格子文、4は牡丹唐草文を描く碗、5は外面に矢羽根文を描く半筒碗である。6は蕎麦箸口で外面に木文、7は坏で外面に立花文を描き、高台内に「大明年製」銘を認める。8は屈曲する体部を持ち見込の筒内に花と鳥、9は蛇の目形高台を持つ皿で、見込に扇と草花文を描く。10は皿で、内面に松竹梅と唐草文、見込に五弁花文を描き、高台内に「大明年製」銘を認める。11は角鉢で、内面と見込に松竹梅を描き、高台内に「渦福」銘を持つ。12は清朝風八角鉢で、外面に幾何学文、内面にアケビ文を描く。輪花状口縁の13は鉢で、外面に草花文、内面に芭蕉文、見込に鶴を描き、印銘を持つ高台内に「うの」と赤色で記す。14は草花文を描く器高の低い瓶である。

瀬戸・美濃焼 15は陶胎染付の鉢で、成形痕が顕著な体部外面に草花文を描く。高台周辺の菱形状の無軸部分に印を入れる。灰軸系の端反碗の16・17は外面に白泥で梅枝文を描く。

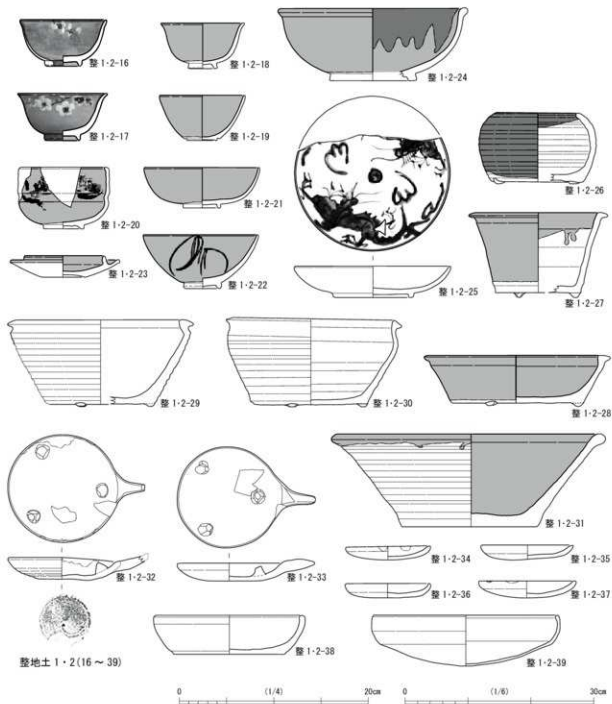
京・信楽焼 灰軸系の端反碗の18、体部が直線的な19の碗はともに高台が無軸である。20は高台無軸の色絵碗で、松枝文の松を緑、枝を黒色で描く。平碗に属する整21・22は、無軸の高台以外に灰



第20図 土器・陶磁器 D街区15-2調査区上層(縮尺1/4 1/6:81-10)



第21图 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層① (縮尺1/4 1/6:表1)



第22図 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層② (縮尺1/4 1/6: 整1・2-26～31・38・39)

軸系の軸を施し、後者は体部外面に柳文を描く。23は灰軸系の灯明皿である。

産地不明品 玉縁状口縁を持つ24は、内湾して伸びる体部内外面に灰軸系の軸を施した後、内面の一部に銅緑釉を掛ける鉢で、見込に目痕が3つ残る。

中国製品 25は彰州窯の皿で、砂高台内に粗く軸を塗り見込に竜文を描く。

越前焼 26は鉢で内湾する体部内外面に成形痕が顕著に残り、体部外面と口縁内面に鉄泥を垂らし掛ける。直線的な体部を持つ27は深鉢で、体部外面と口縁内面、28は浅鉢で全面に灰軸を施す。内湾気味に体部の伸びる29・30も鉢で、垂れ下がる口縁を持つ。玉縁状口縁の31は外面と体部内面に灰軸を施す大型の鉢である。31以外は底部に3脚を貼り付ける。

土師質土器 整32・33はG系の灯明受け皿で、前者は轆轤成型で底部に回転糸切り痕が残る。この手のは既調査地では認めない。整34～37は同系の土師質皿、整38・39は焙烙である。焙烙は両者とも内湾気味の体部を持つが、後者は器厚が薄い。

3) 第3面遺構出土遺物 (第23・24図 第6表 写真図版第20・21)

土坑191・240 (第23図)

伊万里 191-1は瓶で窠彫りの体部に竈内に、唐草文と樹花文を描く。

唐津焼 240-1は成形痕が顕著で、体部内外に刷毛目を施す碗である。

土坑233 (第23図)

伊万里 233-1は碗で外面に山水文、233-2は皿で見込に扇面文を描く。233-3は幅の広い高台を持ち、内面が無軸の波佐見産の香炉で、外面に唐草文を描く。233-4は蛇の目凹形高台を持つ青磁鉢で、凹部に鎗突を施し、見込に印花文を認める。17世紀後半のものである。

唐津焼 233-5は京風唐津碗で、灰軸系の軸を施す体部外面に鉄絵で山水文を描き、無軸の高台内に「清水」銘を持つ。

土師質土器 233-6～9は土師質皿で、6のB系のほかはC系1である。

土坑246・255・258・259 (第23図)

伊万里 246-1は外面に唐草文を描く波佐見産の碗、255-1は皿で見込に草花文を描く。

唐津焼 246-2・255-2～4、258-1・2は全面に灰軸系の軸を施す碗である。深く削る高台内を除き灰軸系の軸を施す259-1は呉器手碗で体部が凹む。259-2は京風唐津碗で、土坑233出土遺物と同じく高台内に印がある。17世紀後半頃にまとまる。

土師質土器 246-3・4、255-5・6はD系、ほかはB系の258-3を除きC系の土師質皿である。

土坑281 (第23・24図)

唐津焼 281-1は灰軸系の皿、281-2は灰軸系の坏で、底部に回転糸切り痕を残す。

瀬戸・美濃焼 281-3・4は、垂直気味に伸びる肩部に僅かに引き出す口縁が付く天目茶碗である。

中国製品 281-5は砂高台中央が無軸の彰州窯の皿で、内面に唐草文、見込に山水文と鳥文を描く。

その他 281-6は備前焼の瓶で、成形痕の顕著な内面は無軸である。

土坑278・279・305 (第24図)

瀬戸・美濃焼 278-1は薄い口縁を僅かに上に積み上げる水注で、全面に鉄軸を施す。279-1は肩部に最大径を持つ高台無軸の天目茶碗である。

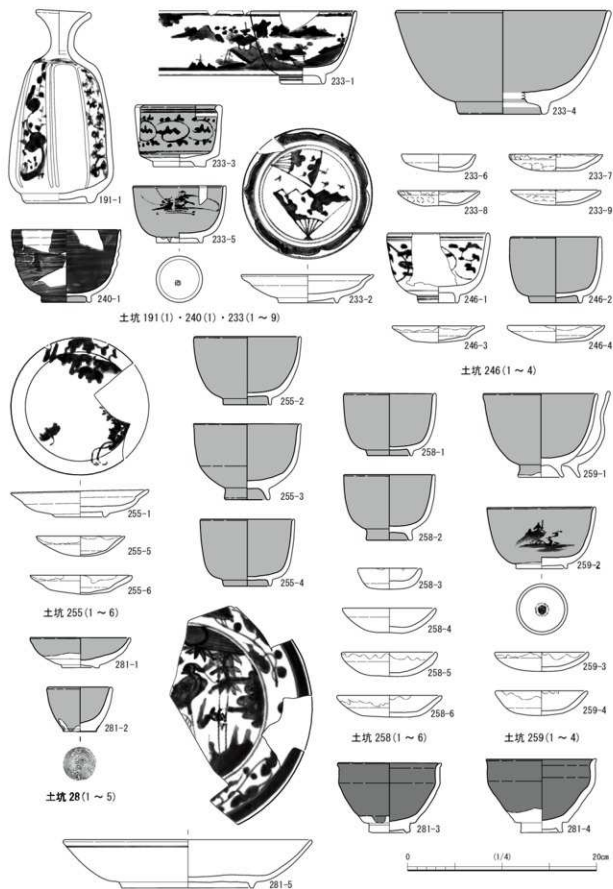
唐津焼 305-1は全面に灰軸系の軸を施す碗である。

中国産 357-1は見込を軸剥ぎする彰州窯の輪花皿で、兜布を持つ高台内面は無軸である。

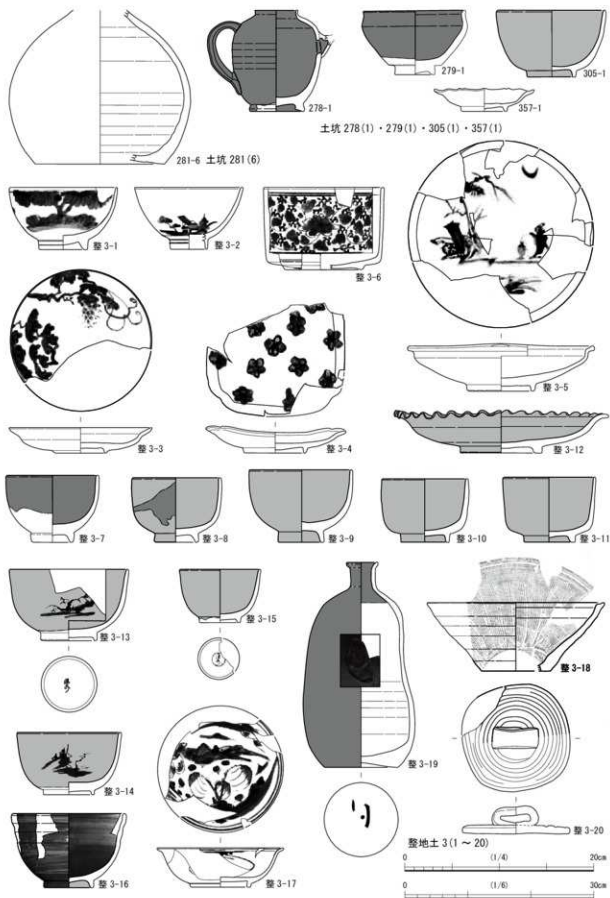
4) 整地土3出土遺物 (第24図 第6表 写真図版第21・22)

伊万里 整3-1は草木文、整3-2は山水文を描く碗である。整3-3は藤文を描く見込中央を軸剥ぎする皿、整3-4は成形後に四隅を糸切り細工する方形皿で見込に花文、整3-5は強く屈曲する口縁を持つ皿で、見込に山水文と人物文を描く。整3-6は口縁内面が無軸で直立する体部を持つ鉢で、外面に緻密な唐草文を描く。皿はいずれも17世紀前半に取まる。

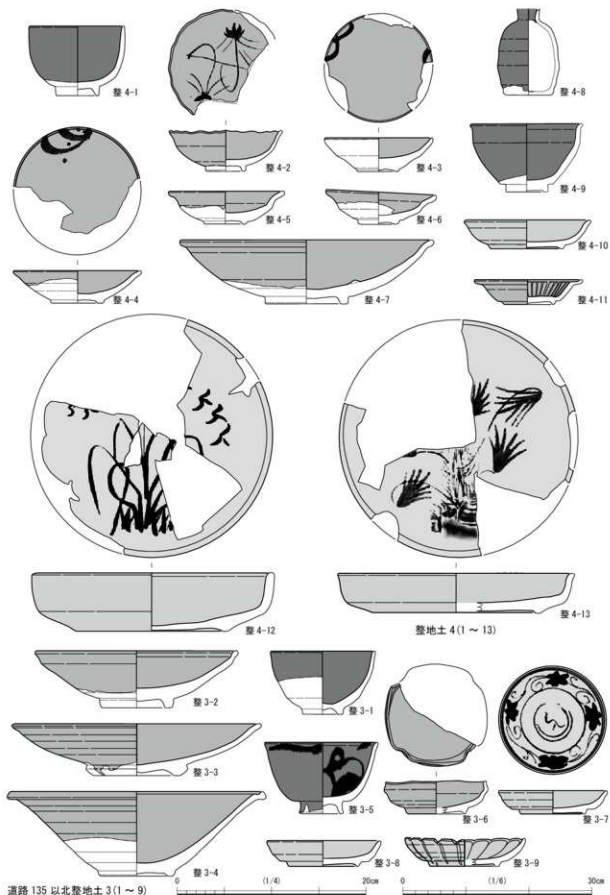
唐津焼 整3-7は高台無軸の鉄軸碗、整3-8～11は灰軸系の碗で、8には銅緑釉を掛ける。10は蛸手があり、11は口縁内面が無軸である。整3-13・14は京風唐津碗で、外面に山水文を鉄絵で描くが、前者は高台内に「清水」銘を持つ。このほか刷毛目碗、灰軸系の襷皿もある。



第23図 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層③ (縮尺1/4)



第24图 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層④ (縮尺1/4 1/6:整3-18)



道路 135 以北整地土 3 (1 ~ 9)

第 25 図 土器・陶磁器 D街区 15-2 調査区下層⑤ (縮尺 1/4)

中国製品 整3-17は高台無軸の端反皿で、見込に山水文を描く。

越前焼 整3-18は内傾する口縁下方に段の巡らない窪鉢である。

その他 整3-19は体部外面と口縁内面に鉄泥を施す備前焼の瓶で、轆轤成型後に体部を变形させ人物文を貼り付ける。整3-20はいびつな摘みを貼り付けた伊賀の水指の蓋で、上面に凹線が巡る。

4) 整地土4出土遺物(第25図 第6表 写真図版第22)

唐津焼 整4-1は高台無軸の鉄軸碗、整4-2は見込に鉄絵を施す輪花状口縁の灰軸系の皿、整4-3・4は簡略化した鉄絵を口縁内面に描く皿である。整4-5・6は灰軸の端反皿で、見込に胎土目痕のある大振りの灰軸皿もある。整4-8は鉄軸瓶である。

瀬戸・美濃焼 整4-9は天目茶碗、整4-11は体部内面を削ぎ、見込を釉剥ぎする皿である。整4-10は全面に長石釉を施す皿、整4-12・13はともに草花文を見込に描く志野の大皿である。

5) 道路135以北整地土3出土遺物(第25図 第6表 写真図版第22)

唐津焼 整3-1は腰部以下無軸の鉄軸碗、整3-2・3は高台無軸の灰軸系の皿で、見込に胎土目痕を認める。整3-4は溝縁口縁の鉢である。

瀬戸・美濃焼 高台以外に鉄軸を施す整3-5は碗で、体部内面に更に濃い鉄釉を施す。整3-6は四角が窪む方形皿、整3-7・8は長石釉を施す皿で、前者は内面に草花文を鉄絵で施す。整3-9は灰志野の菊皿である。

第7節 E街区15-2調査区出土の地区の土器・陶磁器

1) 第1・2遺構面出土遺物(第26・27図 第7表 写真図版第23)

井戸14(第26図)

伊万里 14-1は格子目を外面に描く端反碗で、崩れた花文を描く見込に目痕が残る。14-2は碗蓋で表に変形松枝文を描く。

越前焼 体部が直線的に伸びて口縁で屈曲する深鉢で、口縁上面に沈線が巡り底部が穿孔される。

井戸148(第26図)

伊万里 148-1は口縁が直立する小皿で、体部内面が無軸で外面に横線文を描く瓶もある。

土坑145(第27図)

唐津焼 145-1は碁笥底の唐津皿で、高台以外に灰軸系の釉を施す。

2) 整地土1出土遺物(第26図 第7表 写真図版第23)

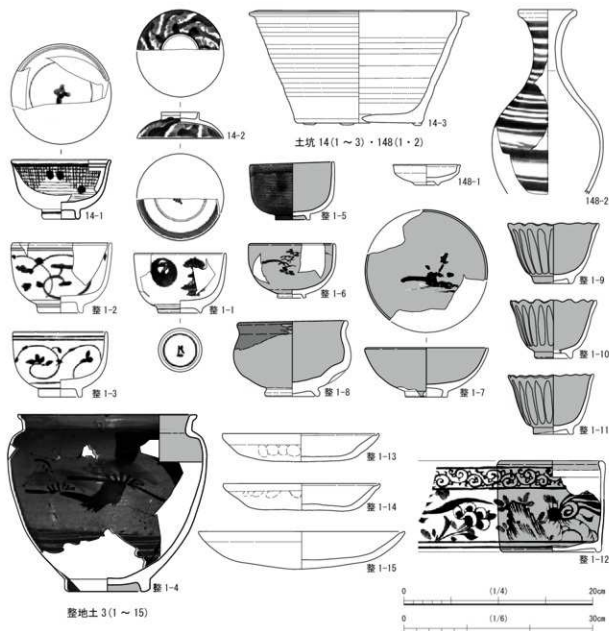
伊万里 整1-2・3は外面に唐草文を描く波佐見産の陶胎染付の碗、整1-1は外面にコンニャク印判で丸鶴文と松文を描く碗で、高台内に銘がある。

唐津焼 整1-4は体部外面下半に刷毛目、上半から口縁内面に白釉を施す甕で、白釉上面に鉄軸と銅緑釉で松栢を描く。高台内と体部内面に鉄泥を認める。

瀬戸・美濃焼 整1-5は灰軸系の碗で、体部外面に鎧手、体部内面と口縁外面に銅緑釉を施す。

京・信楽焼 灰軸系の碗の整1-6・7のうち前者は外面に草花文、後者は見込に河畔文を鉄絵で描く。整1-9～11は轆轤成型後に口縁を变形した高台無軸の青磁碗、整1-12は色絵の火入れで、口縁外面に唐草文、下半に鳳凰を描く。整1-8は灰軸系の軸の上に鉄軸と銅緑釉を掛ける碗である。

土師質土器 整1-13～15は大型のD系土師質皿で、口縁端部を摘み上げる前2者は体部が屈曲する。15は体部全体が丸みを帯びる。



第26図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区① (縮尺1/4 1/6:14-3・整1-4)

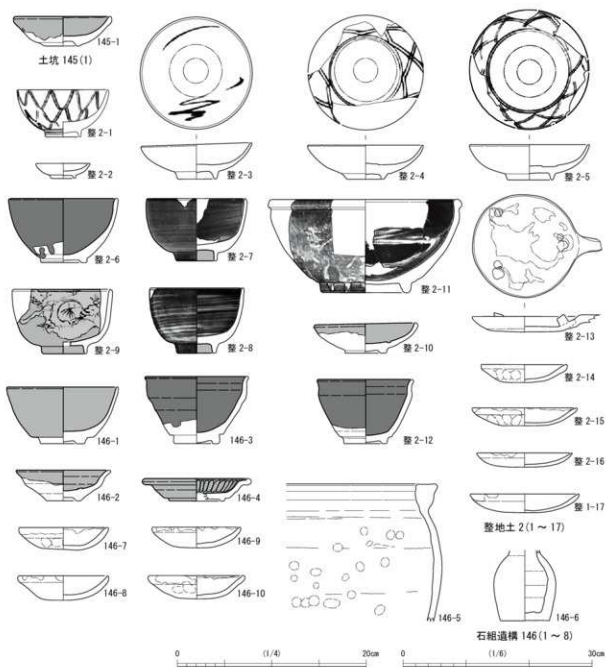
3) 整地土2出土遺物 (第27図 第7表 写真図版第24)

伊万里 整2-1は外面に二重網目文を描くくわんか手の陶胎染付、整2-3～5は軸剥ぎした見込に、3は鉄絵、4・5は二重網目文を認める皿で、高台無軸の3は波佐見産である。整2-2は小皿で口縁の数箇所を緩く窪める。

唐津焼 整2-6は高台無軸の鉄釉碗、整2-7・8は刷毛目碗、整2-9は灰釉系の軸の上に白釉を掛ける碗で、外面に鉄絵を認める。整2-11は玉縁口縁を持つ高台無軸の鉢で、見込にランダムに刷毛目を施す。18世紀後半頃の鉢を除く碗は、17世紀後半のものである。

瀬戸・美濃焼 整2-12は高台無軸の天目茶碗である。

土師質土器 整2-13はG系の灯明受け皿、整2-16・17は同系、整2-14はC系1、整2-15はD系3である。



第27図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区② (縮尺1/4 1/6:146-5・6)

3) 第3遺構面出土遺物 (第27図 第7表 写真図版第24)

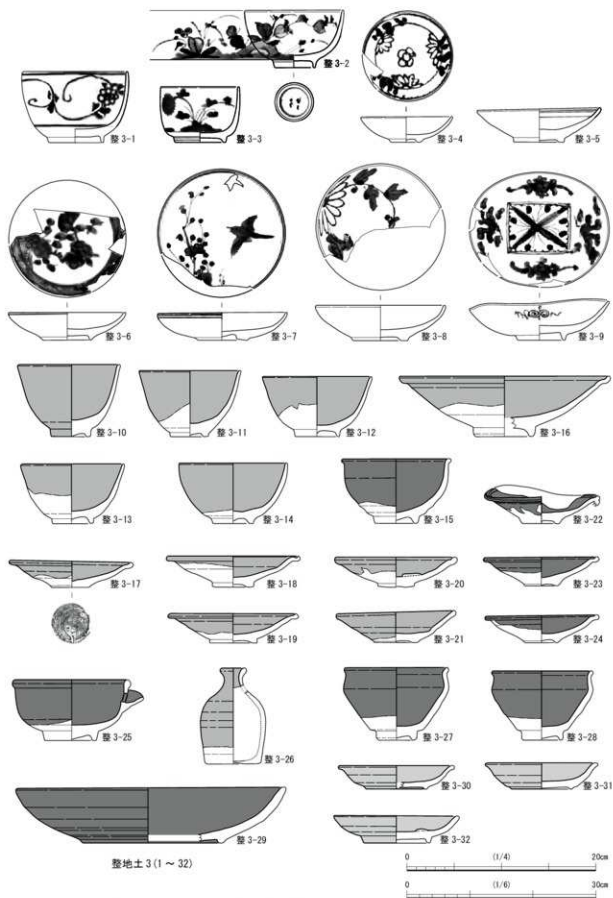
石積遺構146 (第27図)

唐津焼 146-1は高台無軸の灰釉碗、146-2は胎土目積みのお縁が反る灰釉皿である。

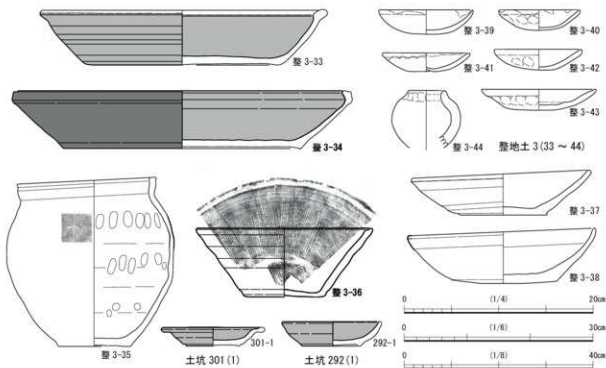
瀬戸・美濃焼 146-3は高台内に3箇所窯道具痕を残す天目茶碗、146-4は内面を削ぎ、見込が無軸の灰釉皿で、口縁を水平に横に引き出し端部を積み上げる。

越前焼 146-5は大甕で、口縁外面の中央に明瞭な、口縁内面に不明瞭な段を認める。外面は全面に鉄釉を施すが、指頭圧痕が目立つ内面は頸部より上には施さない。146-6は外面に鉄釉を施すお歯黒壺で、肩部には残存部が少ないが傘型を呈すると思われる窯印を認める。大甕の年代から後者も17世紀中頃に位置付けられよう。

土師質土器 146-7～10は土師質皿で、全てC系1である。



第28図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区③ (縮尺1/4)



第29図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区④ (縮尺1/4 1/6: 整3-36~38 1/8: 整3-35)

4) 整地土3出土遺物 (第28・29図 第7表 写真図版第25・26)

伊万里 整3-1は外面に唐草文、整3-2は外面に草花文、高台内に銘を描く、整3-3は外面に描く草花文のうち花文をコンニャク印判で施す碗である。整3-4は内面と見込に菊花文を描く小皿である。整3-5は二次被熱を受けた皿で、見込に3箇所の砂目痕が残る。整3-7は蛇の目高台を持ち、見込に梅と鶯、整3-6は梅枝文、整3-8は菊花文を描く皿である。整3-9は楕円形の皿で、内面に草花文、見込に角花を描く。整3-2・4など新しいものもやや混じるが17世紀前半にまとまる。

唐津焼 整3-15は天目茶碗を模した鉄釉碗、整3-10~14は灰軸系の碗で、器高より口径の狭い10・11と標準の12~14がある。整3-16は溝縁口縁を持つ大振りの、整3-17~21は同形態の灰軸皿で、17は回転系切り痕を認める。整3-22~24は鉄軸皿で、22は口縁が焼き歪み、口縁外面に他の個体の口縁部が溶着する。このほか玉縁口縁を持つ高台無軸の鉄軸鉢、灰軸を腰部以外と口縁内面に施す瓶がある。17世紀前半に収まる。

瀬戸・美濃焼 整3-27・28は高台無軸の天目茶碗、整3-29は大振りの全面施釉の鉄軸皿で、見込に線刻を施す。整3-30は全面、整3-31・32は高台内以外に長石釉を施す皿である。

中国製品 整3-33は玉縁状口縁の上面が無軸の鉢で、体部内外に灰軸系の釉を施す。整3-34は口縁外面と上面に面を持つ鉢で、口縁と体部外面に鉄釉、内面に灰釉を施す。軸の掛け方は粗い。共存する伊万里や唐津焼の様相から17世紀前半に収まると思われる。

越前焼 整3-35は口縁外面に段が巡る甕で、肩部に傘型刻文を持つ。整3-36は口縁が内傾する揺鉢、整3-37・38は体部が直線的に伸びる浅鉢で、前者は体部内面、後者は体部内外面に鉄釉を施す。

土師質土器 整39~42はC系、43はD系の土師質皿、整3-43は丸い体部に口縁が付く壺である。

5) 第4遺構面出土遺物 (第29図 第7表 写真図版第26)

土坑292・301 (第29図)

瀬戸・美濃焼 292-1は見込を釉剥ぎする灰軸皿、301-1は全面施釉の灰軸皿である。

第8節 15-2調査区石組水路2出土の土器・陶磁器

1) 石組水路上層出土遺物(第30図 第8表 写真図版第27)

伊万里 2-1は外面に一重網目文と魚文を描く碗で、17世紀後半のものである。このほか外面に草花文を描き見込を軸剥ぎする2-2やコンニャク印判で鶴松文を描く2-3、丸みのある体部外面に花散し文を描く2-4や松竹文を描く2-6の端反碗があり、これに2-7・8の波佐見産の碗や2-9～11の半筒碗が伴う。半筒碗は見込に五弁花文を持ち、それぞれ菊文、半菊文と亀甲文、宝珠連繋文を描く。2-12は蛇の目凹形高台を持つ皿で、見込に山水文を描く。外面に梅文を描く2-13の段重もある。17世紀後半の碗を除き、18世紀後半以降のものが多くを占める。

瀬戸・美濃焼 2-14・15は端反碗で、14は梅に福寿文、15は隸字体文を外面に描く。2-16の半筒碗は見込に五曜星を持ち、外面に菊文、2-17の筒型坏は外面に算木手文を描く。2-18は灰軸系の襲皿で、2-19の碁笥底の鉢は、灰軸系の軸を施す外面に鉄軸の沈線が2条巡る。18世紀後半以降のものである。

京・信楽焼 2-20は体部に透明釉を施す碗で、高台は無軸である。

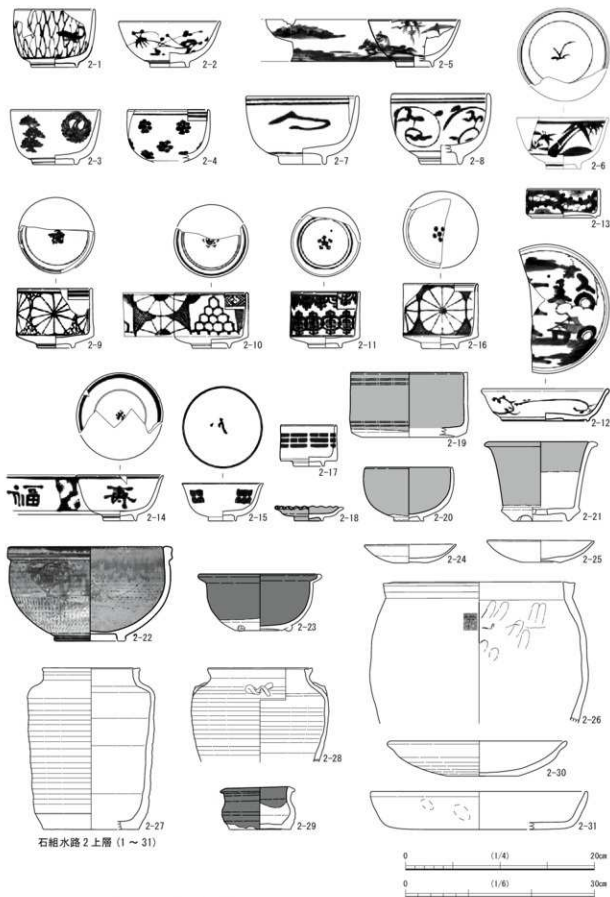
産地不明品 2-21は灰軸系の植木鉢で口縁に薬灰釉を施す。外面がやや窪む玉縁状口縁を持つ2-22鉢で、腰部の内外面に鍍手を持ち透明釉を掛ける。2-23は底部に3脚を貼り付けた鉄軸の土鍋、2-24・25は、腰部以下無軸の白磁皿である。

越前焼 2-26はねじたて成形の中甕で、肩部にTの窯印を持つ。轆轤成型の2-27・28の甕のうち後者は、丸みを帯びた肩部に撚り紐状の貼り付け文を持つ。18世紀末以降のものである。

土師質土器 2-30は轆轤成型の皿、2-31は底部が屈曲し垂直気味な体部を認める土師質皿である。ともに初見のもので共伴資料から18世紀末以降と考える。

2) 石組水路2出土遺物(第31～34図 第8表 写真図版第28～31)

伊万里 2-32は外面に山水文、2-33は屈曲する体部外面に花草文を描く碗で17世紀前半、高台無軸の2-34は青磁碗で、17世紀後半のものである。これに対し外面に唐草文を描く2-35や36のようにコンニャク印判で菊と葉を施す碗、見込を軸剥ぎする2-37や2-40の端反碗は上層出土遺物と同じ様相である。2-41～44は波佐見産の碗で、41は菊花文、42・43は草花文、44は山水文を外面に描く。2-45～53は17世紀前半頃の皿で、45は外面に柳文、見込に沢瀉、輪花状口縁の46は見込に菊花文、蛇の目凹形高台を持つ47は見込に吹墨の兔文、口縁を細かく刻んだ48は見込に草花文、49・50は内面に芙蓉手草花文を描く。内面に圈線が巡る51は見込に砂目痕を認める。小皿は52が型押し成形で輪花状口縁を持ち、53は見込に3匹の蝶を描く。2-54は高台裏に針支え痕があり、内面に波頭文、見込に山水文を描き、「渦福」銘を持つ。見込に五弁花文を認める2-56・57は、前者は内面に矢羽根文、後者は牡丹唐草文と竹文を描き、各々「大明年製」銘と「渦福」銘を認める。2-58・59は蛇の目凹形高台を持つ皿で、後者は内面と見込に松竹文を描く。見込に湖畔と舟を描く2-60は高台内に「大明年製」銘と針支え痕がある。2-61は見込を軸剥ぎする高台無軸の波佐見産の青磁皿である。2-62・63は坏で、後者は外面に萩、高台内に「大明年製」銘を描く。2-64は青磁の、65は雨降文を描く高台無軸仏飯器である。後者は高台内に文字を記す。2-66は端反鉢で、体部外面に市松文を交互に認める。同文様と交互して「幾」・「太」・「東」の文字があり、見込と高台内に印を認める。2-67は輪花状口縁を持つ型押し成形の薄手の白磁鉢で、内面と見込に型押しした菊花文がある。これは17世紀末～18世紀初頭頃のものである。2-68・69は高台が低めの瓶で、前者は外面に松竹梅、後者は草花文を描く。2-54～66は18世紀後半以降のものが多い。



第30図 15-2調査区石組水路2① (縮尺1/4 1/6:2-26~29)

唐津焼 2-70・71は口縁が括れる天目茶碗を模した鉄軸碗、2-72は体部外面に墨書のある灰軸系の碗である。同じ碗には高台無軸の2-73と全面施軸の2-74～77があり、74は口縁外面に銅緑軸を施す兵器手碗である。灰軸系の軸を施す体部外面に山水文を鉄絵で描く2-78は京風唐津碗で、無軸の高台内に刻印を認める。2-79は口縁を薄く横に引き出す皿、不明瞭な凌が見込の屈曲部に巡る2-81は灰軸系の皿と思われる。2-80は高台無軸の大皿で、灰軸系の軸の上から鉄軸と銅緑軸を粗く掛ける。2-82は高台無軸の絵唐津で胎土目積み、2-83～88は溝縁口縁の灰軸皿で、83は皿が二重に、85は別個体の口縁部が溶着する。86・87は底面に回転糸切り痕を持つ鉄軸と灰軸皿である。2-89は高台無軸で灰軸を施す裝皿である。2-90・91は鉄泥を体部内面と高台以外に掛けた鉢で、後者は高台を一箇所括る。

瀬戸・美濃焼 2-92・93は高台無軸の天目茶碗で、後者は肩部に最大径を持つ。灰軸系の軸と鉄軸を掛け分ける2-94は腰鎔碗、高台無軸で外反する体部両面に銅緑軸を施す2-95の皿は見込に目痕が3つ残る。2-96～98は灰軸皿で、体部内面を削ぎ、見込を軸剥ぎするものもある。2-101・102は長石軸を施す皿で見込に笹文を鉄絵で描く。無軸の高台内に赤色で記号文を記すことからセット関係と思われる。2-103は輪花皿で体部内外面に銅緑軸を施す。内面と見込には陰刻の花文を認める。

京・信楽焼 2-99・100は灰軸系の碗で、前者は外面に緑色で葉文を描く。

中国製品 2-104は彰州窯の皿で、高台内に粗く釉薬を塗り、見込に鳳凰と草花文を描く。

越前焼 2-105は括れた口縁を持つ鉢で、体部上半に鉄泥を掛け垂らし掛け、底部に3脚を貼り付ける稀なものである。2-106・107は水平な口縁下に段のない播鉢である。

その他 2-109は備前焼の播鉢で、口縁外面に1条の沈線、内面には段が巡る。器厚は厚く堅く焼き締まる。2-106は括れた口縁下に凌の巡る播鉢で、腰部に回転ヘラ削りを施し、内外面に鉄泥を塗る。須佐唐津焼の系統と思われる。

土師質土器 2-111～127は土師質皿で、111はD系の灯明受け皿である。112～122はC系で、型作りのG系もある。2-110の鉢は体部に数条の沈線が巡り、口縁は内湾して内側に肥厚する。

第9節 15-2 調査区道路遺構出土の土器・陶磁器

遺構32(第35図 第9表 写真図版第32)

1) 第1砂

伊万里 32-1は見込に五弁花文を持つ半筒碗で、外面に菊文を描く。32-2は内面に草花文を描く皿、32-26は大振りの皿で内面に牡丹唐草文、高台内に「大明成化年製」銘を持つ。32-3は外面に蝶と牡丹を描く碗で、口縁内面を軸剥ぎする。

唐津焼 32-4は高台無軸の鉄軸碗、32-5・6は灰軸系の碗で、後者は体部外面に沈線が巡る。32-7は溝縁口縁の灰軸皿で、平底の無軸の底部外面に回転糸切り痕が残る。

瀬戸・美濃焼 32-8は餌皿、32-9は高台無軸の灰軸碗である。32-27の鉄軸四耳壺も併う。

越前焼 32-10は外反して伸びる体部を持ち口縁を引き出す鉢で、体部外面に成形痕を顕著に認める。

土師質土器 32-11・12はG系の灯明受け皿、13～15も同系の土師質皿である。

2) 第2砂

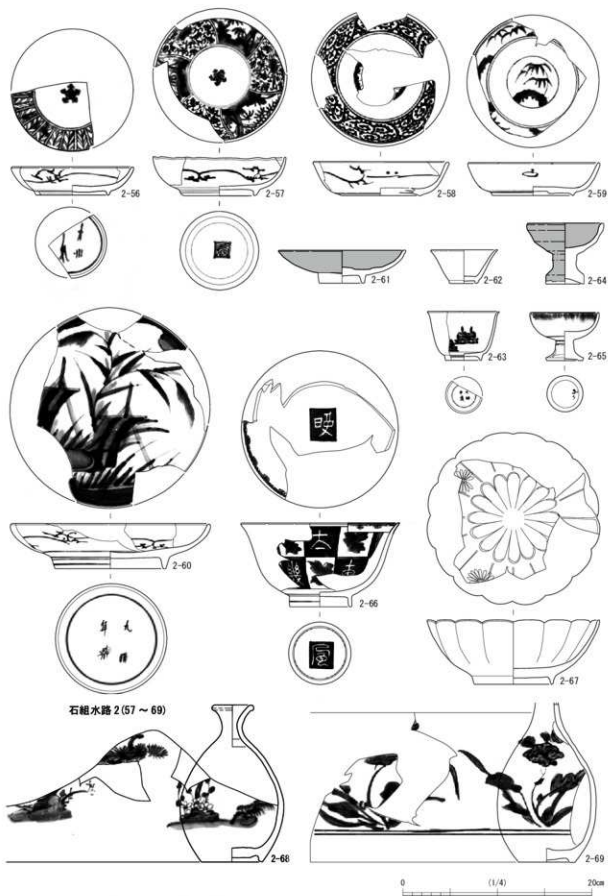
伊万里 32-16の外面に草花文を描く碗のほか、外面に雪文、見込に五弁花文を描く半筒碗がある。

瀬戸・美濃焼 32-18は高台無軸の天目茶碗である。

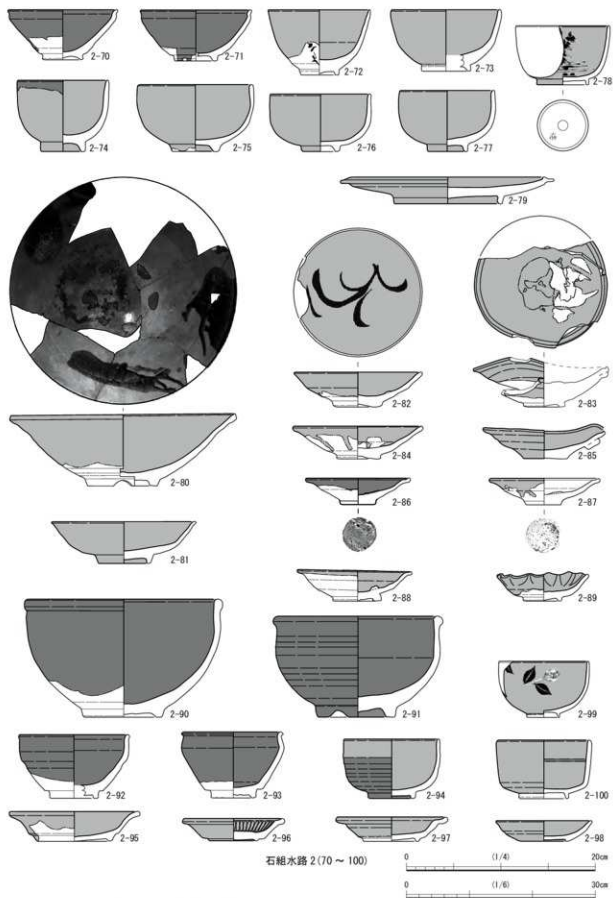
土師質土器 32-19～22はC系の土師質皿である。



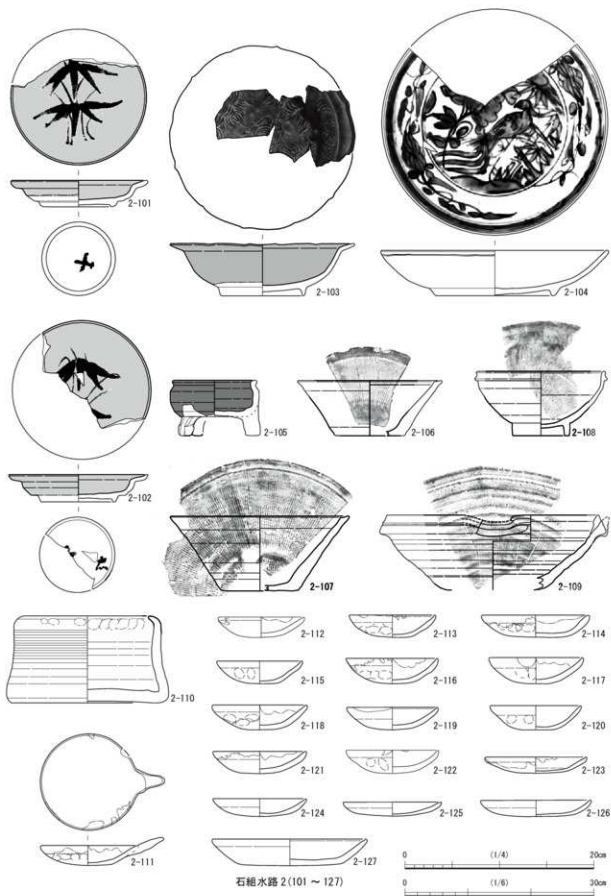
第31图 15-2 調査区石組水路② (縮尺 1/4)



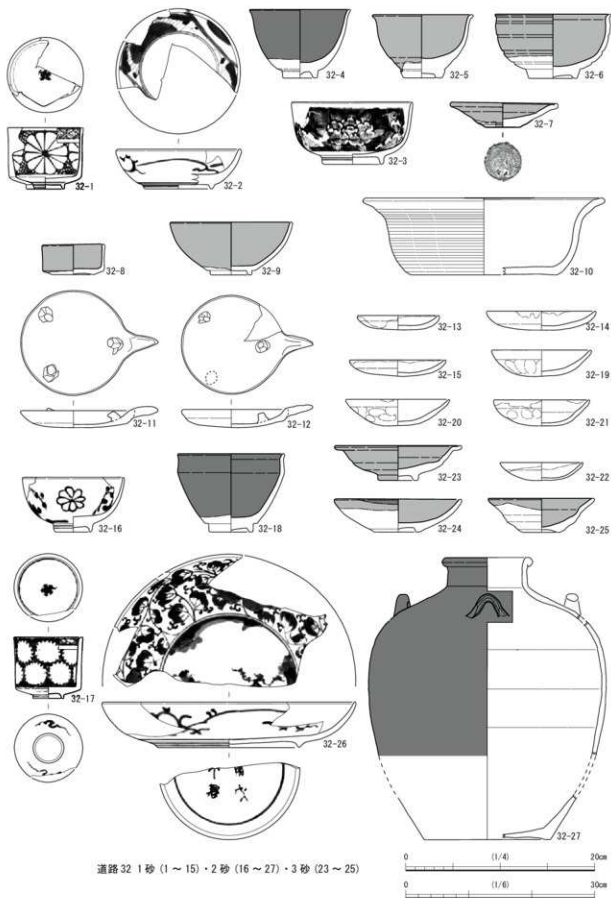
第 32 図 15-2 調査区石組水路③ (縮尺 1/4)



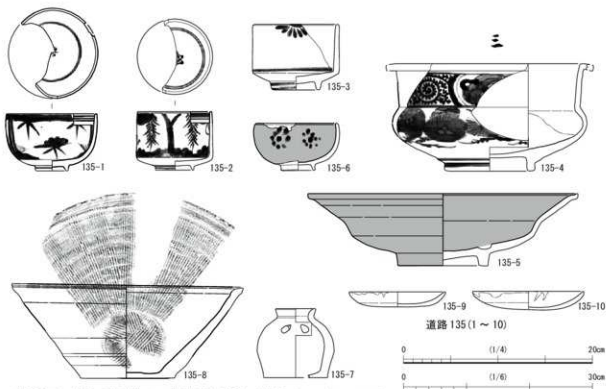
第33図 15-2 調査区石組水路2④ (縮尺1/4 1/6:2-80)



第34図 15-2調査区石組水路2⑤ (縮尺1/4 1/6: 2-105)



第 35 図 土器・陶磁器 15-2 調査区道路① (縮尺 1/4 1/6 : 32-10)



第36図 土器・陶磁器 15-2 調査区道路② (縮尺 1/4 1/6 : 135-8)

3) 第3・4砂

唐津焼 32-23は溝縁口縁、3-24は萁筒底で、32-25は体部が強く屈曲する灰軸系の皿である。

遺構 135 (第36図 第9表 写真図版第32)

伊万里 135-1は碗で外面に柳文を描く。135-2・3は波佐見産の陶胎染付の半筒碗で、前者は見込に五弁花文を持ち外面に柳文、後者は半菊文を描く。135-4は丸く張る腰部に垂直に伸びる頸部の付く香炉で、腰部内面は無軸である。外面に松枝文と蛸唐草文を描く。

唐津焼 135-5は全面に灰軸系の軸を施す溝縁口縁の大振りの皿で、見込に胎土目痕が残る。

瀬戸・美濃焼 135-6は高台無軸の灰軸系の半球碗で、外面に九曜星を描く。

越前焼 135-7は肩部の把手を欠いたお歯黒壺で、内面に鉄分が残る。135-8は口縁下に不明瞭な沈線が巡る大振りの挿鉢で、G系の土師質皿がこれらに伴う

参考文献

- 大橋康二 1989 『考古学ライブラリー-肥前陶磁』 ニューサイエンス社
九州近世陶磁学会 2002 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『江戸時代の瀬戸窯』
瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 『江戸時代の美濃窯』
多治見市教育委員会 1993 『美濃窯の焼き物』
畑中英二 2003 『信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 福井県埋蔵文化財調査報告第146集 『福井城跡 第2分冊 遺物』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 『越前焼総合調査事業報告』

第1表 土器・陶磁器観察表 A街区15-1調査区

表土・トレンチ (第1調査区 調査群1)

遺物番号	地区	層様	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地	法相(m)		成形成態	土師質・粘土色調 陶磁器/胎・裝飾	時期・備考		
				口徑	高さ					
T1	D8	平埴	野原	8.2	4.7	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V期		
T2	D5	甕反碗	野原	10.6	6.0	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 見/松竹文	V期		
T3	D9	杯	野原	7.0	4.5	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V期		
T4	A9	甕	野原	15.3	5(5)	9(1)	赤付 外/赤土文 内/唐草文	V期		
T5	D5	甕反碗	瀬川・赤塗	8.8	4.3	2.5	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	9-10期	
T6	D6	甕反碗	瀬川・赤塗	8.7	4.3	2.9	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	9-10期	
T7	D6	甕反碗	瀬川・赤塗	8.8	5.0	3.0	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	9-10期	
T8	D5	甕反碗	瀬川・赤塗	19.1	4.9	13(3)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 内/赤土文	9-10期	
T9	G9	土師質甕	×	7.3	1.7	-	手づくね 口・内/黒みナテ	灰褐色	G系	
T10	D5	土師質甕	×	9.9	1.6	-	内型成形 口/回しナテ	灰褐色	G系	
T11	D5	土師質甕	○	9.9	1.6	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 灰/板状胎	灰褐色	G系
T12	F10	人形	在場	-	5.3	8.1	型成形	灰褐色	G系	
T13	D6	甕	野原	14.0	7.1	14(8)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V期	
T14	D6	平埴	野原	14.5	5.3	5.3	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土質文	B-10期	
T15	無	鉢	野原	4.9	1.6	1.4	型成形	白磁 胎/黒土質胎	V期	
T16	E5	甕	在場	9.3	6.2	3.8	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/松竹文 高台部無胎	19世紀	
T17	D6	平埴	在場	12.8	4.6	14(9)	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 見/黒線 高台部無胎	19世紀	
T18	D6	甕	在場	1.4	3.7	2.6	クワ口成形 赤塗り高台	灰褐色 高台部無胎	赤土-古代	
T19	D6	甕	在場	10.8	2.8	6.1	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 内/花葉胎 高台部無胎	赤土-古代	

第1面遺物 (第2~5調査区 調査群1~4)

遺物番号	地区	層様	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地	法相(m)		成形成態	土師質・粘土色調 陶磁器/胎・裝飾	時期・備考	
				口徑	高さ				
3-1	C7	甕	瀬川・赤塗	10(2)	5.5	3(3)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文・松竹文 見/赤土	9-10期
3-2	C8	甕	瀬川・赤塗	11.2	2.1	6(0)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文(口縁部)	19世紀
3-3	C8	土甕	在場	11.1	13.7	8.4	クワ口成形 口/11-湯煎付	赤付 外/赤土文 見/黒線胎 胎出し無胎	赤土-古代
3-4	C8	甕	在場	4(5)	-	-	クワ口成形	内/外/赤土質胎・緑緑土	赤土-古代
4-1	C8	鉢	瀬川・赤塗	20(4)	8.7	18(2)	クワ口成形 胎出し高台 口縁輪花文 湯煎付	灰褐色 高台部無胎	赤土-古代
21-1	J5	鉢	野原	15(2)	3.6	12(4)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土質文	V期
21-2	J5	甕	野原	8.5	4.0	3.2	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V期
21-3	J5	甕	野原	37.1	14.4	14.2	クワ口成形 口/11	見/11	V-10期
21-4	J5	土師質甕	○	8.2	1.5	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ	灰褐色
21-5	J5	土師質甕	○	9.7	1.7	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ	灰褐色
21-6	J5	土師質甕	×	12.3	2.1	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 灰/板状胎	灰褐色
22-1	J5	甕	瀬川・赤塗	9.5	4.7	4.0	クワ口成形 胎出し高台	赤付 内/赤土文	10-11期
22-2	J5	甕	野原	11.0	2.1	10(0)	クワ口成形 口/回しナテ	見/黒みナテ	G系
22-3	J5	甕	野原	11.0	1.9	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ	G系
28-1	D8	平埴	野原	8.4	5.5	3.6	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/輪文	V期
28-2	D8	甕反碗	野原	19.4	5.6	13(7)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V期
28-3	D8	平埴	野原	8.2	5.5	2.5	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文・赤土文	V期
28-4	D8	平埴	野原	17.9	6.3	14(0)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 内/四方唐文 見/五弁唐文	V期
28-5	D8	甕	野原	10(2)	3.0	3.3	クワ口成形	赤付 外/赤土文 見/黒線	V期
28-6	D8	甕	野原	10(2)	3.1	5.3	クワ口成形	赤付 外/赤土文 見/黒線	V期
28-7	D8	甕	野原	8.3	2.7	3.6	クワ口成形	赤付 外/赤土文・赤土文・内/唐文・唐草文	V期
28-8	D8	甕反碗	瀬川・赤塗	19.2	5.2	4.0	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土文 見/赤土	V期
28-9	D8	甕反碗	瀬川・赤塗	8.3	4.4	3.3	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土文 見/赤土	10-11期
28-10	D8	甕反碗	瀬川・赤塗	9.5	5.2	3.4	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土文	10-11期
28-11	D8	甕	在場	18.5	5.1	14(0)	クワ口成形 胎出し高台 外/胎出し	灰褐色	19世紀
28-12	D8	甕	在場	8.5	5.2	3.9	クワ口成形 胎出し高台 外/胎出し	灰褐色	19世紀
28-13	D8	甕	在場	18.5	5.2	3.5	クワ口成形 胎出し高台 外/胎出し	灰褐色	19世紀
28-14	D8	甕	在場	8.3	5.0	3.9	クワ口成形 胎出し高台 外/胎出し	灰褐色	19世紀
28-15	D8	甕	在場	18.5	4.9	13(3)	クワ口成形 胎出し高台 外/胎出し	灰褐色	19世紀
28-16	D8	杯	在場	6.0	2.9	3.5	クワ口成形	灰褐色 胎出し無胎	赤土-古代
28-17	D8	行平蓋	在場	13.6	3.1	3.8	クワ口成形	灰褐色	赤土-古代
28-18	D8	鉢	在場	35.4	19.0	20.0	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 胎出し無胎	19世紀
28-19	D8	鉢	在場	34.0	19.3	20.0	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 胎出し無胎	19世紀
29-20	D8	土師質文甕	○	11.6	1.8	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 把手輪付	灰褐色
28-21	D8	土師質甕	×	9.7	1.9	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 把手輪付	灰褐色
28-22	D8	土師質文甕	○	11.5	2.1	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 把手輪付 灰/板状胎	灰褐色
92-1	J6	土師質文甕	×	11.8	2.1	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 把手輪付 灰/板状胎	G系受
92-2	J6	土師質甕	×	11.7	2.4	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 把手輪付 灰/板状胎	灰褐色
92-3	J6	土師質甕	○	11.9	2.0	-	内型成形 口/回しナテ	見/黒みナテ 灰/板状胎	灰褐色
100-1	J6	鉢	野原	4.9	2.0	3.0	型成形	赤付 内/唐草文	G系
100-2	J6	甕反碗	瀬川・赤塗	18.3	4.1	3.0	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土質文	10-11期
100-3	J6	甕	在場	8.2	2.0	5.2	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 胎出し無胎	赤土-古代
100-4	J6	鉢	在場	20.1	13.8	11.4	クワ口成形	灰褐色 胎出し無胎	赤土-古代
100-5	J6	鉢	在場	13.7	8.2	10.9	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 胎出し無胎	赤土-古代
107-1	J6	甕	野原	10(4)	7.6	14.4	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V-10期
107-2	J6	甕	野原	19.7	7.6	15(9)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文	V-10期
107-3	J6	甕	野原	7.6	4.9	5.6	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土質 内/赤土	V期
107-4	J6	甕	野原	32.6	3.2	4.5	クワ口成形 胎出し高台	灰褐色 胎出し無胎	V期
107-5	J6	土師質甕	○	11.6	3.2	-	手づくね 口・内/回しナテ	灰褐色	C系受
137-1	J6	香炉	野原	15(2)	3.9	4.6	クワ口成形	赤付 外/赤土文 内・胎出し無胎	V期
108-1	J6	甕	野原	16.1	7.9	6.5	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 見/黒線胎	V期
108-2	J6	甕	野原	10.8	3.9	3.9	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 見/黒線胎	V期
108-3	J6	平埴	野原	17.8	6.2	13(8)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 内/四方唐文 見/五弁唐文	V期
108-4	J6	甕	野原	18(4)	2.4	9.6	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/黒土文	V期
108-5	J6	甕	野原	14.1	4.8	7(8)	クワ口成形 胎出し高台	赤付 内/赤土文 見/黒線胎 灰/赤土	V期
108-6	J6	甕	野原	14.4	4.0	7.8	クワ口成形 胎出し高台 口縁輪花文	赤付 内/赤土文 見/五弁唐文 赤/大明年製造	V期
108-7	J6	甕	野原	11.6	36.0	17.4	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 口縁内胎無胎	V期
108-8	J6	甕	瀬川・赤塗	21.6	4.5	8.2	クワ口成形 胎出し高台	赤付 外/赤土文 口縁内胎無胎	19世紀
108-9	J6	水注	瀬川・赤塗	14.7	10.5	15(2)	クワ口成形 胎出し高台 湯煎付	灰褐色 胎出し無胎	19世紀

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器/施・装飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	底径		陶磁器	装飾	
108-10	36	鉢	瀬川・美濃	15.3	9.6	6.9	ロウロ成形成	彫出し高台	外無	灰褐色 染め 19世紀
108-11	36	平耳碗	京都	9.3	5.8	3.8	ロウロ成形成	彫出し高台	見付無	灰褐色 染め 19世紀
108-12	36	碗	京都	16.1	6.3	3.6	ロウロ成形成	彫出し高台	見付無	灰褐色 染め 19世紀
108-13	36	変	越前	18.6	13.0	-	ロウロ調整	-	-	灰褐色 18世紀
108-14	15	変	越前	17.2	19.2	-	ねじり成形	-	-	灰褐色 18世紀
108-15	15	土師質蓋	x	9.7	1.6	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	底・板状痕 灰褐色 18世紀
108-16	15	土師質蓋	○	13.7	2.0	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 18世紀
108-17	15	土師蓋	高松	22.6	19.3	23.0	粘土成形	-	-	外・内 19世紀
108-18	15	風戸	佐島	18.6	14.4	18.4	ロウロ成形成	脚懸付付	底へラコナ	灰褐色 19世紀
143-1	36	土師質蓋	○	9.8	1.7	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
143-2	36	土師質蓋	○	10.2	1.7	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
143-3	36	土師質蓋	○	10.3	1.8	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
134-1	36	お煎茶碗	越前	16.8	12.3	19.2	ロウロ成形成	-	-	灰褐色 18世紀
123-1	36	皿	肥前	23.6	4.1	14.2	ロウロ成形成	彫出し高台	脚付支え	染付 内・見付付御草文 18世紀
123-2	36	皿	肥前	20.8	3.0	12.8	ロウロ成形成	彫出し高台	脚付支え	染付 外・見付付御草文 18世紀
123-3	36	鉢	越前	33.6	14.4	21.4	ロウロ成形成	彫出し高台	脚付付	18世紀
5-1	E10	大皿	徳津	32.6	7.3	10.5	ロウロ成形成	彫出し高台	見付足付	灰褐色 白泥・調染粉・鉄絵 彫出し下無 18世紀
5-2	F10	皿	瀬川・美濃	9.8	2.3	15.9	ロウロ成形成	彫出し高台	見付無	灰褐色 2・3世紀
5-3	F10	皿	x	8.9	2.0	-	手づくね	ロウロ成形成	見付ナデ	灰褐色 G系2

整地土1 (第6回 図版第5)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器/施・装飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	底径		陶磁器	装飾	
整1-1	36	碗	肥前	18.3	7.6	4.8	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 内・外 18世紀	
整1-2	36	碗	肥前	8.9	6.1	5.1	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整1-3	15-6	蓋	瀬川・美濃	17.3	5.7	15.0	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整1-4	15-6	碗	徳津	9.9	5.6	4.4	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 外・内 18世紀	
整1-5	15-6	風反碗	瀬川・美濃	19.6	4.3	13.2	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整1-6	15-6	風反碗	瀬川・美濃	18.7	4.8	13.7	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整1-7	36	風反碗	瀬川・美濃	9.5	5.3	3.8	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整1-8	A6	風反碗	瀬川・美濃	18.9	5.5	13.2	ロウロ成形成	彫出し高台	内・白 18世紀	
整1-9	36	風反碗	瀬川・美濃	9.9	4.6	3.5	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 外 18世紀	
整1-10	15	平耳碗	京都	9.1	6.6	4.3	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 外 18世紀	
整1-11	36	隅入角鉢	各地	14.6	6.4	17.6	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 内・外 18世紀	
整1-12	A6	皿	各地	10.8	3.1	5.2	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 外 18世紀	
整1-13	A6	皿	各地	18.1	9.0	7.3	ロウロ成形成	彫出し高台	鉄絵 18世紀	
整1-14	36	鉢	越前	36.9	24.7	23.0	ロウロ成形成	脚懸付付	灰褐色 18世紀	
整1-15	16	土師質交蓋	x	10.5	1.7	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系2
整1-16	16	土師質交蓋	○	10.3	2.9	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系2
整1-17	15	土師質蓋	○	9.7	1.8	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
整1-18	16	土師質蓋	○	11.4	2.9	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
整1-19	15-6	土師質蓋	○	11.8	2.1	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	底・板状痕 淡黄色 18世紀
整1-20	36	土師質蓋	○	11.6	2.0	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	底・板状痕 淡黄色 G系
整1-21	36	土師質蓋	○	12.2	2.0	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
整1-22	A6	土師質蓋	○	12.9	2.2	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系
整1-23	36	人形	各地	-	6.8	3.3	製作中	-	-	淡黄色

整地土2 (第6回 図版第5・6)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器/施・装飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	底径		陶磁器	装飾	
整2-1	15	碗	肥前	6.4	2.4	2.4	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整2-2	A6	鉢	肥前	19.4	6.3	15.0	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 外 18世紀	
整2-3	36	鉢	越前	22.5	8.7	15.9	ロウロ成形成	脚懸付付	鉄絵 18世紀	
整2-4	36	土師質交蓋	x	6.2	1.5	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系2
整2-5	36	土師質交蓋	x	10.5	3.3	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	灰褐色 G系2
整2-6	16	土師質蓋	○	11.6	2.0	-	内型成形成	1口回しナデ	見付ナデ	底・板状痕 淡黄色 G系

整地土4 (第7回 図版第6)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器/施・装飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	底径		陶磁器	装飾	
整4-1	15	鉢	肥前	15.8	6.6	5.8	ロウロ成形成	彫出し高台	染付 内 18世紀	
整4-2	15-6	鉢	徳津	18.2	8.3	17.6	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 染め 18世紀	
整4-3	15-6	鉢	徳津	12.7	3.7	4.8	ロウロ成形成	彫出し高台	灰褐色 染め 18世紀	
整4-4	36	碗	京都	9.5	6.7	4.4	ロウロ成形成	彫出し高台	見付無	19世紀
整4-5	15	土師質蓋	○	3.5	3.3	6.6	ロウロ成形成	肥子船付付	同板未切り	非褐色 18世紀
整4-6	15	土師質蓋	○	9.7	2.7	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
整4-7	15	土師質蓋	○	11.0	2.9	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
整4-8	15	土師質蓋	○	10.6	1.6	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
整4-9	36	土師質蓋	x	9.8	2.4	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	

第2面遺構 (第7回 図版第6・7)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯土 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器/施・装飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	底径		陶磁器	装飾	
226-1	16	土師質交蓋	x	10.4	1.8	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-2	16	土師質交蓋	○	10.4	2.0	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-3	16	土師質蓋	○	11.2	2.2	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-4	16	土師質蓋	○	11.0	1.7	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-5	16	土師質蓋	○	10.6	1.6	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-6	16	土師質蓋	○	11.0	1.6	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-7	16	土師質蓋	○	11.0	1.6	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
226-8	16	土師質蓋	○	10.9	1.7	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
230-1	16	土師質蓋	○	9.5	1.8	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
230-2	16	土師質蓋	○	11.0	2.0	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	
230-3	16	土師質蓋	○	10.9	1.8	-	手づくね	ロウロ成形成	内・内 18世紀	

第1章 土器・陶器

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器・生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
				口径	高さ	底径		陶磁器・胎・裝飾	胎土色調	
230-4	B6	土師質瓦	○	11.0	1.8	-	子づつ(右) 口・内・外・横みナデ	黒褐色	D系2	
236-1	B6	瓦	縦筋	11.6	2.0	-	口・外・横みナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
227-1	B6	瓦	縦筋	12.2	2.9	4.4	口・外・横みナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
227-2	B6	瓦	横溝	18.5	7.9	5.1	口・外・横みナデ	灰褐色	Ⅴ-1(期)	
245-1	15-6	瓦	縦筋	10.2	-	-	口・外・横みナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
245-2	15-6	瓦	縦筋	10.8	7.4	5.0	口・外・横みナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
245-3	15-6	瓦	縦筋	22.3	6.5	7.6	口・外・横みナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
245-4	15-6	土師質瓦	○	7.9	2.0	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	赤褐色	C系3	
245-5	15-6	土師質瓦	○	10.0	2.5	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系3	
245-6	15-6	土師質瓦	○	9.6	2.6	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系3	
245-7	15-6	土師質瓦	○	11.5	2.7	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系3	
245-8	15-6	土師質瓦	○	11.7	3.0	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系2	
245-9	15-6	土師質瓦	○	13.8	3.0	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系2	
245-10	15-6	土師質瓦	○	11.2	2.8	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系2	
245-11	15-6	土師質瓦	○	11.3	3.0	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	灰褐色	C系1	
259-1	B6	瓦	横溝	10.0	7.1	5.1	口・外・横みナデ	灰褐色	D系2	
259-2	B6	土師質瓦	○	10.9	1.8	-	子づつ(右) 口・内・横みナデ	赤褐色	D系2	
259-3	B6	土師質瓦	○	11.0	1.9	-	子づつ(右) 口・内・横みナデ	赤褐色	D系2	
259-4	B6	土師質瓦	○	11.5	1.9	-	子づつ(右) 口・内・横みナデ	赤褐色	D系2	
259-5	B6	土師質瓦	○	12.5	2.0	-	子づつ(右) 口・内・横みナデ	赤褐色	D系2	

古代遺物 (第8・9回 図版第7)

遺物番号	地区	器種	種類	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
				口径	高さ	底径		陶磁器・胎・裝飾	胎土色調	
古1	B7	埴身	埴身	8.3	4.0	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古2	F10	埴身	埴身	8.9	3.5	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古3	E9	埴身	埴身	12.2	3.4	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古4	E9	埴身	埴身	12.6	3.4	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古5	E9	埴身	埴身	13.7	3.3	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古6	E9	埴身	埴身	13.9	3.4	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古7	E9	埴身	埴身	11.1	4.9	8.0	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古8	E9	埴身	埴身	13.6	4.0	10.0	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古9	D6	埴身	埴身	16.0	5.4	11.7	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古10	F9	埴身	埴身	14.2	4.6	7.5	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古11	F10	埴身	埴身	16.5	2.8	13.9	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古12	F10	埴身	埴身	17.9	2.6	14.4	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古13	B7	埴身	埴身	8.3	4.3	4.9	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古14	F9	埴身	埴身	9.2	3.5	4.7	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古15	F9	埴身	埴身	9.8	3.1	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古16	F9	埴身	埴身	10.2	3.5	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古17	E9	埴身	埴身	12.2	3.2	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古18	A7	埴身	埴身	15.4	1.7	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古19	F10	壺	埴身	14.0	-	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古20	E9	壺	埴身	-	-	6.2	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古21	E9	壺	埴身	-	-	4.7	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古22	F9	平皿	埴身	-	-	8.9	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古23	E9	灰	埴身	22.5	16.5	13.3	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古24	A7	耳皿	灰	-	-	15.4	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古25	F9	壺	埴身	13.8	-	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古26	F9	土師器	埴身	19.1	3.4	4.2	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古27	B7	壺	土師器	14.4	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古28	E9	壺	土師器	18.2	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古29	C7	壺	土師器	14.6	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古30	E8	壺	土師器	11.4	7.6	5.0	外・横溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古31	F9	壺	土師器	12.2	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古32	E9	壺	土師器	14.4	13.8	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古33	A7	壺	土師器	16.7	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	

第2表 土器・陶磁器観察表 B街区16-1調査区

包含部・第1調査遺構 (第9回 図版第8)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器・生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
				口径	高さ	底径		陶磁器・胎・裝飾	胎土色調	
111-1	G10	仏花瓶	縦筋	18.8	13.6	5.0	口・外・横溝	青褐色	Ⅴ-1(期)	
111-2	G10	瓦	縦筋	10.8	2.4	-	口・外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
112-1	G10	縦筋	横溝	23.4	5.8	6.9	口・外・横溝	灰褐色	Ⅴ-1(期)	
112-2	G10	瓦	縦筋	12.0	-	-	口・外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
112-3	G10	瓦	縦筋	13.6	3.3	7.5	口・外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
112-4	G10	瓦	縦筋	30.2	10.3	13.0	口・外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
112-5	G10	土師質瓦	○	8.8	2.2	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
112-7	G10	土師質瓦	○	8.9	2.0	-	子づつ(右) 口・見・回しナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
110-1	H10	蓋反皿	中国	11.2	3.1	6.6	口・外・横溝	白褐色	Ⅴ-1(期)	
115-1	H10	壺	横溝	14.5	-	-	口・外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
115-2	H10	横溝	横溝	25.5	8.3	-	口・外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	

古代遺物 (第9回 図版第8)

遺物番号	地区	器種	種類	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
				口径	高さ	底径		陶磁器・胎・裝飾	胎土色調	
古1	G10	埴身	埴身	11.4	3.8	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古2	G10	埴身	埴身	10.0	3.2	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古3	H1	埴身	埴身	12.8	3.3	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古4	H1	壺	埴身	15.5	-	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古5	H1	壺	埴身	23.6	-	-	外・横溝	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古6	G10	壺	土師器	23.8	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古7	G10	壺	土師器	19.6	-	-	外・縦溝毛	赤褐色	Ⅴ-1(期)	
古8	G10	壺	土師器	36.0	-	-	体・回転ナデ	赤褐色	Ⅴ-1(期)	

遺物番号	地区	器種	種別	法量(m)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・裝飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
G10	G10	甕	土師器	17.1	-	-	外取巻口 内回転ナデ	焼成:良好 色調:黄褐色 胎土:褐色	
G10	G10	甕	土師器	21.2	-	-	体回転ナデ	焼成:良好 色調:黄褐色 胎土:褐色	
G11	G10	甕	土師器	-	-	-	体回転ナデ	焼成:不良 色調:淡黄色 胎土:褐色	
G12	H10	甕	土師器	-	-	-	体回転ナデ	焼成:不良 色調:淡黄色 胎土:褐色	
G13	G10	甕	土師器	12.9	4.0	6.6	体回転ナデ	焼成:不良 色調:黄褐色 胎土:褐色	
G14	G10	甕	黒色土師	13.8	-	-	体回転ナデ	焼成:良好 色調:黄褐色 胎土:褐色	

第3表 土器・陶磁器観察表 C街区①16-1調査区

黒土・包含層 (第10図 図版第6)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯層 陶磁器・住居地	法量(m)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・裝飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
表1	D4	平筒甕	肥前	8.0	4.8	4.6	口口成形 削出:高台	灰褐色	19世紀
表2	H10	杯	吉野	5.0	3.0	2.8	口口成形 削出:高台	灰褐色 高台部無胎	19世紀
表3	D4	香炉	北地	19.7	7.8	-	口口成形 削出:高台	灰褐色 外:草花文(緑絵+白絵) 高台部無胎	19世紀
表4	C3	八角小鉢	肥前	8.9	5.1	3.9	口口成形後型押し	色絵 外:草花文(赤・緑)	古期
表5	D4	甕	肥前	14.2	3.9	7.2	口口成形 削出:高台	赤付 内:唐文 見:花文 通:通線無胎	古期
表6	D4	甕	肥前	12.8	4.0	4.2	口口成形 削出:高台	陶磁器 表面無胎	V期
表7	C3	土師質受皿	○	14.5	2.2	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ 把手彫付	灰褐色	G赤交
表8	C4	土師質杯	×	7.4	2.9	-	子つくり	淡灰色	19世紀
表9	C3	土師質甕	○	11.4	1.8	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
表7	C3	土師質甕	○	11.7	1.9	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤

第1調査溝 (第10～12図 図版第8～10)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯層 陶磁器・住居地	法量(m)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・裝飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
1-1	D4	甕	肥前	9.6	6.4	5.2	口口成形 削出:高台	赤付 外:彩文(口ニシクイ) 草花文	古期
1-2	D4	甕	肥前	9.4	7.4	7.0	口口成形 削出:高台	赤付 外:内:人物文+草花文	V期
1-3	D4	五文甕	肥前	11.3	6.6	5.8	口口成形 削出:高台	赤付 外:草花文 見:五草文	V期
1-4	D4	甕	肥前	9.9	4.8	3.3	口口成形 削出:高台	赤付 内:外:菊絵文	V期
1-5	D4	甕	肥前	5.5	2.6	-	口口成形 削出:高台	赤付 内:唐文	V期
1-6	D4	甕	肥前	5.7	2.9	2.0	口口成形 削出:高台	赤付 外:外:唐文+胡瓶文	V期
1-7	D4	甕	肥前	7.3	3.7	2.6	口口成形 削出:高台	赤付 外:唐文	V期
1-8	D4	甕	肥前	7.7	4.0	2.9	口口成形 削出:高台	赤付 外:草花文	V期
1-9	D4	甕	肥前	9.8	3.3	3.5	口口成形 削出:高台	赤付 外:山水文	V期
1-10	D4	鉢蓋	肥前	8.8	3.3	-	口口成形 削出:高台	白胎	古期
1-11	D4	甕	肥前	20.1	8.3	7.2	口口成形 削出:高台	焼成:良好 高台部無胎	19世紀
1-12	D4	甕	津波・美濃	12.4	6.5	4.4	口口成形 削出:高台	灰褐色+白胎	19世紀
1-13	D4	甕	京筑	9.6	7.2	3.9	口口成形 削出:高台	色絵(緑・赤) 草花文	古・遺物
1-14	D4	鉢蓋	越前	33.2	16.2	18.7	口口成形 高台彫付	緑肌手巻	遺・古期
1-15	D4	鉢	越前	34.3	16.5	19.8	口口成形 耳彫付	鉄原毛手巻	古期
1-16	D4	鉢	越前	47.0	24.2	-	口口成形 高台彫付	鉄原毛手巻	古期
1-17	D4	鉢	越前	24.5	12.5	-	口口成形 高台彫付	鉄原毛手巻	古期
1-18	D4	甕	吉野	34.1	18.4	-	口口成形	鉄原毛手巻 外:白内:印文+唐文+胡文	近代
1-19	D4	土師質受皿	○	15.6	2.7	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ 把手彫付	淡灰色	G赤交
1-20	D4	土師質甕	○	9.8	1.6	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
1-21	D4	土師質甕	×	10.4	1.9	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
1-22	D4	土師質甕	○	16.1	1.9	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
1-23	D4	土師質甕	×	15.0	1.9	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
1-24	D4	土師質甕	○	11.7	2.1	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
2-1	D4	甕	肥前	9.9	4.6	3.2	口口成形 削出:高台	赤付 外:唐文 見:唐文	V期
2-2	D4	段蓋	肥前	13.7	-	-	口口成形 削出:高台	赤付 外:外:唐文	V期
2-3	D4	鉢	津波・美濃	20.7	25.1	21.0	口口成形 削出:高台	赤付 外:唐文 表面無胎	19世紀
2-4	D4	鉢	越前	12.4	7.0	12	口口成形 削出:高台	鉄原毛手巻	遺・1期
2-5	D4	鉢	越前	32.7	16.8	21.5	口口成形	鉄原毛手巻	遺・1期
2-6	D4	土師質甕	×	10.2	1.5	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
2-7	D4	土師質甕	×	10.8	2.3	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
2-8	D4	段蓋	×	6.0	7.2	-	子つくり	淡灰色	G赤
8-1	C4	甕	肥前	7.2	3.7	2.7	口口成形 削出:高台	赤付 外:唐文	19世紀
8-2	C4	平筒甕	肥前	7.8	6.4	3.7	口口成形 削出:高台	赤付 外:唐文	19世紀
8-3	C4	平筒甕	京筑	8.2	6.6	3.6	口口成形 削出:高台	灰褐色 高台部無胎	19世紀
8-4	C4	甕	越前	20.3	-	-	ねじり成形 口口調整	鉄原毛手巻	V期
8-5	C4	土師質甕	○	9.8	1.3	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ 底:板状	淡灰色	G赤
8-6	C4	土師質甕	○	10.2	1.6	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
8-7	C4	土師質甕	○	9.6	1.5	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ 底:板状	淡灰色	G赤
8-8	C4	土師質甕	○	11.5	1.8	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
9-1	C4	甕	津波	15.2	7.1	5.5	口口成形 削出:高台 見:日唐	灰褐色 内:外:唐文	1期
9-2	C4	鉢蓋	越前	31.9	15.1	21.3	口口成形 高台彫付	群目12巻	V期
9-3	C4	土師質受皿	○	16.2	2.5	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ 把手彫付	淡灰色	G赤
9-4	C4	土師質甕	○	10.0	1.3	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
9-5	C4	土師質甕	○	11.6	1.7	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
22-1	C4	甕	肥前	13.4	3.4	4.0	口口成形 削出:高台	陶磁器	V期
22-2	C4	土師質甕	○	10.0	1.6	-	内取巻口 1:1回転ナデ 見:横ナデ	淡灰色	G赤
22-3	C4	土師質甕	吉野	9.2	6.5	6.8	子つくり	淡灰色	G赤
22-4	C4	土師質甕	吉野	6.0	5.1	5.9	子つくり	淡灰色	G赤
25-1	D4	杯	肥前	5.7	4.3	3.3	口口成形 削出:高台	赤付 外:唐文	V期
25-2	D4	煎茶	津波・美濃	4.3	2.6	3.9	口口成形 削出:高台	灰褐色 表面無胎	19世紀
25-3	D4	鉢	津波・美濃	25.2	14.5	20.5	口口成形 耳彫付	灰褐色	19世紀
25-4	D4	杯	吉野	4.9	2.6	2.8	口口成形 削出:高台	灰褐色 外:唐文 高台部無胎	19世紀
25-5	D4	甕	吉野	5.6	2.1	2.9	口口成形 削出:高台	灰褐色 表面無胎	19世紀
25-6	D4	鉢	越前	34.1	18.1	21.7	口口成形	鉄原毛手巻	V期
25-7	D4	段蓋	吉野	5.6	7.4	5	子つくり	淡灰色	古期
278-1	E5	甕	肥前	9.3	6.4	4.0	口口成形 削出:高台	赤付 外:彩文	V期
278-2	E5	土師質甕	○	9.4	2.3	-	子つくり 1:1回転ナデ	淡灰色	G赤
278-3	E5	土師質甕	×	12.1	2.6	-	子つくり 1:1回転ナデ 削胎	淡灰色	D赤 遺物
277-1	E5	甕	肥前	11.0	5.0	4.6	口口成形 削出:高台	赤付 外:草花文	V期

第1章 土器・陶器

遺物番号	地区	種別	土師質・打芯痕 陶磁器・生産地	法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	高さ			
277-2	E5	土師質甕	○	9.1	2.5	手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系2

古代遺物 (第13図 図説編10)

遺物番号	地区	種別	種類	法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	高さ			
36-1	C4	坏身	須恵部	9.6	2.9	6.5 体回転ナデ 裏回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-2	A3	坏身	須恵部	11.7	3.5	- 体回転ナデ 裏回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-3	C4	坏身	須恵部	12.8	3.4	- 体回転ナデ 裏回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-4	C4	坏身	須恵部	14.8	3.8	- 体回転ナデ 外回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-5	A3	坏身	須恵部	17.9	4.6	9.8 体回転ナデ 外回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-6	C4	坏身	須恵部	17.0	3.0	- 体回転ナデ 外ヘタ履き	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-7	C4	甕	須恵部	-	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-8	B4	甕	須恵部	25.4	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-9	C4	甕	土師部	35.8	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
36-10	C3	甕	土師部	-	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
711	E5	坏身	須恵部	13.4	5.7	- 体回転ナデ 裏回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
712	D4	坏身	須恵部	15.8	4.9	9.8 体回転ナデ 裏回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
713	E5	甕	須恵部	46.3	1.9	12.0 体回転ナデ 裏回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
714	D4	坏身	須恵部	18.6	4.6	- 体回転ナデ 外回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
715	E5	坏身	須恵部	17.7	4.4	- 体回転ナデ 外回転ヘタ切り	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
716	E5	甕	須恵部	-	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
717	E6	甕	須恵部	11.0	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	
718	E6	甕	土師部	11.6	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調黄褐色 胎土緑青	
719	E6	甕	土師部	16.0	-	外回転ナデ 内閉口	焼成良好 色調黄褐色 胎土緑青	
710	E5	甕	土師部	20.2	-	体回転ナデ	焼成良好 色調黄褐色 胎土緑青	
7111	C4	瓦片	瓦	10.9	2.0	- 外ナデ 内閉口(春日) 薄底取付	焼成良好 色調灰褐色 胎土緑青	

第4表 土器・陶器観形表 C街区⑫15-2調査区

第1遺物番号 (第14～16図 図説編11～13)

遺物番号	地区	種別	土師質・打芯痕 陶磁器・生産地	法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	高さ			
36-1	P6-7	甕	野原	20.8	6.7	7.5 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返文	古類
36-2	P6-7	甕	野原	12.6	2.8	5.0 ロウロ成形 側面L高台	染付 見返文	古類
36-3	P6-7	甕	野原	12.5	3.2	4.1 ロウロ成形 側面L高台	灰褐色 磨面以下無釉	C系1
36-4	P6-7	土師質甕	×	9.6	1.7	- 手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系1
36-5	P6-7	土師質甕	○	9.9	2.1	- 手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系1
36-6	P6-7	土師質甕	○	8.9	2.0	- 手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系2
36-7	P6-7	土師質甕	○	9.2	2.0	- 手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系2
36-8	P6-7	土師質甕	○	9.2	1.9	- 手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系3
36-9	P6-7	土師質甕	×	9.1	2.0	- 手づね口・見廻しナデ	灰褐色	C系3
48-1	CG	甕	野原	10.8	6.5	4.8 ロウロ成形 側面L高台	染付 見返文・大洲焼	古類
48-2	CG	甕	野原	13.6	5.9	5.3 ロウロ成形 側面L高台	染付 見返文	古類
56-1	GS	甕	野原	9.8	5.6	4.3 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返文	19世紀
56-2	GS	甕	在場	17.8	13.8	10.0 ロウロ成形 側面L高台	灰褐色 体部内面無釉 底面施釉	19世紀
76-1	G6	土甕	在場	7.7	9.5	6.5 ロウロ成形 注口・耳懸付付	灰褐色 土師質 口縁内面・底面無釉	古代 遺物
156-1	J9	甕	野原	8.5	5.3	3.3 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返文	V期
156-2	J9	半筒甕	野原	7.9	6.6	4.1 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返文	V期
156-3	J9	半筒甕	野原	8.0	6.4	4.2 ロウロ成形 側面L高台	染付 内:外:草花文・見返文	V期
156-4	J9	甕	野原	14.2	3.7	9.0 ロウロ成形 側面L高台	染付 内:草花文・見返文	V期
156-5	J9	香炉	野原	9.9	7.6	3.6 ロウロ成形 側面L高台	青磁 体部内面・高台無釉	V期
156-6	J9	土師質甕	○	9.9	1.8	- 内閉成形 口回しナデ 見廻しナデ	灰褐色	G系
156-7	J9	土師質甕	○	9.8	1.7	- 内閉成形 口回しナデ 見廻しナデ	灰褐色	内閉し・側面
156-8	J9	土師質甕	○	11.4	1.7	- 内閉成形 口回しナデ 見廻しナデ	灰褐色	G系
156-9	J7	甕	野原	10.1	7.6	14.7 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:風船内面に連続文・草花文	G系・1期
166-1	28-9	甕	野原	10.7	5.7	4.1 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・内:四方様文 見返草花文	古類 被焼
166-2	28-9	甕	野原	11.7	5.6	4.1 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返草花文	古類
166-3	28-9	甕	野原	11.4	6.1	4.7 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・内:四方様文 見返草花文	V期
166-4	28-9	半筒甕	野原	7.8	5.2	3.4 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文	V期
166-5	28-9	半筒甕	野原	7.5	6.0	3.5 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返草花文	V期
166-6	28-9	甕	野原	16.8	6.5	3.8 ロウロ成形 側面L高台	染付 内:草花文	V期
166-7	28-9	甕	野原	13.4	3.4	8.9 ロウロ成形 側面L高台	染付 内:見返文	V期
166-8	28-9	甕	野原	9.4	3.2	3.6 ロウロ成形	染付 外:草花文・内:四方様文 見返草花文	V期
166-9	28-9	甕	野原	9.8	3.1	3.8 ロウロ成形	灰褐色 体部内面半無釉	V期
166-10	28-9	甕	野原	9.9	3.0	4.0 ロウロ成形	染付 外:草花文・内:四方様文 見返草花文	V期
166-11	28-9	甕	野原	10.3	3.0	4.3 ロウロ成形	外:無釉 内:草花文・見返草花文	V期
166-12	28-9	甕	野原	15.3	-	13.8 ロウロ成形 取手・注口履付	染付 外:草花文	19世紀
166-13	28-9	甕	野原	16.5	6.7	6.8 ロウロ成形 側面L高台 見廻し高台	染付 外:草花文	V期
166-14	28-9	甕	野原	12.0	7.8	4.7 ロウロ成形 側面L高台	灰褐色	V期
166-15	28-9	甕	野原	9.0	4.9	3.7 ロウロ成形 側面L高台	染付 外:草花文・見返草花文	古代
166-16	28-9	香炉	瀬川・野原	9.2	5.1	6.9 ロウロ成形 底面施釉	灰褐色 底面内面無釉	9世紀
166-17	28-9	香炉	瀬川・野原	9.4	6.0	- 9.1 ロウロ成形 取手・注口履付	染付 外:草花文 或は内面無釉	9世紀
166-18	28-9	半筒甕	野原	9.6	5.0	4.9 ロウロ成形 側面L高台 注口履付	灰褐色 外:草花文 高台無釉	19世紀
166-19	28-9	甕	野原	7.2	3.3	2.4 ロウロ成形 側面L高台	色調 外:無釉文・秋文	19世紀
166-20	28-9	土甕	在場	10.0	2.3	5.2 ロウロ成形 体部無付	灰褐色 底面無釉	19世紀
166-21	28-9	甕	野原	4.7	7.8	3.6 ロウロ成形 取手・注口履付	灰褐色 白磁・鉄釉+VVOカ	甕系-古代
166-22	28-9	甕	野原	4.8	8.0	5.9 ロウロ成形 取手・注口履付	灰褐色 白磁・草花文・鉄釉	甕系-古代
166-23	28-9	土甕	在場	19.5	11.8	12.1 ロウロ成形 耳懸付付	灰褐色 磨面以下無釉	19世紀
166-24	28-9	土甕	在場	34.1	12.0	38.2 ロウロ成形 耳懸付付	灰褐色 体部内面無釉 磨面以下無釉	19世紀
166-25	28-9	甕	在場	15.4	7.6	5.8 ロウロ成形無取手 側面L高台	灰褐色 高台無釉	19世紀 印
166-26	28-9	甕	在場	15.2	7.6	5.9 ロウロ成形 側面L高台	灰褐色 高台無釉	19世紀
166-27	28-9	甕	野原	46.0	20.6	17.2 口L高台成り	灰褐色 磨面	甕系
166-28	28-9	甕	野原	18.5	24.3	13.9 ロウロ成形 耳懸付付	灰褐色 磨面	甕系
166-29	28-9	甕	野原	33.4	15.1	18.4 ロウロ成形 高台履付	染付 11文	甕系
166-30	28-9	甕	野原	29.7	13.2	18.0 ロウロ成形 耳懸付付	灰褐色 磨面	甕系

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯灰陶磁器・生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	器高	器高	底径		胎色	胎・裝飾	
166-31	78-9	甕	○	22.7	19.3	18.0	ロウロ成形 体ノヘラ磨き 胎削付	灰白色	19世紀	
166-32	78-9	土師質土瓶	×	11.1	1.9	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 把手削付	灰白色	G・赤褐色	
166-33	78-9	土師質甕	○	9.5	1.3	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	G・赤	G・赤	
166-34	78-9	土師質甕	×	10.9	1.6	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ	灰白色	G・赤	
166-35	78-9	土師質甕	○	10.4	1.9	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ	灰白色	G・赤	

豊地土1 (第17回 図版第14)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯灰陶磁器・生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	器高	器高	底径		胎色	胎・裝飾	
豊1-1	19	甕	○	10.4	6.2	3.5	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色	G・赤	V期 Ⅱ
豊1-2	19	甕	○	13.2	4.5	17.2	ロウロ成形 削出し高台	赤付 内・赤褐色	V期 Ⅱ	
豊1-3	A9	甕	○	13.2	3.4	7.1	ロウロ成形 胎の付面高台 口縁輪花	赤付 内・赤褐色 見・横文・月文	V期 Ⅱ	
豊1-4	A9	甕蓋	○	13.6	2.7	10.0	ロウロ成形	白磁 裏施	近代	
豊1-5	G6	甕	○	-	-	10.0	ロウロ成形	赤付 外・赤褐色・高野文・横目文	V期 Ⅱ	
豊1-6	19	甕・土瓶	○	9.3	5.0	3.7	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色	10-1期	
豊1-7	19	甕	○	11.7	4.7	3.3	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 見・横筋・高台部無胎	19世紀	
豊1-8	18	甕	○	12.0	4.8	4.3	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 見・横筋・河野 高台部無胎	19世紀	
豊1-9	19	甕	○	11.2	6.9	6.3	ロウロ成形 削出し高台	赤色 高台部無胎	19世紀	
豊1-10	18	甕	○	11.0	4.5	8.8	ロウロ成形 胎ノ板状	灰白色 口縁内面無胎	19世紀	
豊1-11	18	甕	○	10.5	13.4	8.1	ロウロ成形	灰白色 口縁外・胎部内無胎	19世紀	
豊1-12	18	甕	○	10.0	4.6	6.9	ロウロ成形 胎ノ板状	赤色 口縁外・胎部内無胎	19世紀	
豊1-13	18	甕蓋	○	35.4	14.8	18.2	ロウロ成形 高台削付	横目11文	Ⅱ-2期	
豊1-14	18	甕蓋	○	33.0	14.1	13.3	ロウロ成形	横目11文	Ⅱ-2期	
豊1-15	17	土師質土瓶	×	10.7	1.4	-	ロウロ成形 胎部平底	赤褐色	V・赤褐色	
豊1-16	G7	土師質土瓶	×	13.8	2.8	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 把手削付 胎ノ板状	灰白色	G・赤	
豊1-17	A9	土師質甕	○	9.8	1.7	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	灰白色	G・赤	
豊1-18	P7	土師質甕	×	10.9	1.7	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊1-19	A9	土師質甕	○	11.2	2.0	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	灰白色	G・赤	
豊1-20	G7	土師質甕	○	11.5	2.1	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊1-21	H7	土師質甕	○	11.4	2.1	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊1-22	H7	土師質甕	○	11.5	1.9	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	灰白色	G・赤	

豊地土2 (第18・19回 図版第14・15)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯灰陶磁器・生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	器高	器高	底径		胎色	胎・裝飾	
豊2-1	18	甕	○	8.5	6.6	5.1	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色・外・赤褐色 表・裏・横筋・胎部	V期 Ⅱ	
豊2-2	H7	甕	○	9.4	7.4	4.4	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色内・赤褐色	B・1期	
豊2-3	19	甕	○	12.0	3.7	4.4	ロウロ成形 削出し高台 見・横筋	赤付 外・赤褐色	B・1期	
豊2-4	18	甕	○	12.2	3.8	4.1	ロウロ成形 削出し高台 見・横筋	胎削付 外・赤褐色	B・1期	
豊2-5	18	甕	○	13.5	3.3	5.2	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色	B・1期	
豊2-6	18	甕	○	20.2	3.0	12.5	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色・外・赤褐色	B・1期	
豊2-7	19	甕	○	10.5	6.1	3.4	ロウロ成形 削出し高台	赤色 高台部無胎	B・1期	
豊2-8	19	甕	○	10.5	7.5	4.5	ロウロ成形 削出し高台	赤色 高台部無胎	B・1期	
豊2-9	18	甕	○	10.0	7.7	4.1	ロウロ成形 削出し高台	灰白色	B・1期	
豊2-10	18	甕	○	10.9	7.5	4.5	ロウロ成形 削出し高台	灰白色	B・1期	
豊2-11	19	甕	○	11.0	3.5	3.7	ロウロ成形胎状削出し高台 見・横筋	灰白色 裏施以下無胎 赤付	B・1期	
豊2-12	18	甕	○	11.6	3.7	4.5	ロウロ成形 削出し高台	赤色 裏施以下無胎	B・1期	
豊2-13	19	甕	○	11.5	2.1	-	ロウロ成形 削出し高台	赤色 裏施以下無胎	B・1期	
豊2-14	18	甕	○	6.0	4.7	3.4	ロウロ成形 削出し高台	灰白色	B・1期	
豊2-15	18	片口鉢	○	16.0	9.1	6.3	ロウロ成形 削出し高台 口縁1筋	灰白色 裏施以下無胎	B・1期	
豊2-16	19	天目茶碗	○	12.0	8.4	5.2	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 高台無胎	Ⅱ期 Ⅱ期	
豊2-17	18	天目茶碗	○	11.5	6.4	4.5	ロウロ成形 削出し高台	赤色 裏施以下無胎	Ⅱ期 Ⅱ期	
豊2-18	18	甕	○	11.8	7.5	4.4	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 口縁筋・裏施無胎	17世紀	
豊2-19	18	片口鉢	○	10.0	7.5	17.0	ロウロ成形 削出し高台	土師質	Ⅱ期	
豊2-20	18	甕	○	15.2	7.1	4.5	ロウロ成形 削出し高台	灰白色	Ⅱ期	
豊2-21	18	鉢	○	20.2	-	-	ロウロ成形	赤付 外・赤褐色・赤褐色	19世紀	
豊2-22	18	甕蓋	○	29.1	10.3	12.6	ロウロ成形	横目9文	Ⅱ-1期	
豊2-23	A9	甕	○	24.6	3.9	-	ロウロ成形 筒状ノヘラ磨き	灰白色	19世紀	
豊2-24	A9	土師質土瓶	○	15.6	2.7	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 把手削付	灰白色	G・赤褐色	
豊2-25	A9	土師質土瓶	○	14.5	2.4	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 把手削付	灰白色	G・赤褐色	
豊2-26	18	土師質甕	○	9.1	1.9	-	手づくね 口・見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊2-27	18	土師質甕	○	9.1	2.1	-	手づくね 口・見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊2-28	A9	土師質甕	○	9.4	2.2	-	手づくね 口・見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊2-29	18	土師質甕	○	9.6	2.5	-	手づくね 口・見・横ナデ	灰白色	G・赤	
豊2-30	H7	土師質甕	○	11.3	2.5	-	手づくね 口・内・横ナデ 胎部	灰白色	D・赤	
豊2-31	18	土師質甕	○	11.3	1.8	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	灰白色	G・赤	
豊2-32	18	土師質甕	○	11.1	2.0	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	灰白色	G・赤	
豊2-33	A9	土師質甕	○	11.6	2.1	-	内製成形 口内刷ナデ 見・横ナデ 胎ノ板状	灰白色	G・赤	
豊2-34	19	胎蓋	○	3.0	8.4	-	手づくね 筒状	灰白色	G・赤	

第2遺構面・豊地土3 (第19回 図版第15・16)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯灰陶磁器・生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土色調陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	器高	器高	底径		胎色	胎・裝飾	
178-1	A8-9	甕	○	10.6	7.0	4.7	ロウロ成形 削出し高台	赤付 外・赤褐色	B・2期	
178-2	A8-9	甕	○	11.5	7.1	4.0	ロウロ成形 削出し高台	赤色 裏施以下無胎 赤付	B・1期	
178-3	A8-9	甕	○	11.5	7.6	4.6	ロウロ成形 削出し高台	灰白色	B・1期	
178-4	A8-9	甕	○	11.0	3.3	4.5	ロウロ成形 削出し高台 見・横筋	灰白色 裏施以下無胎	B・1期	
178-5	A8-9	甕	○	14.0	3.9	4.6	ロウロ成形 削出し高台 見・横筋	灰白色 裏施以下無胎	B・1期	
178-6	A8-9	大甕	○	29.2	7.6	8.0	ロウロ成形 削出し高台 見・横筋	灰白色 内・横目・オモテ文(銅緑)	B・1期	
178-7	A8-9	天目茶碗	○	11.2	7.8	5.0	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 裏施以下無胎	Ⅱ期 Ⅱ期	
178-8	A8-9	天目茶碗	○	11.2	7.6	4.5	ロウロ成形 削出し高台	赤色 裏施以下無胎	Ⅱ期 Ⅱ期	
178-9	A8-9	天目茶碗	○	10.6	7.2	4.6	ロウロ成形 削出し高台	赤色 裏施以下無胎	Ⅱ期 Ⅱ期	
178-10	A8-9	甕	○	10.8	1.9	5.6	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 見・横筋 高台ノナデ	Ⅱ期 V	

遺物番号	地区	器種	土師質・打芯焼 陶磁器・生産地		法量(cm)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		胎土色調	胎・裝飾	
178-11	AS-9	土師蓋	焼前	13.7	10.0	7.5	ねじたて成形	灰黄色無胎	素面	Ⅱ-1前期
178-12	AS-9	磁鉢	焼前	28.1	11.8	12.9	ロウロ成形	灰黄色無胎	口縁に朱	Ⅱ-1前期
178-13	AS-9	土師蓋	○	9.6	1.7	-	手づね 口・見出しナデ	灰黄色胎	C系胎	Ⅱ-1前期
178-14	AS-9	土師蓋	○	9.8	2.1	-	手づね 口・見出しナデ	灰黄色胎	C系胎	Ⅱ-1前期
177-1	A9	瓦	焼前	15.2	3.5	6.0	ロウロ成形後変形 彫出し高台	赤任 見込文	素面	Ⅱ-1前期
262-1	A9	瓦	焼前	12.2	5.2	4.4	ロウロ成形後変形 彫出し高台	灰黄色 内・見出し彫文(直線) 高台部無胎	素面	Ⅱ-1前期
299-1	B8	瓦	焼前	9.7	2.6	2.8	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎 変色	素面	Ⅱ-1前期
361-1	B9	瓦	焼前	11.4	6.9	4.6	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎 変色	素面	Ⅱ-1前期
361-2	B9	瓦	焼前	5.5	5.5	3.2	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎 変色	素面	Ⅱ-1前期
229-1	B9-10	瓦	焼前・美濃	11.7	2.3	6.4	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
230-1	B9	瓦	焼前	11.9	6.1	13.8	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
230-2	A9	瓦	焼前	11.0	7.6	3.1	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
231-3	B9	瓦	焼前	12.7	4.0	4.9	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
230-4	C10	瓦	焼前・美濃	11.2	7.6	4.3	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
230-5	C10	瓦	焼前・美濃	11.1	7.1	4.0	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
230-6	B9	土師蓋	焼前	4.7	10.4	6.7	ねじたて成形	鉄褐色無胎	彫出し無文	Ⅱ-1前期
230-7	B9	磁鉢	焼前	28.2	10.5	13.3	ロウロ成形	黒目10系	Ⅱ-1前期	

第5表 土器・陶磁器観察表 D街区15-2調査区上層

第1面遺物(第20図 図版第17)

遺物番号	地区	器種	土師質・打芯焼 陶磁器・生産地		法量(cm)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		胎土色調	胎・裝飾	
106-1	B1	土師蓋	×	9.5	1.7	-	手づね 口・見出しナデ	灰黄色 内側全胎	C系1 薄青	Ⅱ-1前期
106-2	B1	土師蓋	×	9.7	1.8	-	手づね 口・見出しナデ	灰黄色 内側全胎	C系1	Ⅱ-1前期
107-1	B1	土師蓋	×	9.5	1.7	-	手づね 口・見出しナデ	灰黄色 内側全胎	C系1	Ⅱ-1前期
77-1	B10	陶蓋	焼前	16.0	2.9	10.6	ロウロ成形	赤任 外山水文	素面	Ⅱ-1前期
77-2	B10	施化瓦	焼前・美濃	15.3	2.7	7.6	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 高台部無胎	高台	Ⅱ-1前期
81-1	B10	瓦	焼前	11.6	3.7	4.4	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外海水文	素面	Ⅱ-1前期
81-2	B1	瓦	焼前	14.4	6.5	4.8	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外海水文	素面	Ⅱ-1前期
81-3	B10	陶蓋	焼前	19.4	3.0	3.4	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外海水文 彫出し高台	素面	Ⅱ-1前期
81-4	B10	瓦	焼前・美濃	22.4	2.7	16.2	ロウロ成形 鉄器焼	灰黄色 外・鉄器・華文 裏面無胎	高台	Ⅱ-1前期
81-5	B1	蓋	焼前・美濃	10.6	1.4	9.1	ロウロ成形 鉄器焼	灰黄色 鉄器・華文 内外面無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
81-6	B1	鉢	焼前	10.8	8.6	8.2	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 鉄器・華文 内外面無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
81-7	C1	鉢	焼前・美濃	11.7	6.9	7.9	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 鉄器・華文 内外面無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
81-8	B1	蓋	焼前・美濃	10.6	1.4	6.7	ロウロ成形 鉄器焼	赤任 外海水文 内外面無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
81-9	D10	土師	在産	11.8	13.8	7.7	ロウロ成形 (H)彫出し	灰黄色 鉄器・華文 彫出し以下無胎	素面	Ⅱ-1前期
81-10	B1	磁鉢	在産	39.6	17.1	16.0	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 内・外山水文	素面	Ⅱ-1前期
81-11	B1	瓦	焼前	8.4	8.4	9.8	ロウロ成形	灰黄色 内・外山水文	素面	Ⅱ-1前期
81-12	C1	鉢	焼前	21.8	7.2	17.5	ロウロ成形 鉄器焼	鉄褐色彫出し	素面	Ⅱ-1前期
81-13	B1	土師	在産	20.4	20.0	19.4	ロウロ成形 鉄器焼	鉄褐色彫出し	素面	Ⅱ-1前期
81-14	A10	磁石	在産	20.5	19.6	-	ロウロ成形 鉄器焼	鉄褐色彫出し	素面	Ⅱ-1前期
21-1	A10	平鉢	焼前	18.0	6.5	3.9	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文	V系	Ⅱ-1前期
21-2	A10	平鉢	焼前	7.7	6.3	3.9	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文・華文 内・外山水文	V系	Ⅱ-1前期
21-3	B10	平鉢	焼前・美濃	17.7	6.0	3.8	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 鉄器・華文	10系	Ⅱ-1前期

第6表 土器・陶磁器観察表 D街区15-2調査区下層

聖地土・2(第21・22図 図版第18・19)

遺物番号	地区	器種	土師質・打芯焼 陶磁器・生産地		法量(cm)		成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		胎土色調	胎・裝飾	
遺土		鉢	焼前・美濃	29.6	14.1	13.6	ロウロ成形	赤任 身・砂付	素面	10系
21-2-1	A1	平鉢	焼前	9.3	5.1	3.4	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-2	A10	瓦	焼前	18.4	5.2	3.0	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-3	A10	瓦	焼前	17.7	6.0	3.4	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-4	A10	瓦	焼前	6.8	6.5	2.5	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-5	A10	平鉢	焼前	10.4	4.8	2.9	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-6	B1	蓋	焼前	17.0	5.8	4.2	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-7	A1	瓦	焼前	6.7	4.8	3.2	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-8	B10	瓦	焼前	15.5	2.7	6.5	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-9	B1	瓦	焼前	14.1	3.9	8.3	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 内・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-10	A10	瓦	焼前	21.3	6.2	10.3	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 内・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-11	A10	平鉢	焼前	12.6	5.1	7.2	ロウロ成形後変形 彫出し高台	赤任 内・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-12	A10	鉢	焼前	18.4	8.7	17.6	ロウロ成形後変形 彫出し高台	赤任 外・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-13	B1	瓦	焼前	12.7	6.0	5.5	ロウロ成形後変形 彫出し高台	赤任 外・海水文 内・海水文 見出し彫文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-14	B1	瓦	焼前	11.9	5.8	4.5	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-15	A10	瓦	焼前	9.0	7.5	6.0	ロウロ成形後変形 鉄器焼	灰黄色 赤任 外・海水文 高台部無胎	V系 印	Ⅱ-1前期
21-2-16	A10	蓋	焼前・美濃	9.0	4.9	3.5	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-17	B1	蓋	焼前	9.3	5.0	3.4	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-18	A10	蓋	焼前	18.4	4.8	2.6	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-19	A10	蓋	焼前	17.0	5.8	4.2	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-20	A10	瓦	焼前	18.9	6.5	4.2	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文 高台部無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-21	B1	平鉢	在産	12.0	4.3	3.9	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文 高台部無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-22	A10	平鉢	在産	12.0	5.7	2.6	ロウロ成形 彫出し高台	灰黄色 赤任 外・海水文 高台部無胎	19世紀	Ⅱ-1前期
21-2-23	B10	紅明輪	在産	1.4	2.3	4.5	ロウロ成形 鉄器焼	灰黄色 赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-24	B1	鉢	在産	19.4	7.7	9.1	ロウロ成形 鉄器焼	灰黄色 赤任 外・海水文 高台部無胎	素面	Ⅱ-1前期
21-2-25	A10	瓦	彫出所	16.4	3.3	8.1	ロウロ成形 彫出し高台	赤任 見込文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-26	B10	鉢	焼前	12.8	11.3	12.8	ロウロ成形 鉄器焼	赤任 赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-27	A10	鉢	焼前	20.0	13.5	13.4	ロウロ成形 鉄器焼	赤任 赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-28	B10	鉢	焼前	29.2	8.1	20.3	ロウロ成形 鉄器焼	赤任 赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-29	B10	鉢	焼前	29.5	13.8	15.7	ロウロ成形 鉄器焼	赤任 赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期
21-2-30	B1	鉢	焼前	27.8	14.2	18.0	ロウロ成形 鉄器焼	赤任 赤任 外・海水文	素面	Ⅱ-1前期

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土質 陶磁器/胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		陶磁器/胎・裝飾	陶磁器/胎・裝飾	
豊1-2-31	B10	鉢	焼前	41.5	14.7	21.3	ロウ成形	胎土質	外:見取瓦手取り 内:見取陶器+土質付	B前期
豊1-2-32	B10	土師質全面	○	14.5	7.2	—	ロウ成形	胎土質	灰褐色	B-全
豊1-2-33	B1	土師質全面	×	14.5	2.3	—	内製成形	見取土ナテ	見取土ナテ 担子彫付付	G-全
豊1-2-34	B1	土師質全面	○	8.7	1.5	—	内製成形	見取土ナテ	灰褐色	G-全
豊1-2-35	B10	土師質全面	×	9.6	1.6	—	内製成形	見取土ナテ	灰褐色	G-全
豊1-2-36	B1	土師質全面	○	8.7	1.5	—	内製成形	見取土ナテ	灰褐色	G-全
豊1-2-37	A1	土師質全面	×	10.1	1.8	—	内製成形	見取土ナテ	灰褐色	G-全
豊1-2-38	B1	燈芯	焼前	23.1	6.2	17.3	ロウ成形	素焼土	—	—
豊1-2-39	B1	燈芯	焼前	29.4	8.0	15.6	ロウ成形	素焼土	青褐色	—

第3面遺構 (第23・24回 図版第20・21)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土質 陶磁器/胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		陶磁器/胎・裝飾	陶磁器/胎・裝飾	
191-1	B1/10	瓶	焼前	5.4	20.5	6.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
240-1	B10	瓶	焼前	11.4	7.7	4.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
233-1	B10	瓶	焼前	10.9	7.7	4.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
233-2	B10	瓶	焼前	13.8	3.0	6.1	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
233-3	B10	香炉	焼前	8.6	6.6	5.4	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
233-4	B10	鉢	焼前	22.3	11.0	9.0	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
233-5	B10	鉢	焼前	9.6	6.0	4.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
233-6	B10	土師質全面	○	7.7	1.9	—	つづく	胎土質	灰褐色	B前期
233-7	B10	土師質全面	○	9.7	1.8	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
233-8	B10	土師質全面	○	8.6	1.6	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
233-9	B10	土師質全面	○	9.4	1.6	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
246-1	A1	鉢	焼前	10.5	7.4	4.2	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
246-2	B1	鉢	焼前	9.4	7.0	5.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
246-3	B1	土師質全面	○	9.6	1.8	—	つづく	胎土質	灰褐色	D-表2
246-4	B1	土師質全面	○	10.1	1.8	—	つづく	胎土質	灰褐色	D-表2
255-1	B1	瓶	焼前	14.5	2.9	5.2	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
255-2	B1	瓶	焼前	11.1	7.2	5.0	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
255-3	B1	瓶	焼前	11.2	8.1	4.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
255-4	B1	瓶	焼前	9.8	7.1	4.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
255-5	B1	土師質全面	○	9.2	2.1	—	つづく	胎土質	灰褐色	D-表1
255-6	B1	土師質全面	○	10.6	2.0	—	つづく	胎土質	灰褐色	D-表1
258-1	B1	瓶	焼前	9.4	6.6	4.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
258-2	B1	瓶	焼前	9.5	7.0	4.5	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
258-3	B1	土師質全面	○	6.5	2.2	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
258-4	B1	土師質全面	○	9.8	2.6	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
258-5	B1	土師質全面	○	9.8	2.6	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
258-6	B1	土師質全面	×	10.9	2.3	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表1
259-1	B1	瓶	焼前	12.0	8.8	4.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
259-2	B1	瓶	焼前	11.2	6.5	5.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
259-3	B1	土師質全面	○	9.7	2.0	—	つづく	胎土質	灰褐色	D-表2
259-4	B1	土師質全面	○	9.5	2.0	—	つづく	胎土質	灰褐色	C-表2
281-1	B10	瓶	焼前	10.5	3.2	3.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
281-2	B10	杯	焼前	6.7	4.7	3.5	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
281-3	B10	天目茶碗	焼前・美濃	10.8	7.4	3.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
281-4	B10	天目茶碗	焼前・美濃	11.5	7.8	4.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
281-5	B10	瓶	焼前	36.1	5.1	13.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
281-6	A10	瓶	焼前	31	5.1	13.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
278-1	B1/10	木杵	焼前・美濃	4.5	10.7	5.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
279-1	B1/10	天目茶碗	焼前・美濃	10.6	6.8	4.1	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
305-1	B1	瓶	焼前	11.3	7.1	5.5	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
337-1	B10	瓶	焼前	10.4	2.4	4.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期

豊地土3 (第24回 図版第21・22)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土質 陶磁器/胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		陶磁器/胎・裝飾	陶磁器/胎・裝飾	
豊3-1	A10	瓶	焼前	11.3	6.6	4.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-2	B1	瓶	焼前	11.3	6.5	3.7	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-3	B1	瓶	焼前	15.0	2.7	5.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-4	B1	瓶	焼前	14.7	2.9	4.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-5	A10	瓶	焼前	19.3	5.0	6.7	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-6	B1	蓋付鉢	焼前	12.5	8.7	7.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-7	B1	瓶	焼前	9.5	7.1	4.1	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-8	B10	瓶	焼前	9.2	6.8	4.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-9	B1	瓶	焼前	10.7	7.7	4.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-10	A10	瓶	焼前	18.1	5.6	4.2	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-11	A1	瓶	焼前	9.5	6.9	5.2	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-12	B10	瓶	焼前	22.7	4.6	8.6	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-13	B1	瓶	焼前	12.4	7.6	5.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-14	B1	瓶	焼前	10.9	6.6	5.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-15	B1	瓶	焼前	18.1	5.6	4.2	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-16	B10	瓶	焼前	11.8	7.9	4.9	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-17	A10	瓶	焼前	15.4	4.2	6.1	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-18	B10	鉢	焼前	22.8	10.9	10.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-19	A10	瓶	焼前	31	21.7	7.8	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊3-20	A10	水筒	伊賀	—	3.0	11.4	つづく	胎土質	胎土質	B前期

豊地土4 (第25回 図版第22)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地		法量(m)		成形・調整	土師質・胎土質 陶磁器/胎・裝飾		時期・備考
			口径	高さ	口径	高さ		陶磁器/胎・裝飾	陶磁器/胎・裝飾	
豊4-1	A10	瓶	焼前	19.0	7.4	4.4	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊4-2	B10	瓶	焼前	11.8	4.3	4.1	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊4-3	B10	瓶	焼前	11.3	3.6	4.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊4-4	B10	瓶	焼前	12.3	3.4	5.5	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期
豊4-5	B1	瓶	焼前	12.1	3.5	4.3	ロウ成形	胎土質	胎土質	B前期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地			法量(m) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
			陶磁器・生産地	口径	高さ			底径	陶磁器・胎・裝飾	
製1-6	B1	皿	香津	11.4	3.7	4.0	口ノ口成形 削出し高台 見附手付直	灰緑 髹漆以下無施	3期	
製1-7	A10	皿	香津	28.4	6.8	8.1	口ノ口成形 削出し高台 見附土目直	灰緑 髹漆以下無施	1期	
製1-8	B1	皿	香津	-	-	4.6	口ノ口成形	灰緑 髹漆以下無施	3期	
製1-9	B1	天目茶碗	瀬江・美濃	11.5	7.2	4.4	口ノ口成形 削出し高台	灰緑 髹漆以下無施	遡原1期	
製1-10	B10	皿	瀬江・美濃	13.0	3.1	7.6	口ノ口成形 削出し高台 髹下子直	灰緑	遡原V	
製1-11	A1	皿	瀬江・美濃	11.3	2.6	5.2	口ノ口成形 削出し高台 髹下子直	灰緑 見附無施	遡原V	
製1-12	B1・H	皿	瀬江・美濃	25.5	6.2	10.1	口ノ口成形 削出し高台 髹磨	灰緑 見附赤文	大塚V	
製1-13	A10	皿	瀬江・美濃	24.6	4.2	11.7	口ノ口成形 削出し高台 髹磨	灰緑 見附赤文	大塚V	

D街区 15-2調査区上層 整地土3 (第25回 図版第22)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地			法量(m) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
			陶磁器・生産地	口径	高さ			底径	陶磁器・胎・裝飾	
製3-1	A・J10	皿	香津	10.8	6.7	4.1	口ノ口成形 削出し高台	灰緑 髹漆以下無施 変布	1期	
製3-2	J10	皿	香津	21.3	6.0	7.4	口ノ口成形 削出し高台 見附土目直	灰緑 髹漆以下無施	1期	
製3-3	A・J10	皿	香津	20.2	5.5	8.9	口ノ口成形 削出し高台 見附土目直	灰緑 高台髹磨	1期	
製3-4	J10	鉢	香津	29.9	13.4	11.2	口ノ口成形 削出し高台 見附手付直	灰緑 見込・髹漆以下無施	3期	
製3-5	J10	皿	瀬江・美濃	11.8	7.5	4.5	口ノ口成形 削出し高台	灰緑 見込・土目 高台髹磨	遡原1期	
製3-6	J10	皿	瀬江・美濃	10.5	3.5	5.9	口ノ口成形後変形 削出し高台	灰緑 髹漆	遡原1期	
製3-7	A・J10	皿	瀬江・美濃	11.3	2.5	6.7	口ノ口成形 削出し高台	灰緑 髹漆・鉄線・髹赤文	遡原1期	
製3-8	J10	瓦皿	瀬江・美濃	12.0	2.7	7.3	口ノ口成形 貼付高台 見附直	灰緑野	遡原1期	
製3-9	J10	菊皿	瀬江・美濃	12.6	3.0	7.0	口ノ口成形後変形 貼付高台	灰緑野	大塚1期	

第7表 土器・陶磁器観察表 E街区 15-2調査区

第1面遺物 (第26回 図版第23)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地			法量(m) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
			陶磁器・生産地	口径	高さ			底径	陶磁器・胎・裝飾	
14-1	C1	蓋反碗	野原	30.1	6.3	3.6	口ノ口成形 削出し高台 見附直	変付 髹漆・赤文 見付赤文	V期 此	
14-2	C2	碗蓋	野原	9.0	2.8	3.9	口ノ口成形	変付 外・内縁赤文	V期 此	
14-3	C1	鉢	橋原	31.5	18.1	19.4	口ノ口成形 髹磨付直	灰緑野変直	V期-1期	
14B-2	C1	鉢	野原	6.0	-	-	口ノ口成形	変付 髹磨赤文 髹漆内面無施	V期	

整地土1 (第26回 図版第23)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地			法量(m) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
			陶磁器・生産地	口径	高さ			底径	陶磁器・胎・裝飾	
製1-1	B・C1	碗	野原	9.5	6.3	4.4	口ノ口成形 削出し高台	変付 外・内縁・赤(フコニヤク印?) 裏・鉄	3期	
製1-2	C1	碗	野原	10.3	7.4	4.5	口ノ口成形 削出し高台	陶磁変付 髹赤赤文	V期	
製1-3	C1	碗	野原	9.8	6.9	4.2	口ノ口成形 削出し高台	陶磁変付 髹赤赤文	V期	
製1-4	C10	蓋	香津	28.1	28.1	12.4	口ノ口成形 削出し高台	外・内縁・二面髹赤・髹漆・内面・土目 縦目付印(内)・高台髹磨	3期	
製1-5	C1	碗	瀬江・美濃	8.7	6.0	3.6	口ノ口成形 削出し高台	灰赤色 外・内縁・内面髹磨	8小期	
製1-6	B・C1	碗	笠原	9.8	5.8	3.0	口ノ口成形 削出し高台	灰赤色 外・内縁・赤文・高台髹磨	19世紀	
製1-7	C1	碗	笠原	12.7	5.2	4.3	口ノ口成形 削出し高台	灰赤色 外・内縁・赤文・高台髹磨	19世紀	
製1-8	D1	碗	笠原	11.2	7.9	5.4	口ノ口成形 削出し高台	灰赤色 赤・黒・内面髹磨	19世紀	
製1-9	B・C1	碗	笠原	9.3	6.5	3.9	口ノ口成形後変形 削出し高台 縦文	外・内縁・内・白・黒 裏面無施	19世紀	
製1-10	C1	碗	笠原	8.9	6.2	3.7	口ノ口成形後変形 削出し高台 縦文	外・内縁・内・白・黒 裏面無施	19世紀	
製1-11	B・C1	碗	笠原	9.8	6.3	4.2	口ノ口成形後変形 削出し高台 縦文	外・内縁・内・白・黒 裏面無施	19世紀	
製1-12	C1	式人	笠原	10.7	9.7	10.2	口ノ口成形 削出し高台	赤緑 髹・髹赤文・黒風文 内面・内面・裏面無施	19世紀	
製1-13	C1	土師質蓋	×	36.5	3.0	-	手ノ口・内・内・内縁赤十字	灰赤色	D系大	
製1-14	C1	土師質蓋	*	36.5	2.9	-	手ノ口・内・内・内縁赤十字	灰赤色	D系大	
製1-15	C1	土師質蓋	○	21.7	2.9	-	手ノ口・内・内・内縁赤十字	灰赤色	D系大	

第2面遺物・整地土2 (第27回 図版第23・24)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地			法量(m) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
			陶磁器・生産地	口径	高さ			底径	陶磁器・胎・裝飾	
145-1	C1	皿	香津	10	3.1	3.5	口ノ口成形 削出し高台 髹磨	灰赤色 口縁髹磨	3期	
製2-1	C1	碗	野原	9.5	5.0	3.5	口ノ口成形 削出し高台	変付 髹漆・黒・赤・土目	3期	
製2-2	C1	碗	野原	5.5	1.6	2.4	口ノ口成形 削出し高台	変付 髹漆	3期	
製2-3	C1	碗	野原	11.7	3.6	4.0	口ノ口成形 削出し高台 見附髹磨	陶磁変付 高台髹磨	V期	
製2-4	C1	碗	野原	12.0	3.6	3.9	口ノ口成形 削出し高台 見附髹磨	陶磁変付 髹漆・黒・赤・土目	V期	
製2-5	C1	碗	野原	12.5	3.7	4.6	口ノ口成形 削出し高台 見附髹磨	陶磁変付 髹漆・黒・赤・土目	V期	
製2-6	C1	碗	香津	11.1	6.8	4.7	口ノ口成形 削出し高台	灰赤色 髹漆以下無施	3期	
製2-7	C1	碗	香津	10.2	6.6	4.1	口ノ口成形 削出し高台	変付 髹漆以下無施	3期	
製2-8	C1	碗	香津	9.6	6.9	3.8	口ノ口成形 削出し高台	変付 髹漆	3期	
製2-9	C1	碗	香津	10.2	7.0	4.4	口ノ口成形 削出し高台	陶磁赤・白・黒 外・鉄線	3期	
製2-10	C1	碗	香津	10.5	3.1	4.2	口ノ口成形 削出し高台 見附土目直	陶磁赤 内・鉄線 髹漆以下無施 変布	3期	
製2-11	C1	碗	香津	19.0	9.8	9.0	口ノ口成形 削出し高台	変付 口 高台髹磨	1期	
製2-12	C1	天目茶碗	瀬江・美濃	39.9	6.8	4.4	口ノ口成形 削出し高台	灰赤色 髹漆以下無施	遡原1期	
製2-13	C1	土師質変直	○	13.4	2.1	-	内面成形 口縁十字 見附十字 髹手付直	灰赤色	G系変直	
製2-14	C1	土師質蓋	×	9.0	1.9	-	手ノ口・内・内・見附十字	灰赤色	C系1	
製2-15	C10	土師質蓋	○	9.8	2.3	-	手ノ口・内・内・内縁赤十字	灰赤色	G系大	
製2-16	C1	土師質蓋	○	10.0	1.5	-	内面成形 口縁十字 見附十字	灰赤色	G系	
製2-17	C1	土師質蓋	○	11.4	2.0	-	内面成形 口縁十字 見附十字	灰赤色	G系	

第3面遺物 (第27回 図版第24)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地			法量(m) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調		時期・備考
			陶磁器・生産地	口径	高さ			底径	陶磁器・胎・裝飾	
146-1	C1	碗	香津	11.7	6.0	4.5	口ノ口成形 削出し高台	灰赤 高台髹磨	1期	
146-2	C1	碗	香津	9.8	3.3	3.3	口ノ口成形 削出し高台 見附土目直	灰赤 高台髹磨	1期	
146-3	C1	天目茶碗	瀬江・美濃	10.7	7.1	4.5	口ノ口成形 削出し高台	灰赤 髹漆以下無施	遡原1期	
146-4	C1	皿	瀬江・美濃	10.8	2.4	5.5	口ノ口成形 削出し高台 見附髹磨	灰赤	遡原1期	
146-5	C1	皿	橋原	-	-	-	ねじりて成形	灰緑野変直	V期-2期	
146-6	C1	封筒形土師	橋原	-	-	-	手ノ口・内・内・見附十字	灰緑野変直	V期-2期	
146-7	C1	土師質蓋	○	9.3	2.4	-	手ノ口・内・内・見附十字	灰赤色	C系1	
146-8	C1	土師質蓋	○	9.4	2.5	-	手ノ口・内・内・見附十字	灰赤色	C系1	

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯層 陶磁器・生産地	口徑	通量(m) 底径	成形・調整	土師質・胎土調 陶磁器・施・装飾	時期・備考
146-9	C1	土師質圓	○	9.2	2.1	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ	灰褐色 C表1
146-10	C1	土師質圓	○	10.0	2.5	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ	灰褐色 C表1

整地土3・第4番遺構(第28・29段 図版第25・26)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯層 陶磁器・生産地	口徑	通量(m) 底径	成形・調整	土師質・胎土調 陶磁器・施・装飾	時期・備考	
第3-1	C1	碗	肥前	10.9	7.5	5.6	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・内赤文	前期
第3-2	C10	碗	肥前	10.3	6.1	4.1	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文	前期 遺
第3-3	C1	碗	肥前	8.1	5.9	5.3	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文(コニエナ印)	前期
第3-4	C1	碗	肥前	8.5	2.7	3.0	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 内・見・赤文	前期
第3-5	C1	碗	肥前	12.9	3.5	5.1	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	赤付	前期
第3-6	C1	碗	肥前	12.3	2.9	5.0	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 見・梅文	前期
第3-7	C1	碗	肥前	13.5	2.9	5.1	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 見・梅文・赤文	前期
第3-8	C1	碗	肥前	13.5	3.7	5.6	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 見・平文	前期
第3-9	C1	碗	肥前	14.6	3.9	4.8	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 内(赤文・見・赤文)	前期
第3-10	C1	碗	豊津	10.5	7.0	3.9	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-11	C1	碗	豊津	10.6	7.0	3.9	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-12	C1	碗	豊津	11.4	6.4	4.5	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-13	C1	碗	豊津	10.6	6.3	4.1	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-14	C1	碗	豊津	11.2	6.4	4.1	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 高台部無施 赤付	前期
第3-15	C1	碗	豊津	11.0	6.8	4.3	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 高台部無施	前期
第3-16	C1	碗	豊津	22.0	6.4	6.0	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-17	C1	碗	豊津	12.8	2.8	3.8	ロウ成形成 同輪赤塗り 見・砂目直	灰褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-18	C10	碗	豊津	13.9	3.3	4.2	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-19	C1	碗	豊津	13.2	3.2	4.1	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-20	D1	鉢	豊津	12.5	3.2	3.9	ロウ成形成 同輪赤塗り 見・砂目直	灰褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-21	C1	碗	豊津	12.2	3.2	4.4	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	灰褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-22	D1	鉢	豊津	11.3	3.3	3.7	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	鉄褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-23	C1	碗	豊津	11.8	3.0	3.3	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	鉄褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-24	C1	碗	豊津	11.6	2.9	3.4	ロウ成形成 彫出し高台 見・砂目直	鉄褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-25	C1	口付鉢	豊津	11.8	6.4	5.3	ロウ成形成 彫出し高台	鉄褐色 彫出し下無施 赤付	前期
第3-26	D1	鉢	豊津	2.4	5.0	5.0	ロウ成形成	灰褐色 彫出し下無施	前期
第3-27	C1	天目赤碗	瀬戸・美濃	10.8	7.7	3.7	ロウ成形成 彫出し高台	鉄褐色 彫出し下無施	前期1期
第3-28	C1	天目赤碗	瀬戸・美濃	10.4	7.3	4.0	ロウ成形成 彫出し高台	鉄褐色 彫出し下無施	前期1期
第3-29	C1	鉢	瀬戸・美濃	28.2	5.9	14.5	ロウ成形成 彫出し高台 見・日直	鉄褐色 見・日直	大室前期
第3-30	C1	鉢	瀬戸・美濃	12.0	2.5	46.3	ロウ成形成 彫出し高台 見・日直	貝目	大室前期
第3-31	C1	鉢	瀬戸・美濃	11.3	2.8	6.2	ロウ成形成 彫出し高台 見・日直	貝目(赤文)	大室前期
第3-32	C1	鉢	瀬戸・美濃	12.9	2.9	6.9	ロウ成形成 彫出し高台	貝目(赤文)	大室前期
第3-33	C1	鉢	中国	29.6	5.8	19.3	ロウ成形成	灰褐色	前期
第3-34	C1	鉢	中国	34.5	6.1	24.9	ロウ成形成	外・内赤 内(灰)	前期
第3-35	C10	碗	越前	29.0	5.8	15.1	白土成形成	鉄褐色 毛直	V前期
第3-36	C1	鉢	越前	27.6	10.7	12.4	ロウ成形成	赤付 口赤	V前期
第3-37	C1	鉢	越前	28.0	6.5	13.6	ロウ成形成	鉄褐色 毛直	V前期
第3-38	C1	鉢	越前	29.5	8.7	16.6	ロウ成形成	鉄褐色 毛直	V前期
第3-39	C10	土師質圓	○	9.9	2.5	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ	淡灰色 C表1	
第3-40	C1	土師質圓	○	8.5	2.1	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ	淡灰色 C表1	
第3-41	C1	土師質圓	○	9.0	2.0	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ	淡灰色 C表1	
第3-42	C1	土師質圓	○	9.2	2.2	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ	淡灰色 C表2	
第3-43	D1	土師質圓	×	12.1	2.3	-	子づつぬ 白・見・黒シナテ 磨蝕	淡灰色 D1前期	
第3-44	B1	土師質圓	△	3.7	-	-	子づつぬ	褐色	
292-1	C1	鉢	瀬戸・美濃	10.2	2.6	6.1	ロウ成形成 彫出し高台 彫し輪下平直	灰褐色	大室前期
301-1	C1	鉢	瀬戸・美濃	10.3	2.0	5.6	ロウ成形成 彫出し高台 見・赤直	灰褐色	前期1期

第8表 土器・陶磁器観察表 石組溝

石組水路上層(第30段 図版第27)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯層 陶磁器・生産地	口徑	通量(m) 底径	成形・調整	土師質・胎土調 陶磁器・施・装飾	時期・備考	
2-1	C10	碗	肥前	8.3	6.2	4.7	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外(一)・赤文(二)・赤文	前期
2-2	B/C10	碗	肥前	10.7	4.9	4	ロウ成形成 彫出し高台 見・輪赤直	赤付 外・赤文	前期
2-3	C1	碗	肥前	19.3	5.8	(4.5)	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・輪赤(コニエナ印)	前期
2-4	C10	碗	肥前	8(5)	(5.6)		ロウ成形成	赤付 外・赤文	前期
2-5	B1	瓶状碗	肥前	9.6	5.0	(3.8)	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文(赤)	前期
2-6	B1	瓶状碗	肥前	9.6	5.3	3.6	ロウ成形成 彫出し高台 見・日直	輪赤(赤付 外・赤文)	V前期
2-7	C10	碗	肥前	11.7	7.2	4.7	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色(赤付 外・赤文不明)	V前期
2-8	B1	碗	肥前	10.1	7.4	4.2	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色(赤付 外・赤文不明)	V前期
2-9	C10	平筒碗	肥前	7.8	6.3	3.6	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文 見(五弁赤文)	前期
2-10	C10	平筒碗	肥前	7.6	5.8	3.9	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・平赤文・輪赤(中) 内(四方赤文)	V前期
2-11	C10	平筒碗	肥前	7.1	5.9	3.3	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 内・外(平赤文・輪赤) 見(五弁赤文)	V前期
2-12	C10	碗	肥前	13.3	3.4	9.0	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文	V前期
2-13	B1	段蓋	肥前	7.6	3.0	6.8	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・梅文	V前期
2-14	C10	瓶状碗	瀬戸・美濃	9.1	4.8	3.4	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・梅文・赤文	10-10期
2-15	B1	瓶状碗	瀬戸・美濃	8.5	3.9	2.8	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文(赤)	10-10期
2-16	C10	平筒碗	瀬戸・美濃	(7.8)	6.9	3.8	ロウ成形成 彫出し高台	赤付 外・赤文 見(五瓣赤)	前期
2-17	B1	杯	瀬戸・美濃	5.7	4.3	3.1	ロウ成形成 彫出し高台	赤付(赤 外)・赤文(赤)	前期
2-18	C10	瓶状碗	瀬戸・美濃	7.0	16	2.9	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色(貝目)	前期1期
2-19	C1	鉢	瀬戸・美濃	12.2	6.6	9.9	ロウ成形成 磨蝕直	灰褐色	19世紀
2-20	C10	碗	吉野	9.0	3.7	3.1	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 高台部無施	19世紀
2-21	B1	鉢水鉢	吉野	11.5	8.4	-	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色・赤褐色 彫出し内・高台部無施	近代
2-22	B1	鉢	吉野	17.0	10.0	7.3	ロウ成形成 彫出し高台	灰褐色 内・外(赤)手 高台部無施	近代
2-23	C10	土鍋	吉野	12.8	6.0	4.8	ロウ成形成 輪赤付直	灰褐色 彫出し下無施	19世紀
2-24	C1	鉢	吉野	9.5	1.9	3.2	ロウ成形成 磨蝕直	白土 彫出し下無施	近代
2-25	B1	鉢	吉野	11.0	2.3	4.0	ロウ成形成 磨蝕直	白土 彫出し下無施	近代
2-26	C10	碗	越前	26.7	-	-	白土成形成	鉄褐色 毛直	V前期
2-27	C10	碗	越前	15.3	25.5	(14.8)	ロウ成形成	鉄褐色 毛直	V前期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	種別	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地	法量(cm) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・装飾	時期・備考	
2-28	C10	甕	高野	16.2	—	ワタロ成焼 見掛け付	黒褐色(赤土)	Ⅱ-2期
2-29	C10	甕	高野	9.8	—	ワタロ成焼 見掛け付	赤褐色(赤土)	Ⅱ-2期
2-30	B1	土師質甕	×	18.6	3.7	ワタロ成焼	赤褐色	Ⅱ-2期
2-31	B1	土師質甕	×	22.9	4.0	手づね(土)・内・外・底メナテ	赤褐色	Ⅱ-2期

石塚水田2 (第31～34図 図版第28～31)

遺物番号	地区	種別	土師質・灯芯燻陶磁器・生産地	法量(cm) 口径 高さ 底径	成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・胎・装飾	時期・備考		
2-32	C10	甕	高野	9.8	7.6	4.5	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-33	B1	甕	高野	10.0	7.0	4.8	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-34	C1	甕	高野	11.1	6.8	4.7	ワタロ成焼 煎出し高台	青磁	Ⅱ-2期
2-35	C10	甕	高野	8.0	6.0	4.4	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-36	C10	甕	高野	8.6	5.4	4.1	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文・赤文(コンニャク印)	Ⅱ-2期
2-37	B1	甕	高野	10.3	5.5	4.1	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-38	B1	甕	高野	8.1	4.5	3.0	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-39	B1	甕	高野	8.1	4.7	3.3	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文(コンニャク印)	Ⅱ-2期
2-40	C1	甕	高野	11.8	15.4	—	ワタロ成焼	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-41	C1	甕	高野	9.0	6.1	4.1	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器付 外山水文	Ⅱ-2期
2-42	C10	甕	高野	10.7	7.5	5.0	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器付 外山水文	Ⅱ-2期
2-43	B1	甕	高野	9.7	5.1	4.0	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器付 外山水文	Ⅱ-2期
2-44	C10	甕	高野	9.0	6.3	5.2	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器付 外山水文	Ⅱ-2期
2-45	C1	酒杯	高野	13.1	4.0	4.7	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文 見掛け付	Ⅱ-2期
2-46	C1	甕	高野	13.9	3.3	4.5	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-47	C1	甕	高野	14.0	2.7	4.4	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-48	C1	甕	高野	12.9	4.0	3.9	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-49	C10	甕	高野	12.8	3.9	4.2	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 内山水文・赤文 見掛け付	Ⅱ-2期
2-50	C1	甕	高野	13.5	3.1	4.4	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 内山水文・赤文 見掛け付	Ⅱ-2期
2-51	C10	甕	高野	12.8	6.0	4.8	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	赤土	Ⅱ-2期
2-52	C10	甕	高野	8.3	5.2	3.5	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-53	C10	甕	高野	8	2.7	2.7	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-54	B1	甕	高野	18.8	3.7	5.2	ワタロ成焼 煎出し高台 針文	赤土 内山水文 見掛け付 赤土 赤文	Ⅱ-2期
2-55	B1	甕	高野	13.1	2.6	8.3	ワタロ成焼 煎出し高台 針文	赤土 見掛け付 見掛け付(赤文) 赤土 赤文(コンニャク印)	Ⅱ-2期
2-56	C1	甕	高野	12.8	3.0	3.7	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 内山水文 見掛け付(赤文) 赤土 赤文(コンニャク印)	Ⅱ-2期
2-57	B1	甕	高野	14.0	4.1	7.3	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 内山水文・赤文 見掛け付	Ⅱ-2期
2-58	C10	甕	高野	14.0	3.6	8.2	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 内山水文	Ⅱ-2期
2-59	B1	甕	高野	13.7	3.4	8.5	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-60	C10	甕	高野	11.0	4.7	1.6	ワタロ成焼 煎出し高台 針文	赤土 見掛け付 赤土 赤文(大形明輪)	Ⅱ-2期
2-61	C10	甕	高野	13.3	3.5	4.7	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器付 青磁	Ⅱ-2期
2-62	B1	杯	高野	7.0	3.5	2.9	ワタロ成焼 煎出し高台	白磁	Ⅱ-2期
2-63	B1	杯	高野	7.5	5.1	3.7	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文 赤土 赤文(大明寺)	Ⅱ-2期
2-64	B1	杯	高野	8.0	6.4	4.0	ワタロ成焼 煎出し高台	青磁 高台裏面無輪	Ⅱ-2期
2-65	C10	杯	高野	7.1	5.0	3.7	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文 高台裏面無輪	Ⅱ-2期
2-66	B1	碗	高野	16.6	6.8	6.5	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文 見掛け付	Ⅱ-2期
2-67	C10	甕	高野	18.2	8.8	8.1	ワタロ成焼 煎出し高台	白磁 内山水文(赤)	Ⅱ-2期
2-68	C10	甕	高野	4.1	10.5	6.4	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-69	B1	甕	高野	—	—	—	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 外山水文	Ⅱ-2期
2-70	C10	天目茶碗	高野	11.4	5.3	4.0	ワタロ成焼 煎出し高台	鉄釉 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-71	B1	天目茶碗	高野	11.6	5.4	4.4	ワタロ成焼 煎出し高台	鉄釉 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-72	C1	甕	高野	10.7	6.9	3.8	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 高台部無輪 赤土	Ⅱ-2期
2-73	B1	甕	高野	11.5	6.5	3.0	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-74	B1	甕	高野	9.5	7.0	4.5	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器・無輪	Ⅱ-2期
2-75	B1	甕	高野	11.9	7.0	4.8	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器(貫入)	Ⅱ-2期
2-76	C1	甕	高野	10.5	6.1	3.6	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器(貫入)	Ⅱ-2期
2-77	C10	甕	高野	10.2	6.4	4.1	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器(貫入)	Ⅱ-2期
2-78	B1	甕	高野	9.7	6.2	5.4	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 外縁起二山水文 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-79	B1	甕	高野	20.5	2.8	11.3	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器	Ⅱ-2期
2-80	B1	甕	高野	35.2	11.4	11.0	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器・無輪	Ⅱ-2期
2-81	C10	甕	高野	15.2	4.4	5.2	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器	Ⅱ-2期
2-82	B1	甕	高野	13.3	3.7	4.5	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-83	B1	甕	高野	14.0	5.2	4.3	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-84	B1	甕	高野	13.5	3.5	4.7	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-85	B1	甕	高野	12.7	3.6	4.4	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-86	C1	甕	高野	10.9	2.8	3.4	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-87	C1	甕	高野	11.4	2.8	3.5	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-88	C10	甕	高野	12.0	2.5	4.9	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器 煎出し無輪 赤土	Ⅱ-2期
2-89	B1	甕	高野	9.7	2.8	3.8	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-90	B1	甕	高野	20.3	12.5	8.0	ワタロ成焼 煎出し高台	鉄釉 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-91	C10	甕	高野	16.8	10.7	8.0	ワタロ成焼 煎出し高台	鉄釉 煎出し無輪 赤土	Ⅱ-2期
2-92	C1	甕	高野	11.1	6.7	4.9	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-93	B1	甕	高野	10.2	6.9	4.7	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-94	C10	甕	高野	10.0	6.3	4.5	ワタロ成焼 煎出し高台	内・口山水文 外山水文 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-95	C1	甕	高野	13.6	3.1	7.6	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-96	C1	甕	高野	11.5	2.6	5.7	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器	Ⅱ-2期
2-97	C10	甕	高野	10.4	2.3	4.9	ワタロ成焼 煎出し高台 見掛け付	陶磁器	Ⅱ-2期
2-98	C1	甕	高野	10.1	2.1	4.8	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 煎出し無輪	Ⅱ-2期
2-99	C10	甕	高野	19.1	5.9	3.3	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 外山水文・緑土 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-100	B1	平盤	高野	9.8	6.2	5.1	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-101	C1	甕	高野	14.6	2.9	7.7	ワタロ成焼 煎出し高台	長石釉 見掛け付 赤土 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-102	C1	甕	高野	14.3	2.8	7.4	ワタロ成焼 煎出し高台	長石釉 見掛け付 赤土 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-103	B1	甕	高野	19.3	5.5	8.6	ワタロ成焼 煎出し高台	陶磁器 内縁起二山水文 高台部無輪	Ⅱ-2期
2-104	B1	甕	高野	23.9	4.8	12.5	ワタロ成焼 煎出し高台 砂高台	赤土 見掛け付 赤土 赤文	Ⅱ-2期
2-105	B1	甕	高野	12.8	8.7	10.6	ワタロ成焼 煎出し高台	赤土 見掛け付	Ⅱ-2期
2-106	C10	甕	高野	28.2	11.9	22.1	ワタロ成焼	黒土	Ⅱ-2期
2-107	C1	甕	高野	27.6	8.9	10.7	ワタロ成焼	黒土	Ⅱ-2期

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地	口徑	高さ	底径	成形・調整	土師質・胎土調 陶磁器・施・装飾	時期・備考
2-108	B1	厚鉢	肥前	20.0	10.2	8.8	ロウロ成形 削出し高台	横目11系 黒瓦研毛面	
2-109	C1	厚鉢	肥前	32.2	-	-	ロウロ成形	横目14系	
2-110	C10	土師質甕	巻焼	13.0	9.2	15.5	ロウロ成形	黄色内面(上半)に黄褐色斑	
2-111	C1	土師質受皿	○	12.8	2.9	-	子づくねロウロ/内/狭みナデ 彫刻 把手輪付付	灰白色	D系2
2-112	C10	土師質甕	○	8.9	2.1	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系1
2-113	C1	土師質甕	○	9.0	2.3	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系1
2-114	C1	土師質甕	○	11.2	2.3	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系1
2-115	C1	土師質甕	×	8.9	2.4	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
2-116	C10	土師質甕	○	9.6	2.6	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
2-117	C1	土師質甕	○	9.8	2.7	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
2-118	C1	土師質甕	○	9.8	2.6	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
2-119	B1	土師質甕	○	9.5	2.3	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系3
2-120	C1	土師質甕	○	9.4	2.5	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系3
2-121	C1	土師質甕	○	9.7	2.3	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
2-122	B1	土師質甕	○	9.6	2.4	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系3
2-123	C1	土師質甕	○	10.6	1.7	-	子づくねロウロ/内/狭みナデ 彫刻	淡灰色	D系2
2-124	B1	土師質甕	×	9.8	1.5	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ	淡灰色	G系
2-125	C1	土師質甕	×	10.3	1.4	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ 彫/板状痕	淡灰色	G系
2-126	C1	土師質甕	×	11.5	1.7	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ	淡灰色	G系
2-127	B1	土師質甕	×	16.0	2.8	-	子づくねロウロ/内/狭みナデ	淡灰色	D系

第9表 土器・陶磁器観察表 道路

道路 第32 (第35号 図版第32)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地	口徑	高さ	底径	成形・調整	土師質・胎土調 陶磁器・施・装飾	時期・備考
32-1	J9	平段碗	肥前	7.81	6.5	4.6	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、内/四方青文 見/五弁青文	V期
32-2	J9	碗	肥前	13.0	4.2	7.0	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文	V期
32-3	B10	碗	肥前	12.0	6.6	4.1	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、内/四方青文、口縁内輪筋	V期
32-4	J9	碗	巻焼	10.6	7.3	3.6	ロウロ成形 削出し高台	赤焼 腰部以下無施 変色	II期
32-5	C10	碗	巻焼	10.4	6.7	3.9	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 腰部以下無施	II期
32-6	C10	碗	巻焼	12.0	6.8	5.0	ロウロ成形流注 削出し高台	灰白色 腰部以下無施	II期
32-7	C10	碗	巻焼	11.2	2.6	3.6	ロウロ成形 裏/内輪茶留付 見/跡目	灰白色 腰部以下無施	II期
32-8	A9	煎茶	巻焼・丸焼	6.1	3.2	4.1	ロウロ成形 非成形	灰白色 底部外縁無施	19世紀
32-9	A9	碗	巻焼・丸焼	12.8	5.6	4.2	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 高台非成形	D系
32-10	A10	鉢	巻焼	37.3	12.2	23.2	ロウロ成形	表面研毛面	前期
32-11	A9	土師質受皿	×	14.5	2.2	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ 把手輪付付 彫/板状痕	淡灰色	G系交
32-12	A9	土師質受皿	×	13.6	2.3	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ 彫/板状痕	淡灰色	G系交
32-13	A9	土師質甕	○	8.5	1.5	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ	淡灰色	G系
32-14	B10	土師質甕	○	11.5	2.0	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ	淡灰色	G系
32-15	A10	土師質甕	○	10.9	1.7	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ	淡灰色	G系
32-16	C10	碗	肥前	10.6	5.8	3.6	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、内/四方青文 見/五弁青文	V期
32-17	C10	平段碗	肥前	7.21	6.5	3.1	ロウロ成形 削出し高台	赤焼 腰部以下無施	通期1期
32-18	J9	瓦目平碗	巻焼・丸焼	11.2	8.3	4.5	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、内/四方青文 見/五弁青文	V期
32-19	J9	土師質甕	×	10.4	2.7	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
32-20	J9	土師質甕	○	10.8	2.8	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系3
32-21	J9	土師質甕	○	10.0	2.7	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
32-22	A10	土師質甕	○	8.7	1.9	-	子づくねロウロ/見/回しナデ	淡灰色	C系2
32-23	B10	碗	巻焼	11.3	3.7	4.0	ロウロ成形 削出し高台	灰白色	II期
32-24	B10	碗	巻焼	13.2	3.5	4.8	ロウロ成形 非成形 見/跡目	灰白色 口縁部外縁無施 腰部以下無施	I期
32-25	A9	碗	巻焼	11.2	3.6	3.8	ロウロ成形 非成形	灰白色 腰部以下無施	I期
32-26	C10	碗	巻焼	26.8	4.8	15.0	ロウロ成形 削出し高台 跡目	赤付 丹/青文、内/四方青文 見/大明成化年製	V期
32-27	J9	西洋盆	巻焼・丸焼	13.0	-	19.4	ロウロ成形 耳取付	緑褐色上・裏付	

道路 135 (第36号 図版第32)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯質 陶磁器/生産地	口徑	高さ	底径	成形・調整	土師質・胎土調 陶磁器・施・装飾	時期・備考
135-1	A10	碗	肥前	9.41	6.1	3.1	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、見/五弁青文	V期
135-2	A10	平段碗	肥前	7.8	6.2	3.8	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、見/五弁青文	V期
135-3	A10	平段碗	肥前	8.8	7.0	4.6	ロウロ成形 削出し高台	輪筋赤付 丹/青文	V期
135-4	A10	香炉	肥前	11.3	9.3	5.3	ロウロ成形 削出し高台	赤付 丹/青文、輪筋	V期
135-5	A10	碗	巻焼	28.4	7.7	9.5	ロウロ成形 削出し高台 見/跡目	灰白色	I期
135-6	A10	平段碗	巻焼・丸焼	8.4	5.0	3.6	ロウロ成形 削出し高台	灰白色 丹/丸輪筋 高台非成形	横目小期
135-7	A10	お座栗	巻焼	6.0	11.0	9.9	むちて成形 耳取付	緑褐色上・裏付	横目分残
135-8	A10	平鉢	巻焼	36.5	14.7	14.6	ロウロ成形	緑褐色	VI-2
135-9	A10	土師質甕	○	10.1	1.6	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ 彫/板状痕	淡灰色	G系
135-10	A10	土師質甕	○	11.7	2.0	-	内型成形(1)回しナデ 見/狭みナデ 彫/板状痕	淡灰色	G系

備考の時期区分は以下の文献に拠る。

伊万里：巻焼・丸焼(近世陶磁器の巻) 2000 『九州陶磁の鑑賞』九州近世陶磁学会10周年記念

巻焼：巻焼(近世陶磁文化財センター) 2002 『江戸時代の巻焼』

丸焼：丸焼(近世陶磁文化財センター) 2003 『江戸時代の丸焼』

横目分残：福井県教育庁歴史文化財調査センター 2016 『福井県教育庁歴史文化財調査センター所蔵6』『福井県総合調査事業報告』

土師質：福井県教育庁歴史文化財調査センター 2015 『福井県教育庁歴史文化財調査報告第143号』

第2章 瓦

今回の調査区では瓦の出土量が少なく、出土した瓦の残存状況も悪かった。このため、軒瓦については文様の残りが悪く、詳細な形式分類ができないものも含めて図化した。軒瓦の形式分類は『福井県埋蔵文化財調査報告第173集 福井城跡 -JR北陸線外2線連続立体交差事業に伴う調査-』（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2021年刊行）によっている。

軒丸瓦（第37図1～3 第10表 写真図版第33）すべて赤瓦の古段階にあたるもので、瓦当文様から37-1はB右12cに分類できる。他は残りが悪いいため確定はできないが、ともに巴は右巻きで、37-2は珠文が12個ある可能性が高い。釉薬は瓦当面のみに掛かり、37-1は褐色、37-2は暗赤褐色、37-3は灰褐色を呈する。37-1には自然釉も掛かり、丸瓦部凹面には針金引きの痕跡と細かい布目が残る。

軒平瓦（第37図4～7 第11表 写真図版第33）37-4のみいぶし瓦古段階にあたるもので、他は赤瓦古段階にあたるものである。37-4はA2cに分類でき、他は残りが悪いいため確定ができないが、B2の文様に分類できる。37-4は瓦当上縁の中央部を丸く仕上げている。釉薬は瓦当面や平瓦部凹面に掛かり、37-5は灰褐色、37-6は暗灰黄色、37-7は暗赤褐色を呈する。

軒棧瓦（第37図8・9 第11表 写真図版第33）すべて赤瓦の新段階にあたるものである。37-8は中心飾りに橋文を持つもので、37-9は残りが悪いいため確定はできないが、いわゆる「大板式」の文様となる可能性が高い。37-8は赤褐色、37-9は暗赤褐色の釉薬が掛かるが、前者は瓦当裏面が無施釉なのに対して、後者は全面に施釉している。

丸瓦（第37図10 第12表 写真図版第33）いぶし瓦で凸面には工具によるナデ痕跡が残る。凹面には布目のほかに、工具による幅1.0cmほどのタキ痕跡が残る。

平瓦（第37図11 第13表 写真図版第33）赤瓦古段階にあたるもので、凹面と端面に明褐色の釉薬が掛かっている。側縁は上端部を丸く仕上げている。

棧瓦（第37図12 第13表 写真図版第33）赤瓦新段階にあたるもので、暗赤褐色の釉薬が全面にかかっている。針金孔を1つ持つほか、切り欠き部に工具が当たった線刻状の痕跡が残っている。また、端面に「上」を○で囲む刻印を持つ。

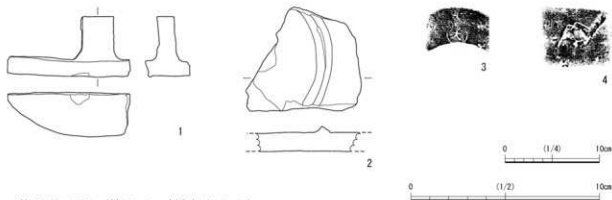
その他の瓦（第38図1・2 第14表 写真図版第33）38-1は面戸瓦（鑿面戸）で未施釉であるが、焼成の状態から赤瓦新段階にあたるものと考えられる。38-2は凸帯で文様を描いている飾板と想定しているが、元の姿は不明である。赤褐色の釉薬が表面にのみ薄く掛かる。

刻印 残りが悪く図化しなかった瓦に、「大」を○で囲む刻印（第38図3）と、山形に「上」を組み合わせた刻印（第38図4）を持つものがあつた。ともに赤瓦新段階にあたる。

出土状況 今回の調査区のうち、FKJ15-1・16-1は瓦の出土量がとくに少なく、製作年代が17世紀と想定されるいぶし瓦や赤瓦の古段階にあたるものは、ほとんど出土していない。また、FKJ15-2も瓦の出土量は少なく、その多くが整地土からの出土である。瓦をまとめて廃棄した遺構等は確認できなかった。このような状況から、今回の調査区付近には近世前半に瓦をふいた建築物があつた可能性は低いと考えている。



第37图 瓦1 (縮尺1/4 1/6:10)



第38図 瓦2 (縮尺1/4 刻印拓本は1/2)

第10表 軒丸瓦観察表

図面 番号	採回 番号	種別	型式	施軸箇所	法量 (cm)					文様			出土地点		出土遺構の主 な遺物の時期	遺物 番号
					外径	文様区径	縁文径	丸瓦部厚	巴の巻き	巴の形数	縁文数	地区	遺構番号	層位		
37	1	非瓦片状陶	軒丸瓦	瓦当部 丸瓦部凸面	116	120	10	1.8	右	c	12	A8	152-178		19C 中	9-1
37	2	非瓦片状陶	軒丸瓦	瓦当部	170	115.4	1.0	-	右	c	12	B9	152-104		19C 後半	9-2
37	3	非瓦片状陶	軒丸瓦	瓦当部	116.8	113.2	0.9	-	右	-	-	B9	152-整地土2		19C	9-3

第11表 軒平瓦・軒棧瓦観察表

図面 番号	採回 番号	種別	型式	施軸箇所	法量 (cm)					文様			出土地点		出土遺構の主 な遺物の時期	遺物 番号
					最大幅	瓦当高	文様区高	平瓦部厚	中心跡	唐草数	地区	遺構番号	層位			
37	4	非瓦片状陶	軒平瓦	—	(20.0)	4.3	2.7	2.0	2 跡	2	B10	152-整地土3		19C	9-4	
37	5	非瓦片状陶	軒平瓦	瓦当部 平瓦部凸面	(12.6)	4.3	2.7	2.0	2 跡	3	D6	152-整地土2		19C	9-5	
37	6	非瓦片状陶	軒平瓦	瓦当部 平瓦部凸面	(12.7)	4.5	2.7	-	2 跡	2	J10	151-TR19		19C	9-6	
37	7	非瓦片状陶	軒平瓦	瓦当部 平瓦部凸面	(4.4)	4.7	2.6	1.9	-	2	J-A5	151-排水溝		19C	9-7	
37	8	非瓦片状陶	軒棧瓦	瓦当部 平瓦部凸面	(14.2)	4.0	2.3	1.6	縁文	2	D1	152-根瓦		19C	9-8	
37	9	非瓦片状陶	軒棧瓦	全面	(7.0)	4.7	2.9	1.9	-	2	D4	161-25		19C	9-9	

第12表 丸瓦観察表

図面 番号	採回 番号	種別	型式	施軸箇所	法量 (cm)					出土地点	出土遺構の主 な遺物の時期	遺物 番号	
					玉縁幅	玉縁高	丸瓦部高	丸瓦部厚	丸瓦部幅				全長
37	10	非瓦片状陶	丸瓦	—	11.7	3.3	7.8	2.7	14.7	(28.6)	A10 152-236 B1 152-2 C10 152-369-236 14-	17C-近代	9-10-11

第13表 平瓦・棧瓦観察表

図面 番号	採回 番号	種別	型式	施軸箇所	法量 (cm)			刻印	出土地点		出土遺構の主 な遺物の時期	遺物 番号
					最大幅	全長	平瓦厚		地区	遺構番号		
37	11	非瓦片状陶	平瓦	笠面 端部	115.3	(21.3)	2.1	—	A8	152-106	19C	9-12
37	12	非瓦片状陶	棧瓦	全面	26.8	27.2	1.5	丸に上	B1	152-106	19C	9-13

第14表 面戸瓦・飾板観察表

図面 番号	採回 番号	種別	型式	施軸箇所	法量 (cm)				出土地点		出土遺構の主 な遺物の時期	遺物 番号
					最大幅	全高	奥行	最大厚	地区	遺構番号		
38	1	非瓦片状陶	面戸瓦	—	(13.0)	4.7	6.4	—	B10	152-整地土3		9-14
38	2	非瓦片状陶	飾板	表面	(12.2)	(11.0)	—	2.6	G-F7	152-根瓦		9-15

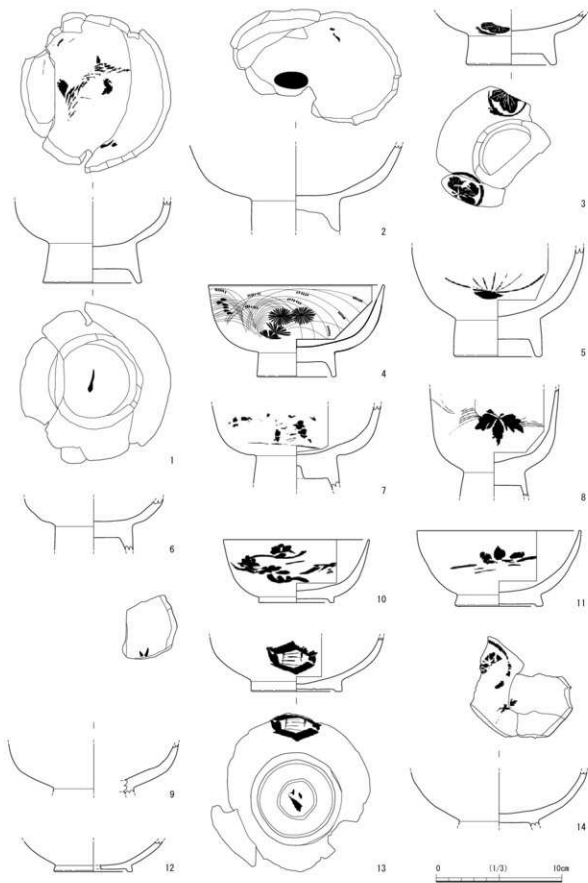
第3章 木製品

木製品は2441点出土した。このうち、比較的残存状態の良いもの231点を図化し、150点の写真を掲載した。製品の分類はこれまでの福井城跡の報告に基づくとともに、他の近世遺跡での分類を参照して行なった。掲載した出土遺物のうち、下駄には足裏の圧痕がみられる個体が13点あり、それぞれ男女と子どもに分けて計測値を第15表に示した。出土数の4割を占める箸は668点あり、特徴のある形状のものや漆塗箸等34本を掲載した。また計測可能な資料187本は計測値をグラフ化し、第16表に示した。各器種の樹種については、同定結果を第6章第4節に記載した。以下、各器種の木製品の概要を表面観察・分類・自然科学分析結果等を用いて報告する。

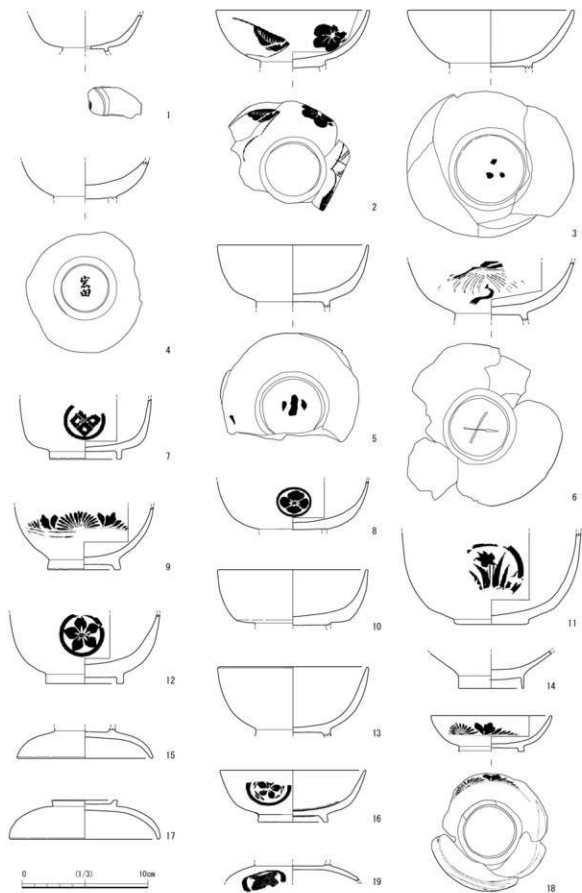
漆器^[1](第39～41図 第17表 写真図版第34～36) 39-1～8は飯椀である。39-1は高台裏に「一」と漆文字が書かれ、3または4個重ねて収納できる重椀系の「イチノワン」の印と推定する。見込に「夫婦松」が描かれる。破損部には鶴亀等が配され、鶴亀松竹を組合せた地方色の強い蓬菜文であったと思われる。39-2は見込に漆絵の痕跡が認められる。残存部の体部径と底部厚から大型の椀と思われる。39-3はいわゆる「三ツ紋」系の椀で、外面の三方に均等に桐紋が配される。ただし、紋様が高台部から離れていないため腰高の可能性もある。39-4は、菊と薄を取り合わせた「秋草文」が精緻に描かれる。樹種はブナよりも上等なトチノキ^[2]である。39-5は残りが悪く、漆絵は扇の河骨部を確認するのみである。39-6は比較的薄め高台厚を持つ。39-7の漆絵は蓬菜文の一部で、松か竹が描かれたと推測する。39-8の器形は壺椀に近似するが、同椀の典型的な加飾は桶等の篋を写した「カツラ」と呼ばれる無文の隆帯である。そのため葛文様が全周に巡り、「カツラ」のない8は飯椀とした。

39-9～14、40-1～3・5～9・12・13は汁椀に分類した。39-9は内面に漆絵の痕跡のある体部片である。39-10の漆絵は、蓬菜文に似た松文様と考える。塗膜分析で銀の成分が検出された。下地は柿澱を用いた渋下地で、用材はブナであることから廉価な製品の部類に入る。39-12は残りが悪いものの高台が極めて低いことから、蓋もしくは重椀の「サンノワン・シノワン」の可能性もある。39-13は「亀甲に三段梯子」が描かれる。高台裏に「上」と漆文字が書かれ、周りを線刻の圏線で囲む。用材は安価なブナで、文様の精緻さも欠ける。口径が14cm以上と推定され、大型の重椀系の「ニノワン」とした。39-14は39-13と同程度の法量を持つと思われるが、高台径がやや小さい。40-1は高台裏に漆文字の痕跡がある。40-2には「破れ地紙」を表現したと考えられる扇面と梅の取り合わせが描かれる。ただし、描かれた2ヶ所の扇面のうちの一方の左端下方に交差する線描が7本みられるため、紋帳にはない文様の可能性が高い。40-3は高台裏に「小」、40-5は「小」と漆で印が書かれる。どちらも所有者や収納の順番等を表すと考えられる。40-6は他の文様は破損によりみられないが、蓬菜文を構成する松と思われる。高台裏に「×」の線刻がある。40-7は腰部が張り出す腰椀に近い器形である。高台が低く、重椀系の一文字腰椀A^[3]の可能性もある。40-8の紋様からも塗膜分析で39-10と同様、銀の成分が検出された。40-9は「半菊」と葉・流水文様が全周に巡る。40-12はやや体部の厚い椀である。「桔梗」の紋が正面ではなく、左に少々傾いて描かれる。

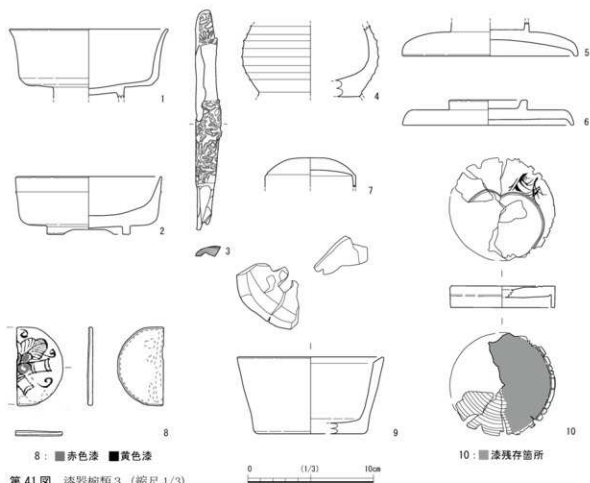
40-4は高台裏に「岩田」と漆文字が書かれる。40-10は一文字腰椀Aである。40-25は元々は飯椀だが、高台を削り杓子等に再利用した可能性^[4]がある。柄を入れる穿孔は破損のため確認できなかった。40-16は汁椀とも蓋ともみえる器形で、漆が内面に多く、高台裏に少量付着している。漆塗りパレット



第39圖 漆器碗類 1 (縮尺 1/3)



第40图 漆器碗類2 (縮尺1/3)

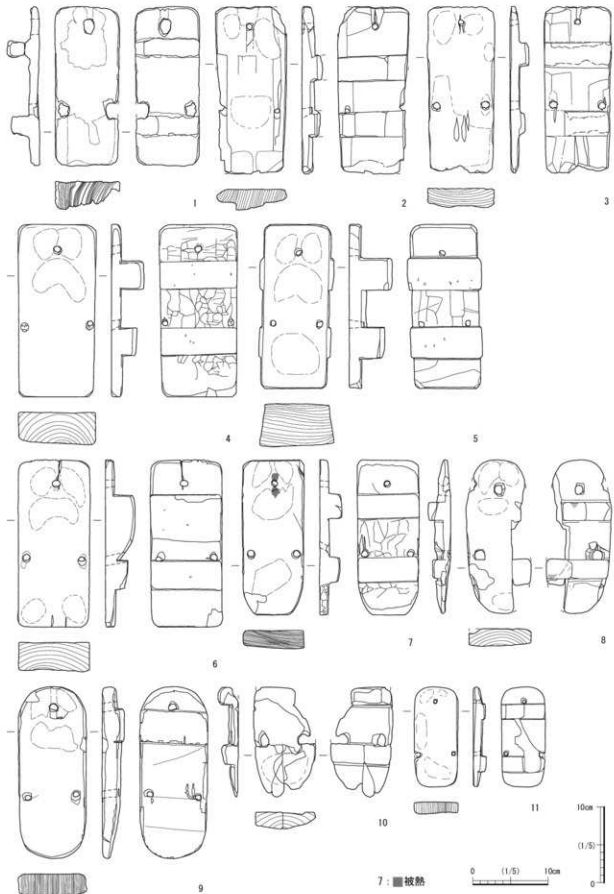


第41図 漆器碗類3 (縮尺1/3)

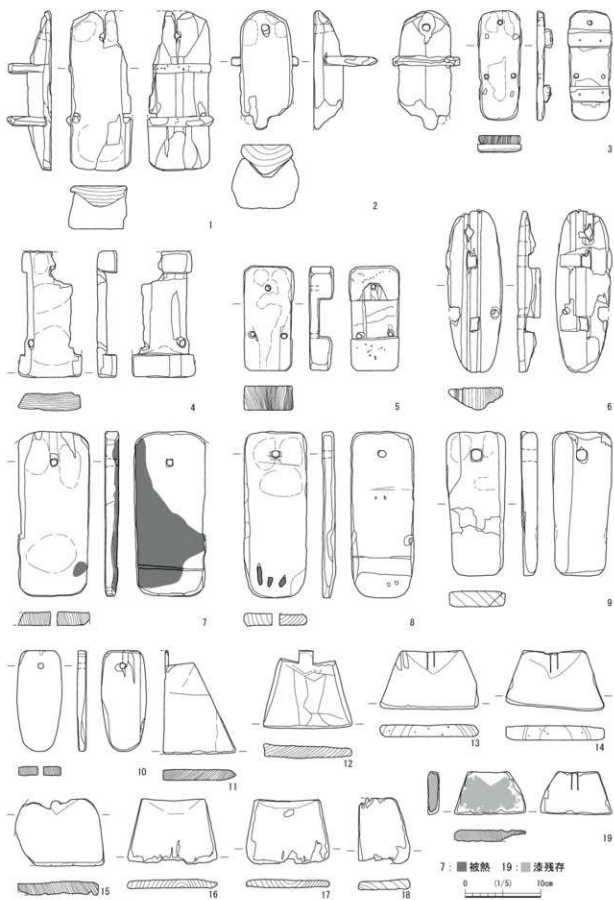
として使用されたと考えられる。40-15・17は共に椀蓋であるが、40-15の用材はトチノキ、40-17はケヤキであり、中品・上品の部類に入ると思われる。41-3は刀子状の部材で、下地2層の上に透明漆1層と朱漆を重ねる。下地には地の粉を用いる。加飾は上塗りと色の異なる下地の色を研ぎ出す唐塗⁽⁵⁾である。41-4は筋加工と僅かに高台痕がある容器の体部である。41-8は、中央に赤色漆で果実または花が描かれた丸板である。一節竹⁽⁶⁾に葉と葛を取り合わせたと考えられる。41-9は上面に別の材の接着痕がある。装飾的で上品の部類に入ると思われる。

註

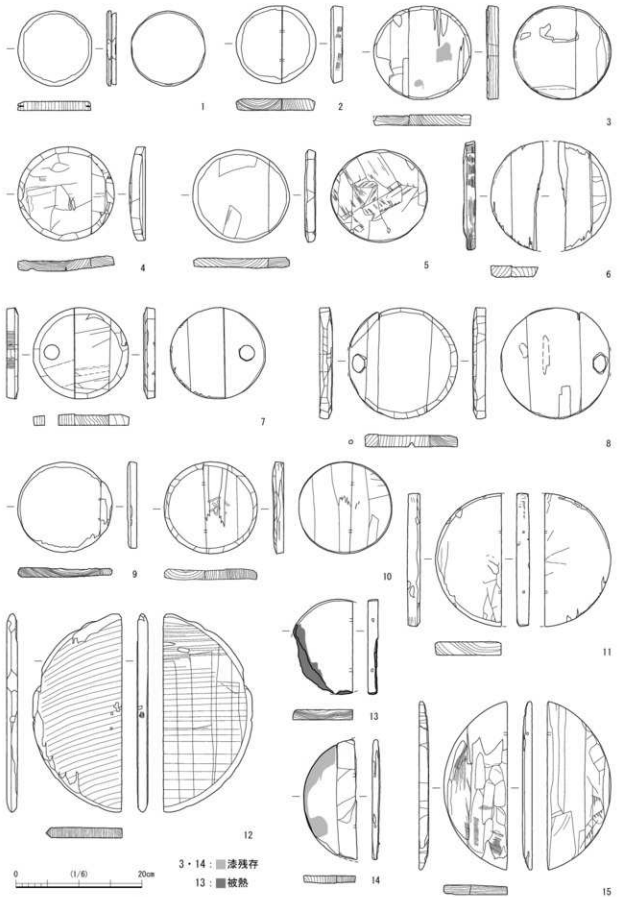
- 1 漆器碗類の分類は第7章第4節で詳述する。
- 2 北野信彦 2005 「第1章 生産技術からみた近世出土漆器」『近世出土漆器の研究』吉川弘文館 p21
- 3 一文字腰椀とは腰部に一本の棧線がある椀で、高台付根より体部棧線が上にあるAと、棧線がほぼ同じのBがある。中井さやか著 2000 「小石川半天神下 第三分冊」第9章第4節では一文字腰椀A・Bは重ね椀として結論づけられる。
- 4 南洋一郎 「漆碗・皿に関する二・三の問題」『朝倉氏遺跡資料館紀要 1986』p37
- 5 唐塗は東北地方の高度な技法とされる。18世紀の中頃には、唐塗は模倣不可能な技術であったという記述が宝暦八年(1758)に商人によって書かれた『津軽見聞録』にある。
- 6 一節竹は、室町時代の一節竹という一節だけで33cm前後あったとされる苗から文様に用いられた。竹の節を模した形に葉をつけたものが圖案化される。



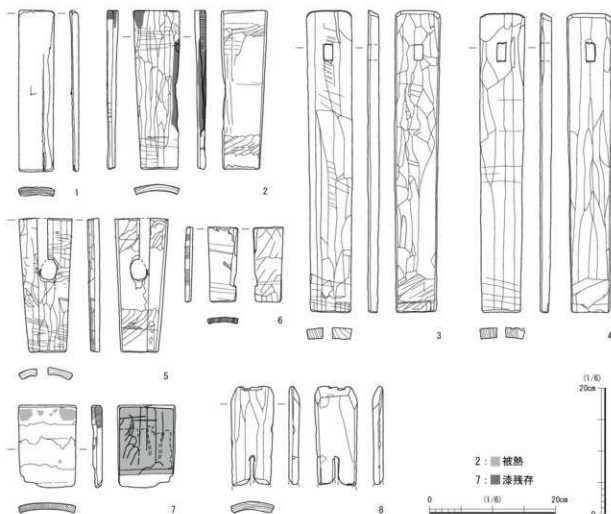
第42図 下駄1 (縮尺1/5)



第43図 下駄2 (縮尺 1/5)



第44図 樽・樽1 (縮尺1/6)



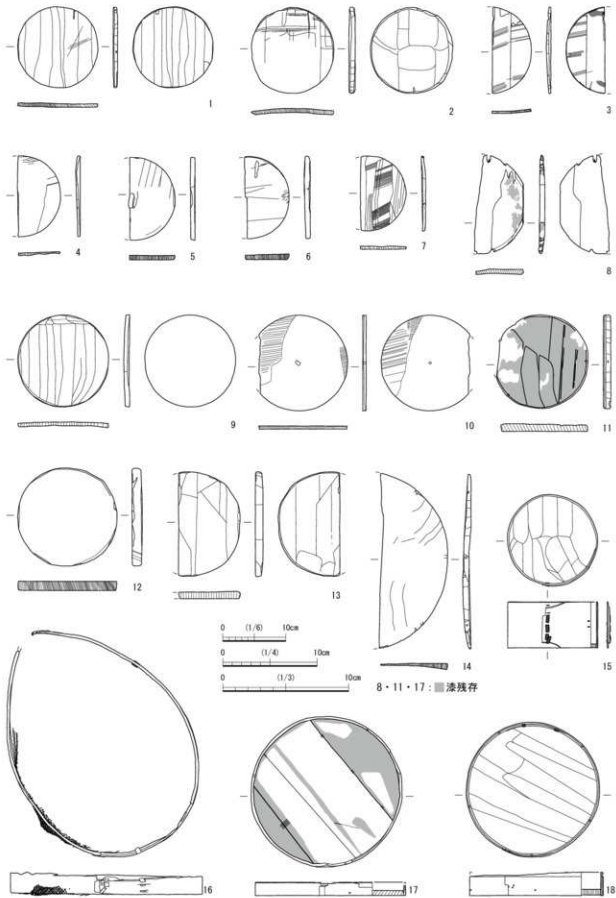
第45図 桶・樽2 (縮尺1/6)

下駄(第42・43図 第18表 写真図版第37・38・84) 42-1~11と43-5は一木造りの連歯下駄で、43-6は差歯による露印下駄、43-1・2は陰印下駄である。43-7~10は裏にわら草履を敷いて履く雪国特有の雪下駄(無眼下駄)である。例外として連歯の形になるよう歯を鉄釘で打ち付けた43-3がある。それぞれ角型を男性用、丸型を女性用、小型のものを子ども用と推定する。42-6は両足で履いた痕跡があるが、歯裏の摩耗痕から主に右足で履いたとみられ、台裏は極めて厚い前歯と後歯の境が無い。43-8は表面踵部に3ヶ所の傷があり、おがくずを詰めて補修されている。またX線写真で下駄の中央に鉄釘が確認された(写真図版第84)。42-11・43-3・5の子ども用の下駄は、成人用と比較して足裏の圧痕が強くみられた。

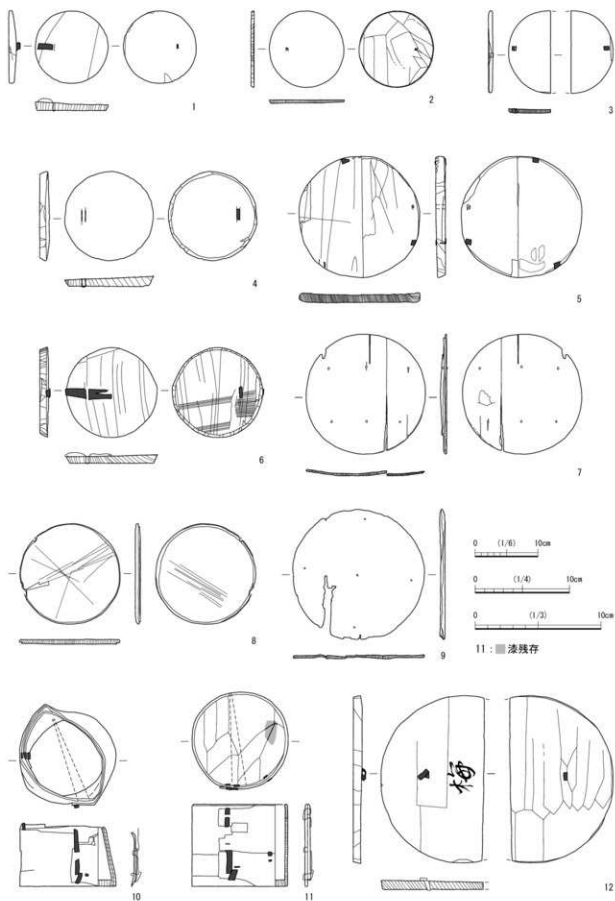
桶・樽(第44・45図 第19表 写真図版第39) 桶・樽は蓋板5点、底板9点、側板8点がある。蓋板は桶が蓋を伴わないため櫨材としたが、底板は区別できない。蓋板・底板は製材方法の別から、単材型と複合型のものに分けられる。側板は用途から液体を通しにくい板目材を櫨材、水分を通す柁目材

第15表 下駄圧痕計測表

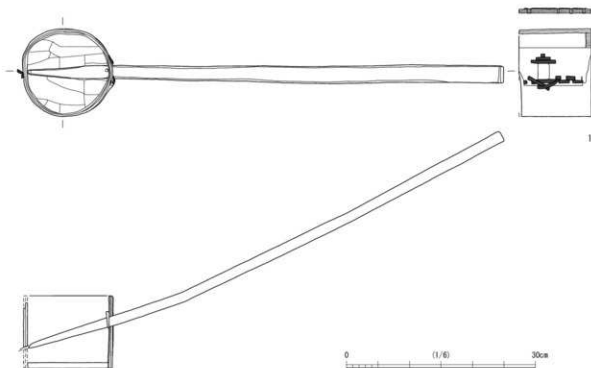
図版番号	足の圧痕の 長さ (cm)	下駄の サイズ	消費した 材料の 寸法	1文 の長さ
第42図1	20.5	21.0	成人男性用	18.7文
第42図6	20.6	22.1	成人男性用	9.2文
第42図3	20.5	22.0	成人男性用	19.16文
第42図8	19.7	20.3	成人女性用	16.45文
第42図5	18.6	21.7	成人男性用	19.04文
第43図1	18.6	(21.1)	成人男性用	18.79文
第42図7	18.0	20.5	成人男性用	18.54文
第43図7	17.9	21.9	成人男性用	19.08文
第42図2	15.0	22.1	成人男性用	9.2文
第43図4	14.8	16.2	成人男性用	6.75文
第43図5	13.2	13.6	子ども用	5.76文
第42図11	11.9	13.2	子ども用	5.5文
第43図3	11.8	14.4	子ども用	6文
成人男性用 の平均	18.3	20.9	成人男性用	18.72文



第46図 曲物1 (縮尺 1/3: 10~13 1/4: 9 1/6: 1~8・14~18)



第47図 曲物2 (縮尺 1/3: 10~12 1/4: 4~6 1/6: 1・2・3・7~9)



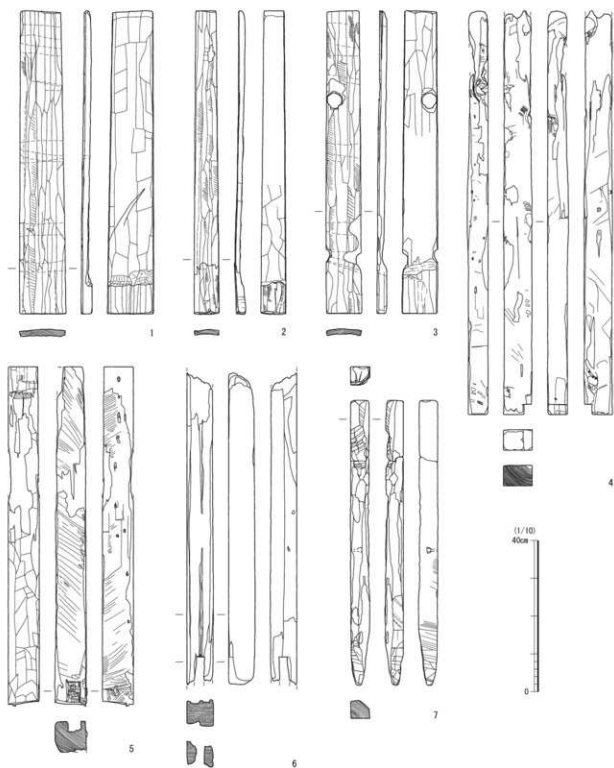
第48図 曲物・柄杓 (縮尺1/6)

を桶材と分類したが詳細は不明である。

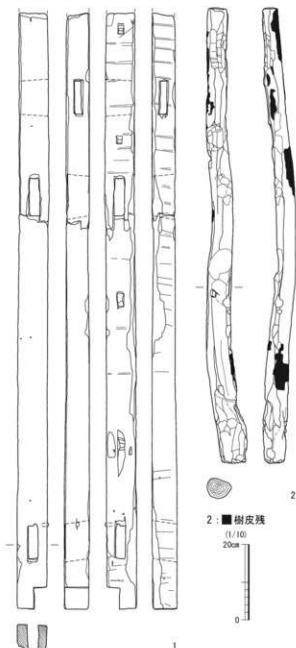
44-1は単材型で側面に1cmの溝がある。44-2～15は複合型で木釘によって接合されていた痕跡がある。木釘は44-12が1本、44-2・9～11・13～15が2本、その他は接合面が固く、木釘の本数を確認できない。複合型は接合したどちらか一方に芯材近くの板目材が用いられる割合が高く、14点中11点が板目材である。そのため、残る柾目材の3点のうち44-12・14は接合する材が欠失しているが、欠失した材が板目材であった可能性もある。

45-1・2・5・8は板目材である。45-2は外面上部にタガ痕が2本以上みられるため樽だと思われる。45-5は栓孔のある材の左方に半損した材が接合する。側板の内面下部は底板を嵌めるために削っている。45-8は把手孔があることから桶の可能性もあり、木取りと器種が一致しないことを示す。45-3・4・6・7は柾目材である。45-3・4は把手を通す孔があり、同一桶の向かい合う側板だと考える。45-6・7には側面に銃等によって調整された痕がみえる。

曲物(第46～48図 第20表 写真図版第39・40) 側板が残るかつ状態の良いものを曲物と分類し、把手の樹皮がある46-3・10、47-1～9・12を蓋、それ以外の46-1・2・4～9・11～14を底板とした。47-7・9は木釘の痕から、把手となる材が付いていた事が分かる。46-16は側板のみで残りは悪いが、金網付きの曲物で籠と推定した。2枚の側板が金網を下から1cmほど挟みこんでいる。また側板の上端を一定間隔で樹皮綴じし、強度を上げたと考えられる。47-10・11と48-1は柄杓で、47-10・11は柄部が欠損している。どちらも側板に2～3mmの小穴を空けて柄先を安定させたと思われる。48-1は柄に木釘が残存していたが、側板の柄先があたる部分から下と柄先が欠損している。樹種は同定された9点中、ヒノキ科アスナロ属4点、ヒノキ科ヒノキ属3点、スギが2点である。ヒノキは曲物に最も多く用いられる樹種である。綴じ皮はヤマザクラまたはカバの樹皮である。



第49図 建築材1 (縮尺1/10)



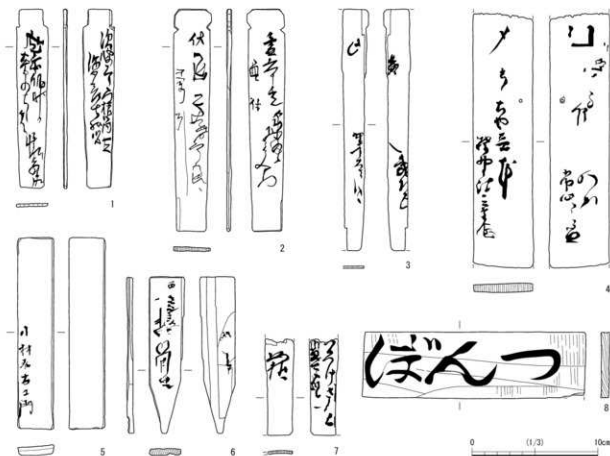
第50図 建築材2 (縮尺1/10)

福井／細田□ □様御内／□ □」と書かれ、細田邸に居住する者へ茶屋から届け物の付札だったと窺える。なお福井城下には「細田」という藩士はいない。5には桶の所有者らしき人名「小林□右エ門」が書かれる。福井藩士として「小林又右衛門」が元禄から嘉永年間に、「小林八郎左衛門」が安永から慶応年間にみられ、どちらかが該当する可能性がある。6は差札で、劣化のため判読不能である。7は表が「□門様、裏が「□けさん井／□□可被成候」と読み、内容は不明だが表に書かれた人物に関わる指示だと思われる。

箸 (第52図 第23表 写真図版第42) 1～10は両端の太さがほぼ均一な寸箸である。11～18は両口箸、19～27が片口箸である。いずれも平均的な個体となかでも短い個体、長い個体を図化した。19・20は断面が正方形を呈し、未塗装の箸としては精緻である。28～32は特殊な形状で、28は他のものより太く、29は長く先端に向かって緩やかに湾曲する。30は片端が被熱し、31・32は片端が扁平である。33・34は塗装箸で、34は3分の1より下が緑色漆、上が赤色漆で塗分けしている。

建築材 (第49・50図 第21表 写真図版第41) 井戸桶材・建築部材・井戸枠材・杭・井戸材がある。49-1～3は同一井戸桶材である。49-3は下部側面に抉りがあり、木札として転用されたと考えられる。49-4～6、50-1・2は同一遺構出土のものである。出土した152-147の上層はゴミ穴で、下層には桶組み井戸がある。49-6が井戸枠、その他の建築材が井戸小屋に関連する遺物の可能性があるが断定はできない。49-7の杭は中央にL字状の貫通孔がある。

墨書 (第51図 第21表 写真図版第41) 1～5・7は人名関連の文字資料である。1の表は「須崎三郎右衛門様御内／□□彦七様□□」と読める。彦七については不詳だが、須崎邸に居住した人物だとみられる。裏は「越前福井□□ □□□□／□らのはし□□」で、進物等の付札と推測する。2は表が「此□□須崎三郎エ門様へ／□□よりまいる」、裏が「亥六月七日 □□□□^上／□□左衛門／□□町□兵衛」で、これも進物の付札である。「須崎三郎右衛門」は江戸時代前期の札所奉行に同名が確認されるほか、近世を通じて福井藩士として名がみられる。1の出土地点は須崎邸を挟んで北隣にあたるが、広範囲に及ぶ掘削のために移動したと考えられる。2の出土地点は須崎邸にあたることから、1と2の人名は同一人物かその家系の人物であろう。3の表は判読不能だが、裏は「武」と「町」の2文字のみ判読できる。4は表に「メ □ちや壺本／福井□茶屋、裏に「越前

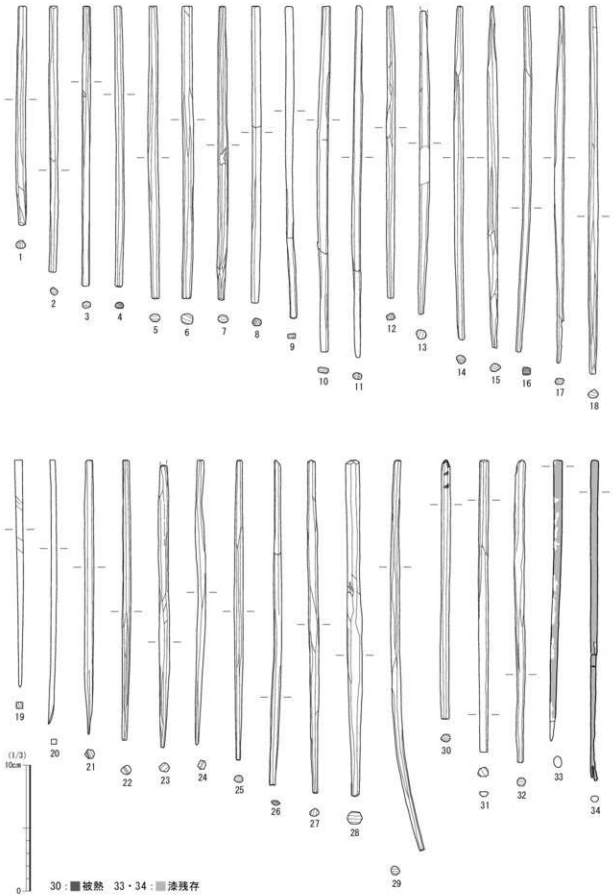


第51図 墨書(縮尺1/3)

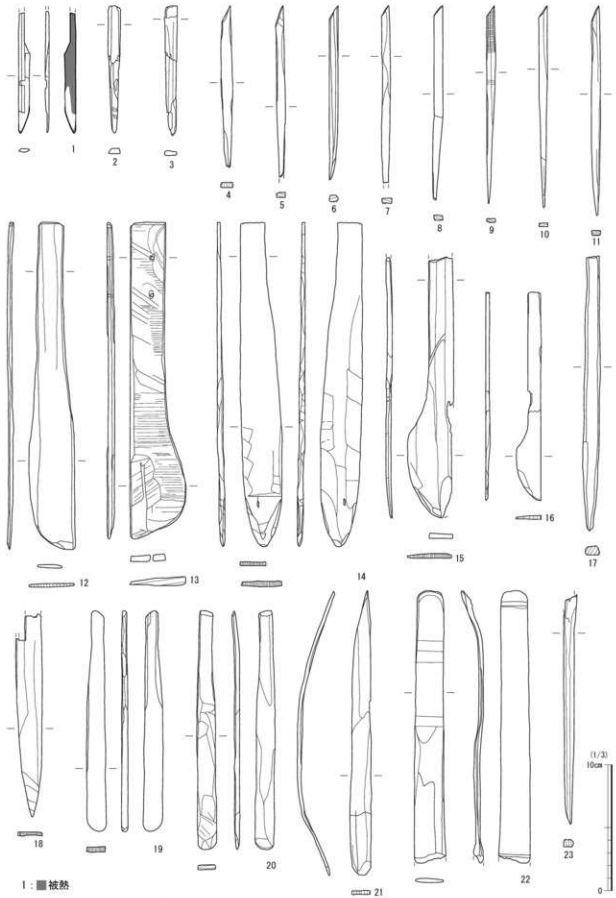
櫛枝・切匙類(第53図 第24表 写真図版第42) 1～11は櫛枝である。1・2は竹製で、1は柄部が欠損している。12～16は切匙である。13は柄に2ヶ所貫通孔がある。刃部側面が鑄状に厚くなっており、刃も厚みがある。使用痕は認められない。14は使用痕が両側面にわずかにみられる。その他の12・15・16の切匙は刃部に使用痕がある。17・19～21は匙の一種でそれぞれ先端に摩擦痕がある。18・23は串で、18は扁平で破損部に長方形の孔が開いていたと思われる。19は竹製のヘラで、表裏面に使用した痕跡はなく、側面が摩耗している。

杓子類(第54図 第25表 写真図版第43) 1はヘラで持ち手には釘穴が2ヶ所あり、全周が摩耗している。2は出土時点では「高野□□□」と判読できる陰刻がみられた。形は撥型で角が摩耗しており、柄部には漆が塗られていた。6は庖丁の柄である。持ち手に2条の溝が入っており、中子が残る(写真図版84)。5・11・12は灯明台で、5と11に被熱痕、11には漆がみられる。8～10・13は紡錘車で半損もしくは一部破損している。

栓(第55図 第26表 写真図版第43) 栓は19点出土し、17点完形のものがある。木取りは17のみ芯のある丸木である。他は全て丸木を木口面からみて、中心から4等分ないし6等分した「みかん割削出し」である。平均的な長さ5cm前後で、直径は3～3.5cmである。15は上端面中央に深さ2cmの小孔がある。側面には三日月形の痕が2ヶ所みられた。17は直径6cmと大きく、また加工が粗く、上端部は水平に整えていない。

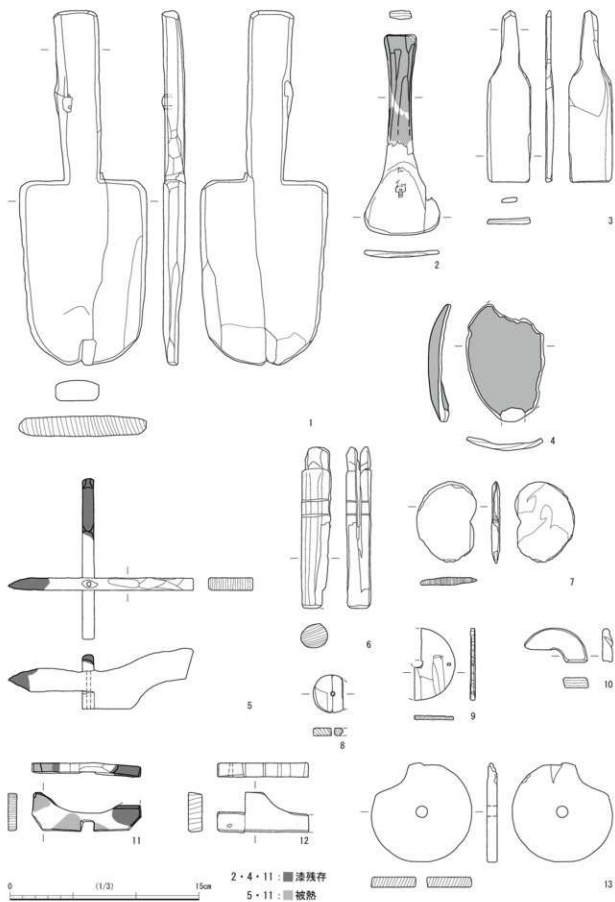


第52図 箭 (縮尺1/3)

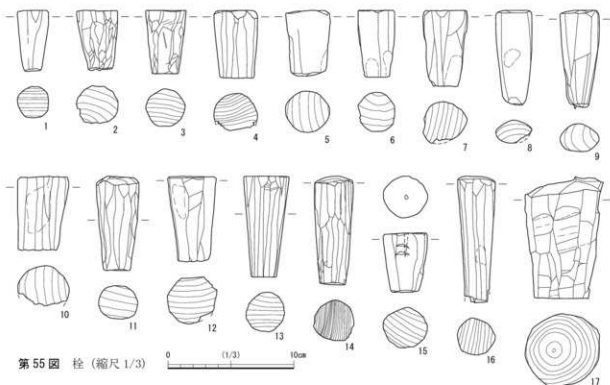


1: 圖被蝕

第53圖 櫛枝・切匙類 (縮尺1/3)



第54図 杓子等 (縮尺1/3)



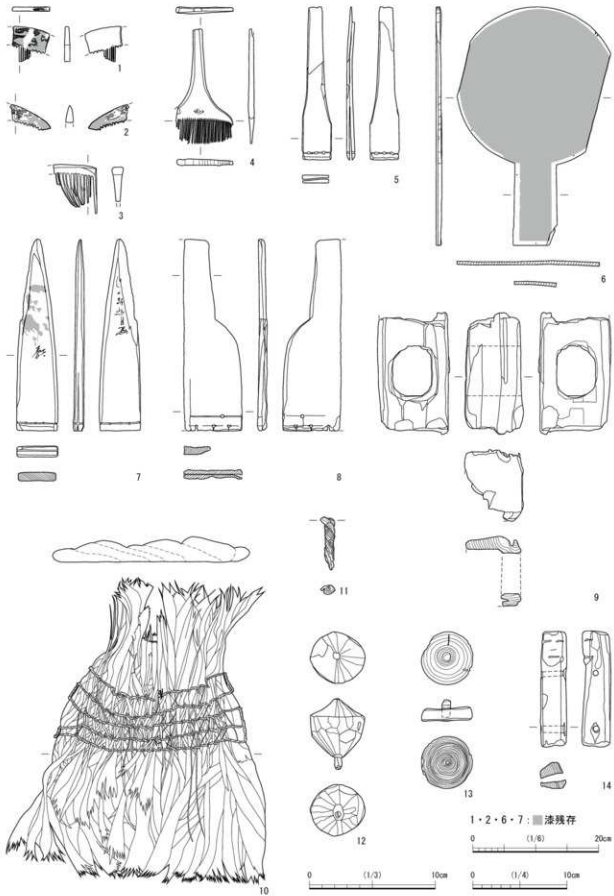
第55図 栓 (縮尺 1/3)

櫛・刷毛・独楽・その他 (第56図 第27表 写真図版第44) 1～4は櫛である。1・2は髪を掻き掲げる鬘櫛で、1には0.45cmの厚さの背に文様が入られ、表面に飛翔する鳥や瑞雲がみられる。2は両面とも蝶の文様で、表裏で上下の向きが変わる。3は梳き櫛の中でも荒櫛の部類に入る。4は毛筋立てで、日本髪の鬘や魁の筋目を整えるのに用いる。櫛の両面に入れ子菱の焼印が入り所有者を表す。

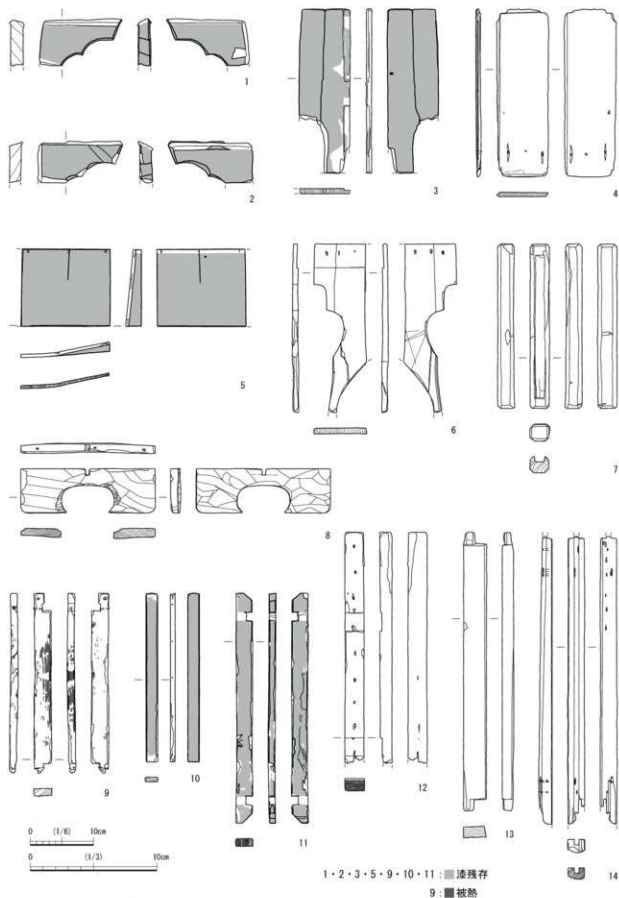
5・7・8は平刷毛で、5・7は毛を留める孔が1列、8は2列である。7には両面に墨書で所有者名が書き込まれる。出土遺構152-166の位置は、享和3年(1803)の城下絵図に描かれた「望月」邸の位置にあたる。6は側板を留める木釘孔と漆の接着痕がみられ、柄鏡箱の底板と思われる。9は上下水道の竹管を延伸するための継ぎ手である。10は棕櫚製の箒で、穂の折れ防止のための小編みが5列残る。棕櫚箒は現代でも使用されており、繊維を精製する前に箒にする「皮」と精製した後に箒にする「鬼毛」がある。この箒は棕櫚の樹皮を解して使用しており「鬼毛」といえる。11は生漆をろ過する際に用いた漉し紙である。紙が破れ漆で硬化した状態で出土した。漆の漉し紙は、これまでの福井城跡の発掘調査でも数点認められる。

12と13は独楽である。12は紐を巻いて用いる鉄芯独楽で、5mm角の芯を嵌める。13は手で回す捻り独楽で、径7.5mmの木製の軸を上部に嵌める。下部先端が尖る形状だったと考えられるが、全体が被熱し変形している。14は手足を差し込むための貫通孔2ヶ所あり、輪軸ははっきりしないものの顔の表現があるため、簡易的な人形となるものとみられる。

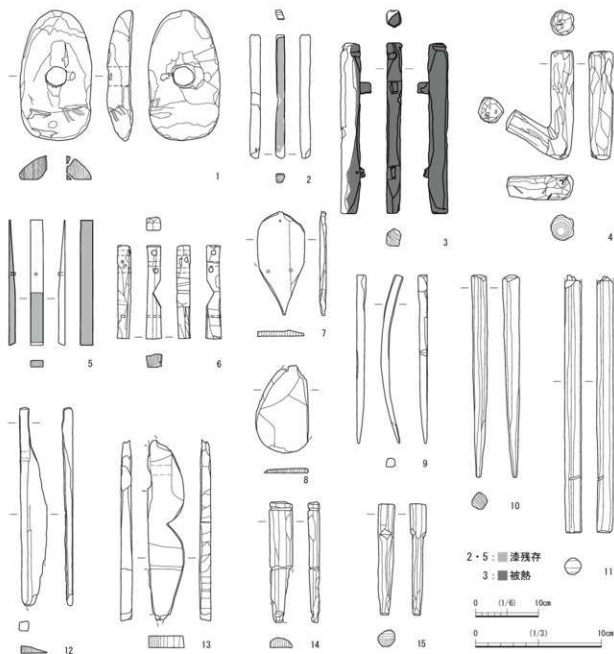
指物等 (第57図 第26表 写真図版第45) 1・2・8は折敷の脚で1・2は上面に漆の接着痕がある。8は天板との接着に枿穴1ヶ所、木釘3本を用いる。3は木釘孔が1ヶ所ある全面漆塗の板材である。4は箱物の一辺である。鉄釘が1本残存し、木釘孔が3ヶ所ある。6は装飾的な枿りがあり、上部に枿穴が1ヶ所と木釘が3本ある。7は長さ228cm、幅1.2cm、深さ約09cmを測る容器である。9・11・13は曲物・桶等の把手の可能性はある。



第56図 櫛・刷毛・独楽・その他 (縮尺 1/3: 1~5・7・8・11~14 1/4: 10 1/6: 6・9)



第57図 指物等 (縮尺 1/3 : 1・2・13 1/6 : 3 ~ 12・14)



第58図 部材 (縮尺1/3: 2・4~11・13~15 1/6: 1・3・12)

部材 (第58図 第26表 写真図版第45) 1は半球状となる楕円形を呈し、中心に直径3cmほどの孔がある。その孔の片側内壁には別の2つの小孔が、部材の表裏両側から斜めに貫き通される。部材の平らな側から孔に棒状の柄を差し込んだとみられ、使用時に支点になる孔の縁が摩耗している。4は自在鉤で両端に浅い孔が2ヶ所ずつみられる。5は先細りの板に木釘が打たれている。木釘から1.5cmは漆がなく、残る6cmの部分に別材を組み合わせていたと想定する。6は角柱状だが、一側面の中央をV字形に切りこむ。貫通した小孔が3ヶ所、埋まったまま両端の切られた木釘が2ヶ所残存する。8は形状から、煎茶の茶匙の可能性が考えられる。側面が斜めに摩耗する。14は円柱を半裁したような形状で、上部と中央に筋状の切り込みがある。庖丁の柄の一部だろうか。

第17表 漆器種類観察表

調査 種別	探頭 番号	器種	出土地点			木取り	分類	法量 (cm)				付着物	漆			器文	備考	出土遺物の 主な遺物の 時期	木製品 No.			
			遺構番号	地区	層位			口径	高台径	高台高	全高		内	外	高					文	内面/高台	
39	1	柄	151-5	E10 F10	-	柄	A	丸筒	12.4	7.8	3.15	0.65	フナ威	黒	赤	赤	夫婦紋	高:「-」	-	~18C後	5-15-13	
39	2	柄	151-5	E10	-	柄	A	丸筒	17.0	7.0	2.4	0.0	フナ威	黒	赤	赤	無文	髹髹不可	-	~18C後	5-11-10	
39	3	柄	152-360	D10	-	柄	A	丸筒	12.0	7.2	2.3	0.4	フナ威	黒	赤	赤	丸に朝日	-	-	~17C中	6-94	
39	4	柄	152-36	F6 F7	-	柄	A	丸筒	14.0	6.2	1.9	7.3	トナノキ	赤	赤	赤	林草文 (朝日海)	-	-	18C前	6-123	
39	5	柄	152-391	C1	-	柄	A	丸筒	13.6	7.0	2.9	0.8	フナ威	黒	赤	赤	赤海草文	-	-	-	6-166	
39	6	柄	161-125	H1	-	柄	A	丸筒	11.0	6.2	1.9	0.4	フナ威	黒	赤	赤	無文	-	-	遺跡	6-551	
39	7	柄	152-355	J9	-	柄	A	丸筒	13.3	6.8	2.7	0.7	フナ威	黒	赤	赤	髹髹不可	-	-	-	6-490	
39	8	柄	152-36	F6 F7	-	柄	A	丸筒	10.2	5.4	1.9	0.6	フナ威	黒	赤	赤	高文様	-	-	18C前	6-122	
39	9	柄	151-102	D8 D9	-	柄	B4	汁椀	13.4	6.4	0.4	0.4	トナノキ	黒	赤	赤	髹髹不可	-	-	17C	102-2-3	
39	10	柄	152-166	J9	-	柄	D1	汁椀	11.6	6.0	0.45	0.5	フナ威	黒	赤	赤	松文様	-	-	18C後	-	
39	11	柄	152-292	C1	-	柄	D1	汁椀	13.0	7.0	0.85	0.6	フナ威	黒	赤	赤	髹髹不可	-	-	17C前	6-430	
39	12	柄	151-東園 遺跡	E10	-	柄	D2	汁椀	11.0	6.2	0.5	0.4	-	黒	赤	赤	無文	-	-	-	東園遺跡 遺14-2	
39	13	柄	151-5	F10	-	柄	D3	汁椀	13.6	7.2	0.8	0.4	フナ威	黒	赤	赤	鳥甲に 三枝柳子	高:「上」 「口」縁部	-	-	~18C後	5-17-1
39	14	柄	151-102	J9	-	柄	D1	汁椀	14.0	6.4	0.4	0.4	トナノキ	黒	赤	赤	髹髹不可	-	-	17C	102-3-3	
40	1	柄	151-28	D8	-	柄	D4	汁椀	9.0	3.8	0.4	0.3	トナノキ	黒	赤	赤	金	-	-	18C後	28-2-15	
40	2	柄	152-352	D10 C10	-	柄	D1	汁椀	12.2	5.2	0.5	0.6	トナノキ	黒	赤	赤	扇面(障子地) 縁2層1	-	-	-	16C後	6-477
40	3	柄	152-239	J9	-	柄	D1	汁椀	12.2	6.6	0.45	0.5	フナ威	黒	赤	赤	高文	高:「三」	-	-	~17C中	6-355
40	4	柄	152-165	J9	-	柄	C	皿	10.2	5.0	0.2	0.3	フナ威	黒	赤	赤	髹髹不可	高:「若田」	-	-	18C後	6-228
40	5	柄	152-166	J9	-	柄	D1	汁椀	12.0	5.8	0.5	0.6	フナ威	黒	赤	赤	髹髹不可	高:「今」	-	-	18C後	6-243
40	6	柄	161- 遺跡等	H1	-	柄	D1	汁椀	13.2	5.8	0.7	0.8	フナ威	黒	赤	赤	笠状文様 高:「+」 縁部	-	-	-	6-559	
40	7	柄	152-166	J9	-	柄	D1	汁椀	10.4	5.8	0.6	0.8	トナノキ	黒	赤	赤	丸に隅立四 葉文	-	-	18C後	6-280	
40	8	柄	152-166	J9	-	柄	D1	汁椀	12.0	5.4	0.1	0.3	トナノキ	黒	赤	赤	丸に花葉	-	-	18C後	6-245	
40	9	柄	152-259	D1	(下)	柄	D1	汁椀	11.0	5.8	0.8	0.1	フナ威	黒	赤	赤	高文様	-	-	-	6-406	
40	10	柄	152- 遺跡上	G6	-	柄	F	文字 彫刻	12.0	6.0	0.3	0.5	-	黒	赤	赤	無文	-	-	-	6-582	
40	11	柄	152-246	D1	-	柄	C	皿	14.2	6.0	0.4	0.3	フナ威	黒	赤	赤	丸に立ち丸 縁3	-	-	高台割平	18C-	6-234
40	12	柄	152-166	J9	-	柄	D1	汁椀	11.8	6.2	0.75	0.5	フナ威	黒	赤	赤	丸に結核	-	-	18C後	6-235	
40	13	柄	152-2	B1 北園 込め土	-	柄	D1	汁椀	12.0	6.0	0.6	0.5	-	黒	赤	赤	-	-	-	17C~近代	6-34	
40	14	蓋	152-2	C10 土層	-	柄	D2	蓋	9.6	5.2	1.0	0.2	ケヤキ	黒	赤	赤	無文	-	-	18C後~近代	6-74	
40	15	蓋	161-112	G10	-	柄	D2	蓋	10.8	4.8	0.2	0.4	トナノキ	黒	赤	赤	無文	-	-	17C	6-955	
40	16	柄	152-48	G8	-	柄	D2	蓋	11.6	5.6	0.6	0.1	トナノキ	赤	赤	赤	丸に点草	-	-	18C後	6-129	
40	17	蓋	152-178	G1	-	柄	D2	蓋	12.0	5.2	0.5	0.1	ケヤキ	黒	赤	赤	無文	-	-	遺跡部	~18C中	6-294
40	18	柄	152-259	D1	(下)	柄	D2	汁椀	9.6	5.2	0.4	0.2	フナ威	黒	赤	赤	丸本 矢羽文様	-	-	18C	6-405	
40	19	蓋	161-25	D4	-	柄	D1	蓋	10.6	6.0	0.2	0.4	フナ威	黒	赤	赤	丸に点草	-	-	19C	6-954	
41	1	柄	161-112	G10	-	柄	E	縁反板	12.6	5.6	0.9	0.5	フナ威	黒	赤	赤	無文	-	-	縁反板	17C	6-954
41	2	柄	151-100	J6 T10 5層	-	柄	F	平椀	11.6	6.6	0.6	0.6	ケヤキ	黒	赤	赤	無文	-	-	カツラ右	18C後	100-20-4
41	3	部材	152-165	J9	-	柄	H	刀子縁	17.4	-	0.9	2.1	セシム	黒	赤	赤	下地:赤色漆 上地:赤色漆 木目焼	-	-	18C後	6-230	
41	4	容器	151- 表土中	D6	-	柄	H	容器	19.2	8.2	0.45	0.5	セシム	黒	赤	赤	-	-	-	朝日鏡加工	表土中	
41	5	蓋	152-166	J9	-	柄	F	平椀蓋	14.0	6.2	0.8	0.2	トナノキ	黒	赤	赤	無文	-	-	18C後	6-279	
41	6	蓋	152-166	J9	-	柄	F	平椀蓋	13.6	6.2	0.8	0.2	フナ威	黒	赤	赤	無文	-	-	平椀	18C後	6-239
41	7	合子 蓋	152- 遺跡上	J9	-	柄	H	合子 蓋	7.2	-	-	0.25	フナ威	黒	赤	赤	無文	-	-	-	6-666	
41	8	丸板	152-367	J9	-	柄	H	容器蓋	6.2	-	0.4	0.3	ヒノキ	黒	赤	赤	-	-	-	花・葉物 蓋蓋・金	16C後	6-507
41	9	柄物 合子蓋	151-5	E10	-	丸本	H	柄	11.6	9.0	-	6.1	セシム	黒	赤	赤	無文	-	-	~18C後	5-20-3	
41	10	合子蓋	152-108	B1	2層	柄	H	合子蓋	8.2	-	-	1.7	ハンノキ	黒	赤	赤	高文様 (縁部)	表土中	-	19C	6-163	

第18表 下駄観察表

調査 種別	探頭 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)					備考	出土遺物の 主な遺物の 時期	木製品 No.	
			遺構番号	地区	層位		長さ	台幅 前後	台厚 前後	高さ 前後	鼻緒幅				
42	1	連板下駄	152-48	G8	-	台:榎目 裏:榎目	21.0	8.5	1.4	4.3	(4.3)	a/b: (6.2)/(1.09)	-	18C後半	本136
42	2	連板下駄	-	H1	161-益倉南	榎目	22.1	10.2	1.7	2.7	(2.4)	a/b: (13.1)後(2.4)	-	-	本324
42	3	連板下駄	-	H10	161-表土	榎目	22.0	8.9	1.2	2.5	1.3	a/b: 6.4/1.12	-	-	本323
42	4	連板下駄	161-129	H1	-	台:榎目 裏:榎目	22.8	10.3	1.5	4.3	3.6	a/b: 8.8/1.1	-	-	本307
42	5	連板下駄	161-132	H1	-	台:榎目 裏:榎目	21.7	8.5	1.6	5.7	4.1	a/b: 6.0/9.5	-	遺跡	本475
42	6	連板下駄	-	H1	161-益倉南	台:榎目	22.1	9.5	1.4	3.9	3.9	a/b: 7.4/1.00	-	-	本322

図説 種別	探回 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)					備考	出土遺構の 主な遺物の 時期	木製品№			
			遺構番号	地区	層位		長さ	台幅 幅幅	台厚 厚厚	高さ 高さ	鼻幅						
42	7	透南下駄	152-301	C1	-	白・灰目 黄・灰目	20.5	8.2 8.2	1.3 1.3	2.9 1.6	1.4	a/b: (5.9) / (9.5)	-	一部灰化	-	木 463	
42	8	透南下駄	152-146	C1	-	白・灰目 黄・灰目	20.3	(7.2) (8.3)	(2.15) (2.5)	(3.0) (0.85)	-	-	-	-	表面付着物	-	木 173
42	9	透南下駄	152-146	C1	-	白・灰目 黄・灰目	22.7	9.1 9.1	2.0 4.2	2.9 0.9	-	a/b:6.1/11.5	-	-	-	-	木 167
42	10	透南下駄	151-102	D8	2層	灰目	(14.5)	8.0 8.0	1.3 2.5	2.7 1.4	-	-	-	-	-	-	木 113
42	11	透南下駄	-	J9	152- 敷土上3	白・灰目	13.2	5.8 (5.8)	(1.3) (2.0)	(1.7) (0.4)	-	a/b:4.7/7.0	-	-	-	-	木 689
43	1	除印下駄	151- 近代透成土	B7	3層	灰目	(21.1)	(8.2) (8.8)	(3.2) (1.2)	(5.8) (2.5)	(2.6)	-	-	-	-	-	近代透成土 34-2
43	2	除印下駄	151-28	D8	台2層 敷土1層	灰目	(15.7)	6.9 (8.9)	3.9 (1.3)	(8.4) (4.5)	-	-	-	-	-	-	木 28-9-1 木 28-9-3
43	3	下駄 打付	152-32	J9	第4砂利 面下盛土	白・灰目 黄・灰目	14.4	5.4 5.8	1.0 2.3	2.9 2.1	1.0	-	-	-	-	-	木 113
43	4	透南下駄	151-5	E10	-	灰目	16.7	(6.7) (8.4)	(1.2) (3.0)	2.6 (1.4)	-	a/b:5.5/9.5	-	-	-	-	木 27
43	5	割り下駄	152-2	B1	水田跡土 (下層)	灰目	13.8	6.2 6.7	1.3 4.5	3.3 4.2	1.6	a/b:4.3/6.2	-	-	-	-	木 27
43	6	透南下駄	152-48	G8	-	灰目	(21.4)	7.2	3.0	-	-	a/b:(5.2) / (11.2)	-	-	-	木 137	
43	7	雪下駄	-	C1	152- 敷土5	灰目	21.8	(9.4)	1.8	1.8	-	-	-	-	-	木 711	
43	8	雪下駄	-	J9	152- 敷土3	灰目	22.0	8.3	1.7	1.8	-	-	-	-	-	木 703	
43	9	雪下駄	152-299	B-	-	透灰目	19.1	7.8	2.2	2.2	-	-	-	-	-	木 453	
43	10	雪下駄	-	J9	152- 敷土3	透灰目	13.3	5.95	1.2	2.2	-	-	-	-	-	木 685	
43	11	高印下駄	151-28	D8	土層	灰目	-	(9.6)	1.4	3.7	-	-	-	-	-	木 329	
43	12	高印下駄	-	H1	151- 包寄席	灰目	-	11.75	2.0	10.3	-	-	-	-	-	木 263	
43	13	除印下駄	152-166	J9-9	-	灰目	-	13.0	1.6	7.8	-	-	-	-	-	木 264	
43	14	除印下駄	152-166	J9-9	-	灰目	-	12.7	1.9	8.0	-	-	-	-	-	木 401	
43	15	高印下駄	151-111	H1	-	灰目	-	11.4	2.0	8.9	-	-	-	-	-	木 401	
43	16	高印下駄	151-3	C7-8	-	灰目	-	11.8	1.3	(8.5)	-	-	-	-	-	木 29-2	
43	17	高印下駄	151-3	C7-8	-	灰目	-	11.0	1.0	8.4	-	-	-	-	-	木 29-2	
43	18	高印下駄	151-28	D8	土層	灰目	-	(6.8)	1.3	(8.7)	-	-	-	-	-	木 29-2	
43	19	高印下駄	151-28	D8	2層	灰目	-	9.4	1.5	5.7	-	-	-	-	-	木 29-2	

第19表 桶・樽観察表

図説 種別	探回 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な 遺物の時期	木製品№		
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	最大厚					
44	1	桶 底板	151-近代 透成土	B7	3層	灰目	11.9	-	-	1.5	桶底の板工有・ホノズメ ホノズメ0.1cm・表面磨面多量	-	-	近代透成土 34-1	
44	2	桶 底板	151-28	D8	2層	灰目/灰目	12.3	-	-	1.8	木釘2	-	-	木 28-3	
44	3	樽 蓋	151-204	J6	-	灰目/透灰目	15.45	-	-	1.5/1.9	2材で接合	-	-	木 204-2-2	
44	4	桶 底板	152-166	J9-9	-	灰目	14.9	-	-	1.6/1.6	2材で接合	-	-	木 233	
44	5	樽 蓋	152-166	J7	A9	-	灰目/灰目	15.3	-	-	1.7/1.7	2材で接合	-	-	木 239
44	6	桶 底板	151-28	D8	土層	透灰目	17.7	-	-	1.8/1.6	透灰目	-	-	木 28-4	
44	7	樽 蓋	151-28	D8	-	灰目/透灰目/透灰目	14.5	-	-	1.8/1.6/1.7	栓穴有・3材で接合	-	-	木 28-2	
44	8	樽 蓋	152-166	J9-9	-	透灰目/灰目/灰目	17.6	-	-	1.8/1.9/2.0	栓穴有・3材で接合	-	-	木 253	
44	9	桶 底板	151-100	J6	TR19-5層	灰目/灰目	14.9	-	-	1.5/1.5	2材で接合・木釘2	-	-	木 100-11	
44	10	樽 蓋	152-182	A9	-	灰目/灰目	14.7	-	-	1.6/1.6	木釘2・樽印「A」の下に「水」	-	-	木 829	
44	11	桶 底板	151-28	D8	-	灰目	21.1	-	-	2.1	木釘2	-	-	木 28-3	
44	12	桶 底板	152-181	C2	-	灰目	(32.0)	-	-	(1.7)	木釘	-	-	木 236	
44	13	桶 底板	151-3	C7-8	-	灰目	15.1	-	-	1.6	一部灰化・木釘1・木釘穴1	-	-	木 29-2	
44	14	桶 底板	151-包寄席 透成土	G10 F10	-	灰目	(20.0)	(19.0)	-	(1.2)	片面塗漆残存・木釘1・木釘穴1	-	-	北朝跡水庫 4-1	
44	15	桶 底板	152-146	C1	敷土上3	灰目	(28.0)	-	-	(1.5)	釘穴2・2点接合	-	-	木 176	
45	1	樽 柄杓	152-32	J9	第3砂利 面下盛土	灰目	-	25.6	5.7	1.4	-	-	-	木 105	
45	2	樽 柄杓	152-2	B1	土層/段目	灰目	-	25.2	-	1.8	一部灰化・外面サテ面有	-	-	木 7	
45	3	樽 柄杓	152-166	J9-9	-	灰目	-	47.95	7.1	1.8	外面サテ面有・把手跡の孔有	-	-	木 303	
45	4	樽 柄杓	152-166	J9-9	-	灰目	-	47.45	7.3	1.8	外面サテ面有・把手跡の孔有	-	-	木 304	
45	5	樽 柄杓	152-166	J9-9	-	灰目	-	21.2	8.4	1.1	栓穴・同一輪の輪穴2材	-	-	木 296	
45	6	樽 柄杓	152-32	J9	第4砂利 面下盛土	灰目	-	11.9	4.8	0.9	2点接合	-	-	木 107	
45	7	樽 柄杓	151-28	D8	下層	灰目	-	13.1	9.2	1.7	外・塗色赤・内・塗色漆有	-	-	木 28-2	
45	8	樽 柄杓	152-166	J9-9	-	灰目	-	15.8	6.8	1.4	孔有	-	-	木 234	

第20表 曲物観察表

図説 種別	探回 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な 遺物の時期	木製品№	
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	厚さ				
46	1	曲物 底板	152-299	B8	-	灰目	12.8	-	-	0.6	-	-	-	木釘1
46	2	曲物 底板	152-299	B1	(下)	灰目	13.5	-	-	1.0	-	-	-	木釘1
46	3	曲物 蓋	152-166	A9	-	灰目	15.9	-	-	0.4	-	-	-	一部灰化・遺物付設不可
46	4	曲物 底板	152-2	C10	-	灰目	(12.8)	-	-	0.4	-	-	-	17代-近代
46	5	曲物 底板	152-146	C3	-	灰目	(13.2)	-	-	0.75	-	-	-	木 192
46	6	曲物 底板	152-146	C1	-	灰目	(13.2)	-	-	0.85	-	-	-	木 168
46	7	曲物 底板	152-166	J9	-	灰目	(11.9)	-	-	0.5	-	-	-	木 330
46	8	曲物 底板	151-TR19	J6	1層	灰目	(16.0)	-	-	0.83	-	-	-	TR19-1-1
46	9	曲物 底板	152-355	B9	-	灰目	9.7	-	-	0.5	-	-	-	木 491
46	10	曲物 蓋	152-182	A9	-	灰目	(7.6)	-	-	0.25	-	-	-	木 835

図版 種別	図種	出土地点		層位	法量 (cm)			備考	出土遺構の主な 遺物の時期	木製品№
		遺構番号	地区		最大長	最大幅	最大厚			
S2	20	竹筴	152-2	B1	水跡層土	20.9	0.4	西側	17C-近代	木21
S2	21	菅	161-125	B1	-	21.8	0.75	-	古墳	木471
S2	22	菅	161-111	H1	-	22.2	0.7	-	古墳	木481
S2	23	菅	151-102	D6-D8	19層	(52.4)	0.8	-	17C	102-7-1
S2	24	菅	161-129	H1	-	22.6	0.7	-	-	木203
S2	25	菅	152-104	B9	-	23.8	0.7	-	~18C 後半	木154
S2	26	菅	152-291	C1	-	25.8	0.7	-	17C 前半	木426
S2	27	菅	151-5	E10	-	26.4	0.8	-	~18C 後半	5-21-2
S2	28	菅	151-5	F10	-	26.7	1.2	大きい	~18C 後半	5-9-1
S2	29	菅	151-3	前10-F10	-	31.0	0.7	長い	~18C 後半	木113-4
S2	30	菅	161-129	H1	-	(20.5)	0.7	片端炭化	-	木150
S2	31	菅	161-129	H1	-	23.2	0.8	片端縮平	-	木172
S2	32	菅	152-2	B1	水跡層土	24.0	0.85	片端縮平	17C-近代	木22
S2	33	藁菅	152-地土まじり	B9	-	22.3	0.7	赤色漆	-	木512
S2	34	竹藪菅	152-166	B9-9	-	25.4	0.6	赤色・緑色漆の塗り掛け	18C 後半~	木286

第24表 楊枝・切庭類観察表

図版 種別	図種	出土地点		木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な 遺物の時期	木製品№	
		遺構番号	地区		層位	最大長	最大幅	最大厚				
S3	1	竹ペラ	151-108	D5	16 層目土	-	90.0	10.0	9.3	一般炭化	18C 後半~	108-21-3
S3	2	竹楊枝	152-166	B9-9	-	10.1	1.0	0.4	-	18C 後半~	木275	
S3	3	楊枝	152-東北 TR	C1	D1	-	10.2	1.1	0.35	-	木569	
S3	4	楊枝	151-TR3	D9	-	根目	12.8	0.95	0.4	-	TR3 古銅葉 2-4	
S3	5	楊枝	161-129	H1	-	根目	13.6	0.7	0.4	-	木310	
S3	6	楊枝	161-129	H1	-	根目	13.8	0.7	0.5	-	木90	
S3	7	楊枝	161-129	H1	-	根目	14.0	0.8	0.4	-	木94	
S3	8	楊枝	161-129	H1	-	根目	15.4	0.7	0.4	-	木91	
S3	9	楊枝	161-129	H1	-	根目	15.7	0.7	0.3	-	木92	
S3	10	楊枝	161-129	H1	-	根目	16.0	0.7	0.25	-	木93	
S3	11	楊枝	161-129	H1	-	根目	16.6	0.7	0.4	-	木95	
S3	12	切庭	161-125	H1	-	根目	25.9	3.6	0.3	-	木492	
S3	13	切庭	161-111	H1	-	根目	29.1	4.5	0.7	貫通孔 2・刃端の方が開い	木410	
S3	14	切庭木製品	161-129	H1	-	根目	25.7	3.2	0.5	貫通孔 1	木55	
S3	15	切庭	161-117	H1	-	根目	20.0	3.5	30.5	-	木570	
S3	16	切庭	152-2	C1	-	根目	16.5	2.0	0.35	柄端 100cm	17C-近代	木47
S3	17	匙	-	C1 内	152-整地土 5	根目	21.8	1.3	0.7	両側面縮平・先端摩耗	-	木712
S3	18	匙	161-117	H1	-	根目	16.1	(2.1)	30.3	ホコ穴	17C-	木836
S3	19	匙	151-28	D8	1層	根目	17.5	1.6	0.5	-	18C 後半~	28-8-5
S3	19	竹ペラ	151-28	D8	5層目土	根目	23.1	4.5	30.8	-	18C 後半~	28-12-19
S3	20	匙	152-2	C1	整地土 3	根目	18.9	1.6	0.4	-	17C-近代	木57
S3	21	匙	152-148	C1	152-整地土 3	根目	22.5	1.7	0.3	-	木205	
S3	23	匙	152-2	B1	北側製品の土	面積目	18.2	0.9	0.6	-	17C-近代	木33

第25表 杓子等観察表

図版 種別	図種	出土地点		木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な 遺物の時期	木製品№		
		遺構番号	地区		層位	直径	最大長	最大幅				最大厚	
S4	1	ペラ	152-2	C1	152-整地土 3	根目	28.1	10.1	1.7	刃先 2	-	木637	
S4	2	杓子	152-2	C1	土層 1段目	根目	15.9	6.0	-	柄部「高野」 「文字数不明」	18C 後半~近代	木36	
S4	3	ペラ	152-2	C1	-	根目	13.5	3.5	0.6	-	17C-近代	木51	
S4	4	杓子	152-367	B9	-	根目	39.3	16.1	-	全面炭化	16C 後半	木208	
S4	5	打明り	151-117	H1	-	根目	(14.7)	(12.8)	(3.6)	一部炭化有・貫通孔あり	17C	木819・木820	
S4	6	打ち物	152-182	A9	-	丸木削出し	4.28	(2.3)	(2.0)	ミゾテ・ホコ1・刃の一部残存	近代	木513	
S4	7	赤漆	161-278	E5	-	根目	6.4	4.5	0.6	-	-	木909	
S4	8	納漆	161-112	G10	-	根目	3.0	3.0	(2.4)	0.6	-	17C	木448
S4	9	納漆	-	C1 西	152-整地土 5	根目	(5.7)	5.7	3.1	0.4	貫通孔 1・端部穿孔あり	18C 後半~	木721
S4	10	納漆	151-108	B9	下層	根目	(5.5)	(2.7)	(5.0)	(0.8)	-	102-7-1	
S4	11	打明り	-	C1-D1	151-東北 TR-9	根目	8.7	3.0	(0.7)	一部炭化有・付着物有	-	木268	
S4	12	打明り	-	C1	151-整地土 3	根目	(7.3)	3.1	1.1	木釘 1	-	木636	
S4	13	納漆	151-28	D8	-	根目	8.0	(7.9)	8.0	(0.8)	貫通孔 1	18C 後半~	28-3-3

第26表 棺観察表

図版 種別	図種	出土地点		木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な 遺物の時期	木製品№		
		遺構番号	地区		層位	最大長	最大幅	最大厚					
S5	1	棺	152-2	C1	土層 1段目	みかん削出し	4.8	2.5	-	-	18C 後半~近代	木35	
S5	2	棺	152-2	B1-C1	墓室の 2	みかん削出し	4.8	3.3	-	-	-	木3	
S5	3	棺	152-2	C10	土層 2段目	みかん削出し	5.0	3.2	-	-	18C 後半~近代	木75	
S5	4	棺	152-166	B9-9	-	みかん削出し	5.35	3.5	-	-	18C 後半	木254	
S5	5	棺	151-4	C8	-	みかん削出し	5.2	3.5	3.3	-	~近代	4-4-1	
S5	6	棺	151-3	C7-C8	-	みかん削出し	5.3	2.9	3.1	-	~近代	3-17-1	
S5	7	棺	151-近代成土	C7	ゴミ層 2	みかん削出し	6.0	3.5	(3.3)	-	-	近代成土 27-1	
S5	8	棺	151-26	C8	4層	みかん削出し	7.5	2.85	1.8	-	~18C 後半	26-9-1	
S5	9	棺	151-26	C8	4層	みかん削出し	7.8	3.1	2.2	-	~18C 後半	26-9-2	
S5	10	棺	152-166	B9-9	-	みかん削出し	5.9	(4.1)	-	-	18C 後半	木255	
S5	11	棺	152-146	C1	-	みかん削出し	7.5	3.4	-	-	17C中	木191	
S5	12	棺	152-104	B9	-	みかん削出し	6.8	3.9	-	-	~18C 後半	木136	
S5	13	棺	152-2	B1	土層 1段目	みかん削出し	8.0	3.6	-	-	18C 後半~近代	木4	
S5	14	棺	161-117	H1	-	みかん削出し	8.6	3.05	3.2	-	17C	木568	
S5	15	棺	152-108	H1	2層	みかん削出し	4.7	3.5	-	-	19C	木103	
S5	16	棺	152-289	C1	-	みかん削出し	10.0	3.0	-	-	大きい	木622	
S5	17	棺	152-82	B7	井口内 1層	丸木	16.6	6.0	-	-	割大木加工	~近代	木152

第27表 櫛・刷毛・独楽・その他観察表

図版 番号	押印 番号	図種	出土地点			木取り	法量 (cm)			墨書 / 焼印	備考	出土遺物の主 な遺物の時期	木製品No	
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅					最大厚
56	1	櫛	152-2	C1	-	-	22.8	22.9	0.45	金(黄)文様有	黒色漆・黒6	17C～古代	本41	
56	2	櫛	152-2	C1	土層1(段目)	-	1.3	33.2	0.6	紫黒粘(櫛)・黄で文様上下通	18C後～近代	本40		
56	3	櫛	152-194	C1	-	-	3.6	33.4	0.95	-	黒1	～17C中	本336	
56	4	櫛	152-2	D1	土層1(段目)	横目	-	9.1	44.5	0.5	「人ね子装」	18C後～近代	本3	
56	5	刷毛	152-東塚	D9-9	152-法原	横目	-	12.15	2.3	0.6	-	毛硬口3	-	本733
56	6	漆塗り独楽	152-166	D8-9	-	横目	-	37.8	22.7	0.9	木釘4	18C後～	本232	
56	7	刷毛	152-166	D8-9	-	逆横目	-	15.2	3.25	0.85	厚唇丸部左・門	毛硬口3・両面墨書	17C	本287
56	8	刷毛	161-117	H1	-	逆横目	-	15.2	4.6	0.8	毛硬口上1・下3	17C	本822	
56	9	竹製刷毛	152-135	A1	152-豊地土3	みかん割開出し	-	19.3	9.2	1.3	両面下の両端に土釘附	～17C中	本164	
56	10	竹	161-117	H1	-	-	5.32	9.27	2.6	-	小編み織4列・断面欠損	17C	本980	
56	11	漆塗り刷	151-沢原 造敷土5	J5	TR12-22	横目	-	9.8	4.2	-	-	非色漆残	-	定体志成庫 25-1
56	12	独楽	152-2	C10	-	丸木割出し	4.0	-	4.3	3.6	輪孔径0.5cm・全周輪筋	17C～近代	本77	
56	13	独楽	151-108	J6	15	-	4.2	-	1.7	1.7	酸化・つまみ上部径0.75cm・下部径0.6cm	18C後～	106-16-1	
56	14	人形	-	B9	152-豊地土2	みかん割開出し	-	9.2	2.1	2.5	手足用の貫通孔2	-	本600	

第28表 指物等観察表

図版 番号	押印 番号	図種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺物の主 な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅			
57	1	指物	151-28	D6	下層	逆横目	3.6	6.2	1.0	全面黒色漆	18C後～	28-6-1
57	2	指物	151-28	D6	-	横目	3.2	6.6	1.0	全面黒色漆	18C後～	28-7-3
57	3	指物部材	151-3	C7-C8	-	横目	26.0	8.0	0.8	表面・黒色漆・裏面・非色漆・跡1	～近代	3-9-13-14
57	4	指物部材	151-28	D6	上層	横目	26.0	8.2	0.8	表面・非色漆・裏面・非色漆・跡1	18C後～	28-5-1
57	5	指物部材	161-117	H1	-	横目	12.3	14.1	0.5	非色漆・木釘穴有・縦筋有	近世	本400
57	6	指物部材	151-193	D9	-	横目	26.7	8.1	1.0	木釘穴3・ホゾ1	-	TR2-2-1
57	7	角材	151-28	D8	-	逆横目	26.0	3.0	2.7	側面貫通孔1	18C後～	28-2-2
57	8	指物部材	161-125	H1	-	横目	7.0	21.2	1.6	木釘3・ホゾ穴2	近世	本872
57	9	指物部材	151-3	C7-C8	-	横目	28.4	2.8	1.2	硬化物付着・一部炭化・木釘2・貫通孔1・ホゾ穴2	18C後～	3-9-5
57	10	角材	161-117	H1	-	横目	26.7	1.85	0.75	表面黒色漆・木釘穴3・木釘2	17C	本576
57	11	脚子	152-259	H1	下層(土層3面)	横目	36.4	2.7	1.2	ホゾ穴1.4cm・全周輪筋・ホゾ穴2	18C	本400
57	12	角材	151-28	D6	-	横目	38.6	3.1	1.9	ホゾ穴2・穿孔11(うち貫通2)	18C後～	28-2-10
57	13	指物部材	-	C1	152-豊地土5	横目	22.05	1.8	0.9	ホゾ穴2	-	本713
57	14	角材	151-28	D6	5層以下	横目	45.5	2.7	2.1	釘穴13(うち木釘3)・脚子の残(痕)有	18C後～	28-12-2

第29表 部材観察表

図版 番号	押印 番号	図種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺物の主 な遺物の時期	木製品No	
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚				
58	1	不明部材	152-149	C1	-	横目	20.6	11.2	4.1	薄肉半球状・貫通孔3・中央孔周辺 物等による墨痕	18C	本213	
58	2	不明部材	151-102	D6-B	26層	横目	9.8	0.7	0.8	両面黒色漆有・中央嵌り有	17C	102-8-3	
58	3	不明部材	151-TR12	15-3b	J6	-	横目	22.0	4.7	2.2	全体炭化・ホゾ穴2・ホゾ穴3	木釘1	-
58	4	不明部材	152-豊地土5	C1(南)	-	丸木	8.6	1.6	2.0	釘穴墨痕露出・自然剥離	-	本209	
58	5	不明部材	161-117	H1	-	横目	9.9	1.0	0.5	横穴・木釘1・表一部全面黒色漆	17C	本814	
58	6	不明部材	152-2	C1	-	横目	7.4	1.2	1.0	貫通孔3・木釘2	17C～近代	本45	
58	7	不明部材	152-2	B1	-	横目	8.2	3.7	0.5	釘穴3	17C～近代	本724	
58	8	不明部材	161-111	H1	-	横目	6.8	4.2	-	刺文字か	近世	本418	
58	9	角材	152-2	C10	-	-	13.3	0.7	0.7	-	17C～近代	本94	
58	10	不明部材	152-2北塚	C1	新込土	みかん割開出し	16.0	1.2	1.3	-	17C～近代	本62	
58	11	部材	152-166	D8-9	-	丸木割出し	20.4	1.3	1.3	-	18C後～	本273	
58	12	刀形	152-2	C10	-	横目	33.4	4.1	1.7	-	17C～近代	本95	
58	13	不明部材	152-2	C10	上層	横目	14.3	2.9	0.9	-	18C後～近代	本73	
58	14	不明部材	152-2	C1	埋土	横目	9.6	1.9	0.9	ホゾ穴3・底1割か	17C～近代	本70	
58	15	不明部材	152-224	J9-10-A10	-	みかん割開出し	8.8	1.3	1.3	横穴	～17C中	本347	

第4章 石製品

石製品は、発掘調査で確認したもののうち約490点を採取した。そのうち状態の良いもの168点(うち基石14点は写真図版に掲載)を図示した。多種多様の製品のほとんどが笏谷石とみられる凝灰岩により作られているが、ごく一部にその他の石材が適宜使用されている。以下、容器類、暖房・調理具等、日用品・その他(硯、砥石等)、石瓦・建材、石塔類の項目に分けて詳述する。

1 容器類(第59～63図 第30表 写真図版第46)

容器類は、表面を平撃で平滑に仕上げるものや丸撃もしくは鵝喙状の工具痕を残すものがあり、そのうち体部立ち上がりが直線的で体部長が底部の短辺や径の半分程度までのものを盤(第59・60図)、体部長が底部短辺や径の半分を超えるものを槽(第61図)、体部立ち上がりが緩やかに内湾するもの等を鉢(第62図1～7)とした。盤・槽の平面形は、おもに方形・円形系だが、洲浜形や扇面形等の特殊な形状になるものもある。これら容器類は、多くが一隅のみの破片となっており、分類の困難なものが多い。このほか、全体的に粗い成形のものや容器形のもは容器状製品(第63図)とした。

盤(59-1～7、60-1～3) ほとんどが小片となるが、平面形は方形(59-1・2・4～6)、円形(60-1～3)、洲浜形とみられるもの等(59-3・7)があり、概ね3もしくは4か所に脚が付く。脚の形状は様々だが、体部外面に隙間なく連続する筋状工具痕による塵状装飾を施すもの(59-1～3・5)は、脚を体部とは区別して立体的で多様な形状に削り出している。体部外面と一連となる脚(59-6・7、60-2・3)は、小さく装飾性が少ない。そのうち体部表面を平滑に仕上げるもの(59-7、60-2)には、表面の脚付根あたりに底面の位置にあわせた野書き線が残る。

比較的残りが良いのは円形(60-1～3)の方で、いずれも破片が足りないもの全容が窺える。60-1・2は底部中央以外の表面を平刃の工具により平滑に仕上げるが、60-3は平刃の工具による粗加工のみである。60-1は、内面のほぼ全体が焼けており、最終的にひで鉢として使用されたことが窺える。60-2は体部の一部が肥厚するが、機能は不明である。

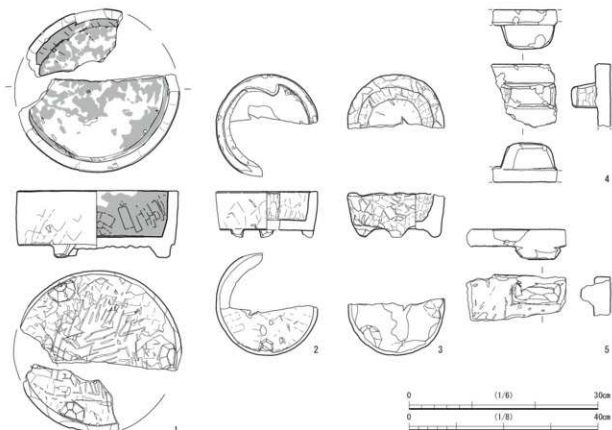
槽(61-1～10) ほとんどが小片であり、全容の窺えるものが少ない。平面形は、長方形または方形(1・2・4・6～9)が多く、ほかに扇面形(3・5)、円形(10)がある。また、ほとんどに脚が付く、体部外面と一連の脚と区別された脚があるが、どちらも小さく装飾性が少ない。

体部はいずれも平滑に仕上げられるが、8のみ各面の縁1.5cm程が平滑で、その内側をやや彫り窪めて塵状装飾が施される。8には一隅部分の口縁破片が残存しており、口縁の平滑部分が隅で交差するように外面に突起が付く。底のある容器ではあるが、外面の装飾と隅の突起から笏谷石裂の井桁石を組んだ状態を模したようである。4・5は体部内面に仕切りが付く。4は長方形の一隅を肥厚し、仕切りを付けて、扇面形の別区画を設ける。5は仕切られた区画部分しか残存しないが、本体の形状が扇面形だったようである。このような仕切りのある槽形容器は一定量出土するものの用途が不明瞭であるが、煙草盆としての利用が想像される。9は外面に把手が削り出される。残存部分は少ないが、両小口に把手が付く、体部がやや厚めの槽形容器である。なお、60-4・5も体部外面に削り出された把手であり、口縁部しか残存しないため盤・槽の区別が出来ない。61-10は平面形が円形で、60-1・2とはほぼ同様なつくりであるが、体部長が底面の半径を超える。

鉢(62-1～7) 体部が緩やかに内湾しつつ立ち上がるもの(1・3・5～7)のほか、直立気味に立ち上がるもの(2・4)がある。なお、1～4は大型品である。1は方形の各隅を面取り状に削り、



第59図 容器類①〔盤〕(縮尺1/6)



第60図 容器類②[円形盤・把手] (縮尺 1/6 1/8 : 1)

平面形が八角形ようになる。体部立ち上がりは急で、中程から口縁部まではほぼ直立となる。体部の内外は平滑に仕上げられ、外面から一連となる脚が付く。3は台付鉢だが、体部が欠損し残存しない。底部内面の状況から、体部は緩やかに立ち上がったものとみられる。台は底径約31cm・高さ約11cmで、外面は面取りされて平滑に仕上げられる。面取りの幅は約5cm(小)・約7cm(中)・約9cm(大)があり、中・大・中・小・中・大・中…と並ぶことから、大・小各3面と中6面が交互に配置されて一周したものと復元される。台の内面は比較的粗成形のままで筋状工具痕が残る。

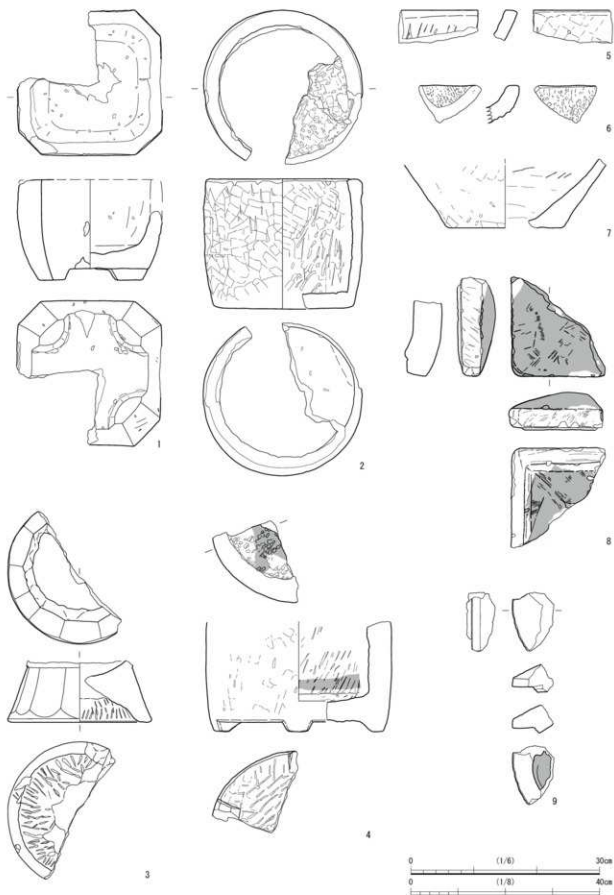
5・6は口縁端部の破片である。5は内外とも平滑に仕上げられており、内面には鶴喙状工具痕が残るが、掃り目として付けた可能性もある。6は花崗岩製であり、内外に成形時の工具痕が残るが、口縁端面は平滑に仕上げられる。7は底部から体部にかけての破片であり、底径約18.5cmに復元される。内外とも平滑に仕上げられる。底面に円孔の痕跡が残るため、植木鉢に転用したことが考えられる。

2は多くの破片が足りないが全容が窺える。体部・底部とも外面は平滑に仕上げるが、内面は鶴喙状工具痕が残る粗い成形となる。脚は確認されないが、底部の失われた部分に3つ脚があった可能性がある。4は底部から体部にかけての破片である。体部外面は平滑に仕上げるが、内面と底部は鶴喙状工具痕が残る粗い成形である。体部外面と一連となる脚が付く。

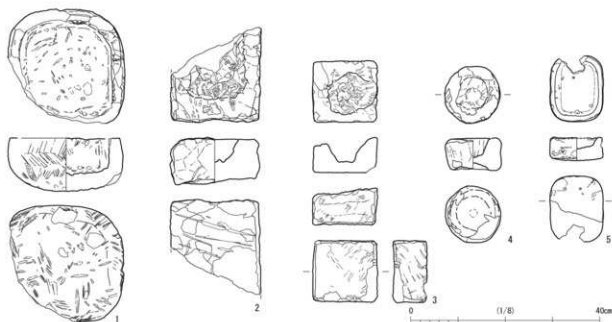
容器状製品 (63-1~5) いずれも容器形ではあるが、すべてが容器としての機能を果たしたかは疑わしい。1・3~5は表面を平滑に仕上げるが、2はやや成形が粗い。1は平面形が隅丸方形の鉢形で、内外面とも平滑に仕上げている。2・3は平面形が方形でやや偏平な石材の広い一面を粗く窪ませたものである。窪みの内側は鶴喙状工具痕が残る。底面は平底となる。4は平面形が円形で、上



第61圖 容器類③[槽] (縮尺1/6)



第62図 容器類④〔鉢・蓋〕(縮尺1/8:1~4 1/6:5~9)



第63図 容器類⑤〔容器状製品〕(縮尺1/8)

面から彫り窪ませるとともに、底面もやや浅めに窪ませる。5は平面形が隅丸長方形で、上面から同形に浅く彫り込む。底面は彫り込まず平底となる。

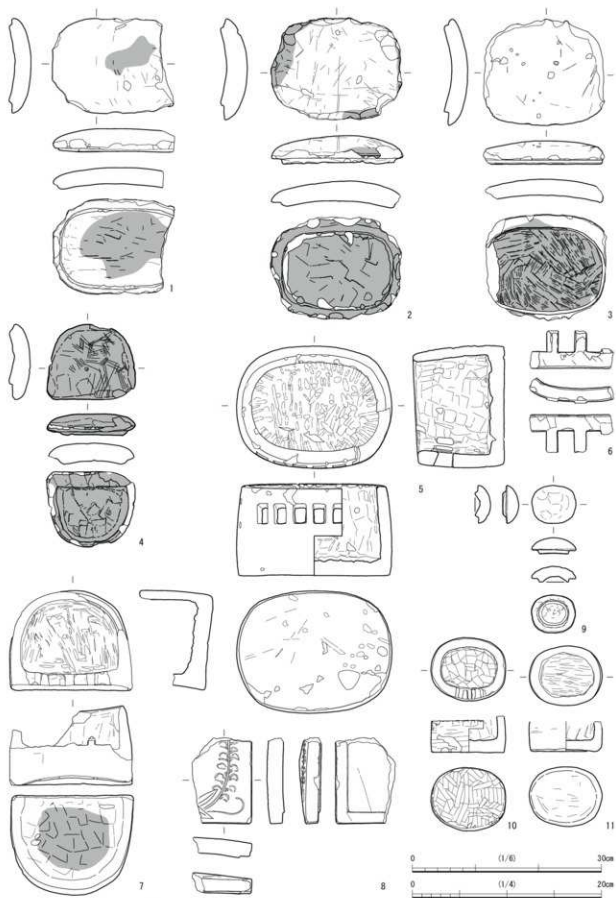
2 暖房・調理具等(第64～68図 第31表 写真図版第46・47)

暖房・調理具等として、行火、温石、風炉、竈、鍋掛重り、石臼、井戸関連遺物等を挙げた。

行火(64-1～7) 蓋と身からなる行火で、バンドコと呼ばれる。楕円型(1～3・5・6)とD型(4・7)が確認された。楕円型は平面形が楕円形で、体部がやや内湾気味に直立する。D型は平面形がD形で体部正面が平面となる。蓋(1～4)はいずれも全体に平滑にするが、内側になる面の仕上げがやや粗い。身(5～7)も外面は概ね平滑に仕上げ、体部内面はやや粗い仕上げだが、底部内面は仕上げが粗く鶏喙状の工具痕が残る。楕円型・D型とも体部正面に長方形の煙出しもしくは内部確認用の孔が窓のように並ぶ。また、ともに身の上部は開口しており、返しを削り出した蓋が付属する。ただし、今回はセット関係となるものは確認されていない。楕円型は平底の中央を緩やかに窪ませており、底の縁全体が接地する。D型は正面の縁のみ底面の中央と同じように削り、正面以外の縁が接地して脚のように見える。

行火に似た形状の小形品(64-9～11)と方形の蓋破片(64-8)がある。小形品は楕円型行火の小形品で、蓋(9)・身(10・11)とも装飾がない。蓋(9)はより小型で、表面の仕上げにやや粗さが残る。身(10・11)は内面にやや工具痕が残るが、全体に精緻で平滑に仕上げられている。方形の蓋破片(8)は、約1/3程度の破片だと思われるが、全体に丁寧に平滑に仕上げられており、上面の周縁に沿うように蔓の延びる植物の模様が線刻される。煙出し孔の存在は不明だが、失われた中央部に開口した可能性はある。8・10・11は、淡青緑色の良質な笏谷石で作られており、これまでに確認された類例(第146集 福井城跡-JR福井駅地点- 第173図1～8、第173集 福井城跡-えちぜん鉄道地点- 第85図5～8等)から、行火ではなく香炉と捉えておきたい。蓋(9)は実用的な寸法でなく、精製品でもないため、玩具的なミニチュア品の可能性が考えられる。

この他、やや大型の蓋(66-1、62-8・9)がある。66-1は一辺11cm以上のおそらく長方形で、



第64図 行火・香炉 (縮尺1/6:1~7 1/4:8~11)

上面に3.5cm×5cm以上の煙出し孔があり、上面の隅には稜線が通る。62-8は一辺14cm以上の方形で、上面隅に稜が立たない。62-9は小片だが、円形で復元径約30cmとみられる。いずれも全体に平滑に仕上げられており、下面には行火の蓋と同様な返しがり削り出される。また、返しの内側を中心に煤が付着しており、火鉢や火消し壺のようなものの蓋になることが考えられる。

温石 (66-2) 上部の大半を欠き、下端部みの破片である。

風炉 (66-5) 円形の脚が付いた底部から体部にかけての破片であり、全容は不明である。内外とも平整で仕上げているが、体部外面には連続する筋状工具痕による簾状装飾が施される。

竈 (66-3) 釜輪と焚口上部の破片である。釜輪の復元径が22cmの小型の移動式竈である。

鍋掛重り (66-4) 自在鉤等に吊った鍋のバランスをとるため、鍋の縁にかける重りである。猿の手の形状をしていることからサルと呼ばれる。

石臼 (65-1~7) 挽臼(1~6)と搗き臼とみられるもの(7)がある。1~3は粉挽臼白臼の破片である。いずれも使い込んで変形するが、特に3は磨り減っている。1は8分画7~8溝、2は8分画11~13溝で、3は播り目がほぼ消えている。4は粉挽臼白臼の破片である。播り目は8分画9溝である。5・6は茶臼白臼の破片である。5は播り面の破片であり、6は周縁の受け部の破片とみられる。7の搗き臼は、口縁部外形約40cm・内径約32cm、残存高約18cmで、体部下半を欠く。体部はやや内傾して直線的に立ち上がる。口縁部周辺や内面は、一部に鶴嘴状工具痕が残るものの概ね平滑に仕上げられる。しかし、外面は粗い成形で全体に鶴嘴状工具痕を残す。

流し (第67図) 現代の洗面台のような形状の製品で、流し部分の背後に方形の別区画が付属する。流しと方形部の間には高さ2cmほどの仕切りがあるが、仕切りの中ほど幅約5cmを削り落として、流し部分の水がすべて流れるように加工してあった。仕切り上方には、両側に板などを落とすための幅2cm前後の溝が彫られており、もともとは流し部分に水等を溜めることができたようだ。方形部の背後には6.0cm×7.5cmの排水孔が開く。また、方形部上端の、流し側から向かって左約3/5の部分が2.5~4.0cmほど低くなっており、仕切り付近にみられたのと同様な溝が彫られる。上澄みのみの排出を可能とする構造となっていたように思われるが、溝をどのように利用するのか判断しかねる。全体的に鶴嘴状工具痕が残る粗い成形であるが、流し部分の内面と口縁部周縁のみ平滑に仕上げる。ただし、平滑に仕上げた部分でも、組成形時の鶴嘴状工具痕がまばらに残る。

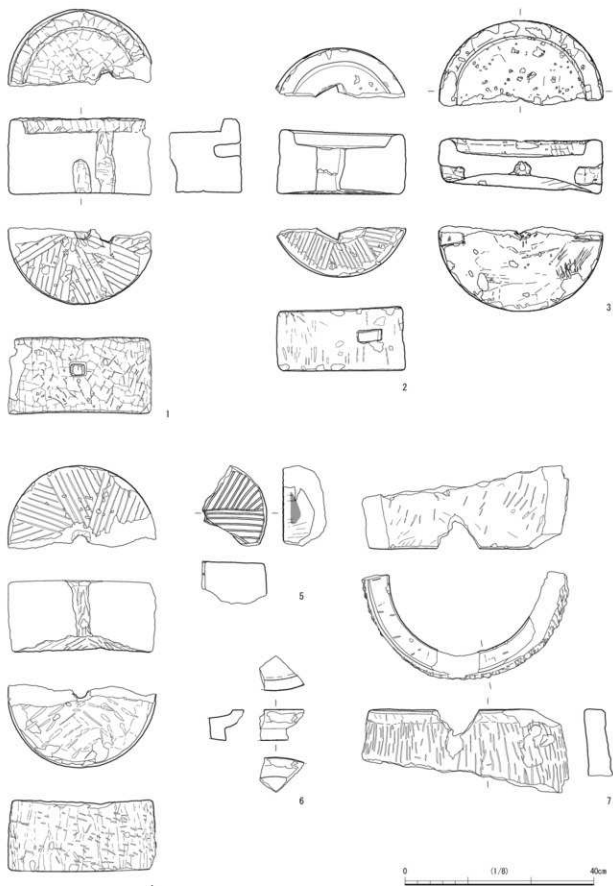
井戸関連遺物 (68-1~4) 1・2は井戸上部構造の井桁石である。井桁石は、木の角材を井桁状に組んで二段重ねにしたような通常の意匠であり、4枚を四角く組み合わせ使用。角材が交差したような突起が両側につくものと、突起の付かないものの各2枚からなる。1は突起部分のみの破片であり、2は突起の付かないものの完形品である。

3・4は円形に削り貫いた井戸側の破片であり、上端に印籠継手の継ぎ手が削り出される。外面はやや粗い成形で、継ぎ手や内面は平滑に仕上げられる。継ぎ手の突起部分は、3が小口の外面側、4が内面側に付く。ただし、4は破損後に再加工されており、継ぎ手の突起部分の大半を削り取っている。使用目的は不明ながら、継ぎ手部分の削り方から縄等の先端に括り付けて重石のようにしたことが考えられる。

3 日用品・その他 (第69~73図 第32・33表 写真図版第47・48)

硯、砥石、重石・重り、甕蓋、手水鉢、碁石等を日用品・その他の製品として括る。

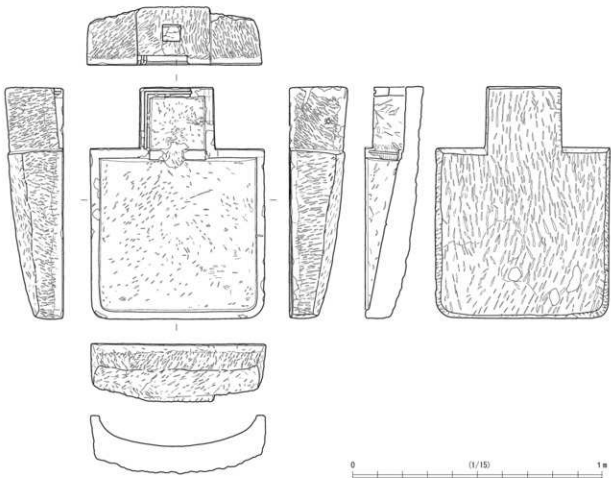
硯 (69-1~13) いずれも長方硯であり、四隅が角張るが、7のみ四隅が円くなる。墨池と陸を囲



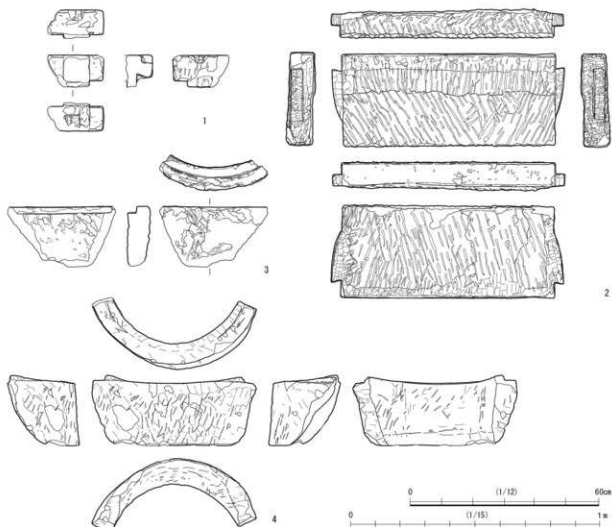
第 65 図 石臼 (縮尺 1/8)



第66図 暖房・調理具〔温石・竈・鍋掛重り・風炉等〕(縮尺1/6:1・5 1/4:2・4 1/8:3)



第67図 流し(縮尺1/15)



第68図 井戸関連遺物 (縮尺1/12 1/15:2)

む縁の内側の形状は、概ね隅丸長方形で、小型品(11・12・13)が長方形となる。その他、9は墨池付近の破片であるが、縁内側の形状が木瓜形ようになる。硯背は概ね平らだが、2・3・5には窪みや段差がある。2は硯背下半に隅丸長方形の緩やかな窪みが、3は硯背中央に縦長の長方形の浅い段差があり、5は硯背の両側側の縁8mm前後を残して墨池側から緩やかに窪んで陸側へ抜けて硯側に段差が付く。完形のもの長さは17.3～62cmでやや大型のものから小型品までである。そのうち、破損品の復元値を含めて、長さは13cm後半代にややまとまる。幅は8.4～2cmまであり、そのうち62～65cmのものも多く、掲載した硯の約半数が該当する。最小となる13は、一部欠損し、4cm以上×2cmである。

また、4・6には文字が、10には文字あるいは記号が線刻されている。4は硯背左下に判読困難な文字列の下に「硯」と線刻されており、所有者の氏名だと思われる。6は硯背中央に「上□□」とあり、左隣に小さく「高(はしごだか)」の上半が線刻されることから、おそらく「上高島(嶋)」だとみられ、近江の高島石をさした後刻である。10は1/4以下の破片であり、「乙」または「そ」が複数といくつかの交差する線がみえるが、線刻の全容は不明である。

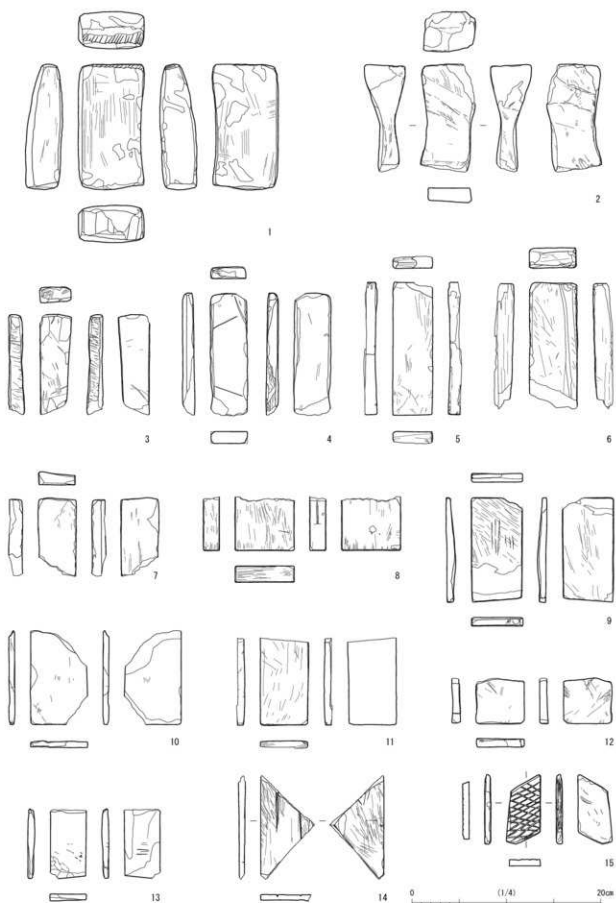
砥石(70-1～11・71-1～15・72-1～7) 砥石は、断面形が方形に近いもの(70-1・4・5)、断面形の短辺と長辺の長さの比が1:2以上の扁平なもの(71-3～15・72-1・2・4～6)、両者



第69図 硯 (縮尺1/4)



第70図 砥石①(縮尺1/4)



第71圖 砥石②(縮尺1/4)

の間の断面形が長方形になるもの(70-2・3・6~9・11、71-1・2、72-3)、断面形が台形となるもの(70-10)等がある。平面形は概ね棒状か板状であるが、使用により変形するものも多い。71-2は小口形状すなわち元の断面形が方形に近い長方形であるが、研ぎ耗して中央部が扁平な断面形となっている。72-1・2・4~6は使用により小型化したものである。また、70-5や70-9の小口、71-14には筋状の研ぎ跡が付き、71-15は片面に格子状の線刻が入る。そのほか、72-7はやや形を整えた自然石で、そのまま土間等に据えて使用したとみられる大型品である。

重石・重り(73-1~7) やや扁平な円形で中央に孔を穿つもの等を重石とした(1~6)。表面はおもに平盤でやや粗く仕上げられるが、1は全体に平滑な仕上げで、2は鶴嘴状工具による粗い成形である。4は整った形状で方形孔が開く。5は石製丸瓦の再加工品とみられる。6は中央孔がなく、周縁に筋状工具痕が残る。このほか、7は短い方柱形で、中央を少し抉る形状となる。組紐等の制作に使用する重り玉(槌の子)とみられる。

円盤型製品(73-8・9) 円盤形の用途不明品である。8は笏谷石裂である。9は粘板岩製の陸から落潮にかけての破片を加工したものであり、中央に円孔が開く。どちらも表面を平滑に仕上げられており、周縁には細かな工具痕が残る。

壺蓋(73-11) 復元径39cm・厚さ6cmで、壺の蓋として利用されたと考えられる。全体に平盤で仕上げられるが、粗成形時の鶴嘴状工具痕も一部残る。

手水鉢(73-12) 口縁部付近の破片である。口縁端部を印籠継状に削り出し、突出部分を玉縁状に整形する。残存する体部は内傾しており、おそらく全体の形状は球体に近い形が想像される。体部外面は鶴嘴状工具痕が覆い、内面は平滑に仕上げられるが粗成形時の鶴嘴状工具痕が残る。

碁石(写真図版第48 碁石1~14) 形状は真円に近いもの(10・11)もあるが、一部に歪な部分を残すものや歪なものが多い。真円に近い10・11は径215cm、厚さ4~5mmである。おもに粘板岩製の黒石であるが、色調の違うものや石材の異なるものがある。3は色調が黒いが、安山岩製のようにである。11は色調が淡く、12~14は淡黄灰色~淡灰色であり、白石の代用とされた可能性がある。

4 石瓦(第74図 第34表 写真図版第49)

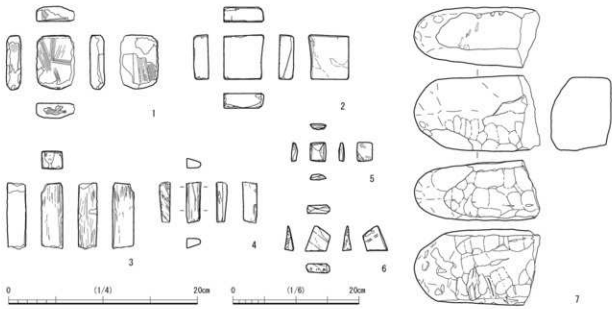
石瓦は、軒丸瓦(74-1)、丸瓦(74-2~4)、棟瓦(74-5~8)、その他の瓦(74-9・10)がある。いずれも表面を平刃の工具により平滑に仕上げられるが、一部に鶴嘴状工具痕が残存する。下面の彫り込み部分はおもに粗成形のままで、内側全体に鶴嘴状工具痕が残る。

軒丸瓦(74-1) 棟側の連結部を欠くが、釘掛孔の痕跡が認められる。瓦当は無紋で、本体に対してやや鋭角気味に付く。

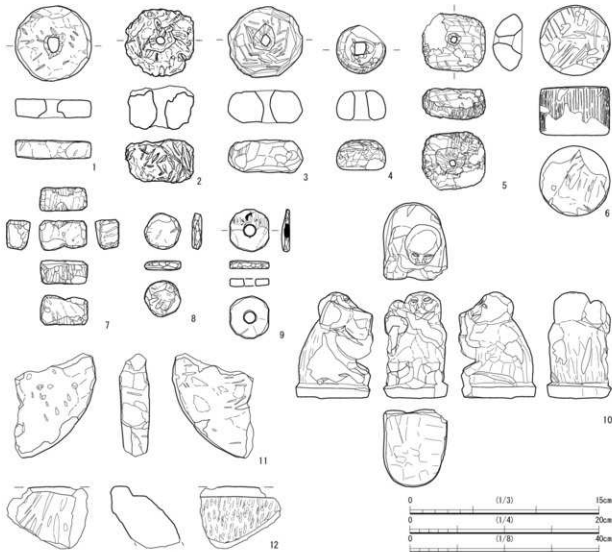
丸瓦(74-2~4) いずれも棟側の連結部付近の破片であり、瓦当の欠損した軒丸瓦との区別がつかない。しかし、下面に釘掛孔を持つ4は、軒丸瓦の一部だった可能性がある。連結突起の形状は、上面が比較的平らなもの(2)と上面中央に稜が付き山形になるもの(4)がある。

なお、軒丸瓦を含む丸瓦の幅は、126cm(4寸1分)、140~148cm(4寸6分~4寸9分)がある。

棟瓦(74-5~8) 5~7は角型、8は丸型で、角型には上面中央に稜が付く有稜式(7)と上面が滑らかな無稜式(5・6)がある。また、棟瓦は両側が連結部となるが、連結突起が上面側に削り出すのをオス側、連結面を削り込み突起が下面側となるのをメス側とする。5はメス側を欠き、オス側の連結突起も欠く。下面の彫り込み内に、平らに削り込んだ部分があり、他の建築部材等に組み合わせて固定したことが考えられる。6は、おそらくオス側を欠いた破片を、棟止瓦として加工したも



第72図 紙石③(縮尺1/4 1/6:7)



第73図 日用品・その他(縮尺1/8:1~7・11 1/4:8・9・12 1/3:10)



第74図 石瓦 (縮尺1/10)

のとみられる。破断面を平刃の工具により平らに仕上げている。7はオス側を欠く。左側側面を削り、上面角を丸く加工している。8は両連結部を平らに加工しており、側面に方形孔を穿つために、下面からも彫り窪めている。再加工して瓦以外の用途に使用したと考えられるが、用途不明である。

その他の瓦(74-9・10) 9は鳥袋の瓦当部分の破片とみられる。ただし、丸瓦等の連結突起を削り、再加工したものである。10は鬼板もしくは棟止瓦の破片とみられる。正面は、傷だらけとなるが、本来は無紋のようである。背面には棟石に連結するための柄穴状の削り込みがある。

5 建材(第75・76図 第34表 写真図版第49)

建材は、礎石(75-1~6)、敷居石(75-7)、石樋(76-1・2)等がある。そのうち、再加工品を含む礎石等の比較的小さな製品は概ね全体を平滑に仕上げているが、石樋等の大型品は使用時に露出して目につくところは平滑に仕上げるが、見えない部分は粗い成形のままとなる。

礎石(75-1~6) 2・5は、もともと礎石や東石として製作されたものと思われる。3もその可能性があると思われるが、柄穴の位置が中央にない。1は破損した石製の丸瓦か棟瓦を再加工したようである。4は礎石の可能性はあるが、用途不明である。6も本来の用途は不明だが、柄穴を穿ち礎石として再利用したようである。

石樋(76-1・2) 石樋は、外面が概ね粗い成形で、ほぼ全体に鶴嘴状工具痕が残る。内面にも鶴嘴状工具痕が残るが、体部外面の口縁部付近から内側は表面を平滑に仕上げている。

用途不明品(75-7・8 76-3・4) 75-7は、その形状から敷居石としたが、用途不明品である。類似するものに大安禅寺の千畳敷と呼ばれる歴代福井藩主墓所の門にみられる敷居があるが、その溝は1条である。75-8は、正面と上端は平刃の工具で平滑に仕上げるが、背面の仕上げはやや粗い。正面に5条以上の筋彫りがあり、筋彫り内を黒漆状のもので着色する。元の形状や寸法が不明だが、本丸石垣の土塀のように、建物等の腰板として使用したのかもしれない。76-3は、扁平な長方形で片側に継ぎ手があり、同様なものを組み合わせたと考えられる。76-4は、石製平瓦の形状であり、寸法比も同様である。ただし、約1.5倍の寸法であり、通常の製品とは異なる。

6 石塔類(第77図 第35表 写真図版第49)

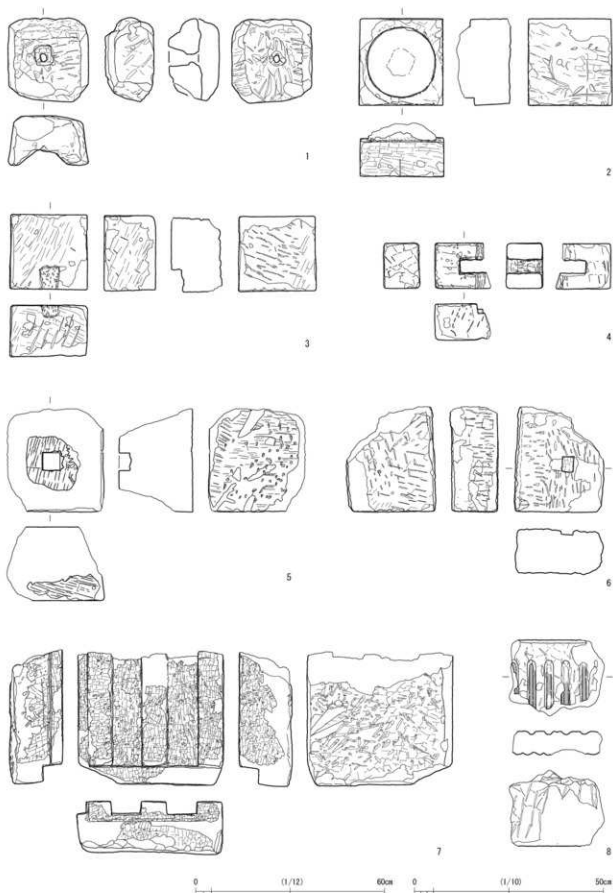
五輪塔や灯籠の一部とみられる破片、石仏、狛犬がある。

石塔類(77-1~4) 五輪塔各部(1~3)と、小型の基礎(4)がある。1・2は空風輪であり、ともに梵字や月輪は見られない。1は平刃の工具による整形痕が残る。2は全体に残存状態が悪い。3は大半を欠くが、正面に「地」の線刻文字が見え、地輪だと判断される。「地」の下の文字は破損のため不明である。左には「五月四日」と線刻される。上面から中ほどに及ぶ内削りがある。4は正面に横長の長方形を彫り込み、その中央を縦方向の2条の筋彫りで分割する。それ以外の装飾はない。

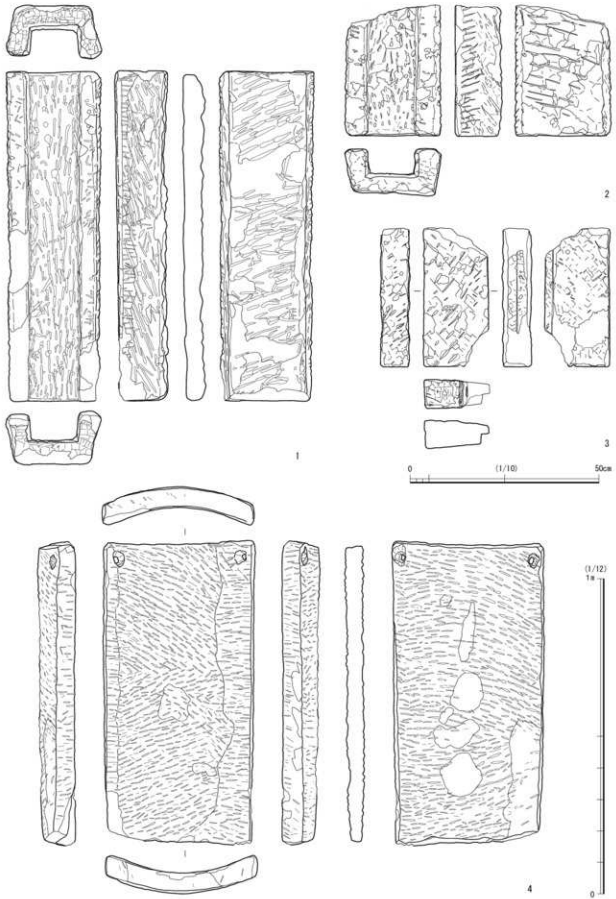
灯籠(77-5・6) 5は四角形の笠で、中央に円孔が貫通する。6はやや歪な円形の笠で、頂部に円形の隆起がある。ともに全体を平滑に仕上げるが、6は周縁に籠状装飾が施される。

狛犬(77-7) 小型の狛犬である。最小限の削り込みで手足や顔を表現する。髪表現はない。

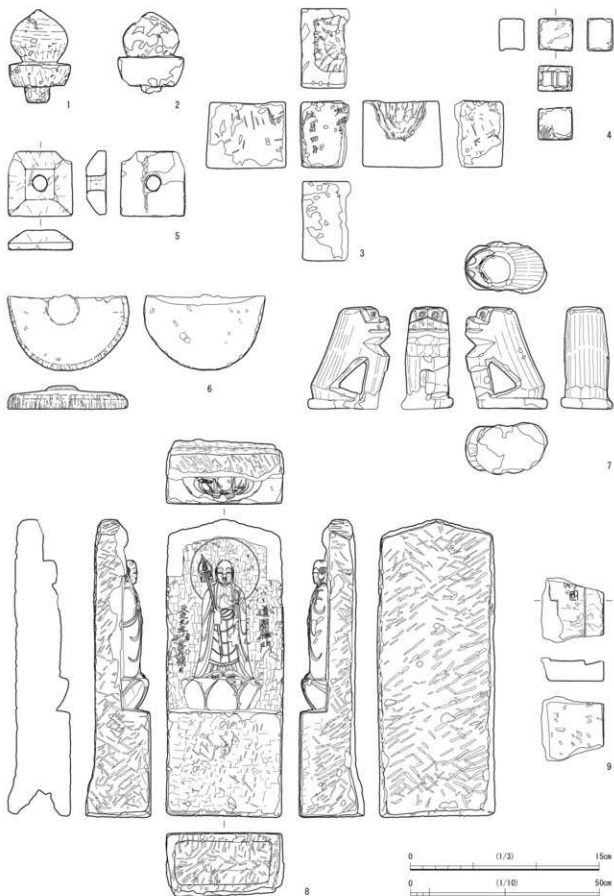
石仏(77-8・9) 8は蓮華座に立つ地藏菩薩が浮き彫りされる。右手に錫杖を持つ。左手は胸の前に伸ばすが、手首から先を欠く。おそらく掌に宝珠を載せていたと思われる。光背は円く筋彫りされる。右に「道□(圓か)禅門」、左に「天文九年庚子五月朔日」(1540年)と線刻される。9は、8と同様な石仏の破片とみられる。大部分を欠くため不明瞭だが、浮き彫りされた仏の足元から蓮華座にかけての部位となるようである。右には「回」のような線刻が見えるが判読できない。



第75図 建材〔礎石・敷居石等〕（縮尺1/10 1/12；7）



第76図 建材〔石樋等〕（縮尺1/10 1/12：4）



第77圖 石塔類〔石仏・狛犬等〕(縮尺1/10 1/3: 7)

第30表 容器類観察表

図面番号	検出番号	類別	出土地点		計測値 (cm)			(g)	備考	出土遺構の主な遺物の時期	石番号			
			地区	遺構番号	層位	縦	横					厚		
59	1	甕	Ⅱ		152-豊地土 2	(128)	(15.8)	14.0	3.0	1602	方形 附付 外面磨取表面	17C 前～	S152-327	
59	2	甕	Ⅱ	B5-6-Ⅱ		151-表土	(120)	(14.0)	9.0	1.7	740	方形 附付 外面磨取表面		S151-43
59	3	甕	C1	152-5	上面	(158)	(16.9)	9.8	3.7	1327	円筒? 附付 外面磨取表面	18C 後半～	S152-36	
59	4	甕	C1	152-2		(7.1)	(7.5)			2.1	148	方形 附付 外面磨取表面	17C～近代	S152-92
59	5	甕	A6		151-表土	(94)	(8.4)	(9.2)	2.0	454	方形 附付 外面磨取表面		S151-42	
59	6	甕	A9		152-豊地土 2	(7.6)	(10.3)	(6.2)	2.6	287	附付		S152-56	
59	7	甕	Ⅱ		152-豊地土 1	(200)	(24.8)	19.5	3.0	2994	西向き 附付		S152-229	
60	1	甕	C10	152-32	築3階床下	(34.5)	(33.1)	14.2	3.1	5162	円筒 附付	17C 前～	S152-274・275	
60	2	甕	B10		152-豊地土 5	(162)	(14.9)	7.4	1.5	674	円筒 附付 内側に突出部		S152-29	
60	3	甕	B10	152-77		(152)	(14.0)	7.0	1.8	553	円筒 附付	18C 後半～	S152-54	
60	4	磁土	Ⅱ		埋瓦	(10.1)	(10.5)	(6.4)	(2.25)	491	横? 方形		S152-41	
60	5	磁土	Ⅱ	151-107	3層	(2.3)	(15.7)			265	横? 方形	18C 後～	S151-63	
61	1	樽	D8	151-28		24.2	(19.5)	14.1		3550	方形 附付	18C 後～	S151-45	
61	2	樽	B10		152-豊地土 4	(112)	(15.0)	12.4	2.6	1035	方形 附付		S152-31	
61	3	樽	A9		152-豊地土 2	(7.6)	(9.0)	8.4	1.2	232	方形 附付	17C 前半	S152-55	
61	4	樽	Ⅱ		152-豊地土 2	(7.5)	(10.9)	5.85	1.6	320	方形 附付 出取あり		S152-49	
61	5	樽	Ⅱ		152-豊地土 2	(6.7)	(6.7)	(3.6)	1.8	94	方形 附付 出取あり		S152-53	
61	6	樽			151-排水溝	(6.75)	(9.5)	8.45	2.0	213	方形 附付		S151-41	
61	7	樽	Ⅱ		152-豊地土 2	(6.6)	10.2	4.8	1.0	193	方形 附付		S152-325	
61	8	樽	A6		151-TR17	(13.1)	(19.2)	(5.2)	1.5	481	非角石製 内底表面	S151-35・ 39・53		
61	9	樽	A10		152-豊地土 2	(11.7)	(10.7)	19.7	1.8	497	方形 磁土付		S152-27	
61	10	樽	D8	151-28	5層	(19.9)	(17.5)	19.5	1.9	945	円筒 附付	18C 後～	S151-48	
62	1	鉢	C8		151-表土	30.2	30.4	21.2	3.0	9450	方形 (八角形) 附付		S151-107	
62	2	鉢	C7-8	151-2		33.7	(29.5)	(27.4)	3.2	7067	円筒 半胴形	～近代	S151-46・47 ・119・121	
62	3	鉢	C8		151-表土		(30.4)	(12.8)	4.0	4800	台付鉢 台のみ		S151-139	
62	4	鉢	C1	152-38			(39.3)	(23.3)	4.1	3650	円筒 半胴形	18C 後～	S152-230	
62	5	鉢	B1	152-2	下層	(5.2)	(12.2)			1.9	303	円筒ののみ	17C～近代	S152-220
62	6	鉢	-		151-TR18 12	(5.9)	9.9		2.5	228	土師から体部		S151-86	
62	7	鉢	B1	152-2			(17.8)	(10.9)	5.0	1164	横木跡に取用	17C～近代	S152-40	
63	1	容器状 製品	Ⅱ		152-豊地土 2	18.1	18.5	8.4	2.5	1480	隅丸方形		S152-324	
63	2	容器状 製品	A10		152-豊地土 2	(15.0)	13.7	6.9	3.5	1425	長方形		S152-39	
63	3	容器状 製品	C1	152-表土		10.2	9.7	5.7	3.0	707	方形		S152-45	
63	4	容器状 製品	C4	161-20		7.5	7.0	5.0	2.5	363	円筒 下底内側	～18C 後	S161-16	
63	5	容器状 製品	B10	152-281		(10.4)	8.4	3.7	1.8	303	隅丸長方形 (角付)	17C 前	S152-329	

第31表 暖房・調理具等観察表

図面番号	検出番号	類別	出土地点		計測値 (cm)			(g)	備考	出土遺構の主な遺物の時期	石番号		
			地区	遺構番号	層位	縦	横					厚	
64	1	行火 (蓋)	Ⅱ	152-32	築3階床下	(18.8)	(15.1)	(3.7)	2.5	1083.0	O型 蓋1付	17C 前～	S152-242
64	2	行火 (蓋)	Ⅱ	152-277		16.2	20.8	4.5	3.3	1324.0	O型 蓋1付	～18C 前	S152-238
64	3	行火 (蓋)	C1	152-292		16.9	(19.2)	3.7	2.5	1043.0	O型 蓋1付	17C 前	S152-443
64	4	行火 (蓋)	B-Ⅱ10	151-5		11.95	14.05		3.3	519.0	O型 蓋1付	～18C 中	S151-127
64	5	行火 (身)	Ⅱ		152-埋瓦	19.5	24.6	14.6	(2.4)	3470.0	O型		S152-265
64	6	行火 (身)	Ⅱ		151-豊地土	(1.8)	(13.3)	(6.05)		152.0	O型 脚部・行り足部分		S151-52
64	7	行火 (身)	C1		152-豊地土 3	15.9	19.5	(12.6)	(2.6)	1942.0	D型		S152-442
64	8	香炉 (蓋)	C1	152-2		9.1	6.2	2.3	2.2	148.19	方形 縦筋付 (蓋表面飾)	上層: 18 後～ 下層: 17C～	S152-87
64	9	香炉 (蓋)	D4		161-表土	4	4.65	1.7	(1.1)	2384	小型 O型行火形 土器 7号		S161-15
64	10	香炉 (身)	B8-9	152-166		6.7	7.9	3.85	0.8	205.31	小型 O型行火形	18C 後半～	S152-57
64	11	香炉 (身)	C8		151-TR10	6.3	7.8	(3.15)	(0.6)	130.09	小型 O型行火形		S151-125
66	1	蓋	B1	152-2	上面	(12.6)	(11.3)	4.2	2.7	506.0	方形 脚部上・蓋1付	18 後～近代	S152-272
62	8	蓋	C7		151-豊地土	15.5	14.8		6.3	1073.0	方形 蓋1付		S151-57
62	9	蓋	A6		151-豊地土	9.4	6.6	(4.5)	2.5	196.0	方形 蓋1付 底径約 30cm		S151-85
66	2	蓋石			151-豊地土	(5.85)	6.05		1.55	114.41	下部破片		S151-21
66	3	蓋	Ⅱ		151-排水溝	(15.4)	(13.6)	(14.1)	6.0	2005.0	部輪一欠片		S151-69
66	4	網罟蓋り	A9		152-豊地土 2	3.25	10.5	4.0	139.49	平丸		S152-306	

第4章 石製品

図面 番号	種類	出土地点			計測値 (m)				(g)	備考	出土遺構の主な 遺物の時期	石番号	
		地区	遺構番号	層位	縦	横	高	厚					重
60	5	菅沼(風車)	-	151-T85 3層	12.5	11.0	6.3		5550	外面磨崖面		S151-40	
65	1	舟橋門	J10	152-整地土 3	(16.2)	(30.5)	16.4		10500.0	上付 瓶孔・罫入・肥牛孔 89層付～90層	17C 後半	S152-77	
65	2	舟橋門	G6	152-瓶孔	(10.5)	(27.2)	13.7		5436.0	上付 罫入・肥牛孔 89層付 11～13層 毛面磨崖面		S152-76	
65	3	舟橋門	D8	151-28	(18.2)	34.7	11.7		6213.0	上付 瓶孔・肥牛孔	18C 後半～	S151-135	
65	4	舟橋門	B10	152-319	(17.6)	33.3	15.1		6300.0	下付 9分磨崖面	17C 前	S152-75	
65	5	船行	8	151-T818 17層	(17.1)	(33.7)	19.3		7266.0	下付 瓶孔 石面磨崖面		S151-198	
65	6	船行	8	152-整地土 2	8.9	5.5	16.6	2.4	347.7	下付 受盤面		S152-80	
65	7	船行	C1	152-86	152-整地土 2	(41.0)	(17.5)	5.1	6300.0	口押形直方	18C 後半～	S152-70-T1	
67		滅し	C1	152-42	92.0	69.4	23.2	7.5	12045.0	滅し 舟水庫南付	18C 後半～	S152-303	
68	1	舟橋石	J6	151-TR19 2層	(10.4)	(18.1)		(9.1)	1854.0	発掘部分のない横 変形		S151-140	
68	2	舟橋石	C8	151-3	井戸石面内	37.0	92.2		100	52500.0	発掘部分のない横 変形		S151-153
68	3	舟戸欄	C1	152-整地土 1	(19.6)	(34.2)		7.5	5300.0	凹形罫り貫き式 印痕跡が物 取部分にのみ残る		S152-73	
68	4	舟戸欄	J5	151-排水溝	(22.2)	52.2		8.6	9900.0	凹形罫り貫き式 印痕跡が物 取部分にのみ残る		S151-103	

第32表 礎・砥石観察表

図面 番号	種類	出土地点			計測値 (m)				(g)	備考	出土遺構の主な 遺物の時期	石番号	
		地区	遺構番号	層位	長・縦	横	高	厚					重
69	1	礎	舟	表土	2層	(15.9)	8.2	2.81	593.0			S151-111	
69	2	礎	J8-9	152-166		17.25	6.15	2.2	402.5		18C 後半～	S152-167	
69	3	礎	A10		152-整地土 3	(13.0)	6.12	2.19	276.44			S152-186	
69	4	礎	C1		152-整地土 3	13.75	6.65	1.35	172.7	縦形(文字) 惣括欄 所有者氏名	17C 後半	S152-188	
69	5	礎	C1		152-整地土 3	13.6	6.17	1.37	1029.93		17C 後半	S152-185	
69	6	礎	J9	152-157		12.88	7.3	1.84	206.11	縦形(文字)「上工」(高瀬川)	18C 後半～	S152-406	
69	7	礎	G-107	152-154		10.52	6.33	(1.1)	132.23		18C 後半～	S152-407	
69	8	礎	16	151-121		12.0	5.29	1.54	157.87		18C 中～	S151-110	
69	9	礎	J9		152-整地土 2	(6.15)	6.45	1.7	61.06			S152-194	
69	10	礎	J9		152-整地土 3	(5.5)	(2.98)	1.2	24.88	縦形(文字または記号) 「乙」または「全」全字	17C 後半	S152-196	
69	11	礎	C8		151-TR10	6.6	2.8	0.6	19.78			S151-24	
69	12	礎	A10		152-整地土 5	6.11	2.34	0.5	16.26			S152-191	
69	13	礎	D4	161-1		(4.0)	2.05	0.5	6.22		19C	S161-12	
70	1	砥石	P9		古代以降の磨崖土	15.7	3.2	2.7	217.0			S151-7	
70	2	砥石	A10	152-236		14.2	5.2	4.5	525.0		近代	S152-353	
70	3	砥石	B10		152-整地土 5	20.9	4.5	3.4	342.0			S152-30	
70	4	砥石	J9		152-整地土 3	5.0	11.8	3.8	355.0		17C 後半	S152-138	
70	5	砥石		地点不明		(10.18)	7.5	6.9	745.0			S152-126	
70	6	砥石	A6-7		表土	10.07	4.4	3.8	251.0			S151-10	
70	7	砥石	C3		出倉層	8.9	3.85	3.25	157.98	角柱状		S161-1	
70	8	砥石		151-TR19 32層		8.9	2.7	1.8	86.0			S151-147	
70	9	砥石	C1		152-整地土 3	(9.7)	4.65	3.7	298.0	角柱状	17C 後半	S152-124	
70	10	砥石	C1	152-68		(9.8)	4.4	2.8	113.84		18C 後半～	S152-97	
70	11	砥石	A9	152-266		(9.2)	3.73	2.47	133.0		～17C 中	S152-113	
71	1	砥石	J10		152-整地土 3	13.25	6.9	3.9	587.0		17C 後半	S152-127	
71	2	砥石	J10		152-整地土 3	11.3	5.8	4.3	254.0		17C 後半	S152-123	
71	3	砥石	B1		152-整地土 4	(10.55)	3.3	1.7	87.59		17C 前半	S152-379	
71	4	砥石	J9	152-32		第3砂面下	12.9	3.9	1.25	120.56		17C 前～	S152-395
71	5	砥石	A10		152-整地土 3	14.1	4.2	1.5	136.47		17C 後半	S152-101	
71	6	砥石	J9		152-整地土 2	(13.3)	5.1	2.0	248.12	瓶状		S152-125	
71	7	砥石	B1		152-整地土 4	(8.3)	4.0	1.4	74.79		17C 前半	S152-362	
71	8	砥石	J8-9	152-166		5.7	6.25	1.7	108.0	瓶状	18C 後半～	S152-21	
71	9	砥石	J9		152-整地土 3	11.0	5.3	0.85	100.0	瓶状	17C 後半	S152-109	
71	10	砥石	B1		152-整地土 4	(9.0)	6.0	0.7	70.91		17C 前半	S152-378	
71	11	砥石	J10		152-整地土 3	(9.2)	5.1	0.8	72.12		17C 後半	S152-100	
71	12	砥石	J6		表土	(4.8)	5.1	0.8	43.67			S151-13	
71	13	砥石	J9		152-整地土 2	(7.3)	3.8	0.8	43.0	瓶状		S152-106	
71	14	砥石	B1		152-整地土 1	10.9	5.7	0.7	42.83	瓶状 磨研石		S152-105	
71	15	砥石	B1	152-305		黒色層	7.2	3.5	0.68	27.98	瓶状 磨研石	～17C 中	S152-405
72	1	砥石	J9	152-210		5.7	4.0	1.5	52.61		～17C 中	S152-362	
72	2	砥石	C1	(151-2)		瓶状	6.7	4.25	1.35	67.74			S152-453
72	3	砥石	B10	152-281		(6.9)	2.2	1.9	60.0	角柱状	17C 前	S152-128	
72	4	砥石	表土			瓶状	(4.3)	(1.5)	1.1	10.29	瓶状		S161-4
72	5	砥石	J9	152-32		第2砂面下	2.0	1.65	0.65	2.15		17C 前～	S152-134
72	6	砥石	8		152-整地土 2	(26.3)	2.98	0.9	5.36			S152-153	
72	7	砥石	P9-10	151-300		(19.9)	12.0	9.5	3038.0	大型 ほぼ自然石のまま	～17C 中	S151-134	

第33表 日用品・その他観察表

図面 番号	種別	出土地点		計測値 (cm)					(g)	備考	出土遺構の主な 遺物の時期	石番号	
		地区	遺構番号	層位	長・縦	横・横	高	厚					重
73	1	赤石	G7	152-惣地土1	16.0	15.9	3.8		1319.0	環状		S152-290	
73	2	赤石	C1	152-惣地土1	14.4	14.5	9.2		1881.0	環状		S152-293	
73	3	赤石	B10	152-惣地土5	16.1	15.1	6.8		2075.0	環状		S152-292	
73	4	赤石	A19	152-135	10.2	10.2	6.1		636.0	方形板 方形瓦	～18C中	S152-309	
73	5	赤石	B8	152-惣地土2	13.3	12.3	6.6		1083.0	石瓦か板瓦		S152-278	
73	6	赤石	B9	152-364	14.8	14.8	10.2		3333.0	瓶・円筒形		S152-297	
73	7	楕円子	B10	152-2	上層	10.0	6.3	5.0	1.0	480.0	環状	18C後～近代	S152-298
73	8	不明品	C8	表土	3.8	3.8			16.73	円筒状		S151-112	
73	9	不明品	-	151-惣地土	4.1	4.3		0.8	21.61	円筒状 円瓦		S151-145	
73	10	丸型	E10	151-5		5.9	5.1	8.2	237.16	蓋土の蓋	～18C中	S151-31	
73	11	蓋	C8	151-3	右側内5層以下	(224.0)	(17.1)		6.3	2350.0	1/4程度	～近代	S151-61
73	12	手水鉢	D8	151-28	(8.5)	(6.5)	(7.0)		4.5	251.0	山崎部産片	18C後～	S151-33
図版集3	1	赤石	D8	151-101		2.14	2.19		0.4	2.81	板瓦片 黒	17C～18C前	S151-28
図版集3	2	赤石	B7	151-7	11層	2.1	2.4		0.6	5.24	板瓦片 黒	18C～	S151-113
図版集3	3	赤石	B7	151-7	11層	2.08	2.33		0.888	6.24	山崎川(黒)	18C～	S151-114
図版集3	4	赤石	B6	151-106		1.68	1.98		0.611	3.08	板瓦片 黒	18C後～	S151-116
図版集3	5	赤石	C1	152-惣地土2	2.38	1.99			0.59	4.13	板瓦片 黒	18C後～	S152-179
図版集3	6	赤石	D1	152-惣地土3	1.8	2.4		0.6	4.34	板瓦片 黒	17C後半	S152-181	
図版集3	7	赤石	J10	152-277		2.1	2.2		0.5	4.52	板瓦片 黒	17C	S152-302
図版集3	8	赤石	B10	152-236		2.2	2.2		0.6	5.27	板瓦片 黒	18C後～	S152-435
図版集3	9	赤石	A10		152-惣地土3	2.16	1.88		0.48	3.00	板瓦片 黒	17C後半	S152-180
図版集3	10	赤石	B10		表土	2.16	2.18		0.52	3.90	板瓦片 黒		S151-111
図版集3	11	赤石	B1-10	152-3		2.13	2.2		0.42	3.21	(白)	～近代	S152-454
図版集3	12	赤石	D9		表土	2.22	2.05		0.51	3.65	板瓦片(白)		S151-115
図版集3	13	赤石	D1		板瓦	2.3	2.51		0.41	4.01	板瓦片(白)		S152-178
図版集3	14	赤石	J9	152-288		1.7	2.0		0.75	3.61	瓦板片(白)	(古)	S152-436

第34表 石瓦・建材等観察表

図面 番号	種別	出土地点		計測値 (cm)					(g)	備考	出土遺構の主な 遺物の時期	石番号	
		地区	遺構番号	層位	長・縦	横・横	高・厚	重					
74	1	軒瓦	B10	152-惣地土1	47.83	14.0	13.5	77.50		環状部欠損		S152-277-285	
74	2	丸瓦		表土	28.85	14.8	11.0	40.93		軒瓦欠損		S152-289	
74	3	丸瓦	C10		板瓦	(24.4)	(26.9)	(9.2)	26.64	両端欠損		S152-287	
74	4	丸瓦	B5	151-排水溝	(19.4)	14.4	13.4	37.70		軒瓦欠損		S151-1	
74	5	棟瓦	C7-8	151-3		38.00	15.6	(11.8)	83.50	典型無様式 両端欠損	～近代	S151-3	
74	6	棟瓦	B8	151-惣地土	20.3	13.2	9.0	25.34		典型無様式 両端欠損		S151-2	
74	7	棟瓦	B10	152-81	152-惣地土2	(80.0)	12.8	9.0	27.38		典型石積式	18C後半～	S152-290
74	8	棟瓦	E9	152-787		34.7	22.2	15.6	18.50	典型 無様式	無用瓦片?	S151-106	
74	9	鳥衣	C10	152-2		16.80	14.8	8.8	17.43	溝筋部欠損		S152-281	
74	10	鳥衣	D-E8		表土	(18.8)	(14.4)	9.1	18.75	板状		S151-64	
75	1	礎石・東石	B1	152-108	上層	22.2	21.4	13.0	60.48	隅瓦か5枚用	18C	S152-291	
75	2	礎石・東石	C1	152-2	上層	22.9	22.2	14.2	103.00	方形 上部半影	18C後～近代	S152-69	
75	3	礎石・東石	B1	152-2	上層	20.4	19.9	13.7	100.08	方形 隅半	18C後～近代	S152-60	
75	4	礎石・東石	15-10-J5		表土	(14.7)	(2.0)	9.7	22.97	板瓦片		S151-65	
75	5	礎石・東石	C1	152-2	上層	(27.2)	(25.6)	19.5	156.00	方形 隅状	18C後～近代	S152-68	
75	6	礎石・東石	B10	152-3	上層	(27.8)	(23.6)	(12.8)	11.87	方形 隅状 転用品	18C後半～	S152-81	
75	7	礎石			表土	(42.6)	(46.4)	17.1	42.750	溝2条 大平欠損?		S152-304	
75	8	不明製品	B1	152-81	152-惣地土2	(20.0)	(25.1)	6.4	47.20	環状・礎石?	18C後半～	S152-83	
75	1	石礎	C8		表土	87.4	25.1	14.4	27.50			S151-152	
75	2	石礎	C7-8	151-3		(34.5)	25.5	12.5	11.000		18C後半～	S151-62	
75	3	不明製品	B-F9		礎石	(36.7)	17.2	7.8	61.29	山崎部産片のソコ		S151-136	
75	4	不明製品	C6		表土	96.6	48.4	12.1	46.250	平瓦片 1.5厚欠		S151-154	

第35表 石塔・灯笼等観察表

図面 番号	種別	出土地点		計測値 (cm)					(g)	備考	出土遺構の主な 遺物の時期	石番号	
		地区	遺構番号	層位	縦・奥行	横・横	高・厚	重					
77	1	空風編	C10	152-2	水跡層	最大径	15.7	24.6	51.23			17C～近代	S152-85
77	2	空風編	C10	152-2	北側表土	最大径	17.4	(21.48)	45.25			17C～近代	S152-84
77	3	風鈴	A-J6	151-160	151-J61-6層	21.1	(12.8)	17.4	62.77		瓶口? (3月4日)	18C～	S151-59
77	4	風鈴	B7	151-惣地土		8.5	9.1	6.7	87.0		方形の瓶口のみと2枚の縦筋		S151-58
77	5	灯笼(笠)	A10		152-板瓦	17.0	17.2	5.1	196.0		方形 円瓦 小型		S152-86
77	6	灯笼(笠)	C8	151-3	右側内7層目	(20.0)	(32.5)	6.1	404.3		2枚の縦筋 蓋部段状	～近代	S151-118
77	7	釘欠	J-A10	(152-223)表	152-惣地土3-4	6.5	4.1	8.2	150		小型 表面磨蝕	～17C中	S152-177
77	8	石仏	C10	152-184		14.0	24.0	63.0	494.50		龍蔵「蓮」(横欠) 佛片 「天文九年(永享)五月朔日」 (164年)	18C	S152-305
77	9	石仏	E10	151-33		(17.1)	(16.3)	(6.2)	2032		龍蔵足元-龍草草	17C	S151-68

第5章 金属製品

金属製品は、発掘調査で確認したもののうち約760点を採取した。そのうち状態の良好なもの278点を図示した。以下、金属製品を武器器具類、生産具類、日用品、調度品・その他、銭貨の5つの項目に分ける。その他、鑄造関連遺物も節を分けてここで扱う。

第1節 金属製品

1 武器器具類 (第78図 第36表 写真図版第50)

刀装具〔緑(78-1)、切羽(78-2~4・11)、鏝(78-5~7)、鐔(78-8~10・12)、小柄小刀(78-13~18)〕、小札(78-19)、鎌(78-20)、弾丸(78-21~26)を図示した。

刀装具(78-1~18) 緑(1)は、周りに1条の沈線が巡る。切羽(2~4)は、いずれも周縁に「こきざみ」が施される。11は鉛製のミニチュアであるが、あるいは鐔を模した可能性もある。鏝(5~7)は、いずれも一重鏝だが形状や厚さがそれぞれ異なる。5は厚さ1mmと薄く、片側の貝先と刃方を欠く。残る貝先の表面には複数の直線による菱形が連続して線刻される。6は呑込みと呼ばれる閘のあたる切り欠き部分がない。7は厚さ3mmと厚めで、両側の貝先表面にそれぞれ1条の太めの沈線が彫られる。鐔(8~10・12)は、8が透鐔で小柄穴のみ開き、9が丸形で茎穴の両側に大きな楕円形の穴が開く。10は丸形の太刀鐔で無紋であるが、籃様の工具で切断されており、鉄素材として再利用されたと考えられる。12は木瓜形鐔を模した鉛製のミニチュアである。斧穴とみられる猪目形の穴が開く。表にS形模様4つ、裏に連続する粒状の隆起が鑄出される。小柄小刀(13~18)は、14・17以外刀身を失い小柄のみとなる。13は表面が薄く剥離し、模様不明である。14は研ぎ耗した刃部が錆びつづ辛うじて残る。小柄は対角線で区切った三角形の中に蔓を持つ植物を彫り出し、周囲を魚々子で埋める。15は小柄両端に猪目形の透かしのある鋸金具、中央に花卉5枚の花が浮き彫りにされ、花の両側には蔓が表現されていた痕跡が残る。16は状態が悪いが蔓状の線刻が残る。17の小柄には、波や渦の見られる水辺表現に、3匹の蟹と肩に柄の長い3本刃の鎌を担ぐ人(あるいは猿)、持ち手付の容器や波模様等を配置し、すき間に魚々子を充填する。18はほぼ全面に横線が削り出されるが、等間隔に3ヵ所で2条ずつ太くなる。その太い横線で区切られた一区画は無紋となり、蚯蚓意匠にみえる。無紋の区画にある円内の模様は五三桐紋のようである。

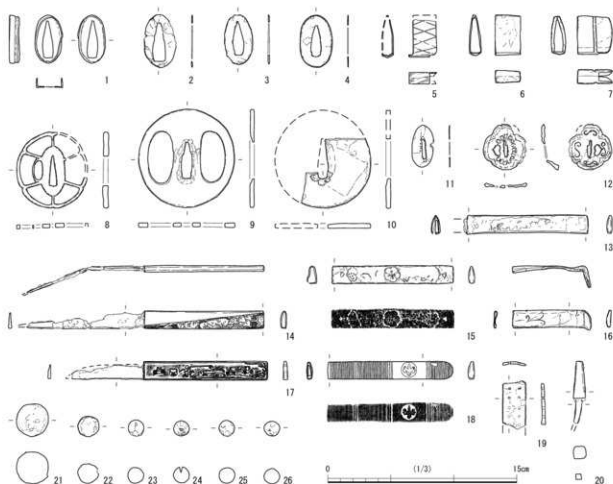
小札(78-19) 半分欠損した甲冑の部品である。

鎌(78-20) 盾割の鎌である。茎を欠損する。

弾丸(78-21~26) 22が鉄製である以外は鉛製で概ね球形である。21が径約2.6cm、22が径約1.7cm、その他は径1.25cm前後であり、21が口径三十匁の大筒、22が口径八匁、他が口径四匁でこれらは中筒の弾丸になるとみられる。重さは、21が二十四匁である他は概ね二匁五分~二匁八分だが、26だけ二匁二分八厘と軽い。

2 生産具類 (第79・80図 第37表 写真図版第51・52)

生産具類として、工具類〔巻頭釘(大巻釘)(79-1~35)、頭巻釘(小巻釘)(79-36~40)、折れ合釘(79-43)、環状釘(79-44~46)、皆折釘(79-47~49)、金槌(79-50)、鋸(79-51~55)、鑿(80-1・2)、小刀(80-3)、錐(80-4)、鋤(80-5)、吊鈎(80-6~9)、鋸(80-14~17)、楔矢(80-19・20)〕、農具類〔鋤先金具(80-10~12)、斧(80-18)、手鋸(80-13)〕、漁具〔鎌(80-



第78図 武器武具(縮尺1/3)

21・22)、箆(80-23)]等を図示した。

釘(79-1～49) 卷頭釘(大卷釘)(79-1～35)、頭卷釘(小卷釘)(79-36～40)、折れ合釘(79-43)、環状釘(79-44～46)、皆折釘(79-47～49)があり、この他に頭部が欠損し周りに木質が付着する41・42がある。なお、頭幅と身幅の比率が2.5:1以上のものを卷頭釘とし、これより頭幅の比率差が小さいものを頭卷釘とした。卷頭釘・頭卷釘は上端を团扇状に薄く平らに成形し、それを巻くようにして頭とする。43は両先端の合釘であり、胴部が106度に折れる。環状釘は、素材の鉄を折り曲げて合わせて身とし、折り曲げた部分を頭として環状に成形する。46は成形後さらに胴部をひねって固定する。皆折釘(貝折釘・替折釘)は身の上端を大きく折り曲げて頭とする。47～49はいずれも全長10cmを超える。

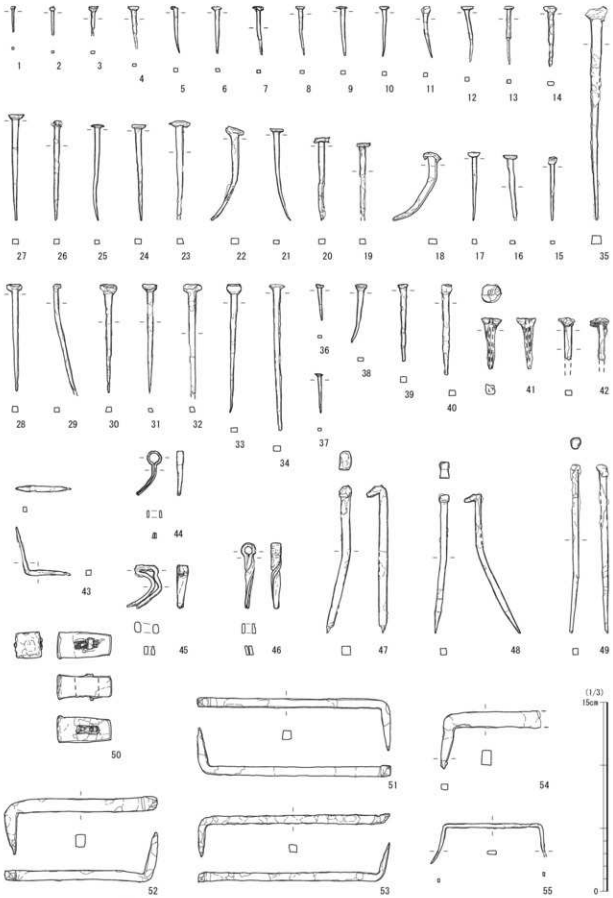
金槌(79-50) 四角玄翁であり、片側が平らでやや広い。柄を欠くが、槌の穴に木質と楔が残る。

鏃(79-51～55) 51～54は断面形が四角い角鏃だが、55は偏平な断面形である。また、51～53は両刃部の向きが異なる手違鏃で、長さの割に胴部が細い。

鑿(80-1・2) 1は幅三分の平刃の追入鑿である。2は角柱の先端を斜めにして幅約一分五厘の刃部を形成する追入鑿または向持鑿である。ともに柄を欠失する。

小刀(80-3) 研ぎ耗のため刃部が茎より短くなる。柄等は残存しない。

錐(80-4) 断面形が四角形となる四つ目錐である。柄は残存しない。



第79図 工具類 (縮尺1/3)

鋤 (80-5) 断面形が菱形の複目鋤で、木工用とみられる。

吊鉤 (80-6~9) 6~8は鉤が1本で上端を環状に曲げるが、6・7は鉤と反対側に曲げ、8は鉤とは直角方向に曲げる。9は3本鉤で、環状部は欠損する。

鋏 (80-14~17) 14・15は頭部が半球形の丸頭鋏、16・17は頭部が円形の平頭鋏である。

楔矢 (80-19・20) 19は先端がやや細くなり薄くなる短冊状の短い鉄板である。20は先端が広がり薄くなるが、頭部が角柱に近い。形状の違いから、19はいわゆる楔であり、20は割矢だとみられる。

鋤先金具 (80-10~12) 鋤あるいは鋸の刃先金具である。10はほぼ完形だが、11は木部に接続する片側部分のみ、12はやや幅の広い刃部のみ破片である。

斧 (80-18) 片刃で、分厚く重い。薪割斧である。

手鋸 (80-13) 刃部先端と茎先端を欠き、目釘孔は不明である。

錘 (80-21・22) 円筒形の鉄製錘である。2点とも同一遺構から出土した。

箱 (80-23) 先端が2つに分かれ、それぞれに逆刺が付く。茎は扁平で目釘孔が一つ開く。

3 日用品 (第81~84図 第38~40表 写真図版第50・53~55・57)

日用品として、煙管 (81-1~32)、迷子札 (82)、簪 (83-1~5)、耳かき (83-6)、毛垂 (83-7)、毛抜き (83-8)、鋏 (83-9)、紡錘車 (83-10)、針 (83-11・12)、指貫状金具 (83-13・14)、庖丁 (83-15~19)、分銅・重り (83-20~24)、針金状製品 (83-25~27・85-21)、棒状製品 (83-28~30・85-17)、鉄鍋・鉄瓶 (84-1~7)、杓子 (84-8・13)、火箸 (84-9~11)、火打金 (84-12)、匙 (84-14~17)、薬研 (84-18)、十能 (84-19) を図示した。

煙管 (81-1~32) 概ね雁首と吸口が別個に出土したが、15・16は一緒に出土しており、同一個体を形成したものとみられる。ただし、意匠に統一感がないため、二個一製品だったことが考えられる。32は延べ煙管である。

雁首 (81-1~15) 火皿接合の補強帯があるもの (1~3・5・7)、肩部が付くもの (1~5)、補強帯と肩の両者を備えるもの (1~3・5) があるが、大半は両者を欠く。12・13は別材による肩部は付かないが、叩き出して肩部状に成形する。15は肩部に竹の節のような圏線が巡る。胛返し部分の形状は、大きく湾曲するもの (1~3・5~8)、直線的に伸びて火皿につながるもの (4・9~15)、火皿付近で屈曲するもの (10・13~15) に分かれる。

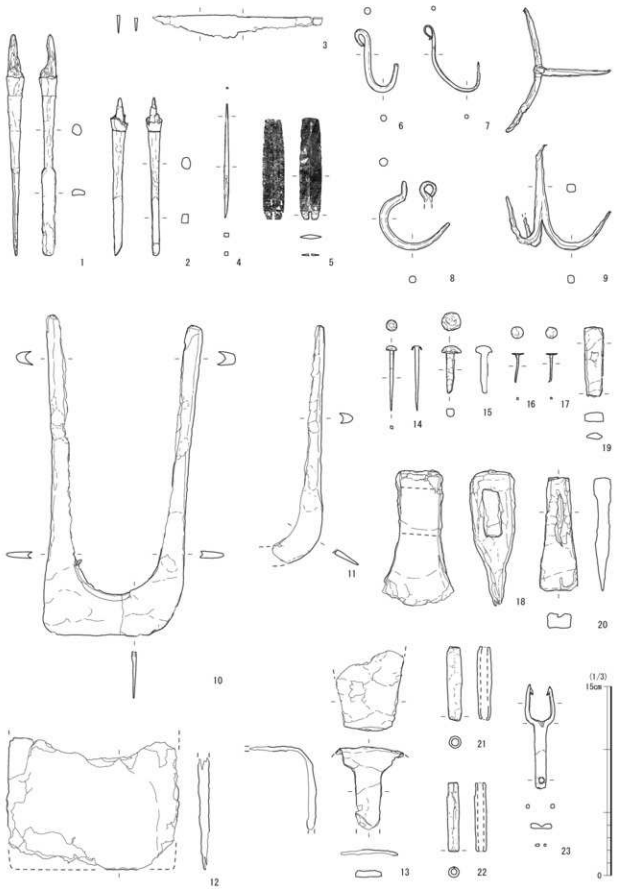
吸口 (81-16~31) ほとんどに胴部が付かず、胴部が付くのは17・18のみである。20・21は叩き出して胴部状に成形する。狭義の吸口部分の形状は、先端の影らむもの (16・21・22・29) と、先に向かい窄まるもの (17~20・23~28・30・31) に分かれる。

延べ煙管 (81-32) 火皿を欠く。首から吸口まで一体的に成形される。肩~胴部の下面に、細い短冊状の銅板を環状にして接着しているが、土圧により潰れている。

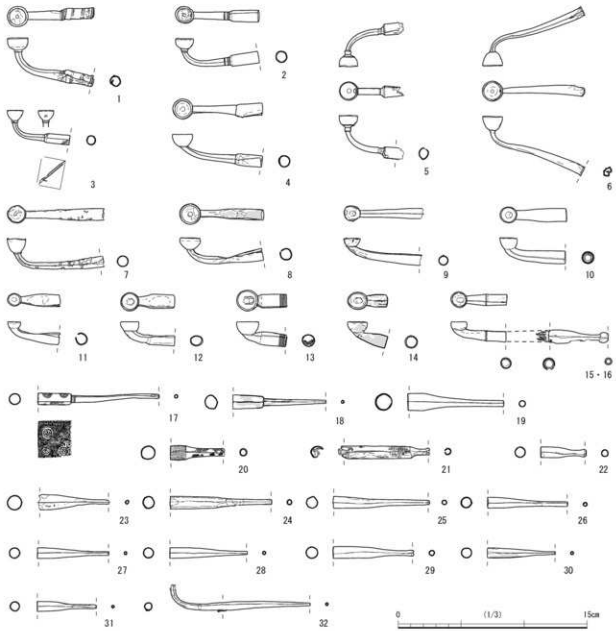
迷子札 (82) 楕円形で上部の円孔に、太さ約1.5mmの針金による径約0.8mmの輪を通す。札の表に「村尾眞兵衛 豊三郎」、裏に松の下を疾走する猪が彫られる。天保年間 (1831~45) の城下絵図には小道具町の調査地付近に「ムラヲ」邸が記され、慶応年間 (1865~68) の絵図には「村尾豊三郎」と記される。慶応年間の村尾家当主が迷子札の本人かどうか明らかにし得ないものの可能性は高い。

簪 (83-1~5) いずれも二本足の玉簪であるが、飾玉を失う。3~5は肩が張らず緩やかに両足へ繋がる。

耳掻き (83-6) 茶匙をそのまま縮小したような形状で、竹節状の意匠がなされる。



第80図 工具・農具・漁具等 (縮尺1/3)



第81圖 煙管 (縮尺 1/3)



第82圖 迷子札 (縮尺 1/1)

毛垂 (83-7) 刃部に「八」と線刻される。

毛抜き (83-8) 残存状況が悪く、片側先端が欠損し、残る側も先端の形状が不明瞭である。

鋏 (83-9) 残存状況が悪く、片側の刃部しか残存しない。

紡錘車 (83-10) 紡輪は薄く、やや球状に湾曲する。紡茎 (紡軸) は下半を欠損する。

針 (83-11・12) 11は縫い針で、頭部に孔が開く。12は待針で、薄い鉄板を巻いて頭を形成する。

指貫状金具 (83-13・14) 13は両端を細くした細長い銅板を指輪状に丸める。表面には多くの円形の窪みが整然と並ぶ。14は残存状況が悪く、指輪状の形が残るのみで詳細は不明。

庖丁 (83-15～19) いずれも出刃系の庖丁。18のみ柄が残る。

分銅・重り (83-20～24) 20は細長い円錐形で上部に円孔がある。底部付近に鉄片を埋め込み、重さを調整する。21・22は扁平な鉛材を捻ったり巻いたりして細長い形にする。23は歪な円形で扁平につぶれる。24は扁平な円形で中央に円孔があり、2か所に切り込みが入る。それぞれの重さは、20が三匁六分七厘一毛、21は一匁四分一厘八毛、22は九分三厘八毛、23は一匁四分一厘八毛、24は二匁四分二厘九毛、25は九分三厘八毛となる。

針状製品 (83-25～27・85-21) 25は断面円形で、片側の方へ向かい次第に細くなる。26は断面円形で太さが均一である。二つに折り曲げて縫い合わせており、径1.5～2.0cmの環ができる。27は断面円形だが、片側の端は扁平で先端が緩く曲がって耳掻き状になる。85-21は断面が太めの円形で両端が尖り、折り曲げて錠状にしている。

棒状製品 (83-28～30・85-17) 28は片側半分がやや偏平で、もう半分が断面円形となる。先端が尖る。29は断面方形で直線的に延びるが、両端が欠損する。30は断面長方形で先端が尖る本体と、断面円形で片側が尖る部分が、丁字形に溶接される。85-17は片側が扁平な舌状で、もう片側は尖る。

鉄鍋・鉄瓶 (84-1～7) 検出された鋳造製の鍋もしくは瓶の破片のうち、1・2は蓋の破片で、2個体分確認された。3・4は鍋の口縁付近の破片、5は脚の付く鍋の底部片だとみられる。6・7は鉄瓶の口縁部から肩部にかけての破片である。

杓子 (84-8・13) 8は柄と鉤う部分が別材であり、鋸でとめる。13は一体的に成形される。

火箸 (84-9～11) 9・10は特に装飾がないが、10は頭部の装飾が欠失した可能性がある。11は先端を欠損するが、上部は捻りを加えた意匠で、頭部を環状にして円環を提げる。

火打金 (84-12) 板に火打金を差し込む板付き型で、関東型とも言われる。刃部の半分程を欠く。

匙 (84-14～17) 薬匙 (14・15)、灰匙 (16・17) がある。14はつぼが角の丸い三角形に近い形状で、先が平らになる。柄はやや偏平で、柄尻がやや丸みを帯びる。15はつぼが楕円形で、柄の断面形は楕円形に近いが、柄尻では扁平で先端がやや曲がり耳掻き状になる。柄が大きく屈曲するが、土圧によるものと思われる。16は柄を装着する袋状の部分に鋸でとめたつぼの一部が僅かに残存する。17はつぼと袋部が一体的に成形される。銅板を折り曲げて袋部を形成し、柄を目釘で止める。

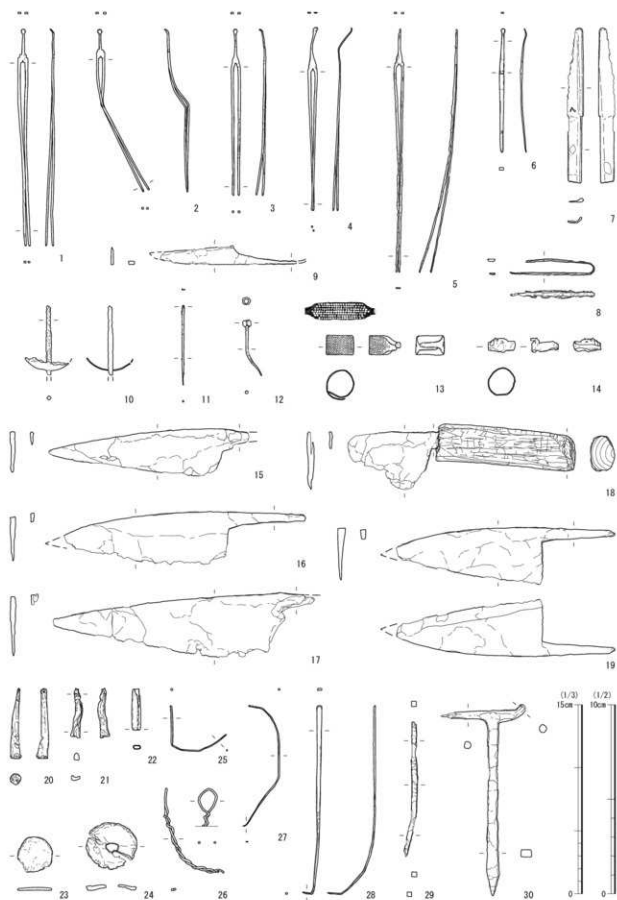
薬研 (84-18) 鉄製の薬研車である。鋳造品で劣化が激しい。

十能 (84-19) 木製の柄が付く柄杓形の木柄十能とみられる。

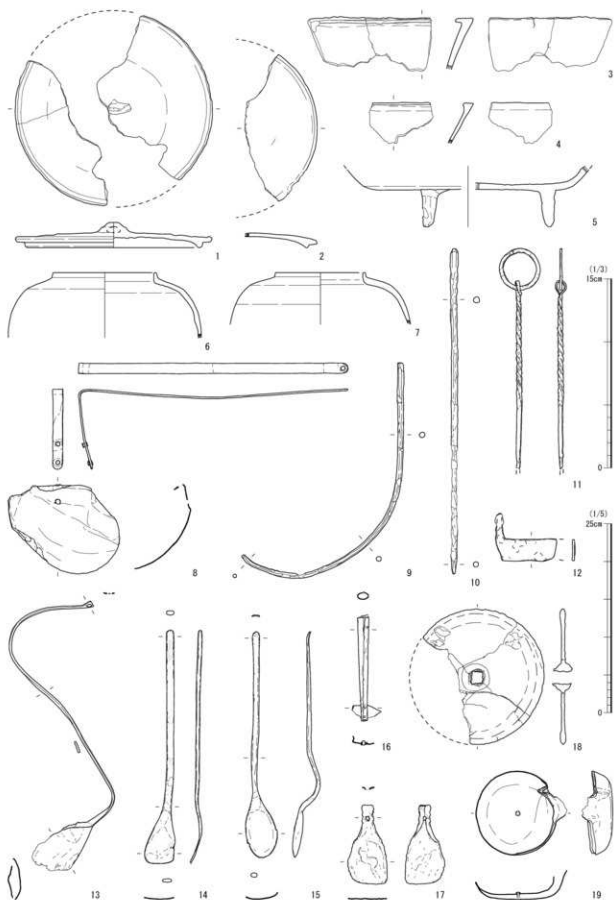
4 調度品・その他 (第85図 第41表 写真図版第50・51・54)

調度品・その他として、引手金具類 (85-1～6)、座金 (85-7・8)、錠付鋳金具 (85-9・10)、錠前 (85-11)、鋳金具 (85-12～14・16・18・20)、額受金具 (85-15)、焼印 (85-19) 等を図示した。

引手金具類 (85-1～6) 引手金具 (1～4)、襖引手金具 (5)、環付金具 (6) がある。1・2



第83圖 日用品〔簪・針・指貫狀製品・庖丁・分銅等〕(縮尺 1/3 1/2 : 11・12)



第84図 日用品〔鉄鍋・鉄瓶・火箸・匙等〕(縮尺1/3 1/5: 18・19)

は一体型で鉛製の鑄造品である。3・4は引手本体と環状釘、座金とで形成される。環付金具(6)は形状が似るためここに含めた。環と環状釘、花(菊)形の座金からなる。換引手金具(5)は楕円形の本体の周りに木瓜形の縁が付く。本体には花(牡丹)と蝶、縁には蔓草植物の意匠がある。

座金(85-7・8) どちらも花(菊)を模しているが、7は花卉形で半肉のなつくりで、8は円盤形の表面に線刻で表現される。7は、環付金具(6)の座金と同形であり、同一遺構出土であるため、対となる製品を形成したことが考えられる。

錠付鋳金具(85-9・10) 錠前の機能がある鋳金具である。9は菊座金を嵌めた可動式のつまみが付く。10は扁平な箱状で、細く扁平な竿状の木部先端に取り付けられたとみられる。

錠前(85-11) 残存部分から施錠した状態のようである。

鋳金具(85-12～14・16・18・20) 12・13は方形に近い団扇形の扁平な金具である。13には柄の一部が残存するが、12には欠損して破断面のみ残る。12・13とも方形部の片面に、縦方向の浅い筋彫りが複数入る。13の残存する柄の形状によると、後に曲がった可能性はあるが、筋彫りのある面とは反対側にやや屈曲して直線的に延びていたようである。その形状から香道具の灰押えである可能性もあるものの、筋彫りが浅くて機能的でない。そのため用途不明ながら鋳金具として扱った。14は蝶番の片側であり、表面に三つ巴の周間に連珠文が巡る模様が14点打刻される。16は残存状態が悪いが本来の外形は花卉状に連弧が巡るようである。表面に装飾はないが、片面中央に細い銅板を釘止めする。18は箆筒等の角を保護する金具である。20は火炎形あるいは水煙形の不明金具である。

額受金具(85-15) 受け部は断面が扁平な長方形でくの字に屈曲する。先端は釘状となる。

焼印(85-19)「神二文字屋」とみえる。

5 銭貨(第86図 第42表 写真図版第56)

銭貨は鑄付いたものを含めて106点を提示した。銭文の内訳は、寛永通寶(1～49)、貞元重寶(50)、唐國通寶(51)、開元通寶(52・53)、淳化元寶(54)、咸平元寶(55・56)、祥符元寶(57・58)、祥符通寶(59)、天禧通寶(60～64)、天聖元寶(65・66)、明道元寶(67)、景祐元寶(68)、皇宋通寶(69～73)、治平元寶(74)、熙寧元寶(75)、元豐通寶(76～81)、元祐通寶(82～84)、紹聖元寶(85～88)、元符通寶(89)、聖宋元寶(90～92)、洪武通寶(93・94)、永樂通寶(95～98)、慶長通寶(99)の23種があり、その他に雁首銭(104～106)がある。また、2枚以上の銭貨が鑄び固まったもの(100～103)がある。

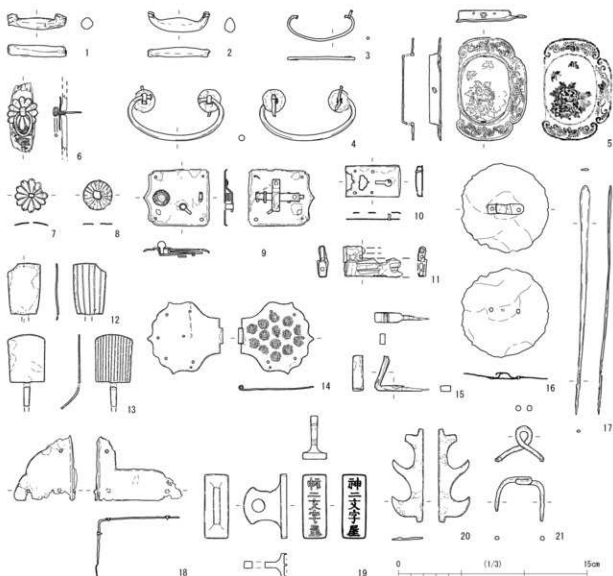
国内鑄造銭は慶長通寶(99)と寛永通寶(1～49)がある。寛永通寶の内訳は、古寛永29点(1～29)、文銭3点(30～32)、新寛永17点(33～49)である。新寛永は43・44に「元」、45に「佐」の背文がある。また、46～49は鉄製のいわゆる鉄一文銭である。

渡来銭は中国銭が占める。貞元重寶(50)は唐、唐國通寶(51)・開元通寶(52・53)は南唐、洪武通寶(93・94)・永樂通寶(95～98)は明である。それら以外は、いずれも北宋銭である。

鑄び固まった銭貨はもともと錢摺の状態だったと思われる。このうち102・103は同一地点から出土しており、もとは一連だったようである。雁首銭(104～106)は、煙管雁首の火皿を薄く潰したもの。

第2節 鑄造関連遺物(第87～90図 第43表 写真図版第57・58)

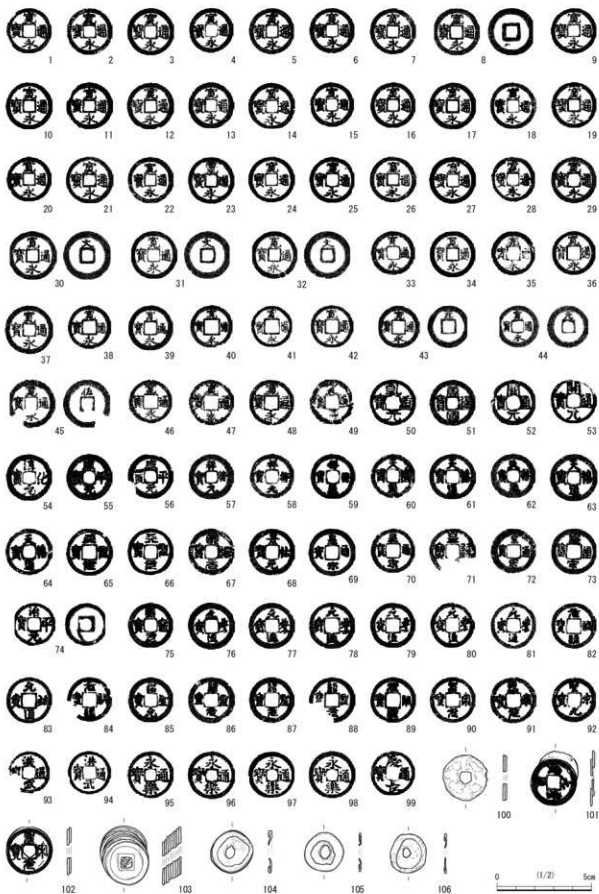
鑄造関連遺物は、発掘調査で118点を採取したうち、比較的状態の良好なもの等64点を提示した。取瓶・埴塙16点(87)、羽口7点(88)、鋳型4点(89)、鉋滓または溶け固まった金属33点(90～103)、鑄造素材4点(90・34～37)である。



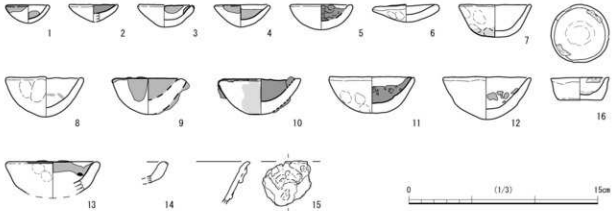
第85図 調度品・その他〔引手金具・鋸金具・焼印等〕(縮尺1/3)

取瓶・埴塙(87-1~16) 図示した16点のうち完形は8点である。これらは、手づくねの腕型(1~14)、型成形で器高の低い寸胴の桶型(16)がある。その他、鋳滓の付着した鉄製腕の口縁部(15)があるが、あるいは鑄造素材の可能性もある。取瓶・埴塙としたが形態に差がなく、被熱具合も同様である。このうち9・10はやや口径が大きく鋳滓の付着量が多い。腕型の口径はばらつきがあるが、完形品では3.3cm(1)、4.0~4.6cm(2~4・16)、5.0~5.5cm(5~7・9)、6cm前後(8・10)、6.7~6.8cm(11~13)とある程度まとまり、いくつかの規格に区分されそうである。

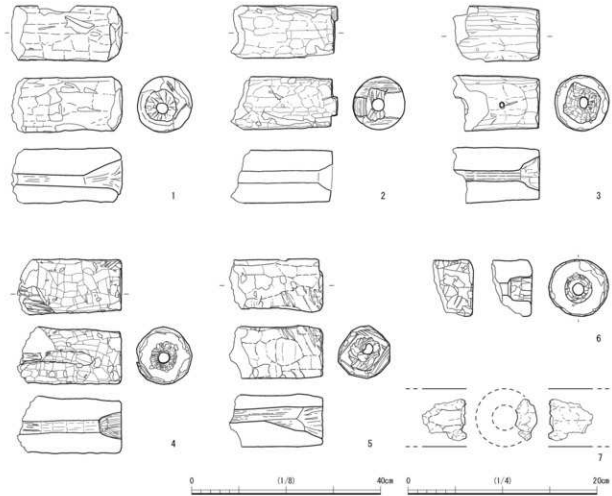
羽口(88-1~7) 笏谷石裂(1~6)と土製(7)があるが、いずれも被熱により変色する。笏谷石裂のものは概ね同様な寸法で、いずれも表面を平刃の工具によって粗く成形され、中心に断面円形の送風孔が穿たれる。小口の状況はそれぞれ少しずつ異なり、とくに2は一部に角張った突起を持つ。3は送風孔の小口部分を略方形に広げており、6は同様の部分に円形に広げて彫り込む。5は小口の送風孔周囲が四角く削り出される。また、制作中に送風孔を穿ち損じたのか、4は外面に送風孔と同様に彫り込んだ跡が残り、5は概ねまっすぐ抜ける送風孔の他にやや食い違う同様の孔が穿たれてい



第86図 錢貨 (縮尺 1/2)



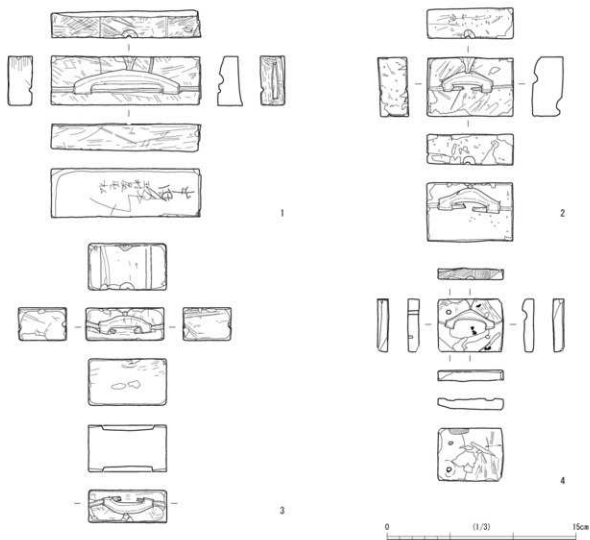
第87図 铸造関連遺物〔取瓶・坩堝〕（縮尺 1/3）



第88図 铸造関連遺物〔羽口〕（縮尺 1/8 1/4：7）

る。7は小片だが外面に面取りが確認され、断面形が多角形となるようである。笏谷石製の羽口と比べると非常に小さい。

鑄型（89-1～4） いずれも引手金具の鑄型とみられる。対になるものはない。2・3は二つの面に鑄型が彫り込まれる。また、いずれも湯口のほかに、棒状のものを当てた彫り込みがある。

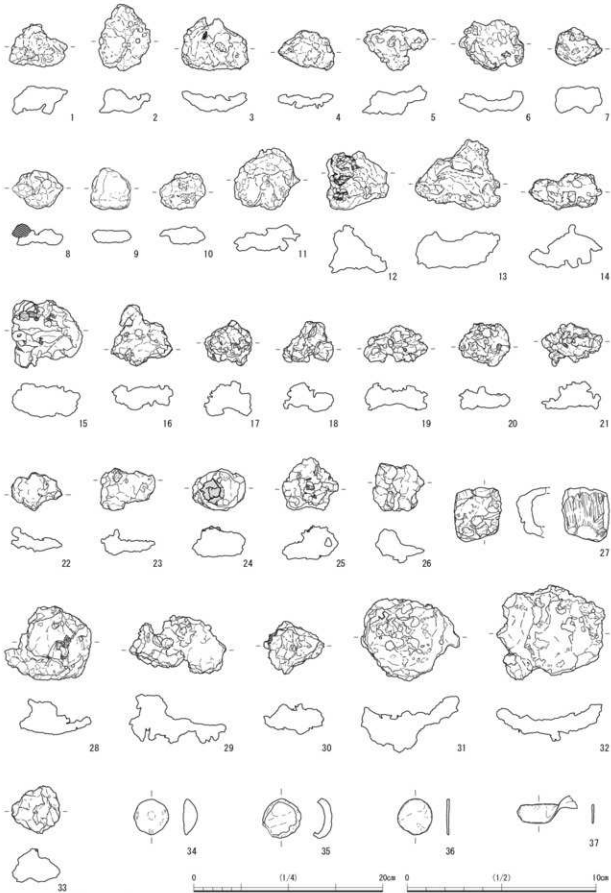


第89図 鑄造関連遺物〔鑄型〕(縮尺1/3)

1はもともと硯であり、四分の一程度に切断した破片を加工して制作している。型の裏側には、硯背(硯除)の縁を巡る脚の形状が残り、刻まれた名前などの文字列が残る。中央の大きな文字の列は傷等と同化しており判読困難だが、その左下には小さめの文字で「玉村屋□(老カ)松」と読める。硯として使用された時の持ち主であろう。二面に型を彫りこむ2・3はともに小口が長方形でやや厚めの直方体であるが、2は対向する広い面に型が彫られ、3は対向する狭い面に型が彫られる。3の場合、対になる鑄型は薄いものだったと思われる。4は砥石を改造して鑄型としたようである。型を固定するためのなか、3つの円孔が穿たれており、そのうちの1つだけが貫通する。

鉢滓等(90-1~33) 金属精錬時や鑄物製造の工程で発生する廃棄物である。大きさや形状が様々であり、いくつか碗形のようになるものがある。また、27は棒状のものから剥離したような形状であり、内面には繊維状のものを巻き付けた痕跡が残る。

鑄造素材(90-34~37) いずれも鉛とみられるが、さまざまな形状である。34は半球状、35は円盤形の中央を押さえて縁が盛り上がった形状、36は円盤形、37は扁平で細長い形で端を捻った形状である。なお、いずれも比重が軽くなっているが、なかでも37は重く不純物が少ないようである。そのため、流通する鉛地金の切れ端である可能性がある。



第90図 鋳造関連遺物〔鉾澤・素材〕(縮尺1/4 1/2:34~37)

第36表 武器器具観察表

図面番号	探回番号	種別	属性	出土地点		計測値							備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号		
				地区	遺構番号	層位	全長	幅	厚	断面	重量	g					
78	1	棒	鋼	A10	152-豊地土3		縦	横	孔縦	孔横	最大厚	厚	重さ		17C後半	152-16	
							3.8	2.1	2.9	0.8	0.1	0.75	7.44				
78	2	短笛	鋼	B1	152-246		縦	横	孔縦	孔横	最大厚		重さ		18C～	152-6	
							4.2	2.5	3.1	1.0	0.1		3.65				
78	3	短笛	鋼	A10	152-豊地土2		縦	横	孔縦	孔横	最大厚		重さ		152-7		
							3.05	2.2	2.6	0.85	0.1		5.94				
78	4	短笛	鋼	B10	152-豊地土2		縦	横	孔縦	孔横	最大厚		重さ		152-8		
							4.15	2.5	2.45	0.8	0.05		4.01	こまやみあり			
78	5	鍔	鋼	J5	151-22		縦	横	長	最大厚			重さ		18C後～	151-17	
							(3.0)	0.9	2.2	0.1			4.79	鍔金 表面磨滅			
78	6	鍔	鋼	B1	152-東西TE		縦	横	長	最大厚			重さ		152-18		
							3.2	1.0	2.0	0.2			8.63				
78	7	鍔	鋼	A10	152-豊地土3		縦	横	長	最大厚			重さ		17C後半	152-19	
							3.05	1.1	2.7	0.3			25.18				
78	8	鍔	鉄	B8	152-229		縦	短縦	孔縦	孔横	最大厚		重さ		～18C	152-4	
							6.0	(5.5)	2.35	0.5	0.4		23.61				
78	9	鍔	鋼	J9	152-豊地土2		縦	短縦	孔縦	孔横	最大厚		重さ		～18C中	152-3	
							7.6	—	2.95	0.8	0.35		79.25	5/6 残存			
78	10	鍔	鋼	J9	152-178		縦	短縦	孔縦	孔横	最大厚		重さ		～18C中	152-1	
							(5.5)	(5.0)	(3.0)	(0.7)	0.4		64.47	1/3 残存			
78	11	短笛	鋼	J5	151-108	19層	縦	横	孔縦	孔横	最大厚		重さ		18C後～	151-5	
							3.3	1.7	1.55	0.25	0.025		6.41	ミニチュア			
78	12	鍔	鉄	B9	152-程尻15		全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	小刃部幅	小刃部厚	重さ		152-2		
							3.6	(3.5)	1.3	0.3	0.3		14.2	ミニチュア			
78	13	小刀	刃部鉄 柄部鋼	B7	152-豊地土1		全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	小刃部幅	小刃部厚	重さ		152-10		
							(9.9)	—	—	—	9.6	1.45	0.4	31.31	小物のみ 表面磨滅		
78	14	小刀	鋼	B1	152-2	本跡 埋土	18.88	9.25	1.2	0.3	9.5	1.4	0.5	36.02	植物物の着染に魚子	17C～近代	152-11
78	15	小刀	鋼	C10	152-2	市街 裏込土	—	—	—	—	9.65	1.4	0.5	24.06	小物のみ 一部磨滅 一部 腐蝕を理由に点々で一部 変形磨損が認められる	17C～	152-13
78	16	小刀	鋼	F10	151-5	—	—	—	—	—	6.25	1.4	0.3	5.47	小物のみ	～18C中	151-9
78	17	小刀	刃部鉄 柄部鋼	C1	152-2	本跡 埋土	15.55	5.7	1.1	0.2	9.85	1.45	0.4	34.18	鍔金 鍔土の意匠 背面に魚子	17C～近代	152-12
78	18	小刀	鋼	B1	152-豊地土4	—	—	—	—	—	9.95	1.4	0.5	23.89	五三鋼の鍔	17C前半	152-14
78	19	小刀	鉄	J6	151-227	3層以下	(3.3)	1.8	0.2				2.94		17C～ 18C前	151-26	
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	基部幅	基部厚					
78	20	鍔	鉄	J9	152-32	第1砂利面 下層土	5.0	2.95	1.0	1.0	0.45	0.4	11.63	柄部磨	17C前～	152-15	
							長径	短径									
78	21	鍔丸	鉄	B1	152-豊地土4		2.55	2.5					8.97		17C前半	152-25	
78	22	鍔丸	鉄	B9	151-表土	程尻	16.5	1.6					10.05		151-23		
78	23	鍔丸	鉄	D5-6	151-程本流		1.3	1.25					10.45		151-22		
78	24	鍔丸	鉄	J6	151-108	11層	1.25	1.25					9.63		18C後～	151-20	
78	25	鍔丸	鉄	A9	152-311		1.25	1.2					10.09		—	152-24	
78	26	鍔丸	鉄	D9	151-表土		1.25	1.2					8.54		—	151-21	

第37表 生産具類観察表

図面番号	探回番号	種別	属性	出土地点		計測値							備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号
				地区	遺構番号	層位	全長	幅	厚	断面	重量	g			
79	1	釘	鉄	J6	151-100	1層	2.02	0.18	0.18	0.35	0.25	0.24	巻鋼釘	18C後～	151-26
79	2	釘	鉄	J5	151-108	13層	2.3	0.2	0.18	0.40	0.35	0.31	巻鋼釘	18C後～	151-13
79	3	釘	鉄	J6-9	152-166		2.2	0.3	0.2	0.4	0.7	0.49	巻鋼釘 欠欠	17C後半～	152-43
79	4	釘	鉄	B10-1	152-191		3.35	0.3	0.2	0.3	0.8	0.7	巻鋼釘	17C後半	152-42
79	5	釘	鉄	J5	151-108	13層	3.68	0.3	0.3	0.60	0.3	1.08	巻鋼釘	18C後～	151-11
79	6	釘	鉄	J5	151-108	32層	3.7	0.3	0.25	0.81	0.3	1.06	巻鋼釘 欠欠	18C後～	151-23
79	7	釘	鉄	C1	152-2	本跡埋土	3.85	0.4	0.2	0.4	0.80	1.27	巻鋼釘	17C～近代	152-47
79	8	釘	鉄	J5	151-108	29層以下	3.9	0.3	0.25	0.7	0.25	0.75	巻鋼釘	18C後～	151-10
79	9	釘	鉄	J5	151-108	14層	3.9	0.35	0.25	0.9	0.2	1.95	巻鋼釘	18C後～	151-31
79	10	釘	鉄	J5	151-108	29～33層	4.95	0.3	0.3	0.1	0.2	1.14	巻鋼釘	18C後～	151-38
79	11	釘	鉄	C2	152-表土		4.07	0.3	0.3	0.55	0.7	1.16	巻鋼釘	152-17	
79	12	釘	鉄	J5	151-108	14層	4.4	0.3	0.3	1.0	0.3	1.4	巻鋼釘	18C後～	151-32
79	13	釘	鉄	C2	152-東野	豊地土5下	4.6	0.35	0.3	0.25	0.7	1.18	巻鋼釘	152-40	
79	14	釘	鉄	A10	152-2		4.75	0.5	0.3	1.05	0.4	2.11	巻鋼釘	～18C中	151-24
79	27	釘	鉄	J5	151-108	6層以下	8.4	0.5	0.4	1.2	0.4	7.65	巻鋼釘	18C後～	151-28
79	28	釘	鉄	B9	152-32	第1砂利面 下層土	7.9	0.45	0.4	0.5	0.9	4.78	巻鋼釘	17C前～	152-19
79	25	釘	鉄	J5	151-108	6層以下	7.6	0.4	0.35	1.05	0.2	5.28	巻鋼釘	18C後～	151-29
79	24	釘	鉄	J6	151-107	3層	7.6	0.5	0.4	1.1	0.3	5.1	巻鋼釘	18C後～	151-27
79	23	釘	鉄	A9	152-32	第1砂利面 下層土	7.53	0.5	0.4	0.5	1.6	8.22	巻鋼釘	17C前～	152-45
79	22	釘	鉄	B6	151-226		7.5	0.6	0.45	(1.9)	0.6	5.63	巻鋼釘 先端折	17C～18C前	151-35
79	21	釘	鉄	J5	151-108	13層	7.3	0.45	0.3	1.1	0.3	4.24	巻鋼釘	18C後～	151-30
79	20	釘	鉄	C8	151-3	舟内内10層	6.6	0.5	0.4	1.3	0.35	5.24	巻鋼釘	～近代	151-23
79	19	釘	鉄	A9	152-32	第1砂利面 下層土	5.75	0.5	0.4	0.3	1.05	4.7	巻鋼釘 欠欠	17C前～	152-44
79	18	釘	鉄	J6	151-197		(5.4)	0.65	0.4	1.4	0.3	8.08	巻鋼釘	～18中	151-34
79	17	釘	鉄	J5	151-108	29～33層	5.4	0.4	0.38	0.95	0.35	2.84	巻鋼釘	18C後～	151-39
79	16	釘	鉄	A9	152-263		5.0	0.4	0.28	0.3	1.1	3.29	巻鋼釘	～17C中	152-41
79	15	釘	鉄	D4	161-4-1		5.05	0.3	0.2	0.7	0.2	1.62	巻鋼釘	18C後～	161-48
79	35	釘	鉄	C1	152-2	本跡埋土	16.9	0.9	0.63	(1.0)	(1.7)	27.61	巻鋼釘	17C～近代	152-20
79	28	釘	鉄	—	151-豊地土1	Tp18 12層	8.45	0.45	0.45	1.2	0.4	5.82	巻鋼釘	—	151-26
79	29	釘	鉄	B1	152-81内堀	豊地土2	8.5	0.4	0.35	0.4	0.60	5.3	巻鋼釘 欠欠	18C後半～	152-16

第5章 金属製品

図面 番号	種別 番号	種別	属性	出土地点		計測値										備考	出土遺物の主 な遺物の時期	金属 番号
				地区	遺物番号	層位	D					g						
79 30	釘	鉄	C1	152-2	水路碑土	8.6	0.4	0.4	0.8	11.3					3.04	巻部釘	17C 一古代	152-21
79 31	釘	鉄	J9	152-235		8.65	0.45	0.3	0.6	1.11				4.73	巻部釘	17C 前	152-18	
79 32	釘	鉄	C10	152-2	水路碑土	8.7	0.5	0.4	0.7	1.4				8.35	巻部釘 先欠	17C 一古代	152-46	
79 33	釘	鉄	F10	151-5		10.2	0.5	0.35	0.9	1.15				5.98	巻部釘	～ 18C中	151-14	
79 34	釘	鉄	D9	151-23		11.6	0.55	0.4	1.2	0.4				10.98	巻部釘 頭欠	～ 17C	151-25	
79 36	釘	鉄	J5	151-108	13層	2.85	0.3	0.2	0.6	0.3				0.54	巻部釘	18C 後～	151-12	
79 37	釘	鉄	J5	151-108	29～33層	3.1	0.28	0.2	0.6	0.2				0.59	巻部釘	18C 後～	151-13	
79 38	釘	鉄	-	151-豊地土1	TR18 12層	4.6	0.45	0.25	0.9	0.35				1.52	巻部釘	～ 18C中	151-37	
79 39	釘	鉄	-	151-豊地土平		6.1	0.5	0.45	0.8	0.4				4.21	巻部釘		151-9	
79 40	釘	鉄	D4	161-4-1		7.15	0.5	0.5	0.8	10.81				3.88	巻部釘	18C 後～	161-22	
79 41	釘	鉄	B1	152-豊地土3		4.05	0.8	0.8	10.1	10.35				3.89	木質・金銭残る 頭欠	17C 後半	152-57	
79 42	釘	鉄	A10	152-豊地土3		(3.4)	0.6	0.5	0.8	1.3				2.56	先欠 木質残る	17C 後半	152-58	
						高 奥行 幅 最大厚												
79 43	釘	鉄	A10	152-32	第1砂利面 下層土	4.35	(4.1)	0.45	0.5	0.5				3.62	採れ前釘 先欠	17C 前～	152-55	
						全長 幅 厚 頭径 頭径												
79 44	釘	鉄	J5-J6	151-表土		3.5	0.4	0.4	1.1	0.5				4.06	環状釘		151-52	
79 45	釘	鉄	-	151-豊地土1	TR18 12層	3.3	0.75	0.65	1.01	0.8				8.61	環状釘		151-53	
79 46	釘	鉄	A9	152-226		5.2	0.55	0.7	1.0	0.8				8.37	環状釘 ひねり	～ 17C中	152-54	
						全長 幅 厚 頭径 頭径												
79 47	釘	鉄	C10	152-2南側	豊地土2	10.3	0.6	0.6	0.8	1.3				23.57	帯折釘 先欠		152-49	
79 48	釘	鉄	G6	152-横穴		11.0	0.5	0.5	0.6	1.3				18.73	帯折釘		152-50	
79 49	釘	鉄	C1	152-146		13.1	0.4	0.5	10.51	10.81				17.43	帯折釘	～ 17C中	152-51	
						長 最大高												
79 50	多角	鉄	J6	151-137		2.3	2.1	2.0						7.44	木質残る	18C 後～	151-7	
						全長 全高 体部全体部厚												
79 51	線	鉄	C10	152-2	上層	15.4	4.1	0.7	0.6					60.47	手線組	18 後～古代	152-3	
79 52	線	鉄	C10	152-2	上層	12.1	4.1	1.0	0.75					62.87	手線組	18 後～古代	152-4	
79 53	線	鉄	C10	152-2	上層	15.2	3.2	0.6	0.6					41.76	手線組	18 後～古代	152-5	
79 54	線	鉄	B1	152-81内部	豊地土2	7.90	4.3	1.17	0.8					48.09	異線 平欠	18C 後半～	152-2	
79 55	線	鉄	J8	152-238		7.8	3.2	0.3	0.7					10.59		～ 17C中	152-6	
						全長 刃部長刃部幅刃部厚刃部全体部厚刃部全体部厚												
80 1	釧	鉄	B1	152-81内部	豊地土2	17.5	6.95	1.0	0.4	2.1	0.85	(3.35)	42.43	物の木質残る	18C 後半～	152-67		
80 2	釧	鉄	B10	152-豊地土3		(12.0)	4.7	0.5	0.7	5.1	0.85	2.65	31.08	物の木質残る		152-68		
						全長 刃部長刃部幅刃部厚刃部全体部厚刃部全体部厚												
80 3	小刀	鉄	C10	152-豊地土3		(13.0)	6.75	1.8	0.2	6.7	1.0	0.2	13.32	先頭欠	17C 後半	152-60		
						全長 最大幅最大厚												
80 4	鎌	鉄	J5	151-108	13層	9.05	0.35	0.3						3.98	鎌 刃部のみ	18C 後～	151-8	
						全長 幅 最大厚												
80 5	鎌	鉄	J5	151-108	28層	8.05	1.7	0.3						1.39	鎌 後部	18C 後～	151-75	
						高 幅 厚 刃部厚												
80 6	釣鉤	鋼	J5-J6	151-TK12		5.0	2.7	0.5	1.15					13.39			151-65	
80 7	釣鉤	鋼	A9	152-32	第1砂利面 盛土	5.3	3.8	0.3	0.8					4.77		17C 前～	152-66	
80 8	釣鉤	鉄	I1	161-110		5.5	5.6	0.6	1.3					17.51		18C	161-337	
						高 最大幅体部全体部厚刃部全体部厚												
80 9	鉤状 製品	鉄	J6	151-豊地土1		18.30	10.0	3.9	0.7	5.45	0.6			42.01			151-1	
						幅 厚 最大幅最大厚												
80 10	鋸先	鉄	J6	151-TK19	2層	25.5	10.8	0.35	12.3	1.1				23.40			151-79	
80 11	鋸先	鉄	D8	151-28	3層	(18.9)	-	(0.4)	(3.2)	(8.8)				73.87		18C 後～	151-78	
80 12	鋸先	鉄	J10	152-豊地土3		(10.5)	13.6	0.8						188.0	刃部のみ	17C 後半	152-76	
						全長 刃部長刃部幅刃部厚刃部全体部厚刃部全体部厚												
80 13	手鋸	鉄	B9	151-道路工上 層盛成土		6.6	(3.9)	(5.2)	0.3	4.6	2.1	0.5	53.59	1/2 残存			151-77	
						全長 幅 厚 頭高 頭径												
80 14	鋸	鋼	D8	151-T84		5.1	0.2	0.2	0.35	0.85				2.87	丸鋸歯		151-71	
80 15	鋸	鋼	B10	152-81内部	豊地土2	3.75	0.6	0.6	0.55	1.5				7.44	丸鋸歯	18C 後半～	152-72	
80 16	鋸	鋼	J6	151-100	1層	3.5	0.1	0.15	-	0.95				0.68	平鋸歯		151-69	
80 17	鋸	鋼	J6	151-100	1層	2.25	0.15	0.15	-	0.9				0.59	平鋸歯		151-70	
						全長 幅 厚 刃部長刃部幅刃部厚												
80 18	斧	鉄	B10	152-豊地土4		10.7	3.7	3.6	5.2	(5.7)	2.9			372.0		17C 前半	152-80	
						全長 最大幅 厚												
80 19	楔	鉄	I5	151-豊地土1	非照付水溝 層	5.6	1.5	0.7						20.79			151-59	
80 20	矢	鉄	J9	152-豊地土2		9.0	3.0	1.2						102.41			152-64	
						全長 径												
80 21	鏃	鉄	-	151-259	-	5.8	1.1							19.25		～ 18C 前	151-82	
80 22	鏃	鉄	-	151-259	-	5.5	0.9							16.76		～ 18C 前	151-83	
						全長 最大幅刃部長刃部幅刃部厚刃部全体部厚												
80 23	飾	鉄	C3	161-泉倉庫		8.3	2.0	2.7	0.3	5.1	0.85	0.2	13.07	目打孔1			161-81	

第38表 煙管観察表

図面番号	押印番号	種別	属性	出土地点		計測値							備考	出土遺物の主な遺物の時期	金属番号	
				地区	遺構番号	層位	全長	高	胴部径	火口径	火口蓋径	胴部長				蓋径
						cm										
81-1	煙管	銅	99	152-32 東壁	152-壱地土 3	6.9	3.85	0.9	1.65	0.9	2.45	6.39	管付 縁部管付	17C 後半	152-18	
81-2	煙管	銅	99	152-261		6.65	2.35	0.9	1.4	0.8	2.3	8.1	管付 縁部管付 火取孔	～17C 中	152-17	
81-3	煙管	銅	81	152-壱地土 5		5.0	2.75	0.75	1.25	0.8	1.95	5.04	鍍金 傘蓋 火取孔 ?		152-21	
81-4	煙管	銅	81	152-2	水跡層土	7.18	2.6	0.9	1.6	0.9	2.1	8.18	管付 一部鍍金あり	17C	152-11	
81-5	煙管	銅	88	152-228		5.1	3.5	0.9	1.5	0.9	1.5	4.1	管付 縁部管付 火取孔	～18C	152-16	
81-6	煙管	銅	81	152-2	水跡層土	8.12	4.7	0.8	1.6	1.0	-	8.48	火取孔	17C～近代	152-12	
81-7	煙管	銅	810	152-壱地土 3		2.7	2.25	0.85	1.5	1.1	-	5.47		17C 後半	152-20	
81-8	煙管	銅	C1	152-2	水跡層土	6.7	2.08	0.9	1.65	0.9	-	7.76	鍍金	17C～近代	152-13	
81-9	煙管	銅	85	151-椀瓦 5		6.3	2.2	0.8	1.3	0.7	-	5.16			151-7	
81-10	煙管	銅	87	151-壱地土	砂層	5.2	2.05	0.95	0.8	0.9	-	10.0	蓋子一部残存		151-8	
81-11	煙管	銅	88-79	152-166		4.2	1.8	0.95	1.05	0.55	-	3.94		18C 後半～	152-15	
81-12	煙管	銅	81	152-壱地土 3		4.3	1.89	1.0	1.45	0.7	-	7.69	一部鍍金	17C 後半	152-19	
81-13	煙管	銅	A6	151-TR17		3.95	1.95	0.95	1.75	1.0	-	6.39	蓋子一部残存		151-9	
81-14	煙管	銅	81	152-2		3.2	2.1	0.96	1.6	0.8	-	4.93		17C～近代	152-10	
81-15	煙管	銅	C1	152-43		4.35	1.6	0.9	1.25	0.6	1.6	4.9	管付 M29とセット	18C 後半～	152-14	
						全長	胴部径	口部径	胴部長							
81-16	煙口	銅	C1	152-43		4.75	1.0	0.5	-	-	-	4.18	銅製し、蓋子一部残存 M14とセット	18C 後半～	152-29	
81-17	煙口	銅	81	152-壱地土 5		9.6	0.9	0.25	2.6			6.3	出土二枚彫像前		152-37	
81-18	煙口	銅	A9	152-263		7.4	1.1	0.25	2.4			6.89	銅製 鍍金	～17C 中	152-31	
81-19	煙口	銅	86	151-土 1		7.65	1.4	0.3	-	-	-	9.03	鍍金 蓋子一部残存		151-25	
81-20	煙口	銅	81	152-壱地土 2		4.3	1.1	0.55	1.3			4.56		152-34		
81-21	煙口	銅	15-86-J5	151-表土		7.25	0.9	0.55	-	-	-	10.1	鍍金 蓋子一部残存		151-26	
81-22	煙口	銅	C7	151-壱地土	ゴミ層 1	3.6	0.85	0.55	-	-	-	2.7			151-24	
81-23	煙口	銅	16 TR12 西	151-壱地土 2	TR12-4層	5.75	1.15	0.3	-	-	-	3.93	鍍金		151-23	
81-24	煙口	銅	81	152-壱地土 1		8.75	1.0	0.4	-	-	-	6.82	銅製八角形		152-35	
81-25	煙口	銅	G8	152-48		2.7	0.95	0.55	-	-	-	4.56		18C 後半～	152-30	
81-26	煙口	銅	C1	152-壱地土 1		6.5	0.85	0.3	-	-	-	4.77	蓋子一部残存		152-33	
81-27	煙口	銅	87	152-表土	壱地土 1	3.7	0.85	0.25	-	-	-	3.53			152-32	
81-28	煙口	銅	C1	152-2		6.15	0.8	0.25	-	-	-	5.21		17C～近代	152-28	
81-29	煙口	銅	C1	152-2		6.4	0.9	0.45	-	-	-	5.85	鍍金	17C～近代	152-27	
81-30	煙口	銅	85	151-108	6層以上	5.4	0.8	0.3	-	-	-	3.75	鍍金	18C 後半～	151-22	
81-31	煙口	銅	81	152-壱地土 4		4.7	0.75	0.2	-	-	-	2.97	鍍金	17C 前半	152-36	
						全長	胴部径	口部径	胴部長	高						
81-32	瓦片管	銅	89	152-壱地土 2		11.1	-	0.2	-	12.0		6.46	火取瓦 鍍金		152-38	

第39表 日用品(管・庖丁・迷子札等)観察表

図面番号	押印番号	種別	属性	出土地点		計測値							備考	出土遺物の主な遺物の時期	金属番号		
				83	遺構番号	層位	全長	筒幅	厚	胴長	胴幅	胴厚				蓋径	
						cm											
83-1	管	銅	-	151-壱地土 1	TR18 12層	17.2	0.9	0.1	14.5	0.15	0.15	7.6			151-1		
83-2	管	銅	C7	151-壱地土	ゴミ層 1	12.9	0.6	0.15	10.6	0.15	0.1	4.99			151-2		
83-3	管	銅	81	152-壱地土 1	上層	13.2	0.7	0.15	10.5	0.15	0.15	4.93	玉鉤欠	18層～近代	152-3		
83-4	管	銅	89	152-椀瓦 20		14.5	0.7	0.08	11.2	0.1	0.15	3.62	玉鉤欠		152-4		
83-5	管	銅	810	152-壱地土 3		19.3	0.7	0.15	16.5	0.15	0.05	5.83	鍍金	17C 後半	152-5		
						全長	最大幅	最大厚									
83-6	耳小	銅	C1	152-2	水跡層土	9.8	0.35	0.2				2.86	水取形意匠	17C～近代	152-6		
						全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	柄部厚							
83-7	毛鉤	鉄	B8-C7-C8	151-表土		12.2	6.95	1.2	0.3				14.8	刃部残有「八」		151-12	
						全長	最大幅	最大厚									
83-8	毛鉤	鉄	16 TR18 東	151-壱地土 2	TR18 16層	6.8	0.6	0.18				3.89			151-40		
						全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	厚							
83-9	鉄	鉄	G6	152-壱地土 1		(10.8)	3.6	1.4	0.2	0.45		11.94			152-41		
						高	軸径	受部径	受部厚								
83-10	銅線車	鉄	F10	151-5		(5.5)	0.3	(3.7)	0.1			7.69		～18C 中	151-37		
						全長	径	胴部径	孔部径								
83-11	針	鉄	A9	152-263		4.2	0.1	0.04				0.08	錆付	～17C 中	152-20		
83-12	針	銅	C1	152-31		(2.9)	1.2	0.4	-	-	-	0.58	錆付	(18C 後半)～	152-19		
						径	幅	厚									
83-13	銅貨状製品	銅	B8-C7-C8	151-表土		1.4	1.0	0.05				2.21			151-40		
83-14	銅貨状製品	銅	86	151-107	3層	1.4	0.7	0.025				0.61			18C 後半～	151-39	
						全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	基部長	基部厚						
83-15	庖丁	鉄	81	152-2	上層	(15.9)	(13.2)	0.37	0.4			51.53		18層～近代	152-55		
						(2.1)	0.95	0.25									
83-16	庖丁	鉄	89	152-32	第1段利面下層土	(19.2)	12.9	(4.2)	0.4			90.34	出芽	17C 前半～	152-52		
						0.6	0.7	0.25									
83-17	庖丁	鉄	16 TR18 東	151-壱地土 1	TR19 4層	(20.7)	(17.1)	4.7	0.4			84.93	出芽		151-54		
						(2.2)	0.85	0.6									
83-18	庖丁	鉄	C8	151-4	4層	(18.1)	-	(4.5)	0.45			86.35	把手木片残存	～近代	151-51		
						11.0	2.9	1.9									
83-19	庖丁	鉄	89	152-壱地土 1		(17.4)	(11.5)	4.4	0.65			81.33	出芽		152-53		
						5.8	0.8	0.4									
						全長	径	88.5									
83-20	鎌	銅	86	151-197		5.55						13.77	分銅	～18C 中	151-2		
83-21	鎌	銅	C2	152-181		3.9	0.55	0.7				5.32	18C		152-58		

第5章 金属製品

図面 番号	種類	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主 な遺物の時期	金属 番号		
			地区	遺構番号	層位	cm			g							
83	22	練	前	J6	151-107	3層	最大径	内径	最大厚				3.52	鉄杖製品 素材中	18C 後～	151-1
83	23	練	前	A10	152-豊地土3								9.11		17C 後半	152-4
83	24	練	前	A9	152-豊地土2		4.0	1.0	0.35				3.52			152-3
83	25	非金杖 製品	銅	C8	151-3	井戸内 7層目	(2.6)	4.45	0.15				0.8		～近代	151-23
83	26	非金杖 製品	鉄	J5	151-108	29層以下	(6.7)	4.8	0.17				2.69		18C 後～	151-22
83	27	鉄杖製品	鉄	J6	151-100	1層	9.6	2.7	0.12				0.96		18C 後～	151-21
83	28	鉄杖製品	鉄	F10	151-184		14.95	0.4	0.13				4.97		17C	151-24
83	29	不明	鉄	-	151-豊地土4	TR12 12層	10.7	0.4	0.4				8.81	棒状製品	18C～	151-73
83	30	不明	鉄	A10	152-豊地土3		14.7	6.7	0.6				96.41		17C 後半	152-74
82		透子孔	銅	J6	151-表土		605	3.15	0.5	0.75	0.15			表面腐(位上層) 裏(村尻段 兵衛伴 豊三郎)		151-39

第40表 日用品(鍋・火箸・匙等)観察表

図面 番号	種類	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主 な遺物の時期	金属 番号		
			地区	遺構番号	層位	cm			g							
84	1	蓋	鉄	C1	152-2	上層	残存径	底外径	器高					重さ		
84	1	蓋	鉄	C1	152-2	水路埋土	4.4	(15.6)	(1.2)				101.01	鍋蓋品 42と同一 段あり	18 後～近代	152-43
84	2	蓋	鉄	C1	152-2	水路埋土	5.7	(14.2)	(1.15)				89.34	鍋蓋品 1/4残存	17C～近代	152-44
84	3	鍋	鉄	F9	151-遺跡1 土層造成土		(48.2)	-	(4.1)				86.03	鍋蓋品		151-17
84	4	鍋	鉄	C8	151-3	井戸掘内	(42.9)	-	(3.2)				10.5	鍋蓋品	～近代	151-16
84	5	鍋	鉄	B8	152-表土	豊地土1	-	(16.6)	(4.8)				149.82	鍋蓋品 脚3本		152-18
84	6	鉄炊	鉄	A10	152-豊地土1		(8.2)	(15.4)	(5.2)				41.25	鍋蓋品		152-34
84	7	鉄炊	鉄	J6	151-123	1層	(7.2)	(14.3)	(4.1)				36.92	鍋蓋品	18C中～	151-15
84	8	杓	銅	B1	152-2		58.1	0.05	2.7	0.9	0.15		44.58		17C～近代	152-14
84	9	火箸	鉄	J6	151-TR5		26.8	0.5	0.5	-	-		23.0			151-33
84	10	火箸	鉄	B7	152-79		25.8	0.65	0.6	-	-		30.11		～近代	152-31
84	11	火箸	鉄	J6	151-TR5	2層	(14.9)	0.45	0.45	3.3	0.2		156.3			151-32
84	12	火打石	鉄	C1	152-豊地土3		3.8	(4.8)	0.2				11.66		17C 後半	152-25
84	13	匙	銅	C1	152-豊地土3		19.1	1.7	0.05	(17.0)	0.9	0.15	33.7	柄先端に凹孔	17C 後半	152-48
84	14	匙	青銅	C1	152-2	上層	18.5	2.35	0.025	14.2	0.6	0.35	20.14	巻込 黄金	18 後～近代	152-50
84	15	匙	銅	D2	152-北埋土		17.9	2.5	0.05	(14.1)	0.6	0.1	16.49	巻込物		152-49
84	16	匙	銅	B1	152-2	水路埋土	(8.4)	2.3	0.05	(8.2)	-	-	4.91	巻込物付き	17C～近代	152-46
84	17	匙	銅	J8	152-表土	豊地土1	6.28	3.05	0.05	-	-	-	6.36	巻込物		152-47
84	18	漆研	鉄	J9	152-豊地土2		17.9	1.9	0.7				291.03	鍋蓋品 3/4残存		152-57
84	19	土甌	銅	G6	152-表土	豊地土1	(11.8)	11.1	(4.1)	2.7			96.74			152-13

第41表 調度品・その他観察表

図面 番号	種類	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主 な遺物の時期	金属 番号		
			地区	遺構番号	層位	cm			g							
85	1	引手金具	銅	J10	152-豊地土3		1.2	4.65	0.9				24.29	穿孔あり	17C 後半	152-28
85	2	引手金具	銅	B10	152-豊地土3		1.6	4.9	0.7				23.49	穿孔あり	17C 後半	152-29
85	3	引手金具	銅	C8	151-3	石堀内5層以下	2.1	5.32	0.2				2.35		～近代	151-26
85	4	引手金具	銅	J5	151-108	20層	4.3	7.6	0.45						18C 後～	151-27
85	5	鎖引手金具	銅	B8	152-表土	豊地土1	8.2	5.5	0.75				45.57	植物・産物の痕跡		152-30
85	6	環付金具	銅	J6	151-100	2層	2.65	0.05	2.0	1.5			6.93	鉄片金具・銅金具	18C 後～	151-61
85	7	環金	銅	J6	151-100	2層	2.6	0.5					0.95	有環金	18C 後～	151-62
85	8	環金	銅	J8	152-213		2.3	0.92					2.28	有環金	～17C 中	152-63
85	9	鍔金具	鉄	J5	151-108	6層以下	4.5	5.2	0.65	0.1			14.56	鍔付鍔金具	18C 後～	151-5
85	10	鍔金具	銅	J9	152-表土	豊地土1	2.5	4.3	0.55	-			8.34	鍔付鍔金具		152-10
85	11	鍔金	鉄	J8	152-206		(4.7)	2.4	0.9				10.57		～17C 中	152-56
85	12	鍔金	銅	J5	151-108	6層以下	(4.1)	2.6	0.1				6.33	鍔金	18C 後～	151-6
85	13	鍔金	銅	J5	151-108	6層以下	(5.7)	2.9	0.1				6.64	鍔金	18C 後～	151-7
85	14	鍔金	鉄	J9	152-表土	豊地土1	5.6	3.95	0.1				10.36	三凹の端部に連続線		152-8
85	15	駒受金具	鉄	-	151-豊地土1		2.8	4.3	0.9	0.5			6.28			151-56

第5章 金属製品

図面番号	押印番号	種別	属性	出土地点		計測値						備考	出土遺物の主な遺物の時期	金属番号	
				地区	遺構番号	層位	cm			g					
							径	高	厚						
85	16	銅金具	銅	B1	152-2	奥土土	7.0	(0.5)	0.05			18.41	内科花弁状 表裏両面	17C～	152-45
85	17	鍍金製品	鉄	15-36	151-跡水溝(南)		18.19	0.8	0.12	0.2		6.41	平板状		151-35
85	18	銅金具	鉄	B1	152-惣土土3	(5.0)	-	(6.6)	0.15	4.6	18.8		17C後半	152-9	
85	19	佛印	銅	C1	152-覆瓦37		5.1	1.9	0.55	3.4	58.23	種二文字型		152-38	
85	20	銅金具	鉄	J5	151-108	13層	7.45	2.45	0.2		6.8		18C後半	151-11	
85	21	針金製品	鉄	J9	152-32	第4砂利台下露土	3.5	3.7	0.3	1.3	2.9	8.34	扇状製品 両面突起	17C前半	152-36

第42表 銭貨観察表

図面番号	押印番号	銭文	初繰年	材質	出土地点		計測値						備考	出土遺物の主な遺物の時期	金属番号
					地区	遺構番号	層位	mm			g				
								径	内径	孔徑					
86	1	東水滲漕	1636	銅	-	151-惣土土1		2.42	1.96	0.29	2.36		古裏土	151-10	
86	2	東水滲漕	1636	銅	C8	151-TR10		2.1	1.95	0.52	2.96		古裏土	151-11	
86	3	東水滲漕	1636	銅	G9	151-北土		2.5	1.97	0.53	3.51		古裏土	151-12	
86	4	東水滲漕	1636	銅	C1	152-2	水路跡土	2.37	1.89	0.55	3.37		古裏土	17C～近代	152-13
86	5	東水滲漕	1636	銅	C10	152-2	水路跡土	2.43	1.94	0.54	3.38		古裏土	17C～近代	152-14
86	6	東水滲漕	1636	銅	C10	152-2	水路跡土	2.42	1.92	0.54	2.95		古裏土	17C～近代	152-15
86	7	東水滲漕	1636	銅	B1	152-2	底面	2.45	1.95	0.51	3.6		古裏土 下層土	17C	152-16
86	8	東水滲漕	1636	銅	B1	152-2	底面	2.52	1.95	0.59	3.5		古裏土	17C	152-17
86	9	東水滲漕	1636	銅	B1	152-2	底面	2.46	1.95	0.5	4.38		古裏土	17C	152-18
86	10	東水滲漕	1636	銅	B10	152-81 F	惣土土2	2.46	2.01	0.48	3.66		古裏土	18C後半～	152-19
86	11	東水滲漕	1636	銅	B10	152-81 F	惣土土2	2.48	1.93	0.51	3.06		古裏土	18C後半～	152-20
86	12	東水滲漕	1636	銅	B10	152-81 F	惣土土2	2.5	1.95	0.53	3.01		古裏土	18C後半～	152-21
86	13	東水滲漕	1636	銅	B10-1	152-191		2.46	1.89	0.52	2.65		古裏土	17C後半	152-22
86	14	東水滲漕	1636	銅	B1	152-255		2.48	1.98	0.54	2.89		古裏土	17C後半	152-23
86	15	東水滲漕	1636	銅	J9	152-北土	惣土土1	2.35	1.85	0.5	2.87		古裏土	17C後半	152-24
86	16	東水滲漕	1636	銅	18	152-北土	惣土土1	2.43	1.92	0.48	3.71		古裏土	152-25	
86	17	東水滲漕	1636	銅	J9	152-惣土土2		2.5	1.97	0.51	3.24		古裏土	152-26	
86	18	東水滲漕	1636	銅	B10	152-惣土土2		2.5	2.0	0.5	3.61		古裏土	152-27	
86	19	東水滲漕	1636	銅	B10	152-惣土土2		2.42	1.95	0.54	2.6		古裏土	152-28	
86	20	東水滲漕	1636	銅	B10	152-惣土土2		2.37	1.92	0.51	2.64		古裏土	152-29	
86	21	東水滲漕	1636	銅	B10	152-惣土土2		2.5	2.05	0.53	3.27		古裏土	17C後半	152-30
86	22	東水滲漕	1636	銅	J9	152-北土		2.45	1.92	0.52	3.1		古裏土	17C後半	152-31
86	23	東水滲漕	1636	銅	B10	152-惣土土3		2.49	1.98	0.53	3.1		古裏土	17C後半	152-32
86	24	東水滲漕	1636	銅	C1	152-惣土土3		2.45	2.01	0.54	2.82		古裏土	17C後半	152-33
86	25	東水滲漕	1636	銅	A9	152-覆瓦21		2.43	1.95	0.51	2.24		古裏土	152-34	
86	26	東水滲漕	1636	銅	B1	152-北土		2.46	1.99	0.53	2.98		古裏土	152-35	
86	27	東水滲漕	1636	銅	D2	152-北土		2.47	1.95	0.55	3.18		古裏土	152-36	
86	28	東水滲漕	1636	銅	D4	161-1+1		2.37	1.85	0.53	1.65		古裏土	16C後半	152-37
86	29	東水滲漕	1636	銅	G10	151-112-4		2.46	1.94	0.56	3.24		江坂土	16C後半	152-38
86	30	東水滲漕	1668	銅	C1	152-2	水路跡土	2.58	2.1	0.55	3.13		江坂土	17C～近代	152-45
86	31	東水滲漕	1668	銅	J9	152-165		2.53	2.1	0.57	3.59		江坂土	18C後半～	152-47
86	32	東水滲漕	1668	銅	C1	152-惣土土1		2.51	1.97	0.52	2.58		江坂土	152-50	
86	33	東水滲漕	1697	銅	-	151-惣土土1		2.32	1.83	0.56	2.92		新裏土	151-40	
86	34	東水滲漕	1697	銅	B7	151-惣土土1	砂層	2.45	1.93	0.58	2.98		新裏土	151-42	
86	35	東水滲漕	1697	銅	C1	152-2	水路跡土	2.32	1.79	0.66	2.17		新裏土	17C～近代	152-43
86	36	東水滲漕	1697	銅	B1	152-2	水路跡土	2.3	1.86	0.6	2.64		新裏土	17C～近代	152-44
86	37	東水滲漕	1697	銅	G2	152-北土	惣土土1	2.58	2.01	0.57	2.86		新裏土	152-48	
86	38	東水滲漕	1697	銅	F7	152-惣土土1		2.29	1.85	0.65	2.80		新裏土	152-49	
86	39	東水滲漕	1697	銅	A10	152-惣土土2		2.4	1.85	0.58	2.88		新裏土	152-51	
86	40	東水滲漕	1697	銅	B10	152-惣土土2		2.25	1.82	0.7	2.14		新裏土	152-52	
86	41	東水滲漕	1697	銅	J9	152-覆瓦20 下段		2.2	1.82	0.63	2.3		新裏土	152-54	
86	42	東水滲漕	1697	銅	H2	152-覆瓦13		2.28	1.87	0.63	2.18		新裏土	152-55	
86	43	東水滲漕	1697	銅	J6	151-117		2.52	1.73	0.62	1.63		江坂土 背[北]	151-53	
86	44	東水滲漕	1697	銅	B10	152-惣土土4		2.25	1.66	0.52	2.18		新裏土 背[北]	17C	152-53
86	45	東水滲漕	1697	銅	J6	151-惣土土1	TR19 4層	2.54	1.92	0.57	1.85		新裏土 背[北]	151-41	
86	46	東水滲漕	1739	鉄	J6	151-100	1層	2.34	1.82	0.59	2.24		鉄～文銭	18C後半	151-7
86	47	東水滲漕	1739	鉄	J6	151-100	1層	2.45	1.92	0.66	2.63		鉄～文銭	18C後半	151-8
86	48	東水滲漕	1739	鉄	J6	151-100	1層	2.42	1.92	0.56	2.85		鉄～文銭	151-9	
86	49	東水滲漕	1739	鉄	C1	152-2	水路跡土	2.43	1.91	0.63	1.77		鉄～文銭	17C～近代	152-46
86	50	瓦文字型	1009	銅	D8	151-224		2.4	2.03	0.6	2.83		江坂土	17C	151-102
86	51	佛眼透漕	959	鉄	B10	152-281		2.44	1.94	0.58	2.84		新裏土	17C前半	152-97
86	52	陶文滲漕	960	銅	J9	152-32	第3砂利台下露土	2.41	1.94	0.62	2.94		西葦	17C前半	152-5
86	53	陶文滲漕	960	銅	A1	152-惣土土3		2.44	2.04	0.62	2.5		西葦	17C後半	152-6
86	54	浮化文型	990	銅	A1	151-100	6層	2.44	1.92	0.6	2.12		西葦	18C後半	151-78
86	55	浮化文型	998	銅	C10	152-2	水路跡土	2.45	1.84	0.6	3.46		西葦	17C～近代	152-99
86	56	浮化文型	998	銅	B10	152-惣土土3		2.41	1.91	0.52	2.12		西葦	17C後半	152-100
86	57	浮化文型	1009	銅	F10	151-5		2.4	1.79	0.6	2.83		江坂土	17C	151-79
86	58	浮化文型	1009	銅	J9	152-惣土土3	惣土土3	2.36	1.83	0.6	2.32		西葦	17C後半	152-81
86	59	浮化文型	1009	銅	J9	152-惣土土2	惣土土2	2.4	1.88	0.49	2.75		西葦	152-80	
86	60	天網透漕	1017	銅	D8	151-224		2.32	1.82	0.58	2.3		西葦	17C	151-93
86	61	天網透漕	1017	銅	J9	152-32	第2砂利台下露土	2.42	1.89	0.66	3.0		西葦	17C後半	152-92
86	62	天網透漕	1017	銅	J9	152-178		2.38	1.77	0.62	2.69		江坂土	152-94	
86	63	天網透漕	1017	銅	C1	152-惣土土3		2.3	1.91	0.53	2.68		江坂土	152-95	
86	64	天網透漕	1017	銅	H7	152-覆瓦20		2.45	2.03	0.62	2.29		江坂土	152-96	
86	65	天網透漕	1023	銅	B-9	152-166		2.49	1.97	0.66	3.02		西葦	18C後半～	152-90

図面 番号	神岡 番号	経文	初録年	材質	出土地点			計測値		備考	出土遺物の主 な遺物の時期	金属 番号	
					地区	遺積番号	層位	mm	g				
86	66	天型元管	1023	銅	A10	152-135南側	敷地土3	2.46	1.98	0.64	3.18	鍍青	152-91
86	67	明型元管	1032	銅	A9	152-敷地土2	敷地土2	2.45	1.91	0.62	2.75	鍍青	152-98
86	68	天型元管	1034	銅	J10	152-敷地土3		2.47	1.88	0.64	2.87	鍍青	17C-後半
86	69	泉元流管	1038	銅	C1	152-2	水跡層土	2.5	1.86	0.66	3.0	鍍青	17C-近代
86	70	泉元流管	1038	銅	J8	152-204		2.32	1.87	0.67	2.03	鍍青	~17C中
86	71	泉元流管	1038	銅	J9	152-敷地土2		2.42	1.95	0.65	1.62	鍍青	152-73
86	72	泉元流管	1038	銅	J8	152-敷地土2		2.38	1.67	0.61	2.82	鍍青	152-75
86	73	泉元流管	1038	銅	A10	152-敷地土2		2.42	1.85	0.64	2.8	鍍青	152-76
86	74	出元流管	1064	銅	E9	151-西門下層		2.38	1.86	0.59	2.61	鍍青	晋下月
86	75	明型元管	1068	銅	D1	152-北側		2.39	1.87	0.64	2.52	鍍青	152-94
86	76	天型流管	1078	銅	C1	152-2	水跡層土	2.49	1.82	0.69	3.28	行青	17C-近代
86	77	天型流管	1078	銅	J10	152-敷地土3		2.44	1.88	0.66	3.01	行青	17C-後半
86	78	天型流管	1078	銅	C1	152-敷地土3		2.45	1.92	0.73	2.96	行青	17C-後半
86	79	天型流管	1078	銅	J-A10	152-223南	敷地土3-4	2.41	1.9	0.66	3.44	行青	152-64
86	80	天型流管	1078	銅	J9	152-地底20	西下	2.36	1.86	0.66	2.84	行青	152-65
86	81	天型流管	1078	銅	G10	161-汲舎裏		2.42	1.85	0.5	3.53	行青	161-66
86	82	天型流管	1086	銅	C10	152-2	水跡層土	2.42	1.9	0.66	3.43	鍍青	17C-近代
86	83	天型流管	1086	銅	B1	152-2	地面	2.43	2.03	0.64	3.76	行青	17C
86	84	天型流管	1086	銅	A10	152-敷地土2		2.36	1.85	0.67	1.75	鍍青	152-69
86	85	明型元管	1094	銅	B10	152-333		2.44	1.8	0.68	2.78	行青	152-82
86	86	明型元管	1094	銅	J9	152-敷地土2	敷地土2	2.42	1.85	0.69	3.4	鍍青	152-83
86	87	明型元管	1094	銅	J9	152-敷地土3	敷地土3	2.43	1.84	0.69	3.02	鍍青	17C-後半
86	88	明型元管	1094	銅	A10	152-敷地土4	敷地土4	2.47	1.88	0.65	2.18	鍍青	17C-前半
86	89	天型流管	1098	銅	D2	152-掘丸		2.42	1.94	0.65	2.85	鍍青	152-59
86	90	泉元流管	1101	銅	J9	152-32	新2砂利面下盛土	2.41	1.95	0.65	2.09	鍍青	17C-前
86	91	泉元流管	1101	銅	C1	152-敷地土3	敷地土3	2.44	1.91	0.66	2.97	鍍青	17C-後半
86	92	泉元流管	1101	銅	D1	152-敷地土3	敷地土3	2.37	1.83	0.69	2.64	行青	17C-後半
86	93	洪式流管	1368	銅	D8	151-224		2.21	1.87	0.59	1.58	~17C中	151-70
86	94	洪式流管	1368	銅	C8	151-F10		2.27	1.91	0.59	1.31		151-71
86	95	水型流管	1406	銅	D2	152-1	地面	2.49	2.06	0.53	3.13		18C-後半
86	96	水型流管	1408	銅	J8	152-295		2.54	2.03	0.48	2.79	~17C中	152-3
86	97	水型流管	1408	銅	J9	152-北土	敷地土1	2.46	2.0	0.48	2.29		152-3
86	98	水型流管	1408	銅	J9	152-敷地土3		2.49	2.03	0.48	3.25		152-4
86	99	露長流管	1506-1615	銅	J9	152-敷地土3		2.33	1.97	0.63	1.85		17C-後半
86	100	鏡餅	1697	銅	A10	152-敷地土5		2.39	1.85	0.54	4.67	2枚鏡餅	152-56
86	101	鏡餅	1678	銅	D1	152-敷地土2		2.45	1.87	0.65	4.47	行青 2枚鏡餅	152-61
86	102	鏡餅	1104	銅	J-A10	152-223南	敷地土3-4	2.41	2.02	0.63	4.29	鍍青 2枚鏡餅	152-69
86	103	鏡餅		銅	J-A10	152-223南	敷地土3-4	2.34	1.9	0.57	29.88	鍍青鏡餅 表面土もろ	152-103
86	104	鍔首鏡		銅	J5	151-108	6層以下	2.25	1.55	0.7	2.76	鍍青	18C-後
86	105	鍔首鏡		銅	C1	152-2	水跡層土	2.05	1.25	0.7	2.18		17C-近代
86	106	鍔首鏡		銅	B1	152-2	水跡層土	2.1	1.55	0.4	1.79		17C-近代

第43表 鋳造関連遺物観察表

図面 番号	神岡 番号	類別	地区	遺積番号	層位	計測値			備考	出土遺物の主 な遺物の時期	遺物 番号
						mm	g	重量			
87	1	取敷-埋物	C1	152-291		3.5	1.5	0.35	8.64		17C-前
87	2	取敷-埋物	C1	152-敷地土3		3.80	1.4	0.7	7.28		17C-後半
87	3	取敷-埋物	B1	152-2		4.2	1.8	0.6	1.96		17C-近代
87	4	取敷-埋物	D1	152-敷地土2		4.4	1.9	0.7	18.25		T-20
87	5	取敷-埋物	J9	152-205		(5.0)	2.2	0.9	19.88		~17C中
87	6	取敷-埋物	C1	152-2	土層	(4.8)	1.4	0.7	14.44	152-4-4-C13・152-2-12-C13融合	18後-近代
87	7	取敷-埋物	B1	152-2	土層	(5.5)	2.6	0.5	7.12		18後-近代
87	8	取敷-埋物	B10	152-敷地土3		6.0	3.2	0.8	46.49		17C-後半
87	9	取敷-埋物	C2	152-敷地土3		5.2	3.0	1.3	67.48		T-24
87	10	取敷-埋物	B1	152-敷地土3		6.2	3.0	1.1	70.84		T-25
87	11	取敷-埋物	C1	152-2		(6.8)	2.9	0.8	28.6		17C-近代
87	12	取敷-埋物	B1	152-敷地土3		6.8	3.4	0.9	62.76		T-21
87	13	取敷-埋物	C1	152-敷地土2		-	3.0	1.0	12.74		T-19
87	14	取敷-埋物	E5	161-汲舎裏Ⅱ		-	(1.7)	7.5	2.30	現存6分の1 外周面遺物 子ノ丸 埋着	T161-37
87	15	取敷	B6	151-敷地土2	T1817層	-	(3.4)	0.4	13.80	鉄組1鏡片に付着	T151-9
87	16	取敷	C1	152-2		4.6	1.8	0.4	27.21	型ノコ	17C-近代
						鏡 厚					
88	1	引口	B10	152-233		(23.4)	11.8		318.0		~18C
88	2	引口	J9	152-敷地土2		(22.6)	11.2		286.0	外側に塩漬孔の遺りあり	T-6
88	3	引口	J9	152-敷地土2		(18.4)	11.8		213.00		T-10
88	4	引口	J9	152-敷地土2		(22.1)	11.8			層面に突起あり	T-8
88	5	引口	J9	152-210		(21.2)	11.0		2309.0		~17C中
88	6	引口	J9	152-敷地土3		(8.0)	11.8		10.99		T-7
88	7	土製引口	D5	161-382-1		(3.4)	(4.5)		12.13	鏡片着色	17C
						鏡 厚					
89	1	鍔型	B1	152-2	土層	3.9	1.9	2.0	204.23	引子金品	18後-近代
89	2	鍔型	G7	152-敷地土1		2.4	4.5	6.6	162.41	引子金品	T-2
89	3	鍔型	D4	161-1		3.7	6.2	2.6	103.82	引子金品	18C
89	4	鍔型	D4	161-4		4.2	5.7	0.9	48.09	引子金品	18C-後
						鏡 厚					
90	1	此洋	H1	161-271		5.8	4.4	2.5	63.14		古銅-古代
90	2	此洋	E5	161-337		7.0	5.4	2.3	76.23		近世
90	3	此洋	H1	161-汲舎裏Ⅱ		5.6	6.85	1.7	85.24	鍔形 取手を含む	T161-3
90	4	此洋	H1	161-汲舎裏Ⅱ		3.9	5.8	0.9	40.8		T161-4
90	5	此洋	J9	151-105	J層	6.8	4.7	2.4	55.29		17C

第5章 金属製品

図面番号	探洞番号	種別	出土地点			計測値			備考	出土遺物の主な遺物の時期	遺物番号
			地区	遺物番号	層位	cm		g			
90 6	底洋	F10	151-130			6.8	5.2	1.6		79.45	
90 7	底洋	F9	151-281			5.0	4.0	2.2		50.92	T151-7
90 8	底洋	-	151-豊地土3	TR19-20層		5.35	4.0	2.25		40.25	T151-10
90 9	底洋	D8	151-豊地土			4.3	4.0	1.3		52.46	T151-11
90 10	底洋	D9	151-古代以降の堆積土			4.8	3.8	1.8		40.55	T151-12
90 11	底洋	D8	151-古代以降の堆積土			6.9	6.4	2.7		100.97	T151-13
90 12	底洋	J9	152-32	第2砂利面 下層土		6.0	6.1	4.5		158.38	炭を含む 17C前～ T152-14
90 13	底洋	J9	152-158			7.3	8.85	3.75		270.0	18C T152-15
90 14	底洋	J9	152-158			7.7	3.6	4.5		104.38	18C T152-16
90 15	底洋	J8-9	152-206			7.2	7.2	3.3		156.20	炭を含む ～17C中 T152-24
90 16	底洋	J9	152-158			0.4	6.4	2.4		96.61	18C T152-17
90 17	底洋	B10-1	152-191			5.0	4.5	3.2		83.36	炭を含む 17C後 T152-18
90 18	底洋	B10-1	152-191			5.3	4.3	2.5		64.66	17C後 T152-19
90 19	底洋	J8	152-205			6.6	3.9	2.7		59.39	～17C中 T152-20
90 20	底洋	J8	152-205			5.4	4.5	2.2		53.22	炭を含む ～17C中 T152-21
90 21	底洋	J8	152-205			6.2	4.0	2.6		65.87	炭を含む ～17C中 T152-22
90 22	底洋	J8-9	152-206			5.3	4.0	2.2		44.37	～17C中 T152-25
90 23	底洋	J8-9	152-206			5.7	4.5	2.7		62.19	～17C中 T152-26
90 24	底洋	B1	152-255			5.6	4.4	3.3		117.91	鉄洋 17C後 T152-27
90 25	底洋	B10	152-281			5.9	5.3	3.6		85.81	炭を含む 17C前 T152-28
90 26	底洋	J9	152-豊地土2			5.1	5.0	2.9		76.02	柄杓 T152-29
90 27	底洋	J8-9	152-206			3.5	5.0	1.6		29.66	引上等から測られたものか ～17C中 T152-23
90 28	底洋	J9	152-豊地土2			9.0	7.8	3.4		192.0	炭を含む T152-30
90 29	底洋	J8	152-豊地土3			10.25	5.6	5.0		113.55	17C後半 T152-31
90 30	底洋	J9	152-豊地土3			0.4	5.6	3.2		106.61	炭を含む 17C後半 T152-32
90 31	底洋	J-A10	152-豊地土3-4			10.4	8.6	3.9		382.0	17C T152-33
90 32	底洋	J-A10	152-豊地土3-4			11.2	9.5	2.45		378.0	17C T152-34
90 33	底洋	B10	152-豊地土4			5.0	5.0	3.5		66.47	鉄洋 17C後半 T152-35
						縦	横	厚			
90 34	鎌倉素材	A7	151-豊地土2			1.8	1.85	0.75		11.75	鉛 T151-39
90 35	鎌倉素材	B6	151-豊地土2	南側排水溝		-	2.0	0.4		11.09	鉛 T151-8
90 26	鎌倉素材	C7	151-豊地土40			1.8	1.9	0.1		2.68	鉛 T151-40
90 37	鎌倉素材	J8	152-213			(3.2)	1.0	0.1		3.05	鉛 ～17C中 T152-38

第6章 自然科学分析

本章では、本調査で出土した遺物の自然科学分析（素材同定）、自然遺物の同定（大型植物遺体、貝類・動物骨）、土壌分析、木製品の樹種同定と塗膜分析結果について報告する。

第1節 素材同定

1) 試料と方法

試料は、土坑 151-19 と廃棄土坑 151-28 から出土した縄が 4 点と、井戸 151-108 から出土した縄が 2 点の合計 6 点である。

方法は、まず肉眼と実体顕微鏡で試料を観察し、樹脂包埋試料として一部を採取した。樹脂包埋は、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包埋した。樹脂包埋試料はマイクロトームを用いて切片を作製し、プレパラートに封入した。プレパラートは光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

2) 結果

同定の結果、151-19 と 151-28 出土の縄はシュロの葉鞘繊維、151-108 出土の縄はイネの稈と、アサの韌皮繊維であった。結果を第 44 表に示す。

第 44 表 素材同定結果

試料 No.	遺構名	遺物 No.	グリッド	層	遺物	遺物幅	素材	備考
1	151-19	1	B6	-	縄	0.6cm	シュロ (葉鞘繊維)	-
2	151-19	2	B6	-	縄	0.6cm	シュロ (葉鞘繊維)	-
3	151-19	6	B6	-	縄	0.8cm	シュロ (葉鞘繊維)	-
4	151-28	12	D8	5 層以下	縄	2.2cm	シュロ (葉鞘繊維)	-
5	151-108	31	J5	20 層	縄	0.6cm	イネ (稈)	炭化
6	151-108	36	J5	29-30 層	縄	0.3cm	アサ (韌皮繊維)	炭化

次に、素材植物の特徴と同定根拠を示す。また、代表的な試料の写真と光学顕微鏡写真を図版第 59 に示す。

シュロ *Trachycarpus fortunei* (Hook.) H.Wendl. ヤシ科 図版第 59-1 (遺物 No. 1)、2 (遺物 No. 2)、3 (遺物 No. 6)、4 (遺物 No.12)

繊維状遺物の断面は円形～楕円形で、直径は 0.3～0.5mm 程度である。断面を構成している細胞は繊維細胞で、厚壁で細胞間隙なく密集している。繊維細胞は太いものでは 1 本の維管束とそれを帽子状に取り囲む大きな繊維細胞束からなり、細いものでは維管束はなく繊維細胞のみからなる。

イネ *Oryza sativa* L. イネ科 図版第 59-5 (遺物 No.31)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類の稈である。維管束は一对の道管と、それと直行する原生木部間隙と師部で形成される。維管束は表皮直下の厚壁細胞にみられる。中心にみられる空隙は、つぶれて扁平になっている。つぶれた形状について、人為か自然かの判断は難しい。以上の特徴から、イネの稈と同定した。

アサ *Cannabis sativa* L. アサ科 図版第59-6 (遺物 No.36)

素材の断面は楕円形～多角形で、直径6～12 μ mの細胞が数10個ほど密集している。炭化しているため、細胞内の組織は壊れて空洞化している。繊維細胞の塊が断面で扁平な楕円形～多角形になる可能性のある植物としては、アサ、シナノキ属、ニレ属が挙げられる。しかし、シナノキ属、ニレ属では繊維細胞塊に必ず柔組織や節管要素等が混在し、また幅広い放射組織に分散されるなどして繊維細胞のみからなる素材を得るのは難しい。アサは韌皮部を剥がし取り、表皮、皮層等を取り除いてテープ状にし、それを敲く、揉むなどして柔軟にすると細く裂け、ほぼ繊維細胞のみからなる塊となる。本試料は炭化しているため組織が観察できたのはほんの一部分だが、大きさの揃った細胞が密集して楕円形～多角形の塊となっており、現生アサの縄製品と極めて良く一致する。出土遺物の繊維細胞径は6～12 μ mで、現生アサ繊維が8～18 μ m程度であるのに比べて一回り小さい。また、出土遺物では細胞壁が薄く、細胞内腔が大きい。このような現生アサとの違いは、炭化によって収縮し、細胞壁がやせ細った結果であると考えられる。以上から、本試料の素材はアサであると判断した。

3) 考察

151-19 出土の縄(遺物 No. 1・2・6)と151-28 出土の縄(遺物 No.12)は、シュロの葉鞘繊維であった。シュロは西南日本に生育する植物であり、福井県域には自生しない。しかし、近世には縄等の製品として、福井城下に流通していたと思われる。新宿区の若葉三丁目遺跡や南元町遺跡などでもシュロの縄や束子が確認されている(小林他 2015)。シュロの葉鞘の繊維は丈夫で水はけがよく腐りにくいため、現代でも束子や縄の素材として利用されている。

151-108 出土の縄(遺物 No.31)は、イネの稈であった。稲藁の分析事例はまだ少ないが、稲作地帯では一般的に利用されていたと考えられる。

151-108 出土の縄(遺物 No.36)は、アサの韌皮繊維であった。アサ(*Cannabis sativa* L.)は、アサ科アサ属の一年生草本である。中央アジアが原産とされ、日本列島では縄文時代早期にアサの果実が確認されている(工藤・一木 2014)。江戸時代から昭和初期にかけては全国的に栽培・利用されていた(篠崎 2014)。福井城下でも栽培されていたか、製品が流通で持ち込まれたと考えられる。

引用・参考文献

- 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男 2015 「南元町遺跡第3次調査出土繊維製品等の素材植物」国際文化財株式会社編『南元町遺跡Ⅲ』住友不動産 pp.248-254
- 工藤雄一郎・一木絵里 2014 「縄文時代のアサ出土例集成」工藤雄一郎編『国立歴史民俗博物館研究報告 第187集 縄文時代の人と植物の関係史』国立歴史民俗博物館 pp.425-440
- 佐竹義輔・原 寛・亙理俊次・富成忠夫 1989 「日本の野生植物 木本Ⅱ」平凡社 p.288
- 篠崎茂雄 2014 「アサ利用の民俗学的研究」工藤雄一郎編『国立歴史民俗博物館研究報告 第187集 縄文時代の人と植物の関係史』国立歴史民俗博物館 pp.405-420

第2節 自然遺物

1 大型植物遺体

1) 試料

試料は、15-1 調査区で井戸・溝・廃棄土坑・土坑等から出土した種実遺体 38 点と葉遺体 2 点の計 40 点、15-2 調査区で水路・井戸・土坑から採取された 12 試料 28 点である。

各試料の詳細は第 45 表に示す。

2) 分析方法

試料を肉眼および（双眼）実体顕微鏡下で観察する。

3) 結果

(1) 大型植物遺体の出土状況

同定結果を第 45 表に、15-1 調査区については大型植物遺体の出土状況を第 46 表と以下に示す。

種実試料

木本 11 分類群（イチョウ、マツ属複雑管束亜属、オニグルミ、ヒメグルミ、クスギ節（クスギ?）、クリ、ウメ、スモモ、モモ、サンショウ、カキノキ）の種実 195 個と、草本 11 分類群（イネ、エノコログサ属、カナムグラ、アカザ属、ヒユ属、クサネム、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、ニホンカボチャ近似種、ナス）の種実 1,587 個の、計 1,782 個が同定された。その他、1 個（廃棄土坑 151-28 5 層以下）は部位および分類群が不明、1 個（TR17）は不明で虫類の蛹の可能性がある。1 個（溝 151-6 8 層）は種実ではなく虫えいで、ナラメイガフシに似る。

栽培種は、イチョウの種子が 3 個（廃棄土坑 151-28・103、151-整地土 1）、ウメの果実・核が 1 個（土坑 151-26）、核が 15 個（溝 151-6、土坑 151-26、廃棄土坑 151-28、151-整地土 1）、スモモの果実・核が 3 個（廃棄土坑 151-28）、核が 29 個（廃棄土坑 151-28・100、151-整地土 1・2、151-近代造成土、攪乱 12）、モモの核が 24 個（溝 151-6・23、土坑 151-26、廃棄土坑 151-28・100・204、攪乱 12）、種子が 1 個（溝 151-6）、カキノキの種子が 6 個（廃棄土坑 151-28）、イネの穎が 3 個（溝 151-5）、雑草メロン型の種子が 55 個（溝 151-5、土坑 151-26）、炭化種子が 1 個（土坑 151-26）、マクワ・シロウリ型の種子が 175 個（溝 151-5、土坑 151-26）、炭化種子が 5 個（土坑 151-26）、メロン類の果実・種子が 3 個（溝 151-5）、種子が 600 個（溝 151-5、土坑 151-26）、ニホンカボチャ近似種の種子が 727 個（井戸 151-4、土坑 151-26、廃棄土坑 151-100・204、151-整地土 1）、果柄が 11 個（廃棄土坑 151-28）、ナスの種子が 1 個（土坑 151-26）の、計 1,663 個が確認された。栽培種が大型植物遺体群全体の 93% を占める。栽培種は、メロン類（マクワ・シロウリ型、雑草メロン型）が最も多く、ニホンカボチャ近似種が次ぐ。

その他の分類群は、木本は、常緑針葉樹で高木になるマツ属複雑管束亜属の球果が 38 個（廃棄土坑 151-28・385、151-整地土 1）、種鱗が 22 個（廃棄土坑 151-28）、種子が 1 個（廃棄土坑 151-28）と落葉広葉樹で高木になるオニグルミの核が 4 個（土坑 151-26、廃棄土坑 151-28・103）、ヒメグルミの核が 1 個（廃棄土坑 151-100）、クスギ節（クスギ?）の果実が 1 個（廃棄土坑 151-28）、クリの果実が 43 個（廃棄土坑 151-28）、低木のサンショウの種子が 3 個（土坑 151-26）の、計 113 個が確認された。

草本は、中生植物のエノコログサ属の果実が 1 個（土坑 151-26）、カナムグラの核が 1 個（廃棄土坑 151-106）、アカザ属の種子が 1 個（溝 151-5）、ヒユ属の果胞・種子が 1 個（溝 151-5）、種子が 1 個（土坑 151-26）、湿生植物のクサネムの果実が 1 個（溝 151-5）の、計 6 個が確認された。

葉試料

常緑針葉樹のスキの枝・葉が、廃棄土坑 151-204 の 9 層から 5 個、廃棄土坑 151-259 から 2 個、落葉広葉樹のクリの葉が廃棄土坑 151-28 の 5 層以下から 1 個の、計 8 個が確認された。

(2) 主な大型植物遺体の記載

大型植物遺体各分類群の写真を図版第 60・61 に、主な分類群の計測結果等を第 47～49 表、第 91 図、第 92 図に示して同定根拠とする。大型植物遺体の保存状態は良好で、土坑 151-26 より出土したウメと廃棄土坑 151-28 より出土したスモモには核表面に果実が残る状況が確認された。また土坑 151-26 より出土したオニグルミ 1 個と雑草メロン型 1 個、マクワ・シロウリ型 5 個には炭化が認められた。その他、廃棄土坑 151-100 より出土したヒメグルミの核には頂部と基部に欠損がみられ、打撃痕の可能性がある。

以下、調査区ごとに形態的特徴等を述べる。

FKJ15-1 調査区 (栽培種)

イチヨウ *Ginkgo biloba* L. 種子 イチョウ科イチヨウ属 種子は灰褐色。完形ならば広楕円体で頂部から基部にかけて 2 本の稜があり、両端は短く尖る。種皮は堅く、表面は粗面。破片の最大は約 1/3 個分で、残存長 17.26mm、残存幅 17.72mm、半分厚 6.80mm を測る (廃棄土坑 151-103; 図版第 60-1)。

ウメ *Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc. 果実・核 バラ科サクラ属 核 (内果皮) は淡灰褐色、果実 (外果皮・中果皮) は暗灰褐色。長さ 14.4～19.4mm、幅 11.6～15.4mm、厚さ 10.0～13.7mm のレンズ状広楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で丸い臍点がある。1 本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮表面には円形の小凹点が分布する。土坑 151-26 出土核には表面に果皮 (外果皮 + 中果皮) の一部が残る状態が確認された (図版第 60-12)。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 果実・核 バラ科サクラ属 核 (内果皮) は淡灰褐色、果実 (外果皮・中果皮) は灰褐色。長さ 12.1～17.0mm、幅 9.9～12.8mm、厚さ 7.5～9.3mm のレンズ状広楕円体。内果皮表面は、ウメよりも平滑でごく浅い凹みが不規則にみられる。廃棄土坑 151-28 出土核には表面に果皮 (外果皮 + 中果皮) の一部が残る状態が確認された (図版第 60-11)。

モモ *Prunus persica* Batsch 核・種子 バラ科サクラ属 核 (内果皮) は灰褐色。長さ 24.9～31.1mm、幅 15.9～22.2mm、厚さ 12.7～17.4mm のやや偏平な広楕円体で頂部が尖る。内果皮表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、粗い皺状にみえる (図版第 60-13・14)。151-28 出土核の腹面にはネズミ類による食痕と考えられる円形の孔がある (図版第 60-14)。内面には種子 1 個が入る長さ 18.1mm、幅 11.1mm の広卵状の窪みがある (図版第 60-15)。溝 151-6 出土核とともに出土した種子は暗灰褐色で長さ 15.2mm、幅 8.6mm の偏平な卵形を呈す。

カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科カキノキ属 種子は黒褐色。完形ならば偏平な非対称倒広卵体。種子には縦に 1 周する稜があり、背面は丸みを帯び、腹面は直線状。腹面基部に 1mm 程度の楕円形の孔がやや突出する。種皮は薄く硬く、表面は粗面。151-28 出土種子は全て破片で、計 1 個体未満である。破片の最大は約 1/4 個分で残存長 14.98mm、同幅 12.28mm を測る (図版第 60-17)。

イネ *Oryza sativa* L. 穎 イネ科イネ属 穎は淡灰褐色で、完形ならば長さ 6.0～7.5mm、幅 3.0～4.0mm、厚さ 2.0mm 程のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。穎は柔らかく表面には顆粒状突起が縦列する。出土穎 (基部) は残存長 3.24mm を測る (図版第 60-21)。

メロン類 *Cucumis melo* L. 果実・種子 ウリ科キュウリ属 種子は淡～灰褐色、炭化種子は暗灰褐色～黒色。扁平な狭倒皮針体を呈し、基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面には縦長の細胞が配列する（図版第60-24・25、第61-31）。一部の表面に果肉が残る状況も確認された（図版第60-25）。

状態良好な一部の出土種子を対象とした計測値（付表省略）のうち、土坑151-26の3層出土種子は長さが4.95～8.06（平均6.65±0.50）mm（標本数102）、幅が2.53～3.85（平均3.22±0.23）mm（標本数102）、厚さが0.38～1.85（平均1.32±0.32）mm（標本数25）で、88個が藤下（1984）の基準による中粒のマクワ・シロウリ型（長さ6.10-8.09mm）、14個が小粒の雑草メロン型（長さ6.09mm以下）に該当する。一方、溝151-5出土種子は、長さが最小4.78～最大7.38（平均6.16±標準偏差0.47）mm（標本数100）、幅が2.25～3.38（平均2.78±0.22）（標本数100）、厚さが1.17～1.91（平均1.45±0.21mm）（標本数10）で、38個が雑草メロン型、62個がマクワ・シロウリ型に該当し、溝151-5出土種子群よりも小型の傾向を示す（第91図、第47表）。

ニホンカボチャ近似種 *Cucurbita cf. moschata* Duch. 種子・果柄 ウリ科カボチャ属 種子は灰褐色。扁平な倒卵形で基部は突出し発芽孔がある。両面全周に走る縁は明瞭で、段差があり薄くなる。種皮表面は粗面で縁付近に褐色の毛がある（図版第61-27・29・30）。廃棄土坑151-100出土種子の一部には、複数種子が密着した塊状が確認され、果実（ウリ状果）の配列を留めている（図版第61-27）。

状態良好な一部の出土種子を対象とした計測値（付表省略）のうち、廃棄土坑151-100出土種子は、長さが最小13.94～最大17.44（平均15.95±標準偏差0.79）mm（標本数100）、幅が7.47～9.79（平均9.01±0.46）mm（標本数100）、厚さが0.80～1.54（平均1.15±0.25）mm（標本数10）、廃棄土坑151-100 2・3層出土種子は、長さが11.51～15.06（平均14.10±0.87）mm（標本数28）、幅が6.67～7.73（平均7.35±0.29）mm（標本数28）、厚さが0.65～1.35（平均0.92±0.17）mm（標本数18）、151-整地土1出土種子は、長さが11.90～14.47（平均13.49±0.46）mm（標本数100）、幅が6.47～8.27（平均7.37±0.38）mm（標本数100）、厚さが1.18～1.78（平均1.56±0.17）mm（標本数10）であった。151-100出土種子群が最も大きく（図版第61-29）、151-整地土1（図版第61-30）および151-100 2・3層などの出土種子群と違いが認められた（第48表、第92図）。

果柄は灰褐色で木質。残存長21.1～69.4mm、最大径31.2～46.1mmの五角錐状。上下面観は五角形を呈す。側面には5本の縦溝があり、基部は広がりやや膨れて果実につく。廃棄土坑151-28出土果柄は頂部が切形が斜切形を呈するものが多く、鋭利な刃物等で切断された痕跡と考えられる（図版第61-28）。

カボチャ（属）は栽培のために持ち込まれた渡来種で、日本で栽培しているカボチャは16世紀に渡来したニホンカボチャ、19世紀に渡来したセイヨウカボチャ（*C. maxima* Duch.）、それより更に後れて渡来したペポカボチャ（*C. pepo* L.）の3種がある。ただし、山形県遊佐町小山崎遺跡からは縄文時代前期前葉の年代値（5,578±24y BP）が得られたカボチャ近似種の種子が出土しており（吉川2015）、渡来時期には議論の余地が残る。今回の出土果柄は、果柄が丸いセイヨウカボチャと区別される。ペポカボチャとは基部は広がらない点で概ね区別されるが、現生標本観察の結果、基部が広がるペポカボチャも確認されたため、現段階では厳密な識別は困難である。以上のことから出土果柄・種子はニホンカボチャ近似種としている。

ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科ナス属 種子は灰褐色で長さ3.04mm、幅3.51mm、厚さ0.84mm程度の扁平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し括れた部分に臍がある。表面には微細な星型状網目模様は臍から同心円状に発達する（図版第61-32）。

第45表 大型植物遺体同定結果

試料	番号	遺構名	遺構の性格	遺物No.	グリッド	層	植群	分類群	部位	状態	個数	写真番号	
棟末	1	151-4	土坑	2	CR	-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	炭化	2	-	
							雑草メロン類	種子	完形	炭化	28	24	
							マクワ・シロウリ型	種子	完形	炭化	62	-	
							メロン類	果皮・種子	完形	炭化	3	25	
	2	151-5	溝	8	F10	-	メロン類	種子	完形	炭化	28	1	
							メロン類	種子	完形未済	炭化	90	-	
							メロン類	種子	破片	炭化	17	-	
							イネ	穂(基部)	破片	炭化	1	21	
							イネ	穂	破片	炭化	2	-	
							アオウグス	種子	完形	炭化	1	18	
							ヒス属	果殻・種子	完形	炭化	1	20	
							クサネム	果実	破片	炭化	1	26	
	3	151-6	溝	4	D9	8層	1	ウメ	核	破片	炭化	1	-
							2	ヒモモ	核	完形	炭化	3	-
								ヒモモ	核	破片	炭化	1	-
	4	151-6	溝	6	D9	8層	-	種類ではない	完形	炭化	1	5	
	5	151-6	溝	9	D9	8層	1	ヒモモ	核	半分	炭化	2	15
							2	ヒモモ	種子	完形未済	炭化	1	-
	-	151-23	房江石村 狭き取り元	4	D9	1層	-	ヒモモ	核	破片	炭化	1	-
	6	151-26	土坑	5	CR	4層	-	雑草メロン類	種子	完形	炭化	3	-
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	炭化	25	-
								メロン類	種子	完形未済	炭化	9	-
								メロン類	種子	破片	炭化	8	-
								雑草メロン類	種子	完形	炭化	14	-
								雑草メロン類	種子	完形	炭化	1	-
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	炭化	4	31
								マクワ・シロウリ型	種子	完形未済	炭化	1	-
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	炭化	83	-
								メロン類	種子	完形	炭化	4	-
								メロン類	種子	完形未済	炭化	42	-
								メロン類	種子	破片	炭化	40	-
								ニホンカボチャ近縁種	種子	破片	炭化	1	-
								エンゴウダマ属	果実	完形未済	炭化	1	22
								ヒス属	種子	完形	炭化	1	19
								ヤンショウ	種子	完形	炭化	2	16
								ヤンショウ	種子	完形未済	炭化	1	-
								メロン類	種子	破片	炭化	1	-
								ナズ	種子	完形	炭化	1	32
								イニシメムシ	核	半分	炭化	1	4
								ウメ	核	完形	炭化	4	13
								ウメ	果実・種	完形	炭化	1	12
								ウメ	核	完形	炭化	2	-
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	炭化	5	-
								メロン類	種子	完形未済	炭化	1	-
								メロン類	種子	破片	炭化	1	-
	10	151-28	農業土坑	3	D8	先行トレンチ	-	マツ属産落葉雑草属	球果	完形未済	炭化	1	-
								マツ属産落葉雑草属	球果	完形未済	炭化	4	-
							マツ属産落葉雑草属	球果	完形未済	炭化	9	-	
							ウメ	核	完形未済	炭化	1	-	
							スモモ	核	破片	炭化	1	-	
							マツ属産落葉雑草属	球果	完形	炭化	1	-	
12	151-28	農業土坑	5	D8	上層(1~4層)	-	ニホンカボチャ近縁種	果物	破片	炭化	2	-	
13	151-28	農業土坑	5	D8	上層(1~4層)	-	ニホンカボチャ近縁種	果物	破片	炭化	2	-	
14	151-28	農業土坑	6	D8	下層(5層以下)	-	カキノキ	種子	破片	炭化	6	17	
15	151-28	農業土坑	6	D8	下層(5層以下)	-	クリ	果実	破片	炭化	1	-	
							クリ	果実	破片	炭化	1	-	
							ヒモモ	核	半分	炭化	2	-	
							マツ属産落葉雑草属	球果	完形	炭化	3	-	
							ヒモモ	核	完形未済	炭化	1	-	
							ウメ	核	破片	炭化	1	-	
							ウメ	核	完形未済	炭化	1	-	
							スモモ	核	完形	炭化	1	-	
							スモモ	核	半分	炭化	1	-	
18	151-28	農業土坑	8	D8	1層	-	イチヨウ	種子	破片	炭化	1	-	
							クス木属(クスギ)	果実	完形未済	炭化	1	8	
							ニホンカボチャ近縁種	果物	破片	炭化	1	-	
							イニシメムシ	核	半分	炭化	1	9	
							ヒモモ	核	破片	炭化	1	-	
							ウメ	核	完形未済	炭化	2	-	
							ウメ	核	完形未済	炭化	1	-	
20	151-28	農業土坑	9	D8	2層	-	ニホンカボチャ近縁種	果物	破片	炭化	7	28	
							マツ属産落葉雑草属	球果	完形	炭化	8	2	
							マツ属産落葉雑草属	球果	完形未済	炭化	7	-	
							マツ属産落葉雑草属	球果	破片	炭化	10	-	
							マツ属産落葉雑草属	種子	完形	炭化	1	3	
							マツ属産落葉雑草属	球果	破片	炭化	3	-	
							クリ	果実	完形未済	炭化	1	7	
							クリ	果実	破片	炭化	40	-	
							不明	完形	炭化	1	-		
							ニホンカボチャ近縁種	果物	破片	炭化	1	-	

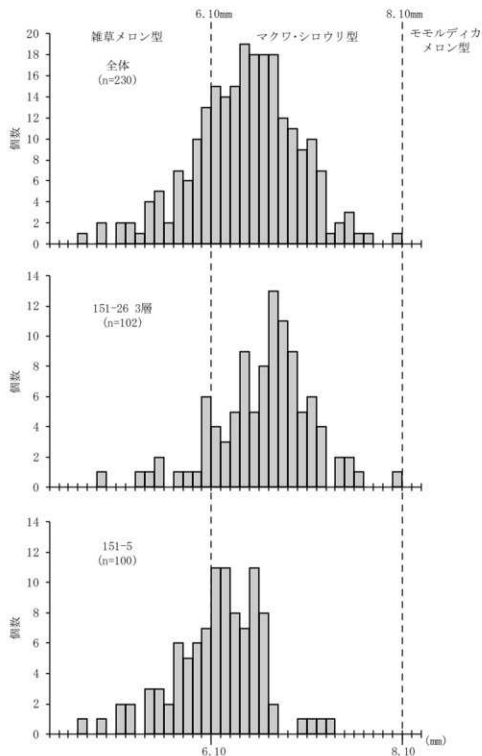
第6章 自然科学分析

試料	番号	遺構名	遺構の性格	遺物 No.	グリッド	層	杖巻	分類群	部位	状態	個数	写真 番号	
様式	21	151-28	廃棄土坑	12	D8	5層以下	4	ウメ	杖	半分	乾燥	1	-
							ウメ	杖	半分	乾燥	2	11	
	ウメ	杖	半分	乾燥	1	-							
	22	151-100	廃棄土坑	5	J6	下層(4層以下)	1	スモモ	杖	完形	乾燥	1	-
							2	モモ	杖	破片	乾燥	1	-
	23	151-100	廃棄土坑	2	J6		-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	浸漬	100	29
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	浸漬	30	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形未調	浸漬	66	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	破片	浸漬	19	-
	24	151-100	廃棄土坑	19	J6	2-3層	-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	浸漬	20	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	浸漬	7	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	塊状	浸漬	6	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形未調	浸漬	23	-
	25	151-100	廃棄土坑	18	J6	2-3層	-	ニホンカボチャ近縁種	種子	破片	浸漬	5	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	破片	浸漬	11	-
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	塊状	浸漬	10	27
							-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形未調	浸漬	7	-
	26	151-100	廃棄土坑	20	J6	4層	1	ニホンカボチャ近縁種	種子	破片	乾燥	9	-
							2	ヒメズルミ	杖	破片	乾燥	1	6
	27	151-103	廃棄土坑	1	J6	2-3層	-	スモモ	杖	破片	乾燥	1	-
							-	オニグルミ	杖	破片	乾燥	2	-
	28	151-103	廃棄土坑	2	J6	5層	-	イチヨウ	種子	破片	乾燥	1	1
							1	マツ属履帯葉果実属	結果	完形	乾燥	2	-
	29	151-豊地土1		6	J6	TR19 4層	2	イチヨウ	種子	破片	乾燥	1	-
							3	ウメ	杖	半分	乾燥	1	-
							3	ウメ	杖	破片	乾燥	5	-
	30	151-106	廃棄土坑	3	J6	6層	-	オサムグサ	杖	半分	乾燥	2	-
	31	151-204	廃棄土坑	1	J6		1	モモ	杖	完形未調	乾燥	1	14
							2	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	乾燥	1	-
	32	151-385	廃棄土坑	1	D8		-	マツ属履帯葉果実属	結果	完形	浸漬	2	-
	33	151-豊地土2		13	J6	TR12 5層	-	スモモ	杖	破片	乾燥	1	-
	34	151-古代造成土		22	C7		-	スモモ	杖	完形	乾燥	1	-
	35	151-豊地土1		125	J6		-	ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	浸漬	100	30
-							ニホンカボチャ近縁種	種子	完形	浸漬	253	-	
-							ニホンカボチャ近縁種	種子	塊状	浸漬	4	-	
-							ニホンカボチャ近縁種	種子	完形未調	浸漬	37	-	
36	TR17		2	A6		-	不明(成類の輪?)		完形	浸漬	1	-	
						1	スモモ	杖	完形	乾燥	14	-	
37	覆瓦12		2	E9		2	スモモ	杖	破片	乾燥	3	-	
						3	モモ	杖	完形	乾燥	2	-	
						3	モモ	杖	半分	乾燥	1	-	
集	1	151-204	土坑	5	J6	9層	-	スサ	杖・葉	破片	乾燥	5	4
	2	151-259	廃棄土坑	13	B6		-	スサ	杖・葉	破片	乾燥	2	-
	21	151-28	廃棄土坑	12	D6	5層以下	1	ナリ	葉	破片	浸漬	1	10
合計											1793	-	

試料	番号	遺構名	遺構の性格	遺物 No.	グリッド	層	杖巻	分類群	部位	状態	個数	写真 番号	
様式	-	152-2	石組水跡	5	C10		-	トウゴウ	種子	完形	浸漬	1	-
				13	C1		-	メロン酢栗	種子	完形	浸漬	1	-
				16	B1		-	メロン酢栗	種子	完形	浸漬	5	42-43
				19	B1		-	メロン酢栗	種子	完形	浸漬	1	-
	-	152-5	土坑	2	C1		-	オキノキ	種子	完形未調	浸漬	1	39
	-	152-150	土坑	1	I7		-	ヒメズルミ	杖	半分	乾燥	1	-
	-	152-257	石組水跡	3	B1		-	チャノキ近縁種	種子	完形	乾燥	1	38
	-	152-259	土坑	1	B1		-	トウゴウ	種子	完形	浸漬	1	-
	-	152-豊地土1		1	G6		-	ニホンカボチャ	種子	完形	浸漬	7	44-45
	-	152-豊地土2		11	B1		-	モモ	杖	半分	乾燥	3	33
							-	ウメ	杖	半分	乾燥	2	34
							-	スモモ	杖	完形未調	乾燥	1	35
							-	ヒメズルミ	杖	破片	乾燥	1	36
	-	152-豊地土3		2	J9		-	オニグルミ	杖	半分	乾燥	1	37
-	152-豊地土3		2	J9		-	トウゴウ	種子	完形	浸漬	1	40	
合計											29	-	

第47表 メロン類種子の計測値

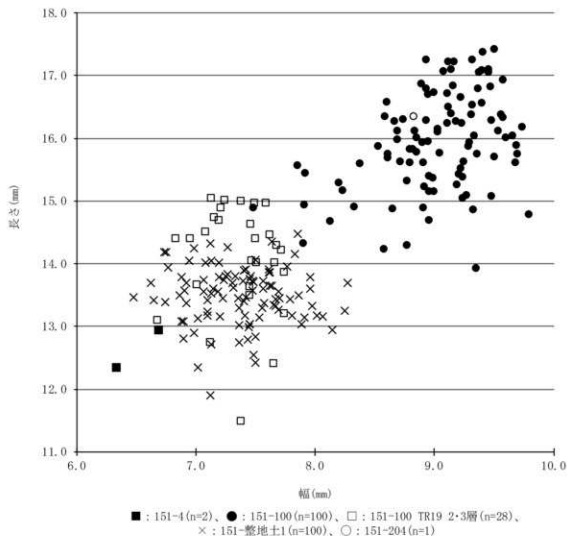
番号	遺集・層	長さ (mm)				幅 (mm)				厚さ (mm)			
		標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差
2	151-5	100	4.78	7.38	6.16 ± 0.47	100	2.25	3.38	2.78 ± 0.22	10	1.17	1.91	1.45 ± 0.21
7-9	151-26 3層	102	4.95	8.06	6.65 ± 0.50	102	2.53	3.85	3.22 ± 0.23	25	0.38	1.85	1.32 ± 0.32
6	151-26 4層	28	5.91	7.72	6.77 ± 0.45	28	2.94	3.71	3.22 ± 0.18	8	1.23	1.92	1.51 ± 0.23
	全て	230	4.78	8.06	6.45 ± 0.54	230	2.25	3.85	3.03 ± 0.31	43	0.38	1.92	1.38 ± 0.29



第91図 メロン類種子の大きさ

第48表 ニホンカボチャ近似種子の計測値

番号	遺構・層	長さ (mm)				幅 (mm)				厚さ (mm)			
		標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差
23	151-100	100	13.94	17.44	15.95 ± 0.79	100	7.47	9.79	9.01 ± 0.46	10	0.80	1.54	1.15 ± 0.25
24-25	151-100 2・3層	28	11.51	15.06	14.10 ± 0.87	28	6.67	7.73	7.35 ± 0.29	18	0.65	1.35	0.92 ± 0.17
35	151-整地土1	100	11.90	14.47	13.49 ± 0.46	100	6.47	8.27	7.37 ± 0.38	10	1.18	1.78	1.56 ± 0.17
	全て	231	11.51	17.44	14.63 ± 1.36	231	6.33	9.79	8.08 ± 0.92	41	0.65	3.03	1.22 ± 0.46



第92図 ニホンカボチャ近似種子の大きさ

FKJ15-2 調査区

モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科 褐色で完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端には大きな着点があり、表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。高さ 26.9mm、幅 17.1mm、残存厚 6.6mm (図版第 61-33)。

ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese 核 バラ科 褐色で完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は卵円形。表面全体に不規則で深い小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。高さ 14.6mm、幅 12.9mm、残存厚 5.5mm (図版第 61-34)。

スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核 バラ科 茶褐色で上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。両側には縫合線があり浅い溝が入る。表面は平滑。残存高 14.6mm、残存幅 11.5mm、厚さ 8.7mm

(図版第61-35)。

ヒメグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *cordiformis* (Makino) Kitam. 核 クルミ科 淡褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は先端が尖る広卵形。外面中央にやや深い溝が走るが、それ以外は表面が平滑な点でオニグルミとは異なる。明瞭な縫合線がある。高さ32.2mm、幅28.2mm、残存厚12.2mm (図版第61-36)。

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 核 クルミ科 淡褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。溝や凹凸の間に微細な皺がある。内部は二室に分かれる。高さ29.1mm、幅26.2mm、残存厚13.4mm (図版第61-37)。

チャノキ近似種 c.f. *Camellia sinensis* (L.) Kuntze 種子 ツバキ科 褐色で、背・腹面観は楕円形、側面観は半円形、上面観は扇形。扇形の上面観から、果実に3個程度入っていた種子の一つと推定される。形態からはツバキ科の中でもチャノキに似るが、着点やその周囲の窪みなどの特徴的な部分は残存していない。また現生チャノキ種子よりもやや扁平である。長さ14.9mm、幅15.0mm、厚さ10.9mm (図版第61-38)。

カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科 黒褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状の皺がみられる。明らかに大型の果実とみられる種子をカキノキとした。高17.8mm、幅12.1mm (図版第61-39)。

トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 種子 ウリ科 赤褐色で倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり中央部は窪む。長さ10.4mm、幅6.3mm (図版第61-40)。

第49表 152-2 出土メロン仲間種子の大きさ

地区	長さ	幅
C1	7.4	3.2
B1	7.1	3.5
	8.2	3.4
	6.7	3.2
	6.2	3.0
	8.0	3.5
C10	6.6	3.1
	9.8	4.4
	6.5	2.8
最小	6.2	2.8
最大	9.8	4.4
平均	7.4	3.3
標準偏差	1.1	0.5

(単位: mm)

メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科 赤褐色で上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。藤下(1984)は、種子の大きさからおおむね次の3群に分けられるとしている。長さ6.0mm以下の雑草メロン型、長さ6.1~8.0mmのマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上のモモルディカメロン型である。今回、石組水路152-2から出土した9点の大きさは長さ6.2~9.8(平均7.4±1.1)mm、幅2.8~4.4(平均3.3±0.5)mmで、マクワウリ・シロウリ型~モモルディカメロン型の大きさであった。(第49表、図版第61-41~43)。

ニホンカボチャ *Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir. 種子 ウリ科 赤褐色で、上面観は扁平、側面観は肩が張る長倒卵形。周縁を毛が取り囲むが残存していない。長さ13.3mm、幅8.5mm (図版第61-44)と長さ14.5mm、幅7.6mm (図版第61-45)。

4) 考察

FKU15-1 調査区 17世紀~19世紀の各遺構より出土した大型植物遺体には、栽培種のイチヨウ、ウメ、スモモ、モモ、カキノキ、イネ、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、ニホンカボチャ近似種、ナスが確認され、栽培種が大型植物遺体群全体の9割超を占める組成を示した。当時利用された植物質食料と示唆され、遺構内への投棄などの人為的行為に由来する可能性がある。

特筆すべき事項として、土坑 151-26 の3層から出土したウメ、廃棄土坑 151-28 の5層以下から出土したスモモ、溝 151-5 から出土したメロン類の一部は、果皮や果肉が残る状態であった。これらの果実は腐りやすいため、加工しない限り長期保存は困難である。堆積物中に残りにくい果実が出土した状況を考慮すると、短期間の埋積や埋積後の嫌気的環境の継続などの要因が想定されよう。出土状況と人為的行為に関する詳細な検討が望まれる。

今回最も多く確認された果菜類のメロン類は、溝 151-5 と土坑 151-26 より出土し、土坑 151-26 出土種子の一部には炭化が確認された。炭化種子は、何らかの人為的行為により火を受けたと推測される。

出土種子の一部の大きさを検討した結果、マクワ・シロウリ型が全体の約3/4を占める組成を示した。中世以降はマクワ・シロウリ型が大半を占める傾向（藤下 1992 など）を支持する結果と言える。一方、溝 151-5 では雑草メロン型が高率（38%）を占め、遺構間における種子群の大きさの違いも認められた。

食用にならない雑草メロン型は、マクワウリやシロウリの未成熟果実等の個体変異による可能性のほかに、他の用途の可能性が挙げられる。例えば、雑草メロンを供物とする風習が各地に残り、現在でも栽培されている地域がある（藤下 2004）。遺跡出土のメロン類種子計測事例の蓄積により、雑草メロン型の用途を検討する必要がある。

メロン類に次いで多産したニホンカボチャ近似種は、多量の種子とともに果柄が確認された。果柄は廃棄土坑 151-28 より出土し、頂部が鋭利な刃物等により切断されたと考えられる痕跡がみられた。この切断痕は、収穫具を反映している可能性が高い。種子は、主に廃棄土坑 151-100 と 151-整地土 1 より多産し、果実の配列を留めた塊状種子もみられた。種ごと剥り抜いた状態で廃棄された食料残渣に由来する可能性が高い。

出土種子の一部の大きさを検討した結果、廃棄土坑 151-100 出土種子群の大きさが最も大きく、151-整地土 1 中の出土種子群や廃棄土坑 151-100 の2・3層出土種子群とは区別される傾向が認められた。これらの要因として果実の大きさや系統等に由来する可能性が挙げられる。今後、DNA 分析等による解明が期待される。

栽培種を除いた分類群は、木本のマツ属複雑維管束亜属、スギ、オニグルミ、ヒメグルミ、クスギ節（クスギ?）、クリ、サンショウ、草本のエノコログサ属、カナムグラ、アカザ属、ヒユ属、クサネムが確認された。木本は全て有用樹であることから、植栽の可能性も含めて周辺に生育していたと考えられる。特に廃棄土坑 151-28 の5層以下より出土したクリは、果実の他に葉を伴うことから、ごく近辺に生育していた可能性が高い。草本は人里植物主体で、周辺の草地に生育していたと考えられる。湿生植物のクサネムを含むことから湿った場所の存在も示唆される。

利用の可能性は、土坑 151-26 より出土したオニグルミの炭化核、廃棄土坑 151-100 より出土した打撃痕の可能性のあるヒメグルミ、廃棄土坑 151-28 より出土したクリが挙げられ、いずれもほぼ破片の状態である。これらの堅果類は食用のために利用されたと考えられる。

FKJ15-2 調査区 モモやウメ、スモモの核、カキノキの種子は、果肉を食べた後に捨てられた可能性がある。モモは食利用以外にも、観賞用や薬用、呪術用、祭祀用等さまざまな目的で利用されるため（那須 2015）、食べる以外の何らかの用途に用いられた後、溝や廃棄土坑に堆積した可能性もある。畑作物としては、トウガンやメロン仲間（マクワウリ・シロウリ型～モモルディカメロン型）、ニホンカボチャが得られており、食べられない部位である種実が水路や廃棄土坑等に廃棄された可能性が考えられる。ヒメグルミやオニグルミの核には打撃痕がみられないため、自然に半分が割れた可能性が高い。チャノ

キの出土例としては、新潟県細池寺道上遺跡の近世のチャノキ種子等がある（バンドリ・佐々木 2018）。

引用・参考文献

- 藤下典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎 pp.638-654
- 藤下典之 1992 「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間—その種類、渡来、伝播、利用について—」『考古学ジャーナル 354』ニュー・サイエンス社 pp.7-13
- 藤下典之 2004 「メロン 海をわたった草花 ヒョウタンからアサガオまで」国立歴史民俗博物館 pp.56-60
- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会 p.328
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2010 「日本植物種子図鑑（2010年改訂版）」東北大学出版会 p.678
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 2012 「ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種—」誠文堂新光社 p.272
- 吉川純子 2015 「植物遺体」『小山崎遺跡発掘調査報告書—総括編—』遊佐町埋蔵文化財調査報告書第10集 遊佐町教育委員会 pp.162-165
- バンドリ スダルシャン・佐々木由香 2018 「細池寺道上遺跡から出土した大型植物遺体」『新潟市文化財センター編 細池寺道上遺跡Ⅶ 第46次調査』新潟市教育委員会 pp.90-98
- 那須浩郎 2015 「古代のモモ」『BIOSTORY』22 pp.58-61
- 米倉浩司・梶田 忠 2003- 「BG Plants 和名-学名インデックス (YList)」 <http://ylist.info>

2 貝類遺体

1) 試料と方法

試料は各遺構および包含層から採取されている。貝類遺体の点数は15-1調査区で449点、15-2調査区で305点、16-1調査区で93点の、合計847点であった。

試料の観察は肉眼で行い、標本との比較により同定した。

最小個体数の算出は、腹足綱（巻貝）はほぼ完存と殻軸が1/2以上が残存する個体の合計数とした。それらが無い遺構では蓋を数えた。蓋も無く、破片だけの遺構では複数片があっても1と数えた。二枚貝綱は、左右殻の数の多い方を最小個体数とし、左右不明の場合は複数の破片であっても1として算出した。

2) 結果と考察

同定結果を第50表、最少個体数を第51表に示す（図版第62）。

同定されたのは、腹足綱でミミガイ科、メガイアワビ、クロアワビ、サザエ、オオタニシ、ウミニナ、アカニシの7分類群、斧足綱（二枚貝綱）でフネガイ科、イタボガキ科、シジミ属、サルボウガイ、イタヤガイ、ホタテガイ、ハマグリ、コタマガイ、ミルクイの9分類群の、計16分類群である。

なお、15-1調査区のシジミ属はマシジミあるいはヤマトシジミと思われる。アワビ属にはトコブシ、クロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビ等複数種があり、破片のため絞り込めない。また、イタボガキ科は、マガキやイワガキ等が含まれるが、いずれも殻頂部を欠損する破片となっており、種の同定には至らなかった。

FKJ15-1調査区 遺構ごとのサザエの最小個体数は、井戸151-3で1個体、溝151-5で22個体、道路側溝151-6で31個体、土坑151-23で1個体である。全ての遺構から出土したサザエの最小個体数を合計すると55個体である。

その他の貝類の最小個体数は、アワビ属が廃棄土坑151-102で1個体、オオタニシが151-5で1個体、

第50表 貝類同定結果

遺構	層	地区	取上 番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考	遺構	層	地区	取上 番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考
151-3		C7-8	2	シジミ属	殻	右	完好、 磨蚀付き	1	1個体	152- 210	J9		2a	サザエ	蓋	-	ほぼ完好	1	
			2b	腕足綱	殻	-	破片	1											
			2c	不明	不明	-	破片	1	目撃ではない										
			2d	ユダマイ	殻	左	磨蚀部	1											
			2e	シジミ属	殻	右	ほぼ完好	3											
			2f	腕足綱	殻	-	破片	1											
			2g	シジミ属	殻	左	磨蚀部	1	磨蚀										
			2h	腕足綱	殻	不明	破片	9	磨蚀										
			2i	サザエ	殻	-	1/2以上残	1											
			2j	腕足綱	殻	不明	破片	4											
			2k	腕足綱	殻	不明	破片	1											
151-5		F10	8	サザエ	殻	-	破片	6	フジツボ付着	152- 226	A9		2b	腕足綱	殻	-	磨蚀部	1	
			2c	不明	不明	-	破片	1											
			2d	不明	不明	-	破片	1											
			2e	不明	不明	-	破片	1											
			2f	不明	不明	-	破片	1											
			2g	不明	不明	-	破片	1											
			2h	不明	不明	-	破片	1											
			2i	不明	不明	-	破片	1											
			2j	不明	不明	-	破片	1											
			2k	不明	不明	-	破片	1											
			2l	不明	不明	-	破片	1											
151-6	下層	D9	5	サザエ	殻	-	破片	4		152- 291	C1		1a	サザエ	殻	-	1/2以上残	1	
			1b	腕足綱	殻	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
151-23	上層	D8	5	シジミ属	殻	右	ほぼ完好	12	6個体、磨蚀し 1個体、表面磨 耗、マフアツ ボウシ、イ ダイワビ	152- 307	B-C10	1	サザエ	殻	-	1/2残	1		
			2	不明	不明	-	破片	1											
			3	不明	不明	-	破片	1											
			4	不明	不明	-	破片	1											
			5	不明	不明	-	破片	1											
			6	不明	不明	-	破片	1											
			7	不明	不明	-	破片	1											
			8	不明	不明	-	破片	1											
			9	不明	不明	-	破片	1											
			10	不明	不明	-	破片	1											
			11	不明	不明	-	破片	1											
151-28	下層	D9	6	サザエ	殻	-	破片	63	27個体	152- 373	J9-9	1a	サザエ	殻	-	1/2以上残	1		
			1b	腕足綱	殻	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
151-102	上層	D8	5	シジミ属	殻	右	ほぼ完好	1	殻長30mm、 殻高25.5mm	152- 373	J9-9	1a	サザエ	殻	-	1/2以上残	1		
			1b	腕足綱	殻	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-1	敷土上1	D2	2a	シジミ属	殻	右	完好	1	殻長25.6mm、 殻高23.2mm	152- 敷土上1	G7	1a	サザエ	殻	-	1/2以上残	1		
			2b	不明	不明	-	破片	1											
			2c	不明	不明	-	破片	1											
			2d	不明	不明	-	破片	1											
			2e	不明	不明	-	破片	1											
			2f	不明	不明	-	破片	1											
			2g	不明	不明	-	破片	1											
			2h	不明	不明	-	破片	1											
			2i	不明	不明	-	破片	1											
			2j	不明	不明	-	破片	1											
			2k	不明	不明	-	破片	1											
152-2	敷土上2	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	4		152- 敷土上2	G9	1a	ハマダリ	殻	左	完好	1	殻長30mm、 殻高25.5mm	
			1b	腕足綱	殻	不明	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-3	敷土上3	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上3	G9	1b	腕足綱	殻	不明	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-4	敷土上4	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上4	G9	1c	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-5	敷土上5	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上5	G9	1d	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-6	敷土上6	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上6	G9	1e	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-7	敷土上7	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上7	G9	1f	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-8	敷土上8	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上8	G9	1g	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-9	敷土上9	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上9	G9	1h	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-10	敷土上10	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上10	G9	1i	不明	不明	-	破片	1		
			1b	不明	不明	-	破片	1											
			1c	不明	不明	-	破片	1											
			1d	不明	不明	-	破片	1											
			1e	不明	不明	-	破片	1											
			1f	不明	不明	-	破片	1											
			1g	不明	不明	-	破片	1											
			1h	不明	不明	-	破片	1											
			1i	不明	不明	-	破片	1											
			1j	不明	不明	-	破片	1											
			1k	不明	不明	-	破片	1											
152-11	敷土上11	D1	1a	サザエ	殻	-	破片	2		152- 敷土上11	G9	1j	不明	不明	-	破片	1		

出土した貝類を生息域でみると、サザエやメガイアワビ、クロアワビは岩礁に生息し、サザエは内湾および外海の岩礁域、アワビ類は外海の岩礁域に生息する。クロアワビは潮間帯から水深20mほどの浅い岩礁、メガイアワビは水深5～30mの岩礁に生息する。ハマグリは内湾の砂泥底、アカニシは内湾泥底に生息する。海産貝類は、いずれも沿岸部に生息する貝類が中心であり、貝の採取活動が沿岸部の水深の浅い海域で行われたと考えられる。また、海における採取活動だけでなく、淡水に生息するオオタニシも出土したことから、遺跡周辺の淡水域の利用が想定される。

これらの貝類はいずれも食用となり、イタヤガイを除いて、殻に人為的な加工の痕跡は認められなかったため、食材として利用された後に殻が廃棄されたと考えられる。

3 動物遺存体

1) 試料

試料は、15-1、15-2、16-1 調査区の溝、道路側溝、井戸材抜き取り坑、土坑、近代造成土、水路埋土と裏込土、井戸枠内、整地土等から出土した動物遺存体179点である。

2) 方法

試料を肉眼と（双眼）実体顕微鏡で観察し、形態的特徴と現生標本との対比によって同定を行った。

3) 結果

同定結果および詳細を第52表に示す。また主要な分類群を写真で示す（図版第63～65）。

同定されたのは魚類がブリ属 (*Seriola*)、タイ科 (*Sparidae*)、チダイ (*Evynnis tumifrons*)、マダイ (*Pagrus major*)、シラ属 (*Coryphaena*)、硬骨魚綱 (*Perciformes*) の6分類群、爬虫類がスッポン (*Pelodiscus sinensis*) の1分類群、鳥類がサギ科 (*Ardeidae*)、ウ科 (*Phalacrocoracidae*)、カモ科 (*Anatidae*)、キジ科 (*Phasianidae*)、ニワトリ (*Gallus gallus domesticus*)、鳥綱 (*Aves*) の6分類群、哺乳類がヒト (*Homo sapiens*)、キツネ (*Vulpes vulpes*)、ニホンザル (*Macaca fuscata*)、ネズミ科 (*Muridae*)、イヌ (*Canis lupus familiaris*)、ネコ (*Felis silvestris catus*)、ウマ (*Equus caballus*)、イルカ類 (*Odontoceti fam. indet.*)、ニホンジカ (*Cervus nippon*)、ウシ (*Bos taurus*)、哺乳綱 (*Mammalia*) の11分類群であった。

4) 考察

FKJ15-1 調査区 解体痕や刀傷などが見られる試料は無かったため、動物の解体などについては不明である。

ブリ属とタイ科は、いずれも海産魚類であり、おそらく海産と見られる腹足綱（巻貝）も見られ、海岸部で採取された魚類や貝類が、福井城下に持ち込まれ消費されたと考えられる。なおタイ科の尾椎など一部の魚骨は焼けていた。

イヌには成獣だけでなく幼獣が見られた。人による飼育下で繁殖していたと思われる。

キツネは、野生の個体が狩猟により捕獲された可能性が考えられる。

その他にイヌの可能性のある左上腕骨があったが、近位端も遠位端も剥落しており、骨端線の癒合が完了しておらず、成長途中の幼獣であったと考えられる。

FKJ15-2・16-1 調査区 硬骨魚綱はいずれも海産魚類であり、上顎骨、鰓蓋骨等の頭部および椎骨が出土している。またマダイ等には切断された解体痕が観察された。他に海産物はイルカ類があり、切断痕が椎骨の縁に見られることから椎骨と椎骨の間を狙って切断されていることがわかる。マダイ、チダイ等のタイ科は沿岸の岩礁域に生息し、ブリ属は季節性の回遊魚で底曳網や刺網などの網漁で漁

獲される。シイラ属は外洋の表層に生息するシイラと考えられる。16、17世紀に日本海で始まったシイラ漬け漁⁽¹⁾によってシイラは日本海側の夏の風物詩となっていたが、本遺跡の試料は椎骨2点のみの出土のため、網漁の混獲の可能性も考えられる。また、イルカ類も網漁の混獲による漁獲と考えられる。そのため、シイラやイルカ類はマダイ等のタイ科に比べると流通量が少なく、食卓に並ぶ比率は低かったと考えられる。

爬虫類はスッポンの肋骨板や腹骨板のみの出土である。スッポンは河川の流れが緩やかな中・下流域や池、湖沼などに生息し、古くは滋養強壮に効くとされる高級なもので、江戸時代には主に西日本で食されていた。なおスッポンは日本各地から出土しており、福井県全域でも生息している。ただし一般家庭では料理が困難であった。

鳥類はサギ科、ウ科、カモ科と浅い海域、河川、池沼などの海辺、河辺の湿潤地を好むものの出土ばかりであり、狩猟によって獲得されたと考えられる。また、海辺や河辺の他にカモ科には水田で蒔跡の落ち穂を食すものもあり、より人里に近い場所で獲得された種もいると考えられる。キジ科は山地から平地の林、農耕地、河川敷などの明るい草地に生息するが、キジ科のなかで家畜化されたものがニワトリである。本報告のニワトリは骨端部が癒合している成鳥であり、現代のように若鶏の消費はせず、場合によっては鶏卵も利用されたと考えられる。カモ科やキジ科に腱を外す切創や関節を外す切断痕が観察されることもあり、鳥類は食用目的で持ち込まれたものであったことがわかる。

哺乳類は野生動物としてニホンザル、ネズミ科、ニホンジカがみられる。ニホンザル、ニホンジカは資源豊かな山野に生息する。特にニホンザルは広葉樹林を好み、森林から狩猟により獲得されたものと考えられる。ネズミ科は森林のほかに河原の土手や田畑の斜面、建物内など人里やその近隣に生息する。ネズミ科は近隣に生息していたものが石組水路152-2で死んだものと考えられる。ニホンジカは鹿角、中手骨、中足骨等が骨角器としてよく利用されるが、本遺跡での出土は橈骨のみであり、食物残渣と考えられる。家禽、家畜としてはイヌ、ネコ、ウマ、ウシがみられる。イヌは古くから飼育されるが、一方で市中には野犬もいたと考えられる。なお、水路152-2よりイヌの頭蓋骨と下顎骨の同一個体の5体、下顎骨のみのもの3体、計8体分の出土があった。いずれも同様の解体痕がみられ、頭部を露出させるために頭蓋骨の上部や左右の顎関節を切断している（図版第65）。近世の例だが、明石城武家屋敷の裏庭から偏頭部に穿孔し脳を利用したと思われるイヌの頭蓋骨の出土例があり、食用としたと考えられており、本遺跡の試料も脳を利用するための解体痕と考えられる。ネコは奈良時代頃に中国から輸入されたとき、平安時代に愛玩動物として『枕草子』等に登場する。江戸時代初期まではネコは少なく貴重な動物だったと考えられる。ウマやウシは腱や皮を外す解体痕や鋸跡などの加工痕がみられ、生きている間は乗馬、荷物の牽引などに使役され、最終的には解体され、骨、角の他に皮や肉を細工物の材料や食用として利用されたと考えられる。なおウシは角のみの出土で全形を留めるものがほとんどだが、鋸による帯状の切れ込みが認められる（図版第63-17）。これはウシの角の皮（角鞘）を切り開いて板状にして細工物に利用した痕跡と考えられ、16世紀、戦国期になって一般化するようになった可能性が高いと言われている（松井2005）。また、非常に高価であったタイマイの甲羅を用いた鼈甲の代用品として、ウシの角鞘を用いた牛甲の素材を採取した末に投棄されたものの可能性もある⁽²⁾。なお、同様の痕跡を持つウシの角は、近世初頭の堺環濠都市遺跡等からも出土している。ヒトは上腕骨、脛骨のみの出土である。脛骨は保存状態が良く、骨の厚みや稜の状態から、比較的華奢な印象を受ける女性のものであると考えられる。

第52表 動物遺存体同定結果

調査区	遺構	遺物 No.	地区	層位	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
15-1	5	2	F10		哺乳類	脛骨	遠位端-骨幹	右	1	中型
		9	F10		イヌ	犬歯	完全	左	1	
		12	F10		イヌ?	上腕骨	骨幹	左	1	両骨端未癒合、幼獣
					イヌ	下腕骨	ほぼ完全	右	1	第1-3指骨未癒合、幼獣
		18	F10		ネコ?	下腕骨	ほぼ完全	左	1	
	6	21	E10		哺乳類	脛骨	ほぼ完全	左	1	小型
					ヒト	頭蓋骨	側頭骨	左	1	
					ヒト?	不明	破片	不明	1	他
		4		8層	哺乳類	歯	破片	不明	1	他
		23	4	D9	1層	哺乳類	尾椎	ほぼ完全	不明	1
	20	2	C8	3層	ネコ?	尾椎	破片	不明	1	他
					鯨骨魚類	脛骨	破片	不明	1	他
					鯨骨魚類	不明	破片	不明	1	他
		4	D7	砂層	イヌ	下腕骨	ほぼ完全	右	1	
		24	C7	ゴミ層2	鳥類	跗骨	遠位端-骨幹	左	1	
近代 造成土	22	C7	ゴミ層1	ネコ?	尾椎	破片	不明	1	他	
				ウシ?	犬歯	骨幹	左	1		
	-	J5-A5-AG	表層	マダイ	上腕骨	ほぼ完全	不明	1	他	
	2	C1-C10	裏込土	マダイ	上腕骨	ほぼ完全	不明	1	他	
	2	2	B1	上層 (1段目)	イヌ	下腕骨	ほぼ完全	左	1	
15-2	2	6	B1	下層	ネコ?	3趾趾骨	骨幹	右	1	前趾骨を切断か(解体後)
					ネコ?	3上腕骨	完全	左	1	
					哺乳類	3趾趾骨	ほぼ完全	右	1	
					鯨骨魚類	不明	破片	不明	1	他
					スッポン	肋骨板	完全	右	1	
					スッポン	中肋骨板	完全	右	1	
					スッポン	肋骨板	ほぼ完全	左	2	左2, 右1
					スッポン	肋骨板	ほぼ完全	右	1	
					イヌ	寛骨	脛骨	右	1	外側に切り傷、後位、脛骨中間を切断(解体後)
					ウマ	短中骨	近位端	左	1	脛による擦り傷による切断(加工後)
	ウマ	脛骨	近位端	右	1	脛を再平脛板(解体後)、脛の擦り傷による切断(加工後)				
	2	10	C10		不明哺乳類	不明	破片	不明	1	加工
	2	12	C10		ウシ?	脛骨	尾端	不明	1	
	2	13	C10		スッポン	肋骨板	完全	不明	1	
					スッポン	肋骨板	骨幹	右	1	
				ヒト	脛骨	ほぼ完全	右	1		
				鯨骨魚類	細肋骨	破片	不明	1	他	
				鯨骨魚類	血管線	完全	不明	1	他	
2	13	C1		鯨骨魚類	細肋骨	破片	不明	3		
				ウシ	頭蓋骨	角	不明	1	網による擦り傷、網による切り込みなど(加工後)	
				鯨骨魚類	血管線	破片	不明	2		
				スッポン	肋骨板	完全	左	1		
				スッポン	肋骨板	完全	右	1		
2	14	C1		スッポン	下肋骨板	完全	左	2	2個体	
				ネコ?	短中骨	完全	左	1	ニワトリ?	
				鳥類	不明	破片	不明	1		
				ネズミ科	頭蓋骨	破片	不明	1	3つに分解	
				ニホンザル	下腕骨	ほぼ完全	右	1		
				ネコ	跗骨	完全	左	1		
				ウシ	頭蓋骨	角	右	2	2個体、大きい個体が刃物で叩いた痕跡(加工後)	
				ウマ	脛骨	遠位	右	1		
				スッポン	肋骨板	ほぼ完全	左	1		
				ネコ	脛骨	遠位端-遠位	右	1	未癒合	
2	15	B1		哺乳類	脛骨	ほぼ完全	左	1	未癒合	
2	15	C1		イノシシノミ ホシジロ	脛骨	完全	右	1	近位後位に鋭い刃物痕(解体後)	
2	16	B1	裏面	スッポン	肋骨板	ほぼ完全	左	1		
2	16	B1		鯨骨魚類	頭蓋骨	角	左	2	2個体、両方に網による擦り傷(加工後)、大きく残る方には頭蓋骨から刃物で切断した痕跡(解体後)	
2	16	B1		鯨骨魚類	細肋骨	破片	不明	2	切断の解体後	
2	18			ネコ?	1趾骨	骨幹	右	1		
				ネコ?	1趾骨	骨幹	右	1		
				マダイ	頭蓋骨	骨幹	右	1		
				スッポン	下肋骨板	完全	不明	1		
				イヌ	上腕骨	近位-遠位	左	1	未癒合	
2	18	B1		ネコ	脛骨	近位端-遠位	右	1	遠位未癒合	
2	18	B1		スッポン	肋骨板	完全	左	2		
2	21	C10	水路橋土	スッポン	下肋骨板	ほぼ完全	右	1		
2	21	B1	裏込土	イヌ	脛骨	近位-遠位端	不明	1		
2	22	C1	水路橋土	小型哺乳類	中手/中足骨	完全	不明	1		
				スッポン	肋骨板	完全	不明	1		
				イヌ	頭蓋骨	完全	不明	2	2個体のイヌの頭蓋骨と下腕骨、頭蓋骨では大きく残る個体は後頭部に、小さい方は前頭部に切痕の痕跡あり、下腕骨はいずれも後位外縁が切断され、両腕突起、角突起を欠く	
				イヌ	下腕骨	ほぼ完全	右	2		
				ウシ	頭蓋骨	角	不明	1	加工による磨りしたものと	

第6章 自然科学分析

調査区	遺構	遺物 No.	地区	層位	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
15-2	2	23	C1	水路埋土	イヌ	上顎骨	後頭部欠損	-	1	頭蓋骨1個体、下顎骨2個体のイヌ。頭蓋骨は後頭部を切除した解体状。下顎骨はいずれも後臼歯列が切断され、歯肉突起、角突起を欠く。下顎骨(右)と遺物No.30下顎骨(左)は同一個体
					イヌ	下顎骨	ほぼ完整	左	1	
					イヌ	下顎骨	ほぼ完整	右	2	
	2	24	C1	裏地土	ネコ	上顎骨	完整	右	1	
					タイ科	歯骨	脱離	-	1	木片2
	2	29	C1	埋土	マダイ	前上顎骨	ほぼ完整	左	1	
					ゾウ属	歯骨	不明	左	1	
					鯨骨魚綱	鯨骨	鱗片	-	2	
					鯨骨魚綱	歯管鱗	鱗片	-	3	
					鯨骨魚綱	線状突起	鱗片	-	4	
					鯨骨魚綱	不明	鱗片	-	10	
					イヌ	歯肉歯	上歯	-	1	
					ウマ	犬歯骨	近位	左	1	前臼歯体に解体状
					スッポン	中腹骨板	ほぼ完整	右	1	
					スッポン	肋骨骨	完整	左	1	
	2	30	B1	水路埋土	イヌ	頭蓋骨	後頭部欠損	-	2	頭蓋骨2個体、下顎骨4個体のイヌ。頭蓋骨は2個体とも頂部のあたりから後にかけて切除。残存の少ない個体は右上前歯列部が消失する程度で切断される。下顎骨はいずれも後臼歯列が切断され、歯肉突起、角突起を欠く。うち下顎骨(左)1点は、遺物No.23下顎骨(右)と同一個体
					イヌ	下顎骨	ほぼ完整	左	4	
					イヌ	下顎骨	ほぼ完整	右	4	
	2	32	B1	裏地土	ウ科	上顎骨	近位端-遠位	左	1	
					鳥類	肋骨	鱗片	-	1	
	2	34	B1		ウシ	頭蓋骨	角	-	1	角の切り込みによる加工痕。線引き跡か
	20	5	C1	埋地土2	ウマ科	臼口骨	切頭-骨体	左	1	
	32	10	J9	第3砂利面下 盛土	鯨骨魚綱	不明	鱗片	-	1	
					ニワトリ	上顎骨	近位-遠位	左	1	
	32	12	J9	第4砂利面下 盛土	ニワトリ	距足骨	完整	左	1	
	43	3	C1		ウマ科	距足骨	完整	左	1	マザンタラス
	86	1	H7	井口内1層	イヌ	上顎骨	近位-遠位	右	1	未融合
					イヌ	肋骨	近位-遠位	右	1	未融合。骨管内側に解体状
	146	1	C1		タイ科	上顎前歯	完整	左	1	
	146	2	C1		マダイ	前歯	ほぼ完整	-	1	
	146	4	C1		シウ属	歯骨	脱離	-	1	
	178	9	J9		ウシ科	臼口骨	完整	右	1	ニワトリ? 遠位端に切断痕(解体状)
	201	2	B10		鯨骨魚綱	歯管鱗	不明	-	1	
	281	4	B10		ゾウ属	歯骨	不明	-	1	
	291	3	C1		鯨骨魚綱	不明	鱗片	-	1	
					ウ科	尺骨	完整	右	1	
	352	2	B10-C10		ニワトリ	距足骨	近位-遠位端	左	1	
					ネコ	肋骨	近位-遠位端	左	1	
					イヌ	中足骨	ほぼ完整	右	4	第2-第5で同一個体。遠位未融合。
	367	1	J9		イヌ	趾骨	基部骨	-	1	
イヌ					犬歯骨	近位-遠位	左	1	未融合	
小型哺乳類					犬歯骨	骨幹	左	1		
373	1	J8-J9		イルカ類	歯骨	歯体	-	1	遠位側に切断(解体状)	
埋地土1	2	D2		シウ属	歯骨	脱離	-	1		
埋地土1	9	C1		マダイ	前上顎骨	ほぼ完整	右	1		
埋地土2	10	A10		ゾウ属	歯骨	鱗片	左	1		
埋地土2	12	C1		ゾウ属	前上顎骨	完整	右	1		
埋地土3	1	A9		鯨魚類	骨幹	骨幹	-	1	ニホンジカ?。きざぎざ割れ。加工?解体?	
埋地土3	1	J9		鯨骨魚綱	線状突起	ほぼ完整	-	1	自然白色化痕	
埋地土3	9	C10		タイ科	上顎前歯	完整	-	1		
埋地土3	19	C1		ウマ科	上顎骨	近位-遠位端	左	1	遠位端に靭帯を列すための切断(解体状)	
				ウマ科	尺骨	近位端-骨幹	左	1	近位端に靭帯をはずすための切断(解体状)	
16-1	112	1	G10		イヌ	短耳骨	一部欠損	左	1	
					イヌ	頭蓋骨	鱗片	-	2	
	112	4	G10		イヌ	肋骨	ほぼ完整	-	1	
					イヌ	肋骨	ほぼ完整	-	1	
	116	2	H10		ニホンジカ	肋骨	骨幹	左	1	
					タイ科	上顎前歯	ほぼ完整	右	1	
	117	1	H1		タイ科	上顎前歯	ほぼ完整	左	1	
					タイ科	間接歯	鱗片	-	1	
					鯨骨魚綱	不明	鱗片	-	1	
	117	2	H1		タイ科	上舌骨-基舌骨	完整	右	1	
マダイ					前上顎骨	ほぼ完整	左	1	近位内側に切断痕。前頭部切断か(解体状)	
鯨骨魚綱					歯管鱗	完整	-	2		
				ヒト	上顎骨	骨幹	-	1		

5) まとめ

出土した動物骨のうちヒトを除きいずれも食用となる動物であるが、ネズミ科は出土地点で死亡したものと考えられた。その他の動物は食用とされ調理や解体の過程で不要となった部位を投棄した残渣であった。また、イヌは脳を食用として複数体頭部を解体し投棄している。なおウマ、ウシは食用とされたほか、皮革や骨角器等に利用され、不要部位を投棄したものと考えられる。ほとんどの動物骨が出土した石組水路 152-2 は屋敷境溝であり、日常的な食物残渣の他にウシやウマを皮革や細工物に利用した端材や不要部位を廃棄する水路にも用いられ、加工を行う工人が近隣で活動していた可能性を示す。

註

- 1 シイラ漬け漁：浮遊物に集まる習性を利用して竹を束ねて沖合に浮かべ、シイラが集まったところで網で漁獲する漁法。16、17世紀に日本海ではじまり、シイラが夏の代表魚となるようになった。
- 2 正徳2年(1712年)成立の『和漢三才図会』にウシの利用方法についての記述に「入りて角を用いるに、煮て柔らかくし、堅に破り抜けて、徐々に踏み押さえ、狭まればすなわち、煮て扱ひ、板のごとし。櫛に挽き、黒き文に染めて琢(みが)きて、貳用(たいまい)と偽る。」とある。牛の角鞘から櫛を作り偽鱧甲を作っていたことがわかる。

引用・参考文献

- 阿部永 1994 『日本の哺乳類』 東海大学出版会 p.195
- 松井章 1992 『明石城武家屋敷出土の動物遺存体』 『明石市明石城武家屋敷跡-山陽電鉄連続立体交差事業に伴う発掘調査報告所-兵庫県文化財調査報告』 兵庫県教育委員会 pp.132-140
- 松井章 2000 『斃牛馬利用の動物考古学的考察-特に牛角の利用について』 『動物考古学』 14 動物考古学研究会 pp.11-22
- 松井章 2005 『考古学から見た動物と日本人の歴史』 『周縁文化と身分制』 思文閣出版 pp.187-239
- 望月賢二 2005 『魚と貝の事典』 魚類文化研究会 p.433

第3節 土壌分析

1 はじめに

福井城跡 15-1 調査区は、JR 北陸本線東側に隣接している。調査区北半部に南北にのびる砂利敷道路が確認され、17世紀前葉と中葉、それ以降で屋敷境の変化に対応して溝や土坑等の遺構が検出された。15-1 調査区は福井市豊島に位置する。城郭存続時には「城ノ橋」と呼ばれる外曲輪にあたり、主に武家屋敷が建ち並んでいた小道具町と呼ばれる辺りである。遺跡からは砂利敷道路、溝、土杭、柱穴等が検出された。試料となる 151-26 は土坑、151-28・102・204・259 は廃棄土坑、151-108 は素掘り井戸である。なお、素掘り井戸 151-108 は深さが2mを越え、廃絶後には廃棄土坑として利用された。これらの遺構で採取された堆積土について分析を行い、植生、環境、食性の復原を行う。

2 試料

分析試料は、15-1 調査区より出土した素掘り井戸、土坑、廃棄土坑より採取された試料で、詳細は第53表に記す。

3 花粉分析

1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物等を対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉等の

植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。しかし風媒花や虫媒花等の散布能力の差で、庭園などの狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど陸上の堆積物が分析に適さないわけではない。

第53表 分析試料一覧表

No	遺構名	グリッド	層位	土色・土質	花粉	大型植物遺体	微細遺物	遺構	時代
1	151-28	D8	1層	オリーブ黒色粘質土	○	○		廃棄土坑	18～19世紀
2			2層東半	黒色砂質土	○				
3			2層西半	黒色砂質土	○	○			
4			3・4層	黒色有機質・黒褐色砂質土	○	○			
			5層以下東半	オリーブ黒色砂質土	○	○			
5	151-102	E8	19層中央	黒色粘質土	○		○	廃棄土坑	18～19世紀
6			26層下層	黒色粘質土	○		○		
7	151-26	C8	4層西端種集中	黒褐色粘質土	○	○		土坑	17世紀
8			4層東側	黒褐色粘質土	○	○			
9			3層	黒色有機質層	○	○			
			3層(黒色土)	黒色有機質層	○				
10	151-204	J6	8層上	灰黄褐色砂質土	○	○		廃棄土坑	17世紀
11			8層袋	灰黄褐色砂質土	○				
12			9層上層	黒褐色砂質土	○	○			
13			9層下層	黒褐色砂質土	○	○			
14	151-108	J5	18層	黒色粘質土	○		○	素掘り井戸(廃棄土坑)	17世紀
15			20層	黒褐色粘質土	○		○		
16			23層	黒色粘質土	○	○	○		
17			27層	黒色粘質土	○		○		
18			31層	黒色粘質土	○		○		
19			33層	黒色粘質土	○		○		
20			34層・35層	黒色粘質土	○		○		
21	151-259	I6	13層	黒褐色粘質土	○	○		廃棄土坑	17世紀
22			14層	黒色粘質土	○	○			
計					25	12	9		

2) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- (1) 試料から1cmを採量
- (2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- (4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- (5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- (6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- (7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加え染色した後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- (8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と比べて同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

3) 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉31、シダ植物胞子2形態の計69である。これらの学名と和名および粒数を表に示し（第54表）、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図に示す（第93図～第98図）。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（図版第66, 67）。同時に寄生虫卵についても検鏡した結果、7分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉 モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、ツバキ属、グミ属、ツツジ科、カキノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、スイカズラ属

樹木花粉と草本花粉を含むもの クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

草本花粉 ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ユリ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ヒルガオ、シツ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

シダ植物胞子 単条溝胞子、三条溝胞子

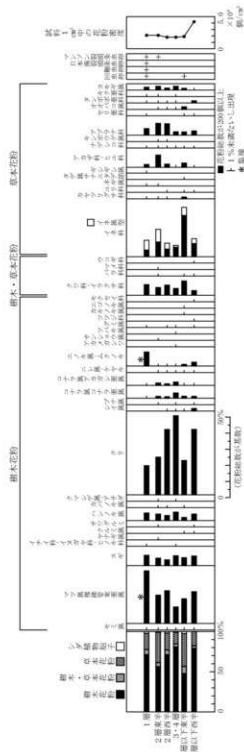
寄生虫卵 回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵-異形吸虫類卵、日本海蛭頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵、不明虫卵

以下にこれらの特徴を示す。

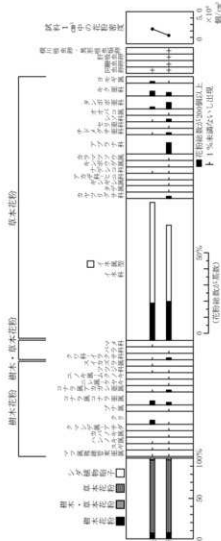
回虫 *Ascaris lumbricoides* 回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり、楕円形で外側に蛋白質を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

鞭虫 *Trichuris trichiura* 卵の大きさは $50 \times 30 \mu\text{m}$ のレモン形あるいは岐阜ちようちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は世界に広く分布し、現在では、特に熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

肝吸虫 *Clonorchis sinensis* 卵の大きさはおよそ $30 \times 16 \mu\text{m}$ のなすび型で一端に陣笠状の小蓋を有する。卵殻の表面には亀甲状の紋理を認める。糞便とともに外界に出た虫卵は、水中で第1中間宿主のマメタニシに食べられ、セルカリアになり水中に遊出し、第2中間宿主のモツゴ、モロコ、コイ、フ



第93図 151-28における花粉ダイアグラム



第94図 151-103における花粉ダイアグラム

ナ、タナゴに侵入してメタセルカリアとなり、魚肉とともにヒトに摂取され感染する。肝吸虫はアジア地域に広く分布し、中国、日本、ベトナム、韓国に多い。日本では岡山県南部、琵琶湖沿岸、八郎湯、利根川流域などが流行地として知られている。

横川吸虫-異形吸虫類 *Metagonimus yokogawai*-*Heterophyes* 卵はおよそ $27 \times 17 \mu\text{m}$ で、短楕円形または卵形。一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。日本各地でみられる横川吸虫や、瀬戸内海沿岸に多く、その他海に近い地域にかなり広く見られる有害異形吸虫は、中間宿主が異なるだけで発育史をはじめ形態なども良く似ている。横川吸虫はアユ、有害異形吸虫はボラ等の生食により魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡においては、小蓋がとれたり、堆積環境や薬品処理などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくく、異形吸虫類とする。

日本海裂頭条虫 *Diphyllobothrium nihonkaiense* 卵の大きさは $66 \sim 75 \times 45 \sim 53 \mu\text{m}$ で楕円形。卵殻はやや厚く小蓋がある。ケンミジンコ類等の第1中間宿主を経て、第2中間宿主のマスやサケ等の生食によって感染する。特に日本においては淡水河川から出て海洋を遡遊し最後に生まれた河川に戻る *Oncorhynchus* 属(サクラマス)のような魚類が第2中間宿主となり、プレロセルコイドが筋肉内だけに分布する特徴を持つ。日本海裂頭条虫は北海道や本州の北半分に多いが、その他の地方にも散在する。

マンソン裂頭条虫 *Diphyllobothrium mansoni* 終宿主はイヌ科、ネコ科の動物で、ヒトは第2中間宿主や待機宿主となる。ヒトへの感染は第1中間宿主のケンミジンコのいる生水や第2中間宿主(主にニワトリ、カモ、ブタ、イノシシ、カエル、ヘビ等)、終宿主の生食などによる。卵の大きさは $70 \times 35 \mu\text{m}$ で、両端がややとがり左右非対称で一端に小蓋がある。

不明虫卵 Unknown eggs 卵の大きさはマンソン裂頭条虫卵よりやや大きく卵殻は薄く、淡黄色。一端に小蓋がある。卵の最大幅は、小蓋側に寄る。

(2) 花粉群集(寄生虫卵を含む)の特徴

遺構ごとに花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

151-28 D8 グリッド(1層、2層東半、2層西半、3・4層、5層以下東半・西半)(第93図)

概ね樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、5層から2層はクリが高率に出現し、次いでマツ属複雑管束亜属が多く、スギ、ハンノキ属が伴われる。他にコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が低率に出現する。1層になるとマツ属複雑管束亜属の出現率が高くなりクリ、スギ、ハンノキ属の他にエノキ属-ムクノギが伴われる。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)を主にアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が出現する。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も比較的多い。回虫卵、鞭虫卵、日本海裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵がわずかに検出される。

151-102 E8 グリッド(19層中央、26層下層)(第94図)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、イネ属型、イネ科の草本が卓越する。他にキク亜科、タンポポ亜科、アブラナ科等が低率に伴われる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ等が出現する。下部の26層下層では、回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵-異形吸虫類卵が1cm中に 6.0×10^3 個出現し、19層中央では鞭虫卵がわずかに検出される。

151-26 C8 グリッド(4層西端種集中、4層東側、3層と同黒色土)(第95図)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、アブラナ科が高率に出現し、イネ属型、イネ科、アカザ科-ヒユ科がこれに次ぐ。他にソバ属、ペニバナが出現する。樹木・草本花粉では、クワ科-イ

ラクサ科、樹木花粉のクリが低率に出現する。また寄生虫卵の密度が極めて高く、1cm中に 1.7×10^4 個から 5.0×10^4 個検出される。その内訳は肝吸虫卵が多く、回虫卵、鞭虫卵、3層では特に日本海裂頭条虫卵が多く、横川吸虫卵-異形吸虫類卵と続く。マンソン裂頭条虫卵、不明虫卵もみられ、消化残渣も認められる。

151-204 J6 グリッド (8層上、8層袋、9層上層・下層) (第96図)

9層では下層で樹木花粉が33%、草本花粉が47%、樹木・草本花粉が15%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が伴なわれる。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科の出現率は比較的高い。樹木花粉では、マツ属複雑維管束亜属、スギを主にコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属が出現する。9層上層になると樹木花粉が47%を占めるようになり、マツ属複雑維管束亜属、スギが増加する。8層になると草本花粉が50%以上を占めるようになりイネ科(イネ属型を含む)が増加する。いずれの試料からも寄生虫卵が検出され、9層では回虫卵、鞭虫卵や石細胞が検出される。8層では回虫卵、肝吸虫卵、日本海裂頭条虫卵が検出され、9層よりやや密度が高くなる。

151-108 J5 グリッド (18層、20層、23層、27層、31層、33層、34層・35層) (第97図)

各層準とも花粉密度が低く、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。下部の34・35層では、樹木花粉が36%、草本花粉が45%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が出現する。樹木花粉ではマツ属複雑維管束亜属を主にクリ、コナラ属コナラ亜属が低率に出現し、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が出現する。23層から33層は密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、34・35層に出現した分類群が継続してみられる。20層では草本花粉が56%を占めるようになりイネ科(イネ属型を含む)が増加する。18層では密度が極めて低くなり、花粉はほとんど検出されない。下位の34・35層では回虫卵がわずかに検出されるが、他では寄生虫卵は検出されなかった。

151-259 I6 グリッド (13層、14層) (第98図)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、70%以上を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が高率に出現し、ヨモギ属、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科が伴う。樹木花粉では、マツ属複雑維管束亜属を主にシイ属、ハンノキ属、スギが低率に出現し、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が出現する。寄生虫卵は検出されなかった。

4) 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの遺構ごとに花粉群集の特徴から植生および環境の復原を行う。

151-28 D8 グリッド (1層、2層東半、2層西半、3・4層、5層以下東半・西半) (第93図)

樹木花粉の占める割合が高く、周囲に樹木が多かったと推定される。特にクリは層位により出現率が大きく変化し、虫媒花植物であるため近接して生育していたとみなされる。クリは比較的乾燥地を好み、早期に二次林を形成する樹木である。マツ属複雑維管束亜属は地域的に分布し、比較的高率であることから庭木として植栽されていた可能性も考えられる。また、比較的多いハンノキ属は、湿地林を形成するハンノキが含まれるが、ここでは河辺林や端境林、畦などに植えられ周辺に生育していたと考えられる。イネ科にはイネ属型が伴い、栽培植物を多く含むアブラナ科は耕地雑草のアカザ科-ヒユ科を伴って出現することから、周辺に水田や畑の分布が示唆される。また、クワ科-イラクサ科は、栽培植物のクワ類が含まれるため栽培が行われた可能性もあるが、人里や荒地に生育するカラムシや

カナムグラ等の草本が遺構の周囲に生育していたと考えられる。

わずかに寄生虫卵が検出され、その密度は生活汚染程度で、汚染源となる生活域が近隣にあったと推定される。

151-102 E8グリッド (19層中央、26層下層) (第94図)

ほとんどが草本花粉で占められ、イネ属型の出現率が高く、分析途中にもイネ類が多数確認されることから、この土坑がイネの貯蔵に使われたか、廃棄場されたと思われる。イネ花粉は初内に残存するため出現率が高いものと考えられる。他に出現するアブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科等は土坑の周囲に生育していたとみなされる。下部の26層下層では肝吸虫卵を主に1cm中に 6.0×10^2 個の寄生虫卵が検出され、汚水が流れ込むかまたは糞便も投棄される遺構であったと推定される。

151-26 C8グリッド (4層西端種集中、4層東側、3層、3層黒色土) (第95図)

出現する花粉はほとんど草本花粉で占められる。出現率が高いアブラナ科は、多くの栽培植物が含まれイネ属型、ソバ属も食用になる栽培植物である。寄生虫卵が極めて多く消化残渣もみられるため、糞便が投棄されたか便所遺構の可能性がある。アカザ科-ヒユ科もやや多く、ペニバナも検出された。いずれも食用や薬用になる植物かそれを含む分類群である。アカザ科の花穂は近世まで寄生虫の薬として煎じて用いられており、ペニバナは現在まで紅花として薬用として使われていて、平安時代以降の各時期の糞便堆積、便所遺構で検出されている。いずれも食用にならず、薬用と考えられる。

回虫卵、鞭虫卵は中間宿主を必要とせず、汚染された野菜や野草、生水を摂取したり、調理器具から感染する。日本海裂頭条虫はマスやサケの生食により感染し、肝吸虫、横川吸虫を含む異形吸虫類は、コイ科やアユ等の淡水魚の生食や不完全調理の摂食で感染する。微量に出現するマンソン裂頭条虫は、鳥類や小型の哺乳類等の摂食で感染する。当時はマスやサケ、コイ科やアユ等の淡水魚と、鳥類や小動物、花芽を含むアブラナ等の野菜、コメ、ソバを食していたことが示唆される。アカザ科-ヒユ科、ペニバナも薬用としての利用が推定される。

151-204 J6グリッド (8層上、8層袋、9層上層・下層) (第96図)

8層と9層で花粉の出現傾向に大きな差はなく、同一の群集と考えられる。周辺にはスギ林、マツ属複雑管束亜属の針葉樹、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、クリ、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキなどの落葉広葉樹と、シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹が生育する。イネ属型がカヤツリグサ科、ミズアオイ属等の水田雑草を伴って出現することから水田の分布が示唆され、8層の時期になるとイネ科に伴われるイネ属型の割合が高く、水田が拡大したと考えられる。栽培植物を多く含むアブラナ科やソバ属が畑雑草のアカザ科-ヒユ科等を伴って出現し畑の分布も示唆される。クワ科-イラクサ科から、畑の周囲に生育するカナムグラやカラムシ等の草本やクワの栽培も考えられる。

9層では、回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出され、8層では、日本海裂頭条虫卵、肝吸虫卵、回虫卵がやや多く検出される。生活汚染の影響を受けたか、人糞施肥の影響や人糞の投棄が考えられる。

151-108 J5グリッド (18層、20層、23層、27層、31層、33層、34層・35層) (第97図)

下部の34・35層の時期には、マツ属複雑管束亜属の出現率が高く、近隣にニヨウマツ(マツ属複雑管束亜属)が分布し、周辺にはクリ、コナラ属コナラ亜属の落葉樹が生育する。堆積地周囲にはイネ属型がサジモモダカ属、カヤツリグサ科等の水田雑草を伴って出現することから水田の分布が示唆される。33層から23層では花粉密度が極めて低く、花粉等の有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く花粉が集積しなかったと考えられる。しかし、わず

かに検出される花粉は34・35層の出現傾向を踏襲する。

20層の時期には、下部の34・35層の出現傾向とほとんど変わらない。近隣にマツ属複維管束亜属が分布し、周辺にはハンノキ属、コナラ属コナラ亜属の落葉樹が生育していたと考えられ、水田の分布も示唆される。18層の時期には密度が極めて低くなり、花粉等の有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く花粉が集積しなかったと考えられる。34・35層で回虫卵がわずかに検出された。生活汚染程度で近接して生活域が分布していたと思われる。また、他の土坑と比較して炭化遺体片（微粒炭）が多く含まれる。

151-259 16グリッド（13層、14層）（第98図）

13層、14層ともに大きな変化は認められない。イネ属型が水田雑草を含むイネ科、カヤツリグサ科等とともに出現し水田の分布が示唆される。また土坑の周囲は、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、クワ科-イラクサ科の草本等の比較的乾燥した環境を好む草本が生育する陽当たりの良い乾燥した環境であったとみなされる。近隣にはマツ属複維管束亜属が分布し、やや遠方にはスギ林が分布する。周辺にはハンノキ属、シイ属が孤立木として生育する。

4 大型植物遺体同定

1) 原理

大型植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。なお骨は部位や破片によるが、動物種を特定でき、その利用を調べることができる。

2) 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- (1) 各試料2000cm³から500cm³に水を加え放置し、泥化
- (2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.5mmの篩で水洗選別
- (3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3) 結果

分析の結果、種実類、葉に加え、動物骨が検出されたので合わせて同定を行った。

(1) 種実

樹木18、草本32の計50分類群が同定される。学名、和名および粒数を表（第55表）およびダイアグラム（第99図～第102図）に示し、主要な分類群を写真に示す（図版第68・69）。以下に分類群を列挙するとともに形態的特徴を記載する。

樹木

カヤ *Torreya nucifera* S.et Z. 種子 イチイ科 茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である（図版第68-1）。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don 種子 スギ科 茶褐色で長楕円形を呈し、狭い側翼がある（図版第68-2）。

クリ *Castanea crenata* S.et Z. 果皮 ブナ科 堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり

反対面は平らな形が多い。両面とも凹みがある (図版第 68-3)。

ヤマガワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科 茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い (図版第 68-4)。

ウメ *Prunus mume* S.et Z 核 バラ科 茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面に小孔が散在する (図版第 68-5)。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科 黄褐色から黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある (図版第 68-6)。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科 淡褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である (図版第 68-7)。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科 淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面に大きな網目模様がある (図版第 68-8)。

サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. 種子 ミカン科 黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある (図版第 68-9)。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 種子 ミカン科 黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落した破片のため、属レベルの同定までである (図版第 68-10)。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科 黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する (図版第 68-11)。

モチノキ *Ilex integra* Thunb. 種子 モチノキ科 種子は浅赤黄色で、楕円形を呈し、V字状の溝があり、縁は鋭く光沢はない。鋭い隆条や凹凸が多く粗面である (図版第 68-12)。

カエデ属 *Acer* 果実 カエデ科 茶褐色で楕円形を呈す。翼は残存していない。果皮には弱い縦線が走る。断面は扁平である (図版第 68-13)。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. 種子 ツバキ科 種子は黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある (図版第 68-14)。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. 種子 ツバキ科 種子は心臟形を呈する。背面は長楕円状、狭三角形など種々な形があるが、いずれの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる (図版第 68-15)。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* 種子 クマツヅラ科 淡褐白色で楕円形や狭楕円形を呈し、側面は三日月形で背面は丸みがあり、腹面方向に湾曲する。腹面の縁は薄く一段高く隆起し、その中央にへそがある。背面は平滑で、腹面は粗面 (図版第 68-16)。

クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb. 核 クマツヅラ科 暗褐色で、倒卵形を呈す。断面は三日月形。腹部の一端には発芽口があり、背面の表面には大きな網目状の模様がある (図版第 68-17)。

ニフトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 スイカズラ科 黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある (図版第 68-18)。

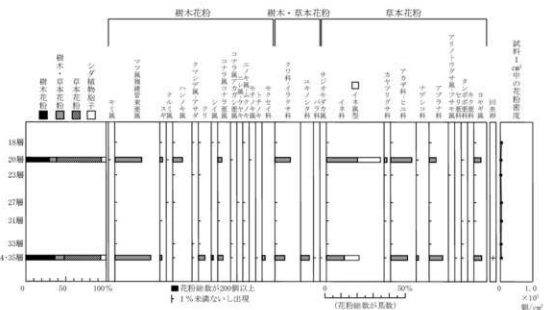
草本

オモダガ属 *Sagittaria* 果実 オモダガ科 淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定に留める (図版第 68-19)。

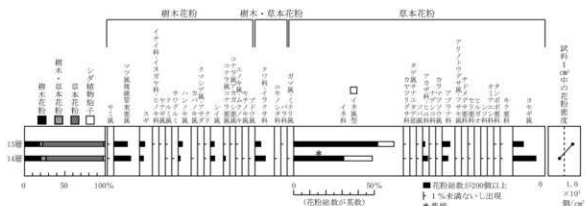
イネ *Oryza sativa* L. 穎・果実 イネ科 穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった (図版第 68-20)。

第55表 大型植物遺体(種別) 同定結果

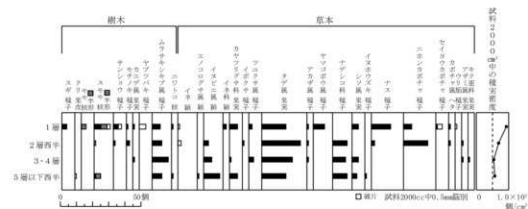
分類群	学名	和名	部位	1		2		3		4		9		7		8		10		11		12		20		21		
				1層	2層 高干	3-4層	5層 137 高干	3層	4層 西端 葉中	4層 東端	8層	9層 上層	9層 下層	13層	14層													
Alber		樹木																										
	<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	ホトケ	種子(鏡片)																					2	1			
	<i>Cyclobalanopsis japonica</i> D. Don	スギ	種子	3																		1	1	4				
	<i>Castanea crenata</i> S. et Z.	クリ	果実(鏡片)			1																						
	<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマブドウ	種子						23	138	39																2	
	<i>Prunus mume</i> S. et Z.	ウメ	核																									
	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核(半割)	3						1	1																	
	<i>Prunus salicina</i> Lindley	スモモ	核	4		1																						
			核(半割)	4	1		3																					
			核(鏡片)	2																								
	<i>Rubus</i>	キイチボ属	核						5	56	66	1																1
	<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.	サンショウ	種子	3	1				3	22	14																	
			種子(鏡片)	2																								
	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	種子									1																
	<i>Mallota japonicus</i> Muell. et Arg.	アオメダシソウ	種子																									1
			種子(鏡片)																									3
	<i>Ilex integrifolia</i> Thunb.	ホトチシ	種子	1	2																							
	<i>Acer</i>	カエデ属	果実	1		1																						
	<i>Camellia japonica</i> L.	ヤブツバキ	種子(鏡片)	4																								
	<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ヒサカキ	種子						1								2	1	1	1								
	<i>Callicarpa</i>	ムウロキシキブ属	種子	5	6	10	6																					
	<i>Clerodendron trichotomum</i> Thunb.	クササギ	核																									1
	<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex Griseb.	ニワトコ	核	1			1																1	2			1	
Herb		草本																										
	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	果実						1																			
	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎																									3
	<i>Oryza sativa</i> L.		穎(鏡片)	1	2				1	2	16												5	14	23			
	<i>Oryza sativa</i> L.		炭化果実(鏡片)						1																			
	<i>Setaria Beauv.</i>	エノコログサ属	穎				1																					1
	<i>Setaria indica</i> Beauv.	アワ	炭化果実						1																			
	<i>Echinochloa Beauv.</i>	イヌビロ属	穎			3	5	10								3												3
	Gramineae	イネ科	穎	2																								1
	<i>Scirpus</i>	ホトケシ属	果実																									1
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	5		1	5			1																		1
	<i>Carex</i>	スガ属	果実																									1
	<i>Aeluropus Aristal</i> Hance	イボクサ	種子			1																						
	<i>Commelina</i>	フユクサ属	種子	2		3																						
	<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	カナメダラ	種子(鏡片)																									1
	<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	フバ	果実(鏡片)																									2
	<i>Polygonum</i>	テナ属	果実	15	24	19	15																					
	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1	1	1				10	31	19																1
	<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	サツロソウ	種子							1																		
	<i>Phytolacca</i>	ヤマブドウ属	種子	7																								
	Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子		9	8	9	1	2	1	76	5	28	3	6													
	<i>Oxalis</i>	カタハシ属	種子							2							1	1	5									
	<i>Habenaria microtha</i> R. Br.	アリトウワダキ	果実																									1
	<i>Cucullaria</i>	アブクサ科	種子																									
	<i>Pteris</i>	シロ属	果実	4		4	3																					1
	<i>Solomon nigra</i> L.	イヌカズキ	種子				1					1																
	<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	12	2						17	12	12	1														
	<i>Solanum indicum</i> L.	ゴマ	種子(鏡片)								11																	14
	<i>Cucurbita moschata</i> Duch.	ニホンカボチャ	種子	5	15																							
	<i>Cucurbita maxima</i>	セイヨウカボチャ	種子	1																								
	<i>Cucurbita moschata</i> Duch.	カボチャ属	種子(鏡片)	3																								
	<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ属	種子	1	1																							
			種子(鏡片)							340	1078	210																1
			種子(鏡片)	1						214	730	95																
			種子(鏡片)							(+++)	(+++)	(+++)																
	<i>Melothria japonica</i> Maxim.	スズメウリ	種子																									
	<i>Cynan</i>	アザミ属	果実			1	1																					
	<i>Asteraceae</i>	キク科属	果実				1																					
	Total	合計		93	69	54	56	627	2079	460	103	11	102	36	58													
	Bud	芽		15	1	5	2																					2
	bone	骨(骨)							(+)	(+)	(+)											(+)						
		貝類	シジミ殻産				14																					
		虫類		39	12	2	1			3																		
		昆虫	(鏡片)			7	6				7	4	76	9	7	31	37											
		材	(鏡片)																									
		葉				(+)	(++)	(++)	(++)		(+)	(+)		</														



第97図 151-108における花粉ダイアグラム



第98図 151-259における花粉ダイアグラム



第99図 151-28における大型植物遺体(種実)ダイアグラム

エノコログサ属 *Setaria* 穎 イネ科 穎は茶褐色で、楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある (図版第 68-22)。

アウ *Setaria italica* Beauv. 果実 イネ科 炭化しており黒色で楕円形を呈す。胚の部分が窪む (図版第 68-23)。

イヌビエ属 *Echinochloa* 穎 イネ科 茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある (図版第 68-24)。

イネ科 Gramineae 穎 穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである (図版第 68-25)。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科 黒褐色でやや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両面凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に 4～8 本の針状の付属物を持つ (図版第 68-26)。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実 黄褐色で倒卵形を呈し、断面は扁平である。茶褐色で倒卵形を呈し、断面は三角形である (図版第 69-27)。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科 茶褐色で倒卵形で扁平である。果皮は柔らかい (図版第 69-28)。

イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科 黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部には「一」文字状のへそがあり、側面に窪んだ発芽孔がある (図版第 69-29)。

ツユクサ属 *Commelina* 種子 ツユクサ科 茶褐色で楕円形を呈し、一端は切形である。表面には「一」字状のへそがあり、切形の端まで達する。一側面に窪んだ発芽孔がある (図版第 69-30)。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科 黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある (図版第 69-31)。

ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科 黒褐色で卵形を呈す。表面には縞状の模様がある。断面は三角形である (図版第 69-32)。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科 黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。茶褐色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で表面は粗い (図版第 69-33)。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科 黒色で光沢があり、円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る (図版第 69-34)。

ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科 黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある (図版第 69-35)。

ヤマゴボウ属 *Phytolacca* 種子 ヤマゴボウ科 黒色で扁平楕円形を呈す。一端に窪みがあり、ここから褐色の突起が出る。表面には光沢があり滑らかである (図版第 69-36)。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子 黒色で円形を呈し側面にへそがある。表面には突起がある (図版第 69-37)。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科 茶褐色で楕円形を呈し上端が尖る。両面に横方向に 6～8 本の隆起が走る (図版第 69-38)。

アリノトウグサ *Haloragis micrantha* R. Br. 果実 アリノトウグサ科 淡褐色で卵形を呈す。表面には 6～7 本の縦方向の稜がはしる (図版第 69-39)。

アブラナ科 Cruciferae 種子 茶褐色で楕円形を呈し下端にへそがある。表面には長方形の網目があ

る (図版第 69-40)。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科 茶褐色で、球形を呈し下端にへそがある。表面に大きい網目模様がある (図版第 69-41)。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科 黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端に窪んだへそがある。表面には網目模様がある (図版第 69-42)。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科 黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端に窪んだへそがある。表面には網目模様がある (図版第 69-43)。

ゴマ *Sesamum indicum* L. 種子 ゴマ科 黒褐色で楕円形を呈し、上端がやや尖る。表面には微細な網目模様がある (図版第 69-44)。

ニホンカボチャ *Cucurbita moschata* Duch. 種子 ウリ科 茶褐色で扁平楕円形を呈し、周縁部はやや肥厚する。肥厚した表面は繊維状である (図版第 69-45)。

セイヨウカボチャ *Cucurbita maxima* 種子 ウリ科 黄褐色で扁平楕円形を呈し、全体的にやや肥厚する (図版第 69-46)。

カボチャ属 *Cucurbita* ヘタ ウリ科 ニホンカボチャ、あるいはセイヨウカボチャのヘタである (図版第 69-47)。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科 淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」の字状に窪む (図版第 69-48・49)。

スズメウリ *Melothria japonica* Maxim. 種子 ウリ科 黄褐色で卵形を呈す。表面はやや粗い (図版第 69-50)。

アザミ属 *Cirsium* 果実 キク科 茶褐色で倒三角状鈍菱形。やや扁平を呈し、片側は直線上で相対する一方の上部付近はやや曲線状を呈す。突起状の花柱基部が残る (図版第 69-51)。

キク亜科 *Asteroidae* 果実 キク科 茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に 8 本程の筋が走る (図版第 69-52)。

(2) 葉遺体

同定された学名、和名、部位および点数を表に示し (第 56 表)、主要な分類群を写真 (図版第 70) に示す。

第 56 表 151-28 における大型植物遺体 (葉) 同定結果

遺構 / 層位	結果 (学名 / 和名)		部位	個数	備考		
151-28	2 層	<i>Juniperus</i>	ビャクシン属	枝葉	一括	ニヨウマツ類 (アカマツないしクロマツ)	
		unknown fragments	不明 破片	葉片	(+)		
	3・4 層	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	マツ属 樹脂管束垂直属	葉	一括		
		unknown fragments	不明破片	葉 (細片)	(+)		
	5 層以下	<i>Quercus acuta-sessilifolia</i>	アカガシツクバネガシ	葉 (破片)	2		二回羽状複葉
		<i>Cinnamomum</i>	クスノキ属	葉 (破片)	1		
		<i>Lindera</i> A	クロモジ属 A	葉 (破片)	7		
		<i>Lindera</i> B	クロモジ属 B	葉 (破片)	12		
		<i>Nandina domestica</i>	ナンテン	葉	1		
		<i>Fern</i>	シダ植物	葉 (破片)	2		
	unknown A	不明 A	葉 (破片)	10			
	unknown fragments	不明破片	葉 (細片)	(+)			

(3) 動物遺存体

同定された学名、和名、および部位を下記表に示し、和名および粒数を表に示す(第57表)。主要な分類群を写真に示す(図版第71)。他に検出された部位または細片のため同定はできない不明な椎骨尾椎、椎骨腹椎、骨片ではボラ科?、タイ科?、カマス科?、トビウオ科?、不明椎骨細片、不明骨細片が検出された。

表 種名

硬骨魚綱 Osteichthyes

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

サケ属の一種 *Oncorhynchus* sp. 遊離歯

アユ科 Plecoglossidae

アユ *Plecoglossus altivelis* 椎骨腹椎、尾椎

スズキ目 Percidae

サバ科 Scombridae

サバ属の一種 *Scomber* sp. 椎骨腹椎

第57表 大型植物遺体(動物遺存体) 同定結果

遺構名	グリッド	層位	種類	部位	部分	個数
151-26	C8	3層	アユ	椎骨	腹椎	1
			不明	椎骨		(+)
			不明	不明		(+)
151-26	C8	4層西端種集中	アユ	椎骨	腹椎	13
					尾椎	31
			サバ属	椎骨	腹椎	1
			サケ属	遊離歯		1
			ボラ科?	椎骨	尾椎	1
			タイ科?	椎骨	尾椎	1
			カマス科?	椎骨	腹椎?	1
			不明	椎骨		(+++)
			不明	不明		(++)
151-26	C8	4層東側	アユ	椎骨	腹椎	5
					尾椎	2
			トビウオ科?	椎骨	尾椎	1
			不明	椎骨		(+)
151-204	J6	9層上層	不明	不明		(++)
			不明	歯		1

(4) 貝類

同定された学名、和名および部位を下記表に示す。

表 種名

斧足綱 Bivalvia

マルスダレガイ目 Veneroida

シジミ科 Corbiculidae 殻皮

4) 遺体群の特徴

(1) 151-28 (廃棄土坑) (第99図)

1層 樹木種実ではスギ3点、モモ半形3点、スモモ4点、半形4点、破片2点、サンショウ3点、破片2点、モチノキ1点、カエデ属1点、ヤブツバキ破片4点、ムラサキシキブ属5点、ニワトコ1点、

草本種実ではイネ穎破片1点、イネ科2点、カヤツリグサ科5点、ツユクサ属2点、タデ属15点、アカザ属1点、ヤマゴボウ属7点、シソ属4点、ナス12点、ニホンカボチャ5点、セイヨウカボチャ1点、破片3点、カボチャ属ヘタ1点、ウリ類破片1点が検出され、他には芽15点、虫瘤(虫えい)39点、葉(+)が検出された。

2層 樹木種実のスモモ半形1点、サンショウ1点、モチノキ2点、ムラサキシキブ属6点、草本種実のイネ穎破片2点、イヌビエ属3点、イボクサ1点、タデ属24点、アカザ属1点、ナデシコ科9点、ナス2点、ニホンカボチャ15点、カボチャ属ヘタ1点、アザミ属1点が検出され、他には芽1点、貝類のシジミ科殻皮14点、虫瘤(虫えい)12点、昆虫細片7点、ビャクシン属の枝葉1点が検出された。

3・4層 樹木種実のカエデ属1点、ムラサキシキブ属10点、草本種実のイヌビエ属5点、カヤツリグサ科1点、ツユクサ属3点、タデ属19点、アカザ属1点、ナデシコ科8点、シソ属4点、アザミ属1点、キク亜科1点が検出され、他には芽5点、虫瘤(虫えい)2点、昆虫細片6点、マツ属複雑管束東亜属の葉一括がみられた。

5層以下西半 樹木種実のクリ破片1点、スモモ1点、半形3点、ムラサキシキブ属6点、ニワトコ1点、草本種実のエノコログサ属1点、イヌビエ属10点、カヤツリグサ科5点、タデ属15点、ナデシコ科9点、シソ属3点、イヌホウズキ1点が検出され、他には芽2点、虫瘤(虫えい)1点、アカガシツクバネガシ2点、クスノキ属1点、クロモジ属A7点、クロモジ属B12点、ナンテン1点、シダ植物(二回羽状複葉)の葉2点が検出された。

(2) 151-26 (土坑) (第100図)

3層 樹木種実のヤマグワ23点、キイチゴ属5点、サンショウ3点、ヒサカキ1点、草本種実のオモダカ属1点、アカザ属10点、ナデシコ科1点、イヌホウズキ1点、ナス17点、ゴマ破片11点、ウリ類340点、破片214点、細片(+++),その他にアユ椎骨腹椎1点、不明椎骨細片(+),不明骨細片(+)が検出された。

4層西端 樹木種実のヤマグワ138点、ウメ1点、キイチゴ属56点、サンショウ22点、草本種実のイネ穎破片1点、炭化果実破片1点、アワ炭化果実1点、ホタルイ属1点、カヤツリグサ科2点、アカザ属31点、ザクロソウ1点、ナデシコ科2点、カタバミ属2点、ナス12点、ウリ類1078点、破片730点、細片(+++),その他にアユ椎骨腹椎13点、尾椎31点、サバ属椎骨腹椎1点、サケ属遊離歯1点、また同定には至らないがボラ科?椎骨尾椎1点、タイ科?椎骨尾椎1点、カマス科?椎骨腹椎?1点、不明椎骨細片(+++),虫瘤(虫えい)3点、昆虫細片7点、葉(+)が検出された。

4層東側 樹木種実のヤマグワ39点、ウメ1点、キイチゴ属66点、サンショウ14点、草本種実のイネ穎破片2点、アカザ属19点、ナデシコ科1点、イヌホウズキ1点、ナス12点、ウリ類210点、破片95点、細片(+++),他には芽2点、アユ椎骨腹椎5点、尾椎2点、また同定には至らないがトビウオ科?椎骨尾椎1点、不明椎骨細片(+),不明骨細片(+),昆虫細片4点、葉(+)が検出された。

(3) 151-204 (廃棄土坑) (第101図)

8層 樹木種実のキイチゴ属1点、サンショウ属1点、ヒサカキ2点、草本種実のイネ穎破片16点、イヌビエ属3点、ナデシコ科76点、カタバミ属1点、ナス1点、ニホンカボチャ1点、スズメウリ1点、その他に芽1点、昆虫細片76点、木材細片(+++)が検出された。

9層上層 樹木種実のヒサカキ1点、ニワトコ1点、草本種実のカヤツリグサ科1点、ザクロソウ1点、ナデシコ科5点、カタバミ属1点、シソ属1点、他には不明歯1点、昆虫細片9点が検出された。

9層下層 樹木種実のスギ1点、ヒサカキ1点、ニワトコ2点、草本種実のイネ穎破片5点、エノコログサ属1点、イネ科39点、カヤツリグサ科2点、アカザ属1点、ナデシコ科28点、カタバミ属5点、アブラナ科1点、シソ属2点、ゴマ破片14点が検出され、他には昆虫細片7点が検出された。

(4) 151-259 (廃棄土坑) (第102図)

13層 樹木種実のカヤ2点、スギ1点、アカメガシワ1点、破片3点、ヒサカキ1点、草本種実のイネ穎3点、破片14点、イヌビエ属3点、スゲ属1点、カナムグラ破片1点、ソバ破片2点、アカザ属1点、ナデシコ科3点が検出され、他に昆虫細片31点、木材細片(++)が検出された。

14層 樹木種実のカヤ1点、スギ4点、ヤマグワ2点、キイチゴ属1点、クサギ1点、ニワトコ1点、草本種実のイネ穎破片23点、イヌビエ属1点、イネ科1点、ホタルイ属1点、カヤツリグサ科1点、ソバ破片12点、アカザ属1点、ナデシコ科6点、アリノトウグサ1点、ウリ類1点、その他に芽2点、昆虫細片37点が検出された。

5) 結果と考察

15-1 調査区における大型植物遺体同定の結果、種実には樹木種実のカヤ、スギ、クリ、ヤマグワ、ウメ、モモ、スモモ、キイチゴ属、サンショウ、サンショウ属、アカメガシワ、モチノキ、カエデ属、ヤブツバキ、ヒサカキ、ムラサキシキブ属、クサギ、ニワトコ、草本種実のオモダカ属、イネ、エノコログサ属、アワ、イヌビエ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、スゲ属、イボクサ、ツユクサ属、カナムグラ、ソバ、タデ属、アカザ属、ザクロソウ、ヤマゴボウ属、ナデシコ科、カタバミ属、アリノトウグサ、アブラナ科、シソ属、イヌホウズキ、ナス、ゴマ、ニホンカボチャ、セイヨウカボチャ、カボチャ属、ウリ類、スズメウリ、アザミ属、キク亜科が検出され、その他には魚骨のアユ、サバ属、サケ属、明らかな同定はできないがボラ科?、タイ科?、カマス科?、トビウオ科?が検出された。また、葉遺体では、ビャクシン属とマツ属複雑維管束亜属(ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ)がまとまって一括で検出され、植栽されていた可能性ももたれる。その他にはシジミ科、芽、昆虫片も検出された。

(1) 151-28 (廃棄土坑) (第99図)

草本種実が樹木種実より多く、タデ属、イヌビエ属、ナデシコ科等が多く、他にアカザ属、ナデシコ科、ヤマゴボウ属、イヌホウズキ、シソ属、アザミ属、キク亜科、ツユクサ属が検出された。いずれも人里植物ないし畑雑草であり日当たりの良い乾燥地周辺に生育していたと考えられる。樹木種実ではムラサキシキブ属が多い。検出自体が珍しく、自然状態では集積されない遺構内であることから、ある程度の量が観賞用に植栽されていたとみなされる。1層と2層西半では、草本種実には栽培植物のナス、ニホンカボチャがやや多くなり、セイヨウカボチャ、ウリ類、イネが伴う。樹木種実ではモモ、スモモ、サンショウが検出され、食用となる種実類が投棄されたと考えられる。草本は他にアカザ属、ヤマゴボウ属、イヌホウズキ、シソ属、アザミ属、キク亜科等の人里植物ないし畑雑草が同定され、周囲はこれらが生育する、日当たりの良い乾燥地であったと推定される。

(2) 151-26 (土坑) (第100図)

草本種実では、ウリ類種子が極めて多く、他にゴマ、ナス、少ないがイネ、アワと栽培植物が多いという特徴をもつ。他にアカザ属も多い。樹木種実ではヤマグワ、キイチゴ属、サンショウと特定の食用になる種類が多く、ウメも検出された。魚類骨・歯ではアユが多く、サケ属とサバ属が続き、151-26の遺体群は食用になる動植物で大部分が構成される。花粉群集と寄生虫卵の結果を合わせ、本遺構の堆積物が糞便であり、糞便が投棄された土坑か便所遺構であることが示唆される。畑作物として

ウリ類、ゴマ、ナス、アワ、果実としてヤマグワ、キイチゴ属、ウメを利用していたと考えられる。またアカザ属は、薬用になり、寄生虫剤の駆虫薬として利用された可能性も考えられる。サンショウは実山椒が香辛料として用いられたと推定される。

魚類ではアユが多く、サケ属とサバ属が食べられていたと考えられる。アユは河川下流域で産卵し、成長すると遡上する。またサケ属は海を回遊し、産卵のために河川を遡上する。いずれにしても、旬となる初夏や秋に漁獲し食べられたと推測される。少ないが、ホタルイ属の水生植物や、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、カタバミ属、イヌホウズキの人里植物ないし畑作雑草が遺構周辺に生育していたと考えられる。

(3) 151-204 (廃棄土坑) (第101図)

下部から9層下層ではイネ科、ナデシコ科、9層上層では少ないがナデシコ科、8層ではナデシコ科が多く検出された。いずれも周囲はイネ科やナデシコ科の生育する日当たりのよい乾燥地であったことが示唆される。また9層下層はイネとゴマ、8層ではイネが多く、利用された食用植物の残渣が投棄されたと考えられる。エノコログサ属、イヌビエ属、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ属、カタバミ属、アブラナ科、シソ属、スズメウリは人里植物ないし畑作雑草で日当たりの良い乾燥地に生育する。シソ属は有用植物でもあり、周辺に生育していたと考えられる。また、栽培植物であるナス、ゴマ、ニホンカボチャが同定された。樹木種実が少ないが、スギ、キイチゴ属、サンショウ属、ニワトコが検出され、少なからず周辺に生育していたとみられる。なお、9層上層では、種類不明の菌1点が出土している。

(4) 151-259 (廃棄土坑) (第102図)

草本種実が多く、栽培植物であるイネ、ソバが多く、利用されて投棄されている。他に栽培植物はウリ類が検出された。草本種実のイヌビエ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科は水生植物であり、沼沢地や流れの緩やかな水路、湿地や溪流沿い、水田、川端に生育する。また、アリノトウグサも山野の湿地などに生育する。カナムグラは原野や路傍、河原などの荒地に生育する。樹木種実が少ない。カヤは山地に認められる。ヤマグワは温帯に広く分布する落葉高木で、流路沿いなどを好み、スギは温帯に広く分布し、特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。キイチゴ属、アカメガシワ、ニワトコは山野、山地の林縁に生育し、二次林種でもある。ヒサカキは温暖に広く分布し、種実は染料になる有用植物である。クサギは林縁や川岸など日当たりの良い場所に生育する。

5 微細遺物分析

1) 原理

種実や木材は炭化しても、比較的良好に構造が保存されるため同定することができる。種子や果実の特徴としては種まで同定できるものが多く、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。木材は概ね属レベルの同定が可能であり、微小遺物と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生やその利用を検討することができる。骨は部位や破片によるが、動物種を特定でき、その利用を調べることができる。試料は一覧表に示す。

2) 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- (1) 試料 1000mlに水を加え放置し、泥化
- (2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別

(3) 検出された種実は双眼実顕微鏡下で観察して同定し、同定可能な比較的大きな炭化材片(約15 cm程度)は割り折りして新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柃目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の断面をだし、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察し同定した。いずれも計数を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級など分類群で示した。

3) 結果

(1) 分類群

分析の結果、種実類と炭化材が検出された。

種実 樹木2分類群、草本16分類群の計18分類群が同定される。学名、和名および粒数を表に示し(第58表)、主要な分類群を写真に示す(図版第72)。1000cm中の種実数をダイアグラムに示す(第103図)。以下に同定根拠となる形態的特徴を示す。大型植物遺体で記載した分類群は省く。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化果実 イネ科 炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく胚と胚乳とが接する輪郭線は山形である(図版第72-7・8)。

ムギ類(オオムギ-コムギ) *Hordeum-Triticum* 果実 イネ科 オオムギもしくはコムギと思われるが、胚が欠落し鑑別できないためムギ類とした。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科 黒色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい(図版第72-9)。**キランソウ属 *Ajuga* 果実 シソ科** 卵形や狭卵形で側面は横狭卵形を呈す。着点は広卵形や広楕円形で、腹面的一端(卵の細い方)から中央までを占め幅広い隆条状の縁で囲まれる。大型の網目模様がある(図版第72-15)。

炭化材 炭化材は159点、17分類群が同定された。学名、和名を第58表、第104図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群を写真に示す(図版第73~75)。なお試料は15 cm以上の炭化材を堆積物より検出した。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に1~4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径90 cmに達する。材は均質緻密で堅硬かつ弾性が強く水湿にも耐える。保存性が高く、加工が容易で割裂し易く、表面の仕上がり良好で光沢が出る材で、弓等に用いられる(図版第73-1)。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やか箇所があり垂直樹脂道がみられる。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の特徴からマツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類)に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木であり、材はいずれも水湿によく耐え腐りにくく、建築材のなかでも水湿の影響がある柱、礎板等に用いられる材である(図版第73-2)。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉

樹材である。早材から晩材への移行はやや急で晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具に至るまで幅広く用いられる（図版第73-3）。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞がみられる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高く、加工工作が容易な上、建築材はもとより板材や小さな器具に至るまで幅広く用いられる。またヒノキないしヒノキ科の木材は大きな材がとれる良材であり、律令期以降に流通する材である（図版第73-4）。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は単列の異性放射組織型である。以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は耐朽・保存性は低く、切削・加工が容易で柔軟性に富む材で、建築、器具等に用いられる（図版第73-5）。

サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc. クルミ科 大型で丸い道管が、単独あるいは2～数个放射方向に複合し、全体としてやや放射方向に配列する傾向を示して、まばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が接線状に1列配列し、波状を示す。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で1～2細胞幅で細い。以上の特徴からサワグルミに同定される。サワグルミは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で高さ30m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性は低いが、軽軟な材で、加工性は良いが質感が悪く、建材にはあまり利用されない。しかし軽軟さがクリに似ていることから山桐と呼ばれ、古くからクリの代用として下駄等にも使用されてきた（図版第73-6）。

ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科 小型で丸い道管が放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～30本ぐらいである。放射組織は、平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。以上の特徴からハンノキ属に同定される。ハンノキ属にはハンノキ、ヤシヤブシ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。材は耐朽・保存性、切削・加工性ともに中庸な材で、挽物の器、杓子等の器具に利用されることが多い（図版第74-1）。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。材は重硬で耐朽性が高く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木

等広く用いられる (図版第74-2)。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られ、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属にはブナイヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材の強さ、切削・加工性は中庸で、弾性と従曲性に富む材である。また、縄文時代以降から現在まで木材の性状から伝統的に木地に用いられる材である (図版第74-3)。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のもの大型の広放射組織でなる複合放射組織である。以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み建築材としても用いられる。ナラ類は建築材だけではなく火持ちの良い薪炭材としても重宝される。ここでは同定数が比較的多いが、福井における中近世のコナラ属コナラ節の報告数は少なく、報告例としては一乗谷朝倉氏遺跡の銀がある (図版第74-4)。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニシ科 年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔部外の小道管は多数複合して円形か接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らむものがある。幅は1～7細胞幅である。以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3m程に達する。材は概して強く強靱で従曲性に富み、耐朽・保存性は高く水湿にもよく耐え、建築、家具、器具、船、土木等に用いられる。なお、縄文時代以降現在まで、伝統的に木地に用いられる材である (図版第74-5)。

ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。直立細胞に大きく膨らんでいるものがあり結晶細胞がみられる。以上の特徴からツバキ属に同定される。ツバキ属にはヤブツバキ、サザンカ等があり、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靱で、耐朽性が高く堅硬な良材だが切削・加工は困難である。建築、器具、楽器、船、彫刻等に用いられる (図版第74-6)。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも認める。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。以上の特徴からサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱かつ堅硬であるため、建築、器具等に用い

られる(図版第75-1)。

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1~3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキ等があり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で通常高さ10m、径30cmである。材は概して強さ中庸で、枕や農具柄等に利用されることがあるが、福井では一乗谷朝倉氏遺跡からヒサカキ属の横櫛の報告例がある。また、サカキの少ない地域ではその代替品として祭事に利用される場合がある(図版第75-2)。

カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 中型の道管が単独および放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は異性放射組織型で1~2細胞幅である。接線断面ではいずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列し、リップルマークを呈する。以上の特徴からカキノキ属に同定される。カキノキ属にはトキワガキ、ヤマガキ、マメガキ等があり、本州の西部から、四国、九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は概して堅硬な材といえ、建築および器具等に用いられる(図版第75-3)。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、主に2~4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は、異性放射組織型で1~3細胞幅である。以上の特徴からエゴノキ属に同定される。エゴノキ属にはエゴノキ、ハクウンボク等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で高さ10m、径30cmである。材はやや堅硬であるが切削、加工は容易で、器具、旋作、薪炭等に用いられる(図版第75-4)。

タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科 基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と節部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。放射断面と接線断面では柔細胞および維管束、維管束鞘が樫軸方向に配列している。以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。材は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え割裂性に富み、また細工が容易であるため、様々な素材として利用される。タケ亜科ではマダケ、ハチク、ヤダケが古くから日本にあり、モウソウチクが庭木として17世紀後半または18世紀前半に日本本土へ植栽され、現在では工芸品にも利用されている。ハチク、ヤダケは茶杓等の器具や矢等の武器にも利用されることがあり、マダケは弓道の弓のほか茶筌や茶杓等の工芸品、垂木、土壁の建築材にも利用される(図版第75-5)。

(2) 遺体群集の特徴

151-102(廃棄土坑)(第103図)

19層中央 種実では草本のイネ類破片603点、細片(+++)が極めて多い。イヌビエ属4点、スゲ属1点、アカザ属1点、カタバミ属1点、キランソウ属1点、キク亜科1点が検出され、その他に芽1点、昆虫片6点、葉片(+++)が確認された。

第58表 微細遺物分析結果

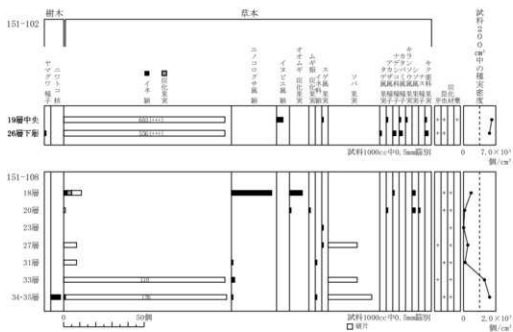
分類群		部位	151-102		151-108						
学名	和名		19層 中央	26層 下層	18層	20層	23層	27層	31層	33層	34-35層
Arbor		樹木									
<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマガワ	種子	1								
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex Griseb.	ニワトコ	柱	6								
Herb		草本									
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎	2								
		穎 (破片)	603	556	6	1		8	8	110	126
		(破片)	(+++)	(+++)							
		炭化果実	3								
<i>Setaria</i> Beauv.	エノコログサ属	穎	25								
<i>Echinochloa</i> Beauv.	イヌビエ属	穎	4								
<i>Hordium vulgare</i> L.	オオムギ	炭化果実	8								
<i>Hordium - Triticum</i>	ムギ類	炭化果実(破片)	1								
Gramineae	イネ科	穎	1								
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	1								
<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	ソバ	果実 (破片)	18								
<i>Polygonum</i>	ナデ属	果実	1								
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1								
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	2								
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1								
<i>Ajuga</i>	カタバミ科	果実	1								
<i>Pteris</i>	シロソウ属	果実	2								
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	1								
Asteroidae	キク亜科	果実	2								
Total			612	564	47	7	1	27	10	129	162
分類群		合計	151-102		151-108						
学名	和名	部位	19層 中央	26層 下層	18層	20層	23層	27層	31層	33層	34-35層
Charcoal		炭化材									
<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ		1								
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylois</i>	マツ属複雑管束亜属		9								
<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ		1								
<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ		4								
<i>Salix</i>	ヤナギ属		6								
<i>Pterocarya rhodia</i> Sieb. et Zucc.	サワグルミ		1								
<i>Alnus</i>	ハシノキ属		1								
<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ		1								
<i>Fagus</i>	ブナ属		1								
<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ部		2								
<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ		1								
<i>Camellia</i>	ツバキ属		1								
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ		2								
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属		2								
<i>Diopyros</i>	カキノキ属		1								
<i>Styrax</i>	エゴノキ属		1								
Bambusoideae	タケ亜科		4								
Total			0	0	23	9	38	11	29	28	21
Bud		芽	1								
		(破片)	2								
		炭化材	6								
		(破片)	4								
		葉	5								
		かわ?	(+++)								
		かわ?	(++)								
		かわ?	(++)								
		土器瓦片	(破片)								
		水洗選別量	(cc)								
		備考	ムギ類 未成熟 産付5村 産付有								

26層下層 種実では草本のイネ穎破片556点、細片(+++)が極めて多く、樹木のヤマガワ1点、タデ属1点、ナデシコ科2点、カタバミ属2点、キク亜科2点が検出され、その他に芽2点、昆虫片5点が確認された。

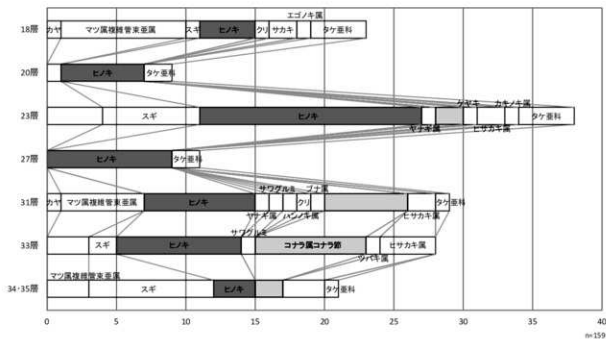
151-108 (井戸) (第103図)

18層 種実では草本のイネ穎2点、破片6点、炭化果実3点、エノコログサ属25点、オオムギ炭化果実8点、ナデシコ科1点、シロソウ属2点が検出され、他には昆虫片4点、炭化材細片(+++)、かわ?(+)が確認された。炭化材ではカヤ1点、マツ属複雑管束亜属が9点と多く、スギ1点、ヒノキ4点、クリ1点、サカキ2点、エゴノキ属1点、タケ亜科4点が検出された。

20層 種実では草本のイネ穎破片1点、オオムギ1点、ムギ類炭化果実破片1点、アカザ属1点、シ



第103図 151-102、151-108における微生物（種実）ダイアグラム



第104図 151-108における樹種と層序の相関グラフ

ソ属2点、ナス1点が検出され、他には昆虫片5点、炭化材細片(++)、土器片(+)が確認された。炭化材はマツ属複雑管束亜属1点、ヒノキ6点、タケ亜科2点が検出された。

23層 種実では草本のスケ属1点が検出され、その他に炭化材細片(+++)、なわ?(+)が確認された。炭化材はマツ属複雑管束亜属4点、スギ7点、ヒノキ16点と多く、ヤナギ属1点、コナラ属コナラ節2点、ケヤキ1点、ヒサカキ属2点、カキノキ属1点、タケ亜科4点が検出された。

27層 種実では草本のイネ類破片8点、スケ属1点、ソバ破片18点が検出され、その他に芽1点、炭化材細片(+++)が確認された。炭化材はヒノキ9点、タケ亜科2点がみられた。

31層 種実では草本のイネ類破片8点、エノコログサ属1点、イネ科1点、その他に昆虫片2点、炭化材細片(+++)が確認された。炭化材ではカヤ1点、マツ属複雑管束亜属6点、ヒノキ8点、ヤナギ属1点、サワグルミ1点、ハンノキ属1点、クリ1点、ブナ属1点、コナラ属コナラ節6点、ヒサカキ属2点、タケ亜科1点が検出された。

33層 種実では草本のイネ類破片110点、エノコログサ属1点、ソバ破片18点が検出され、他には芽1点、炭化材細片(+++)が確認された。炭化材はマツ属複雑管束亜属3点、スギ2点、ヒノキ9点、サワグルミ1点、コナラ属コナラ節8点、ツバキ属1点、ヒサカキ属4点が検出された。

34、35層 種実では樹木のニワトコ6点、草本のイネ類破片126点、炭化果実1点、エノコログサ属1点、イネ科1点、ソバ破片27点が検出され、その他に昆虫片4点、炭化材細片(+++)が確認され、炭化材はマツ属複雑管束亜属3点、スギ9点、ヒノキ3点、コナラ属コナラ節2点、ヒサカキ属3点、タケ亜科1点が検出された。

4) 考察

151-102 (廃棄土坑)

イネ類破片と細片が極めて多く、多量に破棄されたと考えられる。樹木種実のヤマグワは温帯に広く分布する落葉高木で流路沿いなどに生育する。草本種実のイヌビエ属、スケ属、カヤツリグサ科、タデ属は水生植物であり、沼沢地や流れの緩やかな水路、湿地や溪流沿いまたは水田、川端に生育し、ナデシコ科、カタバミ属、キランソウ属、キク亜科は人里植物ないし畑雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育し、これらの草本が周囲に分布していた。

151-108 (井戸)

草本種実のエノコログサ属、イネ科、スケ属は水生植物であり、沼沢地や流れの緩やかな水路、湿地や溪流沿いまたは水田、川端に生育し、アカザ属、ナデシコ科、シソ属、ナスは人里植物ないし畑雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育する。これら草本は151-108(井戸)周辺に生育していたと考えられる。検出されたイネ、オオムギ、ソバ、ナスは栽培植物であり食用にもなる。ソバは、気温差が大きく、冷涼な地域で栽培されて生育する。ニワトコは山野、山地の林縁、低地や湿地に生育する二次林種である。

同定された樹種はいずれも温帯上部の冷温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であった。またヒノキは適潤性であり、スギは特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。土壌条件の悪い岩山に生育するアカマツ(マツ属複雑管束亜属)、クリ、コナラ(コナラ属コナラ節)は二次林要素である。また、ヤシヤブシ(ハンノキ属)、サカキ、カキノキ属は山野や日当たりの良い尾根筋などに生育する。カヤ、ヤナギ属、サワグルミ、ケヤキは適潤な谷側や谷合いを好んで生育し、ハンノキ(ハンノキ属)は水湿のある低地に生育する。他に湿潤な気候下に生育するブナ属にはブナとイヌ

ブナがあり、温帯上部の冷温帯から温帯中間域に生育する。なおヒサカキ属、ヤブツバキ（ツバキ属）は尾根筋や海岸等に生育する。

5) 小結

調査区 15-1 から出土した堆植物から微細物を同定した結果、樹木種実のヤマグワ、ニワトコ、草本種実のイネ、エノコログサ属、イヌビエ属、オオムギ、ムギ類、イネ科、スゲ属、ソバ、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、カタバミ属、キランソウ属、シソ属、ナス、キク亜科が検出され、炭化材はカヤ、マツ属複雑維管束亜属、スギ、ヒノキ、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ節、ケヤキ、ツバキ属、サカキ、ヒサカキ属、カキノキ属、エゴノキ属、タケ亜科が検出された。その他には芽、昆虫細片、葉細片が検出された。

炭化材で同定された樹種は建築材や器具に比較的好く利用されるものがほとんどで、またその点数が多く、板材の形状を示す破片もあり、多くは建築材や器具等の一部であると考えられる。また、いずれの層においても針葉樹の同定数の方が比較的多い（第104図）。なお、中部日本海側では地域的な森林要素からヒノキよりもスギの供給が多く利用される特徴があるが、本遺跡ではヒノキの方が多い傾向がみられる。なお、ヒノキは律令期以降に頻繁に流通するようになった。他にマツ属複雑維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ節、ヒサカキ属、タケ亜科が多いが、ヒサカキ属を除くと部材や器具等の利用にみられる樹木である。またヒサカキ属は径が細いため用材とは考えられず、生育または植えられていた可能性がある。

6 まとめ

15-1 調査区において、寄生虫卵を含む花粉分析、大型植物遺体同定、微細遺物分析を行った結果、遺構ごとに遺体、遺物の内容が異なり、151-28、151-204、151-108、151-259 は周辺植生を基本的に示すが、151-102 はイネ属型花粉が卓越して多く、イネ穎片（粃殻）も多いため、イネ穎（稲穂）の投棄が示唆される。151-26 では寄生虫卵密度と食用になる植物の花粉、種実が多く、糞便の投棄が便所遺構であったかが示唆された。151-106 では廃棄された炭化材が多く、木材の使用状況が示された。食用植物はイネやソバの他ウリ類、ニホンカボチャ、セイヨウカボチャ、アブラナ科、アワ、オオムギ、ムギ類（オオムギ-コムギ）の畑作物、ウメ、スモモ、モモの果樹、ヤマグワ、キイチゴ属、サンショウ、シソ属、カヤ、クリが採取され利用されている。イネ穎（稲穂）が多量に投棄されていることから、イネ（コメ）は多量に扱われている。151-26 の魚骨からはアユを主にサバ属やサケ属、寄生虫卵の感染からはサケ類、アユやコイ科の魚類、鳥類が小動物の摂食が示唆された。151-102 の廃棄された炭化材からは、ヒノキを主にスギ、コナラ属コナラ節、マツ属複雑維管束亜属（ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ）、タケ亜科等の建築材や器具によく利用される樹種が多いため、建物に用いられていたことが推定された。またマツ属複雑維管束亜属（ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ）、ビャクシン属、ムラサキシキブ属、ナンテン、クリの植栽が考えられ、クリは二次林の可能性もある。周辺地域には水田の分布が示唆され、マツ属複雑維管束亜属、スギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属の樹木が分布していたと考えられた。

参考文献

- 中村純 1967『花粉分析』古今書院 pp.82-102。
 鳥倉巳三郎 1973『日本植物の花粉形態』『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p。

- 中村純 1974「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究 13』pp.187-193.
- 中村純 1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学 第10号』pp.21-30.
- 中村純 1980「日本産花粉の標識」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p.
- 金原正明 1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』角川書店 pp.248-262.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一 1987「線形動物・扁形動物. 医動物学」『新版臨床検査講座 8』医歯薬出版 pp.9-55.
- 金原正明・金原正子 1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-』奈良国立文化財研究所 pp.14-15.
- 金原正明 1999「寄生虫. 考古学と動物学」『考古学と自然科学 2』同成社 pp.151-158.
- 笠原安夫 1985『日本雑草図説』養賢堂 494p.
- 笠原安夫 1988「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣出版 pp.131-139.
- 金原正明 1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル No.409』ニューサイエンス社 pp.15-19.
- 南木睦彦 1991「栽培植物」『古墳時代の研究 第4巻 生産と流通 1』雄山閣出版株式会社 pp.165-174.
- 南木睦彦 1993「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』東京大学出版会 pp.276-283.
- 吉崎昌一 1992「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル No.355』ニューサイエンス社 pp.2-14.
- 南木睦彦 1993「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編. 第四紀試料分析法』東京大学出版会 pp.276-283.
- 渡辺誠 1975『縄文時代の植物食』雄山閣 187p.
- 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学』雄山閣 449p.
- 佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 pp.20-48.
- 島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 pp.296.
- 鈴木三男・能城修一 1991「越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹種」『朝倉氏遺跡資料館紀要 1990』福井県立朝倉氏遺跡資料館 pp.15-22.
- 山田昌久 1993『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成』『植生史研究特別第1号』植生史研究会 pp.242.
- 東海大学出版会 1994『日本の哺乳類』
- 松井章 2008『動物考古学』京都大学学術出版

第4節 遺物の構造分析

1 木製品の樹種

1) 試料

試料は福井県福井城跡から出土した木製品のうち、完形で状態の良い遺物、または製品や部材として珍しいもの、または多量にある製品から傾向分析のため抽出した遺物など150点である。

2) 調査方法

調査方法は剃刀で木口（横断面）、柃目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。No.16は、数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、薄片プレパラートを作製した。これらを顕微鏡で観察して同定した。なお遺物の形状や状態により、No.17・28・45・56・59・76・85・92・99・115・124は木口の採取ができなかった。No.は15-1～16-1調査地区からの遺構の昇順である。

2 結果

樹種同定結果19樹種（針葉樹4種、広葉樹13種、樹皮1種、イネ類1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

マツ科マツ属【二葉松類】(*Pinus sp.*) (分析 No.9,12,34) (樹種写真 No.1) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は壱型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属【二葉松類】はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don) (分析 No.1~4, 6, 11, 13, 15, 28, 32, 37, 38, 40~42, 46, 52, 54~56, 59, 60, 65, 71, 76, 80 (蓋) 82, 102, 104~107, 113, 115, 118, 120, 132, 143) (樹種写真 No.2) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis sp.*) (分析 No.7, 8, 30, 33, 50, 74, 89, 92, 97, 100, 121, 124, 125, 137~140, 142) (樹種写真 No.3) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏平している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis sp.*) (分析 No.10, 14, 18, 39, 45, 49, 72, 77~79, 85, 88, 99, 101, 108, 110, 111, 114, 116, 117, 123, 126~129, 131, 133~136, 141, 144, 150) (樹種写真 No.4) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔は、ヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属には基本種のアスナロ(ヒバ、アテ)と変種のヒノキアスナロ(ヒバ)があるが、顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

カバノキ科カバノキ属ミズメ (*Betula grossa* Sieb. et Zucc.) (分析 No.16, 98) (樹種写真 No.5) 散孔材である。木口ではやや大きい道管(~190 μ m)が単独ないし2~4個が放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と直立、平伏細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は1~4細胞列、高さ~450 μ mであった。ミズメは本州、四国、九州に分布する。

カバノキ科ハンノキ属 (*Alnus sp.*) (分析 No.53) (樹種写真 No.6) 散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管(~90 μ m)が2~数個半径方向に放射複合管孔をなして平等に分布する。軸方向柔細胞は単接線状柔細胞を形成している。放射組織は多数の単列放射組織と幅の広い放射組織がある。柾目では道管は階段穿孔と小型で円形の対列壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなるが、ときに上下縁辺に方形細胞が現れる。板目では多数の単列放射組織(1~30細胞高)と単列放射組織が集まってできた集合型の広放射組織がある。ハンノキ属はハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科ブナ属 (*Fagus sp.*) (分析 No.19~21, 23, 47, 57, 61~63, 73, 83, 84, 87, 90, 93, 95, 96, 109, 130, 145, 146, 149) (樹種写真 No.7) 散孔材である。木口ではやや小さい道管(~110 μ m)がほぼ平等に散

在する。これらは年輪の内側から外側に向かって、大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は、大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属は単幹のブナ、基部で分枝して複幹になるイヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (分析No.91) (樹種写真No.8) 環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500 μ m）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

ニレ科ニレ属 (*Ulmus* sp.) (分析No.44) (樹種写真No.9) 環孔材である。木口では大道管（～300 μ m）が2～3列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数接合して複合管孔を形成し、花束状、斜線状、接線状に比較的規則的に配列する。軸方向柔細胞は周囲状が顕著である。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を持つ。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁には櫛状の壁孔が存在する。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～740 μ mである。ニレ属はハルニレ、アキニレ、オヒヨウがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) (分析No.43, 75, 147) (樹種写真No.10) 環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270 μ m）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では、大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では、放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のはば大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

クワ科クワ属 (*Morus* sp.) (分析No.112) (樹種写真No.11) 環孔材である。木口では大道管（～280 μ m）が年輪界にそって1～5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が2～6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では、道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属は日本原産種のヤマグワのほか、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.) (分析No.5, 27, 58, 66, 67, 86) (樹種写真No.12) 散孔材である。

木口ではやや小さい道管（ $\sim 110\mu\text{m}$ ）が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では、道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は、すべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ $\sim 700\mu\text{m}$ となっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

マンサク科イヌノキ属イヌノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) (分析 No.36, 81) (樹種写真 No.13) 散孔材である。木口ではやや小さい道管（ $\sim 50\mu\text{m}$ ）がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物（チロース）がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では、放射組織は1～2細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ で多数分布している。イヌノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。

マメ科ネムノキ属 (*Albizia* sp.) (分析 No.26) (樹種写真 No.14) 環孔材である。木口では大道管（ $\sim 300\mu\text{m}$ ）が3～5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では移行するにしたがって大きさを減じ、年輪最外部では軸方向柔細胞と区別がつかない。軸方向柔細胞は孔圏外で顕著に周囲柔組織を形成している。放射組織は2～3列のものが走向している。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。道管内には着色物質がある。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ $\sim 450\mu\text{m}$ からなる少し角張ったものが多くある。ネムノキ属はネムノキ、ヒロハネムがあり、本州、四国、九州に分布する。

ツゲ科ツゲ属ツゲ (*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* Rehd. et Wils.) (分析 No.29, 35) (樹種写真 No.15) 散孔材である。木口では極めて小さい道管（ $\sim 40\mu\text{m}$ ）が多数平等に分布する。木繊維は厚壁である。柾目では道管は階段穿孔（10本前後）を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔には小型の篩状の壁孔がある。板目では放射組織は2～3細胞列、高さ $\sim 600\mu\text{m}$ からなる。ツゲは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (分析 No.22, 24, 25, 48, 51, 64, 69, 70, 94, 148) (樹種写真 No.16) 散孔材である。木口ではやや小さい道管（ $\sim 80\mu\text{m}$ ）が単独かあるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側（ターミナル状）に配列する。柾目では、道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている（上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる）。板目では放射組織は単列で大半が高さ $\sim 300\mu\text{m}$ となっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列している。肉眼では微細な縞模様（リップルマーク）として見られ、用材として大きな特徴となっている。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

カキノキ科カキノキ属 (*Diospyros* sp.) (分析 No.122) (樹種写真 No.17) 散孔材である。木口ではやや大きい道管（ $\sim 200\mu\text{m}$ ）が単独ないし2～4個放射方向に複合している。道管の接合している壁は厚くなっている。分布数は少ない。軸方向柔細胞は顕著で接線状、網状に配列している。柾目では道管

は単穿孔と隔壁に多数の小壁孔を有する。道管内腔には着色物質がみられる。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~2細胞列、高さ~500 μ mからなる。放射組織、木繊維とも階層状に配列しており、肉眼的に微細な縞模様(リップルマーク)としてみられる。カキノキ属はヤマガキ、カキ、シナノガキがあり、本州(西部)、四国、九州、琉球に分布する。

ヤマザクラ or カバの樹皮(分析 No.80 (縦じ皮))(樹種写真 No.18) 横断面と放射断面ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。接線断面では細胞が放射方向に規則正しく配列している。しかし桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

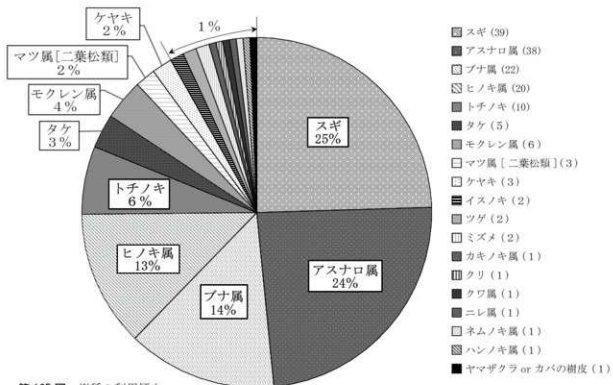
イネ科タケ亜科(Subfam. Bambusoideae)(分析 No.17, 31, 68, 103, 119)(樹種写真 No.19) 横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稜輪方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

参考文献

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)
 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ~Ⅴ」京都大学木質科学研究所(1999)
 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)
 使用顕微鏡 Nikon DS-Fi 1

第59表 器種別樹種組成

器種	建築材	文房具	座席具	容器	紡織具	工具	容器(漆)	食器具	祭祀具	部材	雑具	遊戯具	その他	合計
ヒノキ属	3	1	10	11	1	2	7	2	2				1	40
スギ	5	2	2	17		3	3		1	1			3	37
アスナロ属	1	2	3	8		1		5		1			2	23
ヒズメ								1				1		2
ハンノキ属							1							1
アナ属			1				22							23
タリ			1											1
ニレ属											1			1
カヤキ							3							3
クワ属													1	1
モクレン属			2	1			2							5
イスノキ			2											2
ホムノキ属			1											1
ツゲ			2											2
トチノキ							10							10
サキノキ属								1						1
ヤマザクラ or カバの樹皮				1										1
タテ						1		4						5
合計	9	5	24	38	1	7	38	21	2	4	1	2	7	139



第105図 樹種の利用傾向

2 塗膜観察と分析

1) 試料と調査方法

調査した試料は、第61表に示す漆器類の什器24点と食器具5点、不明漆器5点、櫛2点の塗膜が確認された合計36点である。

調査方法は、断面観察を行った。本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。次にEPMA分析のため、作製した塗膜断面プレパラートの導電性を上げて観察精度を上げる為に金(Au)蒸着を行い、日本電子株式会社製走査型電子顕微鏡JSM-6010LAを用いて、電子顕微鏡画像を撮影すると共に、塗膜混和物の元素同定を行った(第61表)。

2) 調査結果

塗膜断面の観察結果を、第61表に示した。

塗膜構造: 下層から、木胎、下地、漆層が観察された。

布着せ: No.75外面紋様部には漆下地の下に布着せの布の糸の断面が見られた。それらの糸繊維の横断面の形状は長径と短径の差がややある横長楕円形を呈しており、木綿ではない植物繊維である。

下地: 膠着剤として漆を用いる漆下地 (No.58外面、No.75外面) と、柿渋を用いる渋下地 (No.19内面、No.20、23、24、25、27外面、No.30底部、No.33柄部、No.36、47外面、No.48外面、No.51外面、No.53内面、No.57、59柄部、No.61、64、70、73、84、87、90、94、96、97、98内面、No.146、148外面、No.149) とがみられた。またNo.10内面、No.116については木胎の上に直接漆が塗布されていた。No.35の櫛は下地については不明である。No.30杓底部とNo.59漆塗柄鏡箱、No.122塗箸は下地のみ残存しており、漆層があったかどうかは不明である。

漆層: No.27 外面、No.75 外面、No.148 外面 (高台) には漆層の塗り重ねが見られた。また、No.23 外面、No.119 塗分け部は赤色漆、青色漆、赤色漆の塗り重ねが見られた。

加飾: No.20 外面、No.28 外面、No.24 内面、No.25 内面、No.47 外面、No.48 外面、No.58 外面、No.84 外面、No.87 外面、No.90 外面、No.146 外面には赤色漆で、No.36、No.51 外面、No.75 外面には黄色漆で漆絵が施されている。No.149 外面は赤色漆、黄色漆の両方が使用されている。また No.61 外面、No.64 外面、No.70 外面、No.73 外面、No.97 の加飾部には金属片の混和が見られた。

顔料: 赤色漆に混和された赤色顔料は、No.10 内面、No.87、No.97 が透明度が高く不定形粒子のベンガラであった。それ以外では透明度が高く、明確な粒子形状を呈する朱であった。また黄色の漆層に葉石黄が混和されている。No.119 の青色漆には藍の粒子が混和され、No.23 外面は加えて石黄も混和されていた。No.61 外面、No.64 外面、No.70 外面、No.73 外面の金属片は銀、No.97 は金が混和されていた。

また EPMA 成分分析結果以上の分析から、赤色顔料は朱とベンガラの混和が確認された。黄色漆は石黄が確認された。また、No.58 外面と No.75 外面の下地では、炭素 (C)、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) が検出されているが、炭素 (C) は膠着材に使用されている有機質の漆に由来し、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) などは無機質の地の粉 (成分はシリカ (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃)、酸化第二鉄 (Fe₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)) 由来と考えられる。その他ではほぼ炭素 (C) が検出されているが、膠着剤の柿渋と混和剤の木炭粉に由来すると考えられる。これは漆下地では炭素とケイ素が、漆下地ではほぼ炭素が検出されるというように、製作技法の違いと矛盾しない結果であった。

3) 所見

木胎と下地との間に、布着せの布の断面が見られたものが1点 (No.75 外面) あった。その布の素材は、木綿以外の苧麻や麻と推定される。布着せの見られた1点には漆下地、そして透明漆2層の塗り重ねが見られた。また、No.23 外面、No.119 塗着塗分け部のように下地の上に赤色漆、青色漆、赤色漆と丁寧に塗り重ねが施された製品もあった。その他には下地の上に地色の漆が塗布されたものや、透明漆の上に赤色漆や黄色漆で加飾されたものが見られた。

4) 考察

以上の分析結果を受けて全体をみると、36点53ヶ所の塗膜分析のうち、24ヶ所は漆層が1層のみであった。最も厚い4層塗のものはNo.58の漆塗刀子状木製品で、3層のものは布着せのあるNo.75の漆器椀の外面であった。No.58の漆塗刀子状木製品は下地2層に透明漆1層で、部分的に朱漆が重ねられ4層と3層になる。特有の斑紋を付けた後、研ぎ出して模様を出す唐塗 (津軽塗) の技法とみられる。No.75は透明漆を2層重ねた上に、黄色漆で文様を描く。残りの24ヶ所は2層の構造で、うち22ヶ所は透明漆と色漆の組み合わせである。塗膜構造が見られなかった箇所も2ヶ所存在する。

混成された顔料は、ベンガラ・朱・石黄・藍・金・銀であった。分析された36点53ヶ所のうち、顔料が検出されたのは42ヶ所であった。最も多かったのは、朱 (辰砂または水銀朱 HgS) で32ヶ所に上る。次にベンガラ (酸化第二鉄 Fe₂O₃) と石黄が6ヶ所ずつで、銀が5ヶ所、藍が2ヶ所、金が1ヶ所であった。目視では、漆黒の無文の端反椀に分類していたNo.23に朱・石黄・藍が用いられていたことは新たな発見であった。また、銀と石黄は金粉の代用品としての側面も考えたい。

下地は2点を除き、全て柿渋であった。このことから、今回の試料は廉価な普及品がほとんどであり、日常使いの漆器類であったと考えられる。

第60表 木製品樹種同定表

図版番号	分析No.	樹種	樹種	木製品番号	図版番号	分析No.	樹種	樹種	木製品番号
第39図1	19	漆樹科	アナンサナ属	5-15-13	第47図2	133	植物 漆	ヒノキ科アナンサナ属	木431
第39図2	21	漆樹科	アナンサナ属	5-21-10	第47図4	79	植物 漆	スギ科スギ属	木331
第39図3	96	漆樹科	アナンサナ属	木494	第47図5	89	植物 漆	ヒノキ科ヒノキ属	木417
第39図4	48	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木123	第47図6	80	植物 漆	スギ科スギ属	木332
第39図5	93	漆樹科	アナンサナ属	木466	第47図7	135	植物 漆	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木489
第39図6	145	漆樹科	アナンサナ属	木951	第47図10	89	植物 漆	ヒノキ科ヒノキ属	木447
第39図7	95	漆樹科	アナンサナ属	木490	第47図11	30	植物 漆	ヒノキ科ヒノキ属	木13
第39図8	47	漆樹科	アナンサナ属	木122	第47図12	127	植物 漆	ヒノキ科アナンサナ属	木313
第39図9	24	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	102-2-3					
第39図10	73	漆樹科	アナンサナ属	木285					
第39図11	90	漆樹科	アナンサナ属	木450					
第39図13	20	漆樹科	アナンサナ属	5-17-1					
第39図14	25	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	102-3-3	第48図1	150	植物 漆	ヒノキ科アナンサナ属	木982
第40図1	22	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	28-2-15					
第40図2	94	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木477	第49図1	2	木材 榿	スギ科スギ属	3-15-1
第40図3	83	漆樹科	アナンサナ属	木355	第49図2	2	木材 榿	スギ科スギ属	3-4-4
第40図4	57	漆樹科	アナンサナ属	木228	第49図3	1	木材 榿	スギ科スギ属	3-4-6
第40図5	63	漆樹科	アナンサナ属	木243	第49図5	101	建築材	ヒノキ科アナンサナ属	木520
第40図6	149	漆樹科	アナンサナ属	木959	第49図7	34	材	ワツバノ属 [二重松組]	木39
第40図7	70	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木280	第50図1	100	建築材	ヒノキ科ヒノキ属	木514
第40図8	64	漆樹科	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木245	第51図3	141	遺物 札	ヒノキ科アナンサナ属	木851
第40図9	87	漆樹科	アナンサナ属	木406	第51図4	137	遺物 札	ヒノキ科ヒノキ属	木567
第40図11	84	漆樹科	アナンサナ属	木388	第51図5	105	遺物 榿	スギ科スギ属	木592
第40図12	81	漆樹科	アナンサナ属	木235	第51図6	71	遺物 札	スギ科スギ属	木282
第40図14	43	漆樹科 漆	ニレ科ヤブニレ属ヤブニレ	木74	第51図7	126	遺物 札	ヒノキ科アナンサナ属	木308
第40図15	148	漆樹科 漆	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木955	第51図8	11	遺物 札	スギ科スギ属	28-6-3
第40図16	51	漆樹科 漆	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木139	第52図14	118	菅	ヒノキ科ヒノキ属	木179
第40図17	75	漆樹科 漆	ニレ科ヤブニレ属ヤブニレ	木294	第52図15	120	菅	スギ科スギ属	木445
第40図18	86	漆樹科	アナンサナ属	木405	第52図16	121	菅	ヒノキ科ヒノキ属	木454
第40図19	146	漆樹科 漆	アナンサナ属	木953	第52図19	116	菅	ヒノキ科アナンサナ属	木101
第41図1	23	漆樹科	アナンサナ属	木954	第52図20	33	竹筴	イネ科タケノコ属	木21
第41図2	147	漆樹科	ニレ科ヤブニレ属ヤブニレ	100-20-4	第52図25	117	菅	ヒノキ科アナンサナ属	木154
第41図3	58	漆樹科 榿	ホトケシザン科ホトケシザン属	木230	第52図33	122	遺物 漆	オウノヒゲ科オウノヒゲ属	木512
第41図4	27	漆樹科	ホトケシザン科ホトケシザン属	表土中-1	第52図34	119	竹筴	イネ科タケノコ属	木286
第41図5	69	漆樹科 漆	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木279	第53図1	17	竹ハタ	イネ科タケノコ属	108-21-3
第41図6	62	漆樹科 漆	アナンサナ属	木239	第53図2	68	榿	イネ科タケノコ属	木275
第41図7	109	漆樹科 漆	アナンサナ属	木686	第53図3	103	榿	イネ科タケノコ属	木269
第41図8	97	漆樹科 漆	ヒノキ科ヒノキ属	木507	第53図9	124	榿	ヒノキ科ヒノキ属	木92
第41図9	3	植物	ホトケシザン科ホトケシザン属	木200-3	第53図12	136	榿	ヒノキ科アナンサナ属	木492
第41図10	53	漆樹科 漆	ヒノキ科アナンサナ属	木163	第53図13	132	榿	スギ科スギ属	木410
第42図1	49	連年下駄	ヒノキ科アナンサナ属	木136	第53図14	123	榿	ヒノキ科アナンサナ属	木55
第42図2	129	連年下駄	ヒノキ科アナンサナ属	木324	第53図15	138	榿	ヒノキ科ヒノキ属	木570
第42図4	125	連年下駄	ヒノキ科ヒノキ属	木307	第53図16	37	榿	スギ科スギ属	木47
第42図5	134	連年下駄	ヒノキ科アナンサナ属	木475	第54図1	107	ハタ	スギ科スギ属	木637
第42図6	128	連年下駄	ヒノキ科アナンサナ属	木322	第54図2	33	ハタ	ヒノキ科ヒノキ属	木36
第42図7	92	連年下駄	ヒノキ科ヒノキ属	木463	第54図3	38	ハタ	スギ科スギ属	木51
第42図9	55	連年下駄	スギ科スギ属	木167	第54図4	98	杓子	オウノヒゲ科オウノヒゲ属	木568
第42図11	110	連年下駄	ヒノキ科アナンサナ属	木689	第54図5	139-2	打明台	ヒノキ科ヒノキ属	木819
第43図1	26	漆印下駄	ヤマボウシ科ヤマボウシ属	近代産成土 34-2	第54図6	99	漆印下駄	ヒノキ科アナンサナ属	木513
第43図2	91	板取履	アナンサナ科アナンサナ属	木463	第54図11	102	打明台	スギ科スギ属	木568
第43図3	46	下駄 打行	スギ科スギ属	木113	第54図13	8	結縁帯	ヒノキ科ヒノキ属	28-3-3
第43図4	4	連年下駄	スギ科スギ属	5-20-2	第55図2	28	杖	スギ科スギ属	木1
第43図5	32	櫛の下駄	スギ科スギ属	木27	第56図1	36	櫛	ワツバノ科ワツバノ属	木41
第43図6	59	漆印下駄	ヒノキ科ヒノキ属	木137	第56図2	35	櫛	ワツバノ科ワツバノ属	木40
第43図7	113	板取履	スギ科スギ属	木711	第56図3	81	櫛	ワツバノ科ワツバノ属	木326
第43図8	111	板取履	ヒノキ科アナンサナ属	木703	第56図4	29	櫛	ワツバノ科ワツバノ属	木3
第43図10	108	板取履	ヒノキ科アナンサナ属	木685	第56図5	115	櫛	スギ科スギ属	木733
第43図12	130	漆印下駄履	アナンサナ属	木329	第56図6	59	漆印物箱	スギ科スギ属	木232
第43図13	66	漆印下駄履	ホトケシザン科ホトケシザン属	木263	第56図7	74	櫛	ヒノキ科ヒノキ属	木287
第43図14	67	漆印下駄履	ホトケシザン科ホトケシザン属	木264	第56図8	140	櫛	ヒノキ科ヒノキ属	木822
第44図2	13	榿 板取	スギ科スギ属	28-9-3	第56図9	54	竹筴	スギ科スギ属	木164
第44図3	18	榿 板取	ヒノキ科アナンサナ属	204-2-2	第56図12	44	榿	ニレ科ニレ属	木77
第44図4	69	榿 板取	スギ科スギ属	木523	第56図13	65	榿	ヒノキ科アナンサナ属	108-16-1
第44図7	6	榿 板取	スギ科スギ属	28-2-2	第56図14	106	人形	スギ科スギ属	木600
第44図8	65	榿 板取	スギ科スギ属	木253	第57図1	9	前巻 脚	ワツバノ属 [二重松組]	28-6-1
第44図9	15	榿 板取	スギ科スギ属	100-11-1	第57図2	12	前巻 脚	ワツバノ属 [二重松組]	28-7-3
第44図10	78	榿 板取	スギ科スギ属	木329	第57図7	7	角材	ヒノキ科ヒノキ属	28-2-6
第45図3	76	榿 板取	ヒノキ科ヒノキ属	木303	第57図8	142	不明部	ヒノキ科ヒノキ属	木877
第45図4	77	榿 板取	ヒノキ科アナンサナ属	木304	第57図11	85	榿 板取	ヒノキ科ヒノキ属	木400
第45図7	10	榿 板取	ヒノキ科アナンサナ属	28-6-2	第58図1	56	不明部	スギ科スギ属	木213
第46図3	104	植物 漆	スギ科スギ属	木527	第58図4	112	不明部	少バネ科バネ科	木769
第46図5	144	植物 榿	ヒノキ科アナンサナ属	木948	第57図5	131	不明部	ヒノキ科アナンサナ属	木814
第46図16	14	植物 榿	ヒノキ科アナンサナ属	木948	第58図7	114	不明部	ヒノキ科アナンサナ属	木724
第46図16	14	植物 榿	ヒノキ科アナンサナ属	100-6-4-1	第58図10	39	不明部	ヒノキ科アナンサナ属	木62
第46図17	72	植物 榿	ヒノキ科アナンサナ属	木284	第58図12	45	刀柄	ヒノキ科アナンサナ属	木95
第46図18	143	植物 榿	ヒノキ科アナンサナ属	木946	第58図13	42	不明部	スギ科スギ属	木73
		植物 榿	スギ科スギ属	木946	第58図14	40	不明部	スギ科スギ属	木70
		植物 榿	スギ科スギ属	木946	第58図15	82	不明部	ヒノキ科ヒノキ属	木347
第47図1	41	植物 漆	スギ科スギ属	木72					

第61表 塗膜膜分析結果表

写真 No.	図標番号	分析 No.	器種	部位	塗膜構造			原料
					下地		塗膜構造 (下層から)	
					膠着剤	湿和剤		
1	第43007	10	紙 糊板	内面	-	-	赤色塗 1層	ベンゾウ
2	第39001	19	漆器類	内面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
3	第39013	20	漆器類	内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
4				外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
5	第41001	23	漆器類	内面	精洗	木炭粉	透明塗 1層	なし
6				外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 黄色塗 1層 / 赤色塗 1層	朱 / 石黄 / 朱
7	第39009	24	漆器類	内面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
8				外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層	なし
9	第39014	25	漆器類	内面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
10				外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層	なし
11	第41004	27	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 2層	なし
12	第47011	30	杓	絶部	精洗	木炭粉	なし	なし
13	第54002	33	ヘラ	絶部	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
14	第56002	35	櫛	表面	-	-	黄色塗 1層	石黄
15	第56001	36	櫛	裏絶部	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 黄色塗 1層	石黄
16	第39008	47	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
17	第39004	48	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
18	第40016	51	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 黄色塗 1層	石黄
19	第410010	53	漆塗合子 蓋	内面	精洗	木炭粉	透明塗 1層	なし
20	第40004	57	漆器類	内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
21				外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層	なし
22	第41003	58	漆塗部材	外面	漆	地の粉	下地 2層 / 透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
23	第56006	59	漆塗物(鏡筒)	外面	精洗	木炭粉	なし	なし
24				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
25	第40012	61	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 金属片	朱 / 銀
26				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
27	第40008	64	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 金属片	朱 / 銀
28				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱 / 銀
29	第40007	70	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 金属片	朱 / 銀
30				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
31	第39010	73	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 金属片	朱 / 銀
32	第400071	75	漆器類 蓋	外面	漆	地の粉	透明塗 2層 / 黄色塗 1層	石黄
33				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
34	第40011	84	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
35				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	ベンゾウ
36	第40009	87	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	ベンゾウ
37				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
38	第39011	90	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
39				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
40	第40002	94	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
41				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	ベンゾウ
42	第39003	96	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	ベンゾウ
43	第41008	97	漆塗丸板	表面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 金属片	ベンゾウ / 朱
44	第54004	98	杓子	内面	精洗	木炭粉	透明塗 1層	なし
45	第520019	116	筥	表面	-	-	赤色塗 1層	朱
46	第520034	119	竹籠背	塗り分け部	精洗	木炭粉	赤色塗 1層 / 黄色塗 1層 / 赤色塗 1層	朱 / 朱
47	第520033	122	漆筥	表面	精洗	-	なし	なし
48				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
49	第40019	146	漆器類 蓋	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層	朱
50				外面 (高白)	精洗	木炭粉	透明塗 2層	なし
51	第40005	148	漆器類 蓋	外面 (体部)	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
52				内面	精洗	木炭粉	赤色塗 1層	朱
53,54	第40006	149	漆器類	外面	精洗	木炭粉	透明塗 1層 / 赤色塗 1層 / 黄色塗 1層	朱 / 石黄

第7章 まとめ

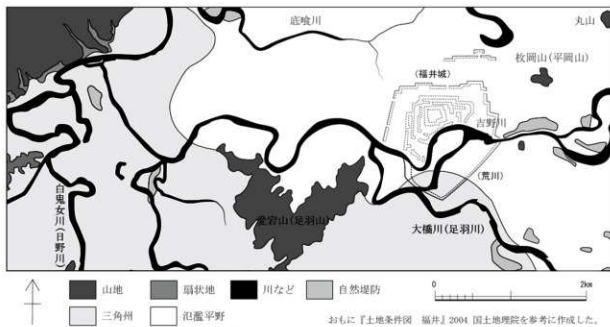
第1節 城ノ橋の変遷

北陸新幹線建設事業に伴う福井城跡発掘調査のうち今回報告する範囲は、主要地方道福井加賀線の通称「城の橋通り」から南の県道足羽川右岸線までであり、福井城南東側外曲輪の「城ノ橋」と呼ばれた区域にあたる。なお、「城の橋通り」は福井城下に存在した道路の名称を引き継ぐものである。

福井城下での調査地の位置は、「城ノ橋」「新屋敷」等の区域からなる外曲輪の南西端に近く、南に外堀とされた足羽川、西に百間堀から連なる漆ヶ淵が近いが、東側は屋敷地が広く展開する。築城以前には足羽川の流路が異なっており、調査地の南あたりで南西に湾曲して方向を変え、足羽山麓に沿うように流れていたようである。また、百間堀の前身は自然河川の吉野川であり、漆ヶ淵あたりから西へ屈曲して流れるが、北東の方で分岐した支流が調査地の東を通って南の足羽川へ合流したようであり、築城以前の調査地周辺は河川に挟まれた中洲のような地形だったとみられる。FKJ15-1調査区下層の浅い流路跡やFKJ15-2調査区の石組水路152-2の下層に確認された流路状の落ち込みは、周囲の河川から派生し、両者をつなぐように変遷した小規模な流路の痕跡とみられ、やや不安定な土地だったことが窺える。しかし、FKJ15-1・16-1では古代の土師器・須恵器が出土しており、周囲の調査では複数の遺構も確認されている。とくにFKJ16-1ではいくつかの布目瓦が出土しており、中には摩耗が少ない残存状況の良い丸瓦もあることから、出土量が少ないながらも付近にそれを葺いた建物があった可能性がでてきた。

今回の調査地にかかる福井城下の屋敷地は、「城ノ橋」のうちの西側の小道具町と呼ばれる武家屋敷地と、福井城築城の際に城郭内に取り込まれたとされる町屋地である。当時の道路で囲われた屋敷地群を街区とし、調査地内の街区を南西からA～D街区とした。また、D街区のうち石組水路152-2から北側は、江戸時代を通して町屋地として存続した部分であるため、E街区として区別した。

現代の城の橋通りは、福井城下の城ノ橋通りを拡幅整備した姿であり、もとの道路は幅7m前後で



第106図 福井城周辺の旧地形(縮尺1/50,000)

現道の南縁に沿うことが、これまでの調査で明らかになっている（『福井城跡（地下道地点）』2013・『福井城跡（JR福井駅地点）』2014等）。また、もとの道路の北側に幅5m前後・奥行10～11m程度の短冊形の町屋敷地が、道路に小口を向けて並ぶことが確認されており、今回E街区とした町屋地と道路を挟んで向かい合う。この付近の町屋地は、城ノ橋上町・城の橋下町・城ノ橋横町・城ノ橋泉町等、道路単位で分かれており、城郭内の町屋地が城ノ橋町組を形成する。

A・B街区は、江戸時代を通して武家屋敷地として存続した街区であり、調査地内にA街区では屋敷地3軒、B街区では屋敷地2軒がかかる。なお、城下絵図によると、A街区南端に付近の町名のもととなる小道具方が位置するが、今回検出した南端の屋敷地（A-1）の南隣の敷地がそれに該当する。幕末頃の城下絵図には、それまでの小道具方の敷地に複数の名が記されるようになり、その中に「ムラヲ」「村尾豊三郎」とみえる。FKJ15-1調査区南端で「村尾眞兵衛 豊三郎」と刻まれた迷子札が出土しており、後世の擾乱により移動した状況ではあるが、自宅近辺で遺失したようである。

C・D街区は、C街区の南半分については屋敷地数が変化するものの江戸時代を通して武家屋敷地として存続するが、それ以外の部分は17世紀半ば頃に境に街区の再整備が為され、町屋地から武家屋敷地へと変更されている。C街区は、当初南側に2軒の武家屋敷地、北側には沼が迫る空き地のような状況だったが、17世紀半ば頃には南端の屋敷地が二分割されて3軒の武家屋敷地となり、北側は町屋地として整備されるようである。17世紀後葉には、街区の再整備により北側の町屋地が2軒の武家屋敷地となり、あわせて5軒分の武家屋敷地が調査区にかかる。なお、C街区の屋敷境は、境を示す遺構が明瞭な状態で残存せず、明確でない。そこで、城下絵図に記載の寸法をもとに屋敷割を推定した。しかし、そのうち屋敷境付近に位置すると想定された廃棄土坑152-166については、屋敷地C-3に含まれる可能性が高く、この北側に屋敷境が考えられる。これは、廃棄土坑152-166から出土した漆刷毛に墨書された「望月八郎左衛門」が確認されたことによる。城下絵図によると、出土地点付近には18世紀後葉から幕末まで望月氏邸が存続したようであり、家の並びから屋敷地C-3に該当するためである。望月家の当主は、おもに八郎右衛門を名のるが、安永から文化頃まで二名ほど八郎左衛門を名のっており、その頃の人物をさすようである。D街区には、当初C・D街区を隔てる南北方向へ延びる道路から東へ枝道が派生しており、その道の両側に町屋地が並んでいたが、17世紀後葉の街区再整備により1軒の武家屋敷地となる。なお、C・D街区間の南北道路は、当時の城ノ橋通りから南へ派生した道路であり、北側で緩く角度を変えるものの曲輪の端の足羽川まで直線的に延びる。町屋を伴う枝道を廃止した結果、交差道路はB・C街区間の東西道路だけとなる。どちらも城ノ橋の区域内で長く直線的に延びており、城ノ橋での基幹道路と言える。

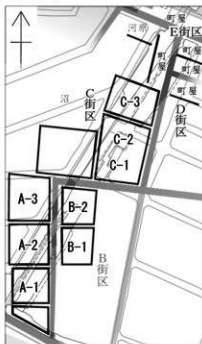
城下絵図に書かれる町屋地の名称は、17世紀前葉には城ノ橋通りに「本町」、枝道周辺に「二番町」と記載されるが、17世紀中葉には城ノ橋通りに「長濱町」、枝道周辺に「二番町」と記載されるようになる。枝道のなくなる17世紀後葉以降は、おもに城ノ橋通りに「城ノ橋上町」「城ノ橋下町」等と記載されるようになる。ただし、18世紀後葉の安永4年や19世紀前半の天保年間の城下絵図等には、城の橋通りに「長濱町」「ナガハマ丁」と記載される。このことから、もともとの名称は長濱町で、街区再整備後に城ノ橋上・下町等と名称も改められたが、通称として旧称も残っていたことが想像される。

今回の調査地周辺の屋敷地名義の変遷は、第62表にまとめた。おもな城下絵図と天保年間の「福井藩家中絵図」の記載をもとに確認したが、名前を記載した紙が剥がれているものが多く、剥がれて場所を違えて貼り直されたものや、文字が消えて判読できないものがある。完全なものではないが、4

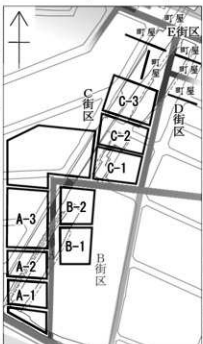
第62表 調査地周辺の屋敷地名義変遷

	(A-1の南)	A-1	A-2	A-3	(A-3とC-1西の間)	B-1	B-2
慶長10年頃 (1613)	本村丸石南門	林尾又左南門	広沢兵庫⇒ 狭野→(忠)石南門	多賀谷左内	<空地>	安藤九郎左南門	<空地>
万治2年以前 (1659)	加藤三郎右南門 字方	石川大助	中村孫五左南門	岡部新九郎	-	林又左南門	加藤三郎右南門
寛文年間 (1661～69)	()	石川□□(南兵衛)	中村孫五左南門	岡部新九郎	-	林又左南門	加藤三郎右南門
寛文10年 (1670)	()	西九郎左南門	()	()	-	林又左南門	加藤三郎右南門
貞享2年 (1685)	小道具兵衛	相田金介	伊藤宗忠	岡部新九郎	<空地>	林又左南門	加藤安左南門
正徳4年 (1714)	御小道具ノ若	相馬左南門	西脇□□(平治か)	加藤安右南門	磯沢幸左南門	林又四郎	加藤安左南門
安永4年 (1775)	小道具	(横口赤左南門)	()	加藤	()	大藤次兵衛	加藤安左南門
享和3年 (1803)	-	渋谷	西脇	加藤	四沢	吉田	加藤
文化8年 (1811)	-	渋谷	西脇	永見	磯沢	吉田	加藤
天保年間 (1831～45)	ムラツ ヨシユウ 今川	渋谷	西脇	永見	磯沢	吉田	加藤
慶応年間 (1865～68)	村尾忠三郎 吉村 入道位	渋谷五郎左南門	西脇林	永見半人	磯沢政	吉田五左南門	加藤屯毛

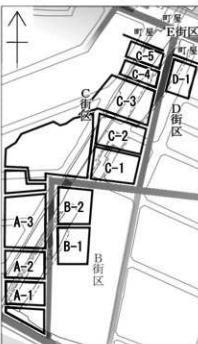
	(C-1の西)	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D-1
慶長10年頃 (1613)	稻本	坂本路之丞		藤合□(少少)七	<河原、空地、町屋か>		<町屋か>
万治2年以前 (1659)	□□七人	本多十郎兵衛	加藤所左南門	()	二番町<町屋>		
寛文年間 (1661～69)	()	本多十郎兵衛	加藤所左南門	()	<町屋>		
寛文10年 (1670)	三寺寺右南門	本多十郎兵衛	加藤所左南門	磯豊左南門	東<空地か>		白根三郎兵衛
貞享2年 (1685)	三寺寺右南門	本多十郎兵衛	東江権平	権平太夫	原助次右南門	渡邊修兵衛	味岡彦八
正徳4年 (1714)	加川右南門	本多十郎兵衛	加藤平右南門	磯豊左南門	小堀元右南門	村田平太夫	村田編南
安永4年 (1775)	(渋谷五郎右南門)	本多十郎兵衛	磯沼十郎太夫	望月八郎左南門	小堀隆右南門	栗崎道登	西村所左南門
享和3年 (1803)	横口	下田	磯沼	望月	小堀	栗崎	西村
文化8年 (1811)	横口	権太	磯沼	望月	本山	石沢	加賀
天保年間 (1831～45)	横口	権太	磯沼	望月	本山	石沢	加賀
慶応年間 (1865～68)	横口赤左南門	権田宗七	磯沼政治	望月八郎右南門	本山城□(梁)	石沢助	加賀九郎次郎



17世紀前葉



17世紀中葉～後葉



17世紀後葉以降

第107図 調査区にかかる屋敷地の変遷(縮尺1/3,500)

つの時期に全体的な変化を確認することができる。慶長・万治の間（17世紀前半）、貞享2年の前後、正徳・安永の間（18世紀中葉）、享和・文化の間（19世紀初頭）で、それまで続く家名がかわったり、それ以降続く家名が現れたりしている。17世紀前半の変化は、元和末から寛永初年（1623・24）の北庄藩から福井藩へ変化する契機となった事件に伴う大規模な移動が原因だと思われる。貞享2年の前後での変化については、城下のほとんどが焼亡した寛文大火（1669）と、藩領が半減された貞享の大法（1686）の影響だろう。18世紀中葉と19世紀初頭の変化については、城下の再編を促すような事件は思い当たらず、屋敷地区画も変化しないため、人事に係わる屋敷地の変更なのかもしれない。

さいごに、調査地にかかる屋敷地の名義人のうち、来歴が確認できた人物について紹介する。取り上げるのは、慶長18年頃の屋敷地A-2に最初に記載された広沢兵庫、寛文年間の屋敷地B-2にみえる須崎三郎右衛門、貞享2年の屋敷地A-2にみえる伊藤宗恕の3名である。

広沢兵庫は、広沢兵庫介重信のことで、もとは北条氏房の家臣であり、小田原征伐の時に迎え撃った武将の一人である。その後、豊臣秀吉の配慮により、結城秀康の下に仕えることになったとされ、秀康とともに越前に入国したらしい。2代藩主松平忠直の代には教賀町奉行となるが、慶長17年（1612）の久世騒動（越前騒動）に巻き込まれて、流罪となることが決まる。ところが、彼の過去の武勇を聞き及んでいた酒井忠勝（後の小浜藩主・老中・大老）の預かりとなり、小浜藩家臣となったという。なお、慶長18年の城下絵図は、久世騒動の直後の情報を記録したものとされる。

須崎三郎右衛門については、多くはわからない。しかし、4代藩主松平光通が藩の財政難に対処するため、寛文元年（1661）に藩札を発行した際、山元八右衛門とともに札所奉行に任じられたことが知られる。寛文8年から、札所奉行は八右衛門ひとりとなり、三郎右衛門は外された格好になる。なお、光通の代の給帳には知行が550石と記されるが（「福井県史通史編3」には350石と記載）、寛文12年に召し出された須崎三郎右衛門は、おそらく息子だと思われるが100石と減り、幕末までの間に一時的に御役料として150石加わることがあるものの回復しない。減俸の理由は不明である。

伊藤宗恕は、京都の人で坦庵、自怡堂、白雲散人等と号す。一般には伊藤坦庵で知られる。医術を江村専斎らに学び、父を継ぎ医者となる。後に那波活所に儒学を学び、とくに朱子学の研究に努めたという。著作は「老人雑話」、「坦庵文集」、「坦庵遺稿」等がある。寛文年間に4代藩主松平光通が福井藩の儒官として招聘した。しかし、福井に藩校等の施設がなかったため、本拠を京都に置いたまま、ときおり福井に来て藩士の教育に当たったという（「福井県史通史編3」）。福井での拠点が屋敷地A-2ということになる。なお、福井市本向寺の古文書に伊藤の書状が残る。本向寺は、吉崎御坊大火のとき親鸞真筆の教行信証を体内に納めて守った了願の寺であるが、寺地を越後、加賀等を転々とし、天正10年（1582）に現在地に移転した。そのため、了願の事績について、本願寺でも別の寺院（本覚寺）と混同していた。伊藤宗恕らが本願寺の誤解を解き、本向寺の寺格回復に尽力したことが書状から知られる。

第2節 FKJ21-1 調査区について

北陸新幹線建設に伴う福井城跡の発掘調査は平成28年度で終了し、その後本格的な建設工事が開始された。これまでの間に、設計変更等により新たな調査必要箇所がいくつも現れたが、いずれも対象面積が狭小か、面積が大きくても狭長なため、工事立会として対応している。これまでは、駅舎付近での工事立会であり、その位置は次回制作の報告範囲に該当する。しかし、本書制作中の令和3年8

月に、今回の報告範囲内で工事立会を実施することとなった。工事立会中に遺物が採集されること、掘削深度によっては遺構面に到達することが考えられたため、事前に成果を掲載できるよう調整した。

今回の報告範囲である「城ノ橋」での工事立会は2件ある。1件は、北陸新幹線に伴う雪消基地貯水槽建設である。場所はFKJ16-1調査区の1・2小区間の未調査部分であり、1小区の北には隣接する位置関係となる。結果的に、遺構・遺物が確認されたことにより、FKJ21-1として福井城関連調査の一つとした。もう1件は、新幹線高架下の管理用道路整備である。場所はJR福井駅高架地点(FKJ00-4)および高架側道5号線地点(FKJ98-8・99-1・3)と今回報告のFKJ15-1・16-1との間で、非常に狭長な範囲である。しかし、近世の遺構面には到達せず、遺構・遺物は出土しなかった。

以下、FKJ21-1調査区の工事立会報告書をもとに概要を記す。ただし、遺物整理は時間的に困難なため、図等は不掲載である。工事範囲は11.2m×8mで、地表下約3mまで掘削する。しかし、地表下1.8m・標高約68mで遺構が検出されたため、平面的に検出した。遺構は、土坑3基(211-1・8・7)、小穴3基(211-2・3・4)、溝1条(211-5)と礎石(211-6)を確認した。検出した遺構面は、FKJ16-1-2地区の1面目と整合するようであるが、遺構については関連しそうな配置が見いだせない。ただし、この地点は屋敷地B-2の中央付近となるとみられ、遺構が希薄なことから、一つだけだが礎石が確認されたことから、建物があった場所に該当するのかもしれない。

遺構面は、FKJ16-1調査区と同様、後世の削平がおよんでおり、地表から遺構面までの間(包含層)には16世紀後半から17世紀前半の瀬戸・美濃焼の灰軸皿等が含まれていたものの、近現代の磁器等も混じる状況だった。遺構から出土した遺物は多くはない。2基の小穴(211-2・3)から土師質皿片が出土したが、小片のため時期の判別はできない。土坑211-7からは、18世紀後半代の信楽焼や肥前系磁器が出土しており、廃棄土坑として利用されたと想定されている。その他の遺構は出土遺物が無い。

この遺構面から下層は、トレンチにより炭化物や植物遺体を含む暗灰色粘土の堆積を確認しており、低湿地もしくは流路内と判断されている。堆積土中から、古代の須臾器や土師器の小片が僅かに出土したが、埋没時期は明らかにし得ない。ただし、この周辺の調査では古代の遺構・遺物が確認されており、また北庄城期の遺構・遺物も広く確認されている。そのため、低湿地や流路の形成は古代かそれ以降であり、北庄城が築城される前の中世後半には埋没していたことになる。



第108図 城ノ橋の発掘調査地点(縮尺1/5,000)

- 1 保育園建設 1995(市)
 - 2 N T 2 進進坑・ガス管理設等「城の橋通り」1998(県)
城の橋通り街路整備 2006(県)
 - 3 福井駅付近連続立体交差【豊島地下道】1998・99(県)
 - 4 J R 北陸線外 2 線連続立体交差
及び高架側道 5 号線街路整備 1998・99(県)
 - 5 福井駅付近連続立体交差【橋梁部】1999(県)
 - 6 福井駅周辺土地区画整理【豊島木田線】2004(市)
 - 7 高架排水路敷設「城の橋通り」2004(県)
 - 8 城の橋通り道路改良 2004(県)
 - 9 足羽川右岸線整備 2004・06(県)
 - 10 福井駅周辺土地区画整理【東口都心環状線】2009(市)
- 北陸新幹線建設 2015・16・21(県)
- A FKJ15-1 調査区
B FKJ15-2 調査区
C FKJ16-1 調査区
D FKJ16-2 調査区
E FKJ21-1 調査区(令和3年8月)
F 令和3年9月工事立会地点

第3節 福井城下における土器・陶磁器の様相

これまで伊万里、唐津、瀬戸・美濃、京・信楽、越前、土師質皿等を産地・遺構・整地土単位で紹介した。以下、産地別に碗皿類の様相の変化をみていく。

伊万里と唐津焼は、寛文の大火前後の様相を表すC街区石組水路178・D街区整地土4とE街区整地土3に良好な資料を認める。そこには志野釉を施した天目茶碗や志野大皿等の瀬戸・美濃焼があり、E街区整地土3出土遺物には伊万里の皿を定量認める。このなかには胎土に砂目を残し、蛇の目高台を持つ初期伊万里もあり、唐津焼も鉄釉・灰釉の碗、見込に胎土目と砂目痕を残す皿が多く、寛文の大火以前の様相を表すものと思われる。なお唐津焼には石組水路178の皿のように刷毛目と銅緑釉を掛け合せたものもあり、瀬戸・美濃焼は肥前陶磁器にシエラを徐々に奪われる流れが理解できる。越前焼は鉄泥を刷毛塗りした甕とお歯黒壺や無釉の播鉢で占められ、土師質皿はA街区遺構面3の土坑226・230・245でまとまるが、いずれもC・D系の一種類の形態で占める。なおE街区整地土3出土遺物からは中国製の皿が出土しており、この時期の組成の一端を示すと理解できる。

続く17世紀後半頃の様相はD街区遺構面3と整地土3で把握できる。当時期の唐津焼は鉄釉・灰釉碗皿が減り、呉器手碗や丸碗、刷毛目碗や京焼を模倣した京風唐津碗等で占めるが、皿類は壁皿を除くとみられず、京・信楽系の製品はない。続く時期の一括資料がないため比較は難しいが、碗皿類が磁器中心へ移行する時期にあたるものと思われる。

18世紀後半以降はA街区土坑28・井戸108、C街区土坑156・166等と一括資料が増加し、A・E街区整地土1や石組水路2上層から比較的まとまる遺物が出土している。唐津焼は刷毛目の鉢を除くと皆無で、伊万里は半球碗や見込に五弁花文を持つ半筒碗、蓋付碗を多く認める。五弁花文を持つ製品はA街区井戸108出土の皿や石組水路2上層出土のコンニャク印判を施す碗と合わせ、廉価な磁器が多くみられる当期の様相を示そう。ただこの時期に出現する広東碗はいずれの遺構にもみられず、それほど多い印象はない。なおE街区整地土1や石組水路2上層出土遺物には波佐良産の陶胎染付も定量認める。瀬戸・美濃焼は磁器を量産する18世紀末以降に端反碗が目立つが、土坑166のように伊万里が量的に多いことがわかる。その一方で陶器の碗は多様化し、腰筒碗や鎧手碗のほか白泥の梅花文を描く端反碗を認める。京・信楽焼は高台無釉の色絵碗や無文の碗のほか錆絵を施す碗皿が多いが、土坑28出土の体部外面を工具で抉る碗のように信楽窯の製品であることが明確なものも認める。このほか、この時期には行平や土鍋、土瓶の在地製品が増え、越前焼も播鉢の形態が大きく変化し、新たな形態の鉢が加わる。この鉢は体部が直線的なものと内湾して口縁が屈曲するものに分かれ、量量も多岐に富み、焼成後に底部を突き植木鉢に転用した例も認める。時期を同じくして外面に轆轤目を残した中・小型甕も急激に増加する傾向を認める。土師質皿は従来と系譜を別にする内型成形のG類で占められ、風炉・焔炉・火鉢等の瓦質土器が加わる。食膳具と瓦質土器等の在地製品には、福井城跡近辺の三国窯や松岡窯の製品が定量含まれると思われる。

最後にE街区近辺の町屋の様相を考慮できる遺物について触れると、特筆すべきものに焼釜み、陶片が付着する皿の存在があげられる。こうした製品は供膳具に使用することが不可能なため、生産地から直接製品を仕入れる窯買いがなされたことを示し、この近辺に陶磁器の売買を行う店が存在したことを示すと思われる。町屋の性格の把握は困難な場合が多いが、このような資料の蓄積により徐々に解明されていくものと考えられる。

第4節 福井城下における出土漆器の構成

漆器の分類と構成 漆器の分類は各都道府県の調査報告においてみられるように、木胎や下地・上塗りの色や種類、加飾技法や文様、用途や形態等による様々な分類法がある。これまでの福井城跡報告書での漆器碗類の分類も、刊行年度によって基準がやや異なる。福井城跡報告書第102集(2008年刊)と第109集(2009年刊)、第146集(2015年刊)では、用途と形態によって分類している。第102・109集での分類は、飯椀・汁椀・皿と3つに大分し、更に口径と全高の比率で細分しており⁽¹⁾、それら以外をその他⁽²⁾としている。第146集では、この分類の他に漆絵の文様も分類している⁽³⁾。その後の第173集(2021年刊)では、口径・高台径・高台高・全高の各計測値により分類している⁽⁴⁾。今回の報告では以上の分類法を参考に、飯椀・汁椀等の種別や法量でA～H類に分類した(第17表)。

A類(飯椀=イチノワン)は8点、B1～B4類(汁椀大=ニノワン)は16点、C類(破損によりAかBか特定できない)は2点、D類(汁椀小=サンノワン・シノワン⁽⁵⁾)は5点であった。また、E類(端反椀)は1点、F類(腰椀・壺椀・両者の蓋)は平椀と平椀の蓋と腰椀の蓋がそれぞれ1点ずつである。G類(腰高)は点数としては挙げていないが、A類の第39図1と3が破損しており、腰高の可能性がある。H類にあたるその他の漆器は、削り物の容器が2点、合子の蓋が2点、文様の描かれた丸板と盃が1点ずつであった。B1～B4類は特に年代を限定せず継続的に確認される。

漆器の自然科学分析 宝永4年(1707)から備中吹屋において、緑礬を原料とした国産ベンガラが多量に生産され始め、朱とベンガラの市場価格には30:1もの差があったとされる⁽⁶⁾。そのため出土漆器碗資料も全国的に地内面の赤漆の塗りにはベンガラを用い、加飾部分のみ朱を利用する例が多い。しかし第6章第4節2の分析では、加飾部を試料として指定したため、朱の利用率が高い結果となった。

漆器の用材傾向 今回の樹種同定の結果、年代と樹種が大筋判明したA類(飯椀)の8点中7点がブナで、1点がトチノキであった。B1類(汁椀大)の9点中6点がブナで、3点がトチノキであった。漆器碗の用材選択には地域性が指摘されており⁽⁷⁾、上記の傾向は北陸地方でのブナ・トチノキ・ケヤキの順に用材の選定頻度が高いことと合致する⁽⁸⁾。漆器は価格に応じた品質の製品が生産されるため、用材選定における年代による樹種の変化は見られない。日常使いであった飯椀・汁椀が、廉価で多量に入手可能な材を用いていることは、上塗りの回数や下地・加飾が簡素であったことと矛盾しない。少数ではあるが、優品にあたる端反椀・壺椀の蓋・盃等には堅硬で靱性のあるケヤキが全年代において選択される。

漆器の文様 漆器碗類43点中、27点に文様があった。それらの文様の分類を以下に記す。

蓬 菜 文: 鶴亀松竹を主体とした文様。鶴と亀は頭部が向き合う。竹は笹のように描写されることもある。年代によって描き方が異なり、今回は年代と筆致から3種確認されている。

植 物 文: 花卉を中心に描く花文。葉や実を中心に植物の全体の姿を写した植物文。四季それぞれの季節内の植物を取り合わせ、もしくは織り交ぜて表現した季節文がある。

花 文…立ち杜若・梅・桔梗・菊(菊水も含む)

植物文…桐・蔦・五瓜

季節文…秋草(薄・菊で構成される)

動 物 文: 実在の動物を題材とした文様。鷹の羽

幾何学文: 家紋に用いられる以前から図案化されていた文様。亀甲・花菱

器 物 文: 物の形を文様化したもの。扇・目結・三段梯子

蓬莱文は時代の古いものから順に、県下の一乗谷朝倉氏遺跡でも出土している「越前型蓬莱文」と簡略化された図案を用いる「量産型蓬莱文」、精緻な鶴や松を描写する「原型復帰型蓬莱文」が確認されているが、今回の報告内では、「量産型蓬莱文」と思われる松文様等が5点みられる。

漆器の様相 年代を迫って観察すると、画期となるのは18世紀後葉である。福井城跡より膨大な量の漆器が出土する江戸市中の事例でも、同時期に文様に入る椀は減少傾向とされる。このことは、A類（大型の飯椀）や椀の見込みに文様を描く椀が、18世紀後葉以降はみられなくなることと重なる。

飯椀・汁椀・飯椀蓋・汁椀蓋の重椀は16世紀から継続してみられるが、18世紀後葉以降はそれ以前の汁椀よりも全高の低い椀や高台径の広い椀が増え、平椀やその蓋も出現する。この時期は中世からの椀のセット関係の転換期にあたる⁽⁹⁾。輪島市史には、安政7年（1861）に飯椀・汁椀・飯椀蓋・汁椀蓋の組み合わせで「四重椀」として生産された記録が残るため、揃え椀への完全な移行が成立するとは言いえないが、江戸市中では画期に重椀系から平椀・壺椀を加えた揃え椀に移行する可能性が指摘されており⁽¹⁰⁾、福井城跡の平椀やその蓋の出現時期と合致する。

註

- 1 本多達哉 2008 「近世の遺構と遺物 木製品」[福井城跡] 福井県埋蔵文化財調査センターでは以下の分類である。
飯椀：口径が14cm以上、全高7.5cm以上、高台高2cm以上の器。汁椀：口径が10～14cm、全高4～7cm、高台高1cm前後の器。 皿：口径が10～12.5cm以下、全高2.5～4cm以下、高台高0.8cm以下の器。
- 2 「蓋・平椀・一文字腰椀A・B・壺椀・腰高・蓋・合子・鉢・器台・その他不明」をその他として掲載される。
- 3 杉田曜 2015 「第2節 漆器椀類の漆絵」[福井城跡] 福井県埋蔵文化財調査センター pp.227～232
- 4 A類：高台高1.5cm以上、底部厚さ0.8cm以上。一の椀に相当。
B類：高台高1.5cm未満、底部厚さ0.8cm未満。二の椀（「二の椀」という名称は御膳の「二の膳に出される椀」と同一である。よって、本文ではカタカナ表記）に相当。体部の立ち上がりが高いものをB1類、浅いものをB2類、底面が広いものをB3類、破損により立ち上がり不明なものをB4類とする。
C類：破損によりA類かB類か判断できないもの。
D類：高台高1.0cm未満、全高4.0cm未満。重ね椀での三の椀、揃え椀での三の椀・四の椀に相当。
E類：端反皿 F類：腰椀・壺椀と、それに伴う蓋。 G類：腰高 H類：その他
- 5 三の椀・四の椀の詳細については、中井さやか著 2000 「第9章 第4節都立文京官学校地点出土漆器椀の考古学的分析」[小石川牛天神下 第三分冊]を参考にした。「椀三・四」という分類名称を用い、椀の全高4.0cm以下をおよその目安としている。三の椀・四の椀は、伝世品として4個重ねた状態でセット関係が明らかである。しかし、出土品は重ね椀として、入れ子式に収納可能かどうかの判定が困難である。よって、双方をまとめて呼称を用いて分類するしかないのが現状である。
- 6 北野信彦 1993 「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」[食生活と民具] 雄山閣出版 p.93
- 7 北野信彦著 2005「近世漆器の産業技術と構造」の「第2章 第1節くろ挽き技術(用材利用)」では、北海道(221点)・東北(208点)・北陸/山陰(646点)・中部(277点)・江戸市中(5930点)・東海地域(1231点)・近畿//山陽(1633点)・九州(243点)の近世漆椀を、ブナ・トチノキ・ケヤキの用材選択の高下や、下地や加飾率が一目で分かるようリーダーチャート式に表した。北陸/山陰地域は、ブナ材が優勢ながらもトチノキ材の使用も多い。その比率は、ブナ：トチノキ：ケヤキが6：4.35である。
- 8 本調査地の漆器椀類の主な樹種はブナ22点、トチノキ10点、ケヤキ3点である。
- 9 北野信彦 2005 「近世出土漆器の研究」 吉川弘文館
- 10 中井さやか 2000 「小石川牛天神下 第三分冊」 都内遺跡調査会

第5節 絵図等史料と各種自然科学分析結果について

花粉分析では、対象となった遺構の多くで周辺に水田の分布が示唆された。調査区15-1は南端が足羽川に接し、北側に慶長18年の城下絵図で「沼」・「河原」と記された場所がある。「沼」はその後の絵図でも形を変えながら表示が残るため、足羽川と共に分析結果に影響を与えているかも知れない。

土坑151-26は、屋敷地A-2内にあり、花粉分析によって便所遺構または糞便投棄場所という結果が得られた。大型植物遺体・貝類・動物骨の同定においても、ほぼ全てが食用かつ小型の種子や焼けた魚骨で、貝殻等の不可食部位はみられない。出土遺物は少数の土師質皿のみであり、糞便以外の廃棄行為がない。この遺構から、寄生虫卵と共に薬用植物の花粉が検出された(第6章参照)。この遺構は土師質皿の年代観から西脇邸に帰属すると推定されるが、西脇以前は医学の心得のあった伊藤宗恕の屋敷でもあったため(195-196頁)、薬用植物は西脇か西脇・伊藤の両者が用いたものと思われる。西脇については、七代福井藩主松平吉品の時代に新たに召抱えられた人の名簿に「西脇豊治」⁽¹⁾、同給帳に御番組二十三石三人扶持として「西脇甚五大夫」の名前があり⁽²⁾、西脇林左衛門は小道具町に居住していたとの記録が残る⁽³⁾。各種の分析結果から、海水・淡水産の魚介とナス、ウリ等が供される、屋敷地A-2の住人の食卓が垣間見えた。

石組水路152-2からは、脳を取り出したとみられるイヌの頭骨8体分が出土している。この遺構は武家と町屋の境界となっており、近隣にウシの角を加工する工人が活動していた可能性があることから(152頁)、イヌの脳の用途として、食用・薬用のほかに皮なめしも考えておきたい。

註

1 福井市 1988『福井市 資料編4 近世二』403p.

2 同上 pp.286-289 西脇家は西脇甚五大夫(太夫)以後、甚五太夫(子)、林右衛門、林右衛門(子)、西脇省三、の順に明治まで家督を相続している(福井県文書館 2016『福井県文書館資料叢書12 福井藩土曜展4 た〜ね』pp.290-292)。

3 鈴木準道(舟木茂樹校訂) 1977『福井藩土曜展』歴史図書社 108p.

報告書抄録

ふりがな	ふくいじょうあと							
書名	福井城跡							
副書名	北陸新幹線建設事業に伴う調査6							
巻次	第一分冊遺構編・第二分冊遺物編							
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第177集							
著者名	御嶽貞義(編) 木村孝一郎(編) 青木隆佳 秋山綾子 佐々木芽衣 杉田曜 九千房百合 中原義史							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒918-8226 福井県福井市大畑町 97-21-3 TEL: 0776-53-7977 E-mail: maibun-c@pref.fukui.lg.jp							
発行年月日	西暦 2022年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ふくいじょうあと 福井城跡	ふくいけん 福井県 福井市 豊島1丁目	18201	01141	36° 3' 29"	136° 13' 14"	20150401 ～1130 20160401 ～1228	3,070㎡ (表面積)	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
福井城跡	城郭 城下町	中世 近世 古墳時代 奈良・平安時代	道路、屋敷境溝、井 戸、廃棄土坑など 自然河川、溝、土坑 など	土器(土師質皿)・陶 磁器・瓦・木製品(下 駄・漆器)・石製品(行 火・石瓦)・金属製 品(刀装具・煙管)・ 自然遺物(種子・骨) など 須恵器・土師器・ 鉾澤など	外曲輪の城ノ橋地区 に区画された5つの 街区(屋敷地)にま たがり、城郭内では 珍しい町屋の建ち並 ぶ部分を検出した。 このうちE街区は江 戸時代を通して町屋 だった街区である。			
要約	北陸新幹線建設事業に伴う調査のうち、地方主要道福井加賀線の起点部分である「城の橋通り」から南側の足羽川までの範囲である。調査区は、福井城の外曲輪のうち南東部の「城ノ橋」地区にあたる。大部分が武家屋敷地で、道路・石組水路などの街区に関わる遺構や、屋敷境溝・井戸・廃棄土坑などの屋敷地に関わる遺構が検出された。また、下層から古代(奈良・平安時代)の遺構・遺物が検出されており、古代の包含層からは炭化物や焼土とともに鉾澤なども検出された。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第177集

福井城跡

—北陸新幹線建設事業に伴う調査6—

第2分冊 遺物編

令和4年3月4日 印刷

令和4年3月14日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒918-8226 福井市大畑町97-21-3

印刷 創文堂印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町1丁目7番地
